

愛知県東海市

平成 28 年度

# 畑間遺跡発掘調査報告



2018 年

東海市教育委員会



愛知県東海市

平成 28 年度

# 畑間遺跡発掘調査報告

2018 年

東海市教育委員会





1 2地点全景 大田川旧流路一帯と木田丘陵地を望む(西から)



2 方形区画溝群と大量出土銭B(南西から)





1 大量出土銭A（南から）



2 大量出土銭B（西から）







1 大量出土銭A壺内部の銭貨

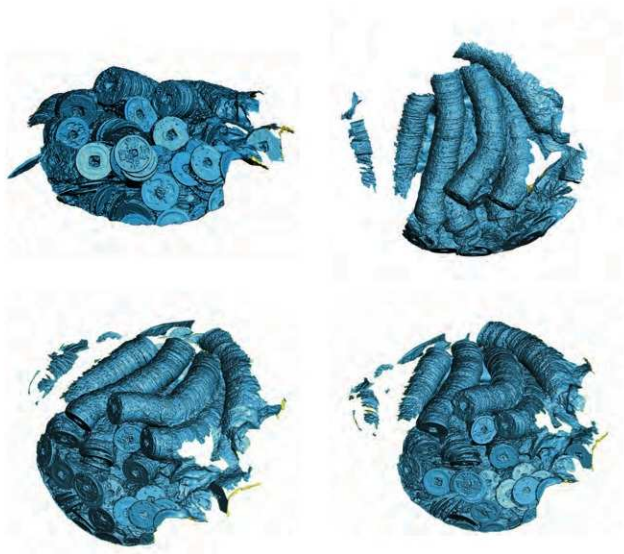


2 大量出土銭B壺内部の銭貨





1 大量出土銭A壺内部の銭貨（3次元計測によって銭貨のみの陰影図を作成）



2 大量出土銭B壺内部の銭貨（3次元計測によって銭貨のみの陰影図を作成）





1 大量出土銭の壺



2 独鈷杵



## 序

伊勢湾に面した知多半島西岸の付け根に、愛知県東海市は位置しています。はるか昔には、あゆち潟と呼ばれた遠浅の海が広がり、その沿岸には多くの先人たちの暮らしがありました。現在、あゆち潟はわが国有数の工業地帯へとその姿を変え、海との関わり方も漁業から工業へと変わっていますが、本市にとって昔も今も海との関わりは切っても切れないものがあります。

こうした海との関わりの中で形成された先人たちの暮らしの跡は埋蔵文化財という形で現在も残されています。

東海市では名古屋鉄道常滑線太田川駅を中心とする区域を中心市街地と位置づけ、平成4年度から土地区画整理事業を実施してきました。教育委員会では、本事業区域内に所在する埋蔵文化財について、平成11年度から記録保存を目的とした発掘調査を実施しています。

本書ではこの土地区画整理事業に伴う平成28年度の畑間遺跡における発掘調査成果について報告します。平成28年度の調査では、中世の大量出土銭を2基確認することができました。発掘調査による出土例は県下初であり、今後の研究の進展が期待されます。

今後、本書が既刊の報告書と合わせて地域の歴史研究に活用され、埋蔵文化財への理解を深める一助となれば幸いです。

なお、調査に際しては、地元の皆様ならびに関係者、関係諸機関より多大なる御理解、御協力を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

平成30年3月

愛知県東海市教育委員会  
教育長 加藤朝夫





## 例言

1. 本書は、愛知県東海市大田町に所在する畑間（はたま）遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は東海太田川駅周辺土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査として、東海市教育委員会が同事業施行者である東海市長から依頼を受け、平成28年5月18日に株式会社アコード名古屋営業所と業務委託契約を結び、「畑間遺跡発掘調査業務委託」として実施した。
3. 現地調査は、平成28年6月8日から平成29年1月23日まで実施し、遺物洗浄・注記等の1次整理作業は現地調査と併行して実施し、平成29年3月28日に終了した。
4. 遺物実測等の2次整理作業および本書の作成は、東海市教育委員会が株式会社アコード名古屋営業所と業務委託契約を結び、「畑間遺跡発掘調査報告書作成業務委託」として実施した。
5. 報告書作成業務は平成29年5月26日から開始し、平成30年3月30日に本書を刊行した。
6. 発掘調査面積は1239.4㎡、各調査地点の面積は以下の通りである。  
1地点=225.0㎡ 2地点=222.5㎡（西区）・353.2㎡（東区）3地点=135.2㎡  
4地点=135.9㎡ 6地点=74.2㎡ 7地点=83.8㎡ 8地点=9.6㎡
7. 現地調査および整理作業は東海市教育委員会（社会教育課主任宮澤浩司・主事補安津由香里）監督のもと、中村毅（株式会社アコード調査技師）が担当した。
8. 現地調査における測量業務および遺構図作成は星英司（株式会社アコード測量士）が担当し、測量助手の稲垣耕作・田邊好（株式会社アコード測量助手）がこれを補助した。
9. 遺物整理作業においてはナカシャクリエイテブ株式会社の協力を得た。
10. 本書は東海市教育委員会監督のもと、中村が編集した。
11. 本書は第1章第1～3節を安津が、第1章第4節～第5章は中村が執筆した。
12. 付論の科学分析は株式会社パレオラボに依頼し、付論1は藤根久・竹原弘展、付論2は小林克也、付論3は竹原が執筆した。
13. 本書で掲載した遺構と遺物の写真は中村が撮影した。
14. 出土遺物と図面、写真、台帳等は東海市教育委員会が保管している。
15. 調査ならびに報告書の作成にあたって、下記の方々および機関からご指導とご協力を賜った。記して感謝いたします。（敬称略 50音順）

石黒立人 鬼頭剛 真田泰光 嶋谷和彦 鈴木正貴 中野晴久 中村賢太郎

愛知県教育委員会 公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター  
知多市歴史民俗博物館 東海市中心街整備事務所 名古屋市工業研究所 法海寺

# 凡例

1. 遺跡の略称はこれまでの略称に今回の調査年度（西暦）を示す16を付したHM16を使用した。遺物注記や図面等の記録および本書の記述においても、上記の略称を用いている。
2. 遺構番号は地点（調査区）ごとに通し番号を付けた。
3. 遺構の種別記号は『発掘調査のてびき』文化庁文化財部記念物課編2010に従った。以下に主なものを記す。

SK=土坑 SP=柱穴（柱痕跡や形状から判断） SD=溝 NR=自然流路  
SA=櫓列 SB=掘立柱建物 SI=竪穴建物 SX=不明遺構・落ち込み等
4. 大量出土銭は遺構としてはSXの記号を用い、2140SXと2190SXとしたが、それぞれ大量（出土）銭A・大量（出土）銭Bや壺A、壺Bとも呼称する。
5. 本書で使用した座標は、国土交通省告示に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠し、世界測地系にて表記している。方位は座標北を示す。標高は東京湾平均海面（T.P.）を使用した。
6. 層・遺構埋土および遺物胎土の色調は『新版標準土色帖』2015年版 農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修を基準とした。
7. 土質に関しては、粒子の大きさで区分し、小さいものから以下の通りとした。

粘土→シルト質粘土→粘土質シルト→シルト→砂質シルト→  
極細粒砂→細粒砂→中粒砂→粗粒砂→礫砂→砂礫
8. 本書における既往調査の記述は本書末に記した参考文献1～14による。
9. 本書で用いた遺物の年代観・用語等に関しては参考文献15～39による。
10. 本書の遺構図は1/100・1/50・1/20を基本とし、一部にその他の縮尺を用いている。
11. 遺物実測図は1/4を基本とし、一部にその他の縮尺を用いている。

# 目次

## 第1章 序章

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 位置と歴史的環境	2
第3節 既往の調査	6
第4節 調査の方法	9
第5節 調査の経過	11

## 第2章 遺構

第1節 遺構の概要と基本層序	14
第2節 1地点の遺構	16
第3節 2地点の遺構	25
第4節 3地点の遺構	50
第5節 4地点の遺構	51
第6節 6地点の遺構	57
第7節 7地点の遺構	58
第8節 8地点の遺構	60

## 第3章 遺物

第1節 遺物の概要	61
第2節 弥生～古墳時代の土器	62
第3節 古代の土器・陶磁器	64
第4節 中世の土器・陶磁器	65
第5節 瓦・土製品・石製品	71
第6節 金属製品（銭貨・独鈷杵・和鏡）	73
第7節 自然遺物（貝・骨類）	76

## 第4章 考察

第1節 畑間遺跡大量出土銭の検討	79
第2節 畑間遺跡出土の独鈷杵	94
第3節 調査成果からみた中世大郷郷	96

第5章 総括	110
--------	-----

註・参考文献	111
--------	-----

付論	117
----	-----

遺構一覧表	127
-------	-----

遺物一覧表	145
-------	-----

## 挿図目次

第 1 図	調査地の位置	1	第 32 図	4065SD	52
第 2 図	遺跡周辺の環境	3	第 33 図	4011SD	53
第 3 図	遺跡の位置と周辺の遺跡	5	第 34 図	4043SD	54
第 4 図	調査区配置図	7	第 35 図	4060SD	55
第 5 図	調査区・グリッド位置図	10	第 36 図	4012SK・4090SK	56
第 6 図	基本層序模式図	15	第 37 図	4030・4052SK	56
第 7 図	1030SD	18	第 38 図	6010SD	57
第 8 図	1040SD・1050SD	19	第 39 図	7001SX	58
第 9 図	1060・1102・1108・1160・ 1152SK	21	第 40 図	7010・7011・7015・7016SD・ 7012SX	59
第 10 図	1062SX・1150SX	23	第 41 図	8 地点平面・断面図	60
第 11 図	1180SX	24	第 42 図	弥生前期～中期前半の土器	62
第 12 図	1186SK	24	第 43 図	弥生前期～中期の条痕文系土器	63
第 13 図	2100SD	26	第 44 図	2221・2222SK と 6010SD 出土土器	63
第 14 図	2120SD 断面図	28	第 45 図	製塩土器	64
第 15 図	2120SD 平面図	30	第 46 図	灰軸陶器	64
第 16 図	2120SD 遺物出土状況図	32	第 47 図	1060SK 出土の土器・陶磁器	65
第 17 図	方形区画溝群模式図	34	第 48 図	方形区画溝群出土の土器・陶磁器	69
第 18 図	方形区画溝群と大量出土銭 A・B・ 2156SK	36	第 49 図	大量出土銭の容器壺	69
第 19 図	方形区画溝群断面図	37	第 50 図	包含層・その他の遺構出土の土器・ 陶磁器	70
第 20 図	2135・2136・2137・2144SD	38	第 51 図	瓦 (1・2・4 地点出土)	71
第 21 図	2180SD	39	第 52 図	土製品・石製品	72
第 22 図	2010・2065SK・2200SK	40	第 53 図	独鈷杵・和鏡	75
第 23 図	2221SK・2222SK	40	第 54 図	壺内銭貨 3 次元計測図	81
第 24 図	2022・2170・2172・2182SK	42	第 55 図	大量銭 A 壺内銭貨実測図	82
第 25 図	2160・2165・2186SK	43	第 56 図	大量銭 B 壺内銭貨実測図	83
第 26 図	2153SX 遺構群	44	第 57 図	愛知県内大量出土銭出土地点	89
第 27 図	2156SK	45	第 58 図	大量銭容器壺実測図	89
第 28 図	東部柱穴列	47	第 59 図	独鈷杵実測図	95
第 29 図	2140SX (大量出土銭 A)・ 2190SX (大量出土銭 B)	49	第 60 図	畑間遺跡の溝・区画	102
第 30 図	3001・3002SD	50	第 61 図	周辺環境と溝・区画	103
第 31 図	4 地点西壁断面図	51			

## 表目次

表 1	既往の発掘調査報告書	8	表 9	出土銭貨一覧	74
表 2	遺構数一覧	14	表 10	出土貝類	76
表 3	時期区分	15	表 11	出土骨類	78
表 4	2 地点遺構編年	25	表 12	大量出土銭編年	82
表 5	中世遺物編年対照表	61	表 13	愛知県内大量出土銭一覧	89
表 6	2120SD 破片数	66	表 14	独鈷杵の法量と年代	94
表 7	2180SD・2153SX 破片数	68	表 15	大郷郷に関する文書記録	97
表 8	銭貨種別出土数	73	表 16	町単位溝一覧	99

## 写真目次

写真1	現地説明会	11	写真23	2165SK	45
写真2	報道関係取材	11	写真24	2156SK 断面	45
写真3	1地点機械掘削状況	12	写真25	東部柱穴列	46
写真4	6地点調査状況	12	写真26	2119SP	46
写真5	4地点調査状況	12	写真27	2105SP	46
写真6	2地点西区調査状況	12	写真28	2140SX 壺内部	48
写真7	2地点東区調査状況	13	写真29	2140SX 検出	48
写真8	2地点東区調査状況	13	写真30	2190SX と 2157SK	49
写真9	大量出土銭 B 調査状況	13	写真31	4043SD	54
写真10	7地点調査状況	13	写真32	4060SD	55
写真11	1地点北側検出状況	16	写真33	8地点	60
写真12	1022SX	16	写真34	出土貝類	77
写真13	1102SK	20	写真35	大量銭 A 壺内上部 CT 撮影	80
写真14	1108SK	20	写真36	大量銭 A 壺内下部 CT 撮影	80
写真15	1062SX	22	写真37	大量銭 B 壺内上部 CT 撮影	80
写真16	1150SX	22	写真38	大量銭 B 壺内下部 CT 撮影	80
写真17	2060SX	26	写真39	大量銭 A 壺内部	81
写真18	2180SD 断面	39	写真40	大量銭 B 壺内部	81
写真19	2182SK	41	写真41	大量銭 B 出土銭	82
写真20	2164SP	41	写真42	一遍聖絵	84
写真21	2153SX	41	写真43	大量銭 B 検出状況 1	85
写真22	2186SK・2172SK	45	写真44	大量銭 B 検出状況 2	85

## 図版目次

図版1	1地点 調査区平面図 (全体)	図版20	6地点 土層断面図
図版2	1地点 調査区平面図 (北部)	図版21	7地点 調査区平面図
図版3	1地点 調査区平面図 (南部)	図版22	7地点 土層断面図
図版4	1地点 土層断面図1	図版23	弥生時代の土器
図版5	1地点 土層断面図2	図版24	古代の土師器・須恵器
図版6	1地点 土層断面図3	図版25	2120SD 出土の土器・陶磁器
図版7	2地点 調査区平面図 (全体)	図版26	2120SD 出土の土器・陶磁器
図版8	2地点 調査区平面図 (西1)	図版27	2120SD 出土の土器・陶磁器
図版9	2地点 調査区平面図 (西2)	図版28	2120SD 出土の土器・陶磁器
図版10	2地点 調査区平面図 (東1)	図版29	2120SD 出土の土器・陶磁器
図版11	2地点 調査区平面図 (東2)	図版30	2120SD 出土の土器・陶磁器
図版12	2地点 土層断面図1	図版31	2180SD 出土の土器・陶磁器
図版13	2地点 土層断面図2	図版32	2153SX 遺構群出土の土器・陶磁器
図版14	2地点 土層断面図3	図版33	中世の土器・陶磁器
図版15	2地点 土層断面図4	図版34	瓦 (2120SD)
図版16	3地点 調査区平面図	図版35	瓦 (2120SD)
図版17	4地点 調査区平面図	図版36	金属製品 (銭貨)
図版18	4地点 土層断面図	図版37	金属製品 (銭貨)
図版19	6地点 調査区平面図	図版38	金属製品 (銭貨)

## 写真図版目次

写真図版 1	1	1 地点全景	写真図版 19	1	2135・2144SD ほか検出
	2	1 地点全景 (北部)		2	2135・2144SD ほか
写真図版 2	1	1 地点西壁 (北端)	写真図版 20	1	方形区画溝群と大量出土銭 B
	2	1 地点西壁 (北部)		2	方形区画溝群南西部検出
	3	1 地点東壁 (北部)	写真図版 21	1	2148SD
写真図版 3	1	1 地点西壁 (南部)		2	2115SD
	2	1 地点東壁 (南部)		3	方形区画溝群と大量出土銭 B
	3	1 地点南東部北壁	写真図版 22	1	2115SD・2199SD ほか断面
写真図版 4	1	1030SD		2	2205SD 断面
	2	1030SD 検出		3	2205SD 遺物出土状況
写真図版 5	1	1040SD		4	2205SD 遺物出土状況
	2	1050SD	写真図版 23	1	2180SD
写真図版 6	1	1060SK		2	大量出土銭 A と方形区画溝群 検出
	2	1060SK 遺物出土状況	写真図版 24	1	大量出土銭 A
写真図版 7	1	1152SK		2	大量出土銭 A
	2	1160SK	写真図版 25	1	大量出土銭 B
写真図版 8	1	1180SX		2	大量出土銭 B
	2	1186SK	写真図版 26	1	大量出土銭 B
写真図版 9	1	2 地点東区全景		2	大量出土銭 B
	2	2 地点東区全景 (東部)	写真図版 27	1	2156SK 独鈷杵出土状況
写真図版 10	1	2 地点東区全景 (西部)		2	2156SK 独鈷杵出土状況
	2	2 地点西区全景	写真図版 28	1	2153SX 遺構群検出
写真図版 11	1	2 地点西区西壁		2	2153SX 遺構群断面
	2	2 地点西区北壁	写真図版 29	1	2010・2065SK
	3	2 地点西区南壁		2	2200SK
写真図版 12	1	2 地点東区東壁	写真図版 30	1	3 地点北部全景
	2	2 地点東区北壁 (東部)		2	3 地点北部検出
	3	2 地点東区北壁 (中央部)	写真図版 31	1	4 地点全景
写真図版 13	1	2 地点東区北壁 (西部)		2	4 地点全景 (中央部)
	2	2 地点東区南壁 (西部)	写真図版 32	1	4 地点西壁
	3	2 地点東区南壁 (西部)		2	4 地点南壁 (西部)
写真図版 14	1	2090SD・2100SD・ 東部柱穴列検出		3	4 地点南壁 (東部)
	2	2100SD	写真図版 33	1	4011SD 検出
写真図版 15	1	2120SD 検出		2	4011SD
	2	2120SD 遺物出土状況	写真図版 34	1	4011SD 断面
写真図版 16	1	2120SD 遺物出土状況 (南西側)		2	4030・4052SK
	2	2120SD 遺物出土状況 (北東側)	写真図版 35	1	6 地点全景
写真図版 17	1	2120SD 遺物出土状況 (北東側)		2	6 地点検出
	2	2120SD 遺物出土状況	写真図版 36	1	6 地点南壁
写真図版 18	1	2120SD 断面		2	6 地点東壁
	2	2120SD 断面		3	6 地点東壁 (北部)

- 写真図版 37 1 6010SD  
2 6010SD 遺物出土状況
- 写真図版 38 1 7 地点全景  
2 7010・7011SD・7012SX ほか
- 写真図版 39 1 7 地点北壁  
2 7 地点南壁
- 写真図版 40 1 7 地点検出  
2 7001SX
- 写真図版 41 弥生土器・土師器
- 写真図版 42 土師器・須恵器・灰軸陶器・山茶碗
- 写真図版 43 山茶碗
- 写真図版 44 山茶碗
- 写真図版 45 山茶碗・常滑焼
- 写真図版 46 古瀬戸・土師器皿
- 写真図版 47 土師器鍋釜
- 写真図版 48 弥生土器・製塩土器
- 写真図版 49 古代と中世の土器・陶磁器
- 写真図版 50 中世の土器・陶磁器
- 写真図版 51 中世の土器・陶磁器
- 写真図版 52 中世の土器・陶磁器
- 写真図版 53 中世の土器・陶磁器・土製品
- 写真図版 54 瓦
- 写真図版 55 大量出土銭・壺
- 写真図版 56 大量出土銭B・壺と蓋
- 写真図版 57 銭貨
- 写真図版 58 和鏡・独鈷杵





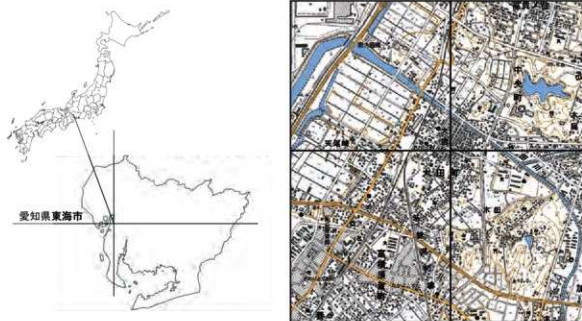
# 第1章 序章

## 第1節 調査に至る経緯

畑間遺跡は愛知県東海市大田町に所在する(第1図)。平成8年度から10年度にかけて愛知県教育委員会が実施した知多半島遺跡詳細分布調査(註1)によると、畑間遺跡は古墳時代から中世にかけての遺物散布地とされている。

本市では、名古屋鉄道太田川駅周辺地区を東海市の玄関口として位置づけ、中心市街地としての整備を進めており、平成4年度から土地区画整理事業、連続立体交差事業及び市街地再開発事業の三つの事業を実施している。これら事業のうち、土地区画整理事業区域内に所在する埋蔵文化財包蔵地について、その範囲および性格を把握するため、平成8年度に試掘調査を実施した(註2)。この調査によって、事業区域内には畑間遺跡、東畑遺跡、郷中遺跡をはじめ、後田遺跡、能雲院遺跡が存在することを確認した(第3・4図)。試掘調査の結果に基づき、土地区画整理事業担当部局である都市建設部中心街整備事務所と協議・調整をはかり、平成11年度から東海市教育委員会によって、主として道路整備用地において記録保存を目的とした緊急発掘調査を継続して実施している。平成28年度末時点での調査済面積は23,590㎡である。

平成28年度の調査は、原因者である東海太田川駅周辺土地区画整理事業施行者代表者の東海市長から平成28年4月8日付けにて文化財保護法第94条の規定に基づく埋蔵文化財発掘の通知があり、平成28年4月28日付け28教生第380号にて愛知県教育委員会教育長から発掘調査指示があった。畑間遺跡範囲内の計7地点1,295㎡については、原因者である東海太田川駅周辺土地区画整理事業施行者代表者の東海市長から平成28年4月8日付け中第9号にて発掘調査依頼があった。平成28年4月8日付け社第26号にて東海市教育委員会教育長から発掘調査を実施する旨回答し、現地調査業務及び1次整理作業について、平成28年5月18日に株式会社アコード名古屋営業所と業務委託契約を締結した。



第1図 調査地の位置

## 第2節 位置と歴史的環境 (第2・3図)

東海市は、北側が名古屋市、南側が知多市、東側が大府市と知多郡東浦町、そして西側が伊勢湾に面している。東海市の所在する知多半島は伊勢湾と三河湾に挟まれ、海と密接な関わり合いを築いてきた地域である。また知多半島は尾張丘陵部から続くなだらかな丘陵地(知多丘陵)が中央部を貫き、沿岸部には数段の段丘面や小規模な沖積平野が形成されている。東海市を始めとする半島北部の丘陵部は第三期中新世の常滑層群に属している。常滑層群は砂層、粘土層、シルト層を中心に火山灰層や亜炭層を含む地層で、この粘土が古代末に始まる常滑窯(知多窯)の陶器原料となってもいる。知多半島は平坦な土地が少ないことが特徴的であるが、畑間遺跡の所在する海岸平地は知多半島で最も広い面積を有している。半島の市町は海に面し、また豊富な粘土を有する丘陵部という立地条件や環境を活かした生活が営まれていた。つまり、古来より海浜部では漁業や製塩、海運、また海浜部の背後に形成された平地では農業、丘陵部においても農業と常滑焼等の窯業が盛んに行われ、生活を豊かなものとしてきた。

今回報告を行う畑間遺跡をはじめ、大田町に所在する遺跡は全て砂堆上に立地している(第2図)。砂堆とは、河川の流れや波による陸地の浸食に伴い伊勢湾に供給された砂が沿岸流等により運ばれ、海岸に沿って蓄積され、形成された浜堤状の地形である。市内にある砂堆は南北方向に延びるものが三つ形成され、海岸より奥に位置しているものから順に第一砂堆、第二砂堆、第三砂堆と呼称している(註3・4)。このうち畑間遺跡は、最も東西幅が広く規模が大きい第一砂堆上に立地している。第一砂堆は南北方向が丘陵部に規制されるために長さは1km程にとどまり、その北側丘陵部頂上には真言宗弥勒寺、同南側には天台宗観福寺が所在する。

東海市では、古くは縄文時代から人々の痕跡を確認することができる。最も古いのは大田町に所在する高ノ御前遺跡である。高ノ御前遺跡では縄文時代前期から中世にかけて集落が営まれてきた複合遺跡で、縄文時代晩期を中心とした土器と石器が出土している。知多半島では旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡数や調査事例は少なく、高ノ御前遺跡は知多半島における縄文時代の様相を考察する上でも貴重な遺跡である。同じく縄文時代について、郷中遺跡と東畑遺跡でも臆げながらその様相を垣間見ることができる。平成17年度調査の郷中遺跡J区では縄文時代中期から晩期、平成21年度調査の東畑遺跡2地点では、縄文時代晩期の雷Ⅱ式を中心とする縄文土器片が100点程まとまって出土している。断片的な資料であるものの、高ノ御前遺跡と旧河道を挟んで所在するこれらの遺跡間に関係性があったことは想像に難くない。

弥生時代になると畑間遺跡と東畑遺跡を中心に、住居址や方形周溝墓を伴う集落が形成され始める。集落は古墳時代前期にいたっても砂堆上で地点を変えながら形成されている。縄文時代以前は僅かであった遺跡数であるが、弥生時代は市内北部に位置する名和町塚森遺跡や、今回報告を行う大田町畑間遺跡はじめ東畑、郷中、龍雲院遺跡、市南部では高横須賀町柳ヶ坪遺跡、高横須賀町烏帽子遺跡等、一挙に増加する。最も新しい時期に形成された第三砂堆はこの頃になると安定的に見られるようになり、高横須賀町烏帽子遺跡や知多市細見遺跡を中心に遺跡が形成される。東海市では弥生時代の人々の生活の中心が第一砂堆である一方、同じ時期の知多市では第三砂堆が生活の中心となっていたようである。これについては、当時の大田町は内陸側に奥まった谷状地形であったため、第一砂堆が発達し、居住に適していたことから積極的に利用された結果であると考えられる。

市沿岸部については後述するが、江戸時代に行われた新田開発に伴い埋め立てられている。現在も伊勢湾に面し、鈴鹿山脈を望む風光明媚な土地ではあるが、遺跡が形成された当時の海岸線からは変容し、



その様相は大きく異なるものである。砂堆に立地するいずれの遺跡の地層も基本的には砂層で形成されており、現代の普段の営みでは気付きにくいものの、遺跡の形成された当時は近くに海岸線があり、海と非常に密接した生活を営んでいたことが発掘調査から分かる。

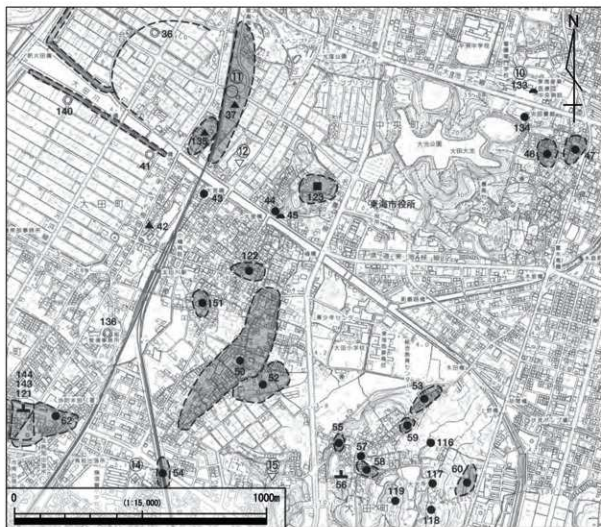
古墳時代は第三砂堆に位置し、古代製塩遺跡として著名な松崎遺跡が代表的である。松崎遺跡をはじめ沿岸部に立地する各遺跡では製塩土器が大量に出土しており、伊勢湾奥部における古代土器製塩の核となる地帯であったと思われる。大田町には王塚古墳と神宮前遺跡があり、王塚古墳では昭和初期の道路工事の際に石室と短頸壺や坏蓋等の須恵器が見つかったとされているが、詳細は不明である。現在は改修された大田川により遮断されているが、第一砂堆は畑間遺跡からその北側に位置する王塚古墳と神宮前遺跡も含んでおり、当時は一連の遺跡であったと言える。市内全域に目を向けると前・中期古墳は少ないものの、名和町兜山古墳（前期古墳）で三角縁神獣鏡が出土している。後期になると古墳の数は増加するものの、大田町王塚古墳や荒尾町丸根古墳等は、簡易な記録と僅かな遺物を残して滅失している。高橋須賀町にある岩屋口古墳は知多半島で最大規模の横穴式石室である。6世紀末頃のもので、7～8世紀にかけての追葬品と思われる須恵器も出土している。古墳時代の集落遺跡は前代に引き続き沿岸部での形成が顕著である。海岸線を南北に辿ると大田町上浜田遺跡や同下浜田遺跡等、製塩土器や須恵器、土師器が出土する遺跡が多く所在している。

古代は第三砂堆上で製塩活動が活発な遺跡を多数確認することができ、平城京出土木簡からも調として塩が献納されていた様相がうかがえる。平安時代の知多半島にはいくつかの荘園や国衙領が記録に残り、知多半島南部では野間内海荘等の荘園があった。半島北部は国司の支配下であったが、平安時代末から鎌倉時代には大田町にあった大郷郷は熱田社領に属していたとされる。

古代寺院としては第二砂堆上にあり、弥生時代から近世まで続く複合遺跡である知多市法海寺遺跡が挙げられる。法海寺遺跡は発掘調査の結果から、塔心礎や礎石、白鳳期の瓦が出土している。瓦には中島郡や海部郡の諸寺と同範・同文関係が指摘されているものがある（註5）。東海市でも名和町トメキ遺跡や岡前川遺跡の周辺に名和庵寺と呼ばれる古代寺院の存在が想定されている。トメキ遺跡では白鳳期の軒平瓦と鴟尾の破片が出土した瓦溜まりが見つかっている。

中世には知多半島全域で山茶碗を中心とした窯業が盛んになる。製品は県内のみならず東海地方、全国へと出荷されている。市内でも加木屋町を中心に隣接する大府市の古窯と関係を持ちつつ窯業が営まれてきた。この古窯跡群には瓦も焼成された加木屋町の社山古窯等があり、熱田神宮寺や京都法金剛院、鳥羽離宮東殿安楽寿院へも供給されていたことが分かっている。畑間、東畑遺跡でも過去の調査でこれらと同範と考えられる瓦が出土している。この時期の集落は古代から引き続き、連続と生活が営まれる遺跡が大半である。畑間遺跡等では、弥生時代や古墳時代の遺構・遺物が東畑遺跡と畑間遺跡の中心部～西側に集中するのに対して、中世の遺構・遺物は畑間遺跡と東畑遺跡、郷中遺跡、龍雲院遺跡の広い範囲で確認することができる。畑間遺跡ではいくつかの区画溝や、龍雲院遺跡では区画溝を有する居館跡と思われる遺構も見つかっている。他方、大田町から富木島町の一部にかけて広がる木田丘陵では、中世城館である木田城跡が存在する。木田城跡は主郭を中心に曲輪が形成され、現在でも堀跡と思われる地形を確認することができる。

江戸時代は横須賀町において尾張徳川家2代藩主の徳川光友の浜御殿（別荘地）である横須賀御殿が建設された。これを期に横須賀町は町方として発展し、尾張万歳や名古屋型の山車等、名古屋の文化も取り入れるようになり、独自の文化として栄えていった。横須賀御殿を軸にその南側には町割りが整え



- |           |              |            |            |
|-----------|--------------|------------|------------|
| 36 浜新田堤防  | 50 畑間遺跡      | 59 前畑遺跡    | 123 弥勒寺遺跡  |
| 37 松崎遺跡   | 51 龍雲院遺跡     | 60 北広遺跡    | 133 丸根古墳   |
| 41 後浜新田堤防 | 52 東畑遺跡      | 62 烏帽子遺跡   | 134 大池北貝塚  |
| 42 下浜田遺跡  | 53 高ノ御前遺跡    | 116 上前田遺跡  | 135 上浜田遺跡  |
| 43 後田遺跡   | 54 太田川第3踏切貝塚 | 117 西広1号遺跡 | 136 御州浜庭園跡 |
| 44 神宮前遺跡  | 55 庄之脇遺跡     | 118 西広2号遺跡 | 140 川南新田堤防 |
| 45 王塚古墳   | 56 木田城跡      | 119 山畑遺跡   | 143 滝川半斎屋敷 |
| 46 蜂畑貝塚   | 57 木田遺跡      | 121 横須賀御殿跡 | 144 横須賀代官所 |
| 47 北屋敷遺跡  | 58 下畑遺跡      | 122 郷中遺跡   |            |

第3図 遺跡の位置と周辺の遺跡

られ、江戸時代初期には馬走瀬（まはせ）と呼ばれていた地域は町方へと変貌を遂げる。また横須賀御殿に伴う大規模回遊庭園として計画された御洲浜は、旧大田川河口に位置しており、河川氾濫の影響を受けやすかったと思われる。こうした影響を排除すべく藩主徳川光友の命により、大田川の流路を砂堆北側へ新たに開削し、旧河道一帯は湿地や田畑へと変化した。元の流路は第一砂堆東側の後背湿地から南端を迂回し、横須賀御殿のすぐ脇に河口を開いていたと考えられる。横須賀町烏帽子遺跡では横須賀御殿に関わる遺構や遺物が出土している。光友の死後は廃止された横須賀御殿であったが、その後は横須賀代官所が設置されたことで、横須賀町は知多半島西岸唯一の町方として栄えた。

また市の沿岸部一帯は江戸時代～明治時代を通じて新田開発とそれに伴う埋め立てが行われた。大田地区では浜新田が1770年に、南側の後浜新田が1797年に築立された。沿岸部が埋め立てにより新田へと変貌したことを除き、少なくとも昭和初期までは中世、江戸時代以来の集落構造がそのまま残存していたと考えられる。

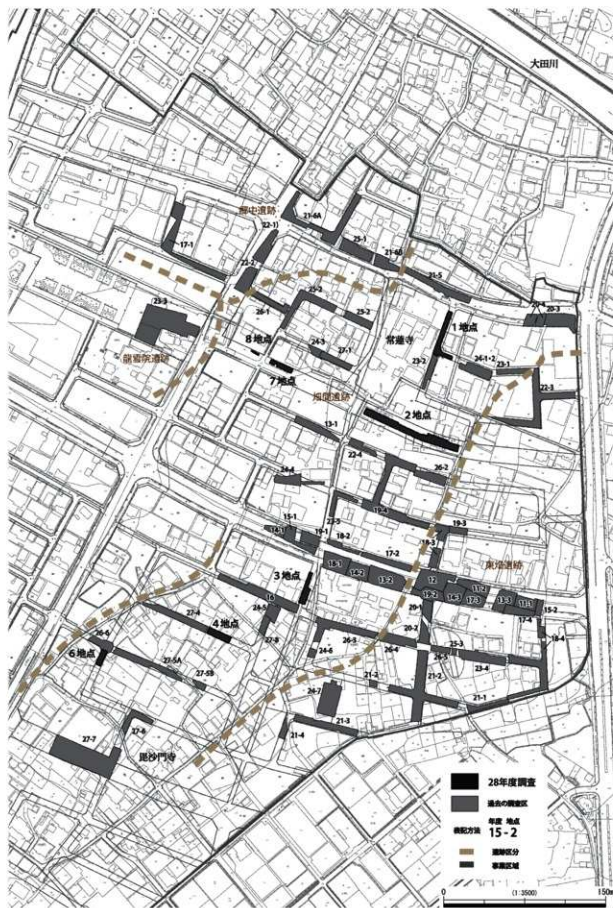
### 第3節 既往の調査（第4図・表1）

畑間遺跡は周知の埋蔵文化財包蔵地として知られてはいたが、土地区画整理事業実施以前は試掘調査も含めて発掘調査は実施されていなかった。初めて調査が実施されたのは、第1節のとおり平成8年度の土地区画整理事業に先立つ試掘調査である。調査は土地区画整理事業の予定区域内に20箇所の特長を想定して行った。このうち畑間遺跡、東畑遺跡に関係するトレンチは12箇所になる。この試掘調査によって分布範囲が不明であった各遺跡について、概略ではあるが範囲を特定することができた。各遺跡の時期については畑間遺跡が中世から近世、東畑遺跡が弥生時代中期から古墳時代前期と古代から中世であることが推測された。

その後は平成11年度からの本調査によって、畑間遺跡、東畑遺跡それぞれの遺跡の様相が明らかとなってきた。既往の調査地は第4図に示した通りであるが、各年次の調査は土地区画整理事業に伴う家屋移転の進捗状況に応じて調査を実施しており、進捗が進んでいなかった初期段階の調査は小規模なものとならざるを得なかった。このため調査当初は遺跡全体の様相のみならず、近隣調査区の遺構との整合を図ることすら困難であった。

発掘調査は駅前から延びる街路（駅前線）を中心に着手し始めたことから、南北方向に長く延びた畑間遺跡の中央部を東西方向に横断して調査する形となった。その後は周辺の街区道路の調査を順次実施している。これまでの調査では、主に縄文時代から近世にかけての幅広い時期の遺構・遺物を確認している。特筆すべき事項としては、1点目に縄文時代後期以降の縄文土器がまとめて出土したことである。畑間・東畑遺跡が立地する砂堆の形成時期を示唆する新たな知見である。2点目に弥生時代中期から古墳時代前期にかけての時期毎の生活域が分かってきたことが挙げられる。近年は街区道路部分の調査も進んでおり、臚げながらではあるが遺跡内での集落の消長をたどることができるようになってきている。

なお、調査開始時の平成11年度から平成19年度までは東海市教育委員会直営で調査を実施した。この間の調査成果については概要報告（註6）と並行して整理作業を実施し、平成25年度に報告書を刊行している（註7）。平成20年度以降は民間調査機関の支援を受けて調査を実施しており、民間支援の調査で刊行した発掘調査報告書は表1のとおりである。



第4図 調査区配置図

調査年次	書名	発行機関	編集機関	発行年
平成20年度	愛知県東海市畑間・東畑遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	国際航業株式会社	2009年(平成21年)
平成21年度	愛知県東海市畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	安西工業株式会社名古屋支店	2012年(平成24年)
平成22年度	愛知県東海市平成22年度畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	株式会社島田稲中部営業所	2012年(平成24年)
平成23年度	愛知県東海市畑間・東畑・龍雲院遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	国際文化財株式会社西日本支店	2013年(平成25年)
平成24年度	愛知県東海市平成24年度畑間・東畑遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	株式会社島田稲中部営業所	2014年(平成26年)
平成25年度	愛知県東海市平成25年度畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	株式会社アコード名古屋営業所	2015年(平成27年)
平成26年度	愛知県東海市平成26年度畑間・東畑遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	国際文化財株式会社西日本支店	2016年(平成28年)
平成27年度	愛知県東海市平成27年度畑間・東畑遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	株式会社島田稲中部営業所	2017年(平成29年)
平成11年度～19年度	愛知県東海市畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告～平成11～19(1999～2007)年度調査～	東海市教育委員会	国際文化財株式会社西日本支店	2014年(平成26年)

表1 既往の発掘調査報告書



## 第4節 調査の方法

### 遺跡略号・調査区

遺跡調査略号は既往調査を踏襲し、2016年を示す16を付し、畑間遺跡2016年として「HM16」とした。図面や遺物注記などの記録にこの略号を用いている。

今回の調査区はすべて畑間遺跡に位置していた。1～8地点が設定されているが、5地点の調査は中止となったので、調査を行なったのは計7地点である（第4図）。

2地点は排土置き場の不足などから東西に分け、それぞれ西区、東区として調査した。さらに、東区は一部拡張（調査時には拡張区と呼称）したが、調査記録や本報告では基本的にすべてを合わせた一つの地点とした。

### 遺構番号・遺構種別

遺構番号は各地点で種別に関係無く通し番号を付けた。遺構種別は凡例に示した通りである。遺構番号は作業上の絶対性があるが、遺構種別は考古学的にも相対的であり、調査時と整理作業時で変更したものもある。よって遺構表記は0001SKのように、先に番号、後に種別を付した。また調査時一つの遺構としていたものを、後日付けた場合にはaやbなどアルファベット小文字を付した。なお、遺構番号は4ケタで、最初の数は地点番号を示し、1地点は1001～、2地点は2001～となる。

### 調査記録

遺構の図面記録は基本的に電子平板によるデジタル測量を行ない、写真測量も併用した。重要な出土遺物は、出土状況図の作成や出土地点を座標で計測し、それぞれの遺物に取上げ番号を付けた。

写真記録は35mmフィルムのカラーリバーサルと1000万画素以上かつ撮像素子フルサイズのデジタル一眼レフカメラを使用した。調査状況の記録はデジタルカメラのみを使用した。

### 測量・グリッド設定（第5図）

調査における測量は2級基準点を基点とし、従来通り世界測地系座標による。また、遺物の取上げや遺構位置の記録等に、これまで同様にグリッドを5mに設定した。この5mグリッドは国土交通省告示の平面直角座標系第VII系を基軸とし、7J10tのような4ケタのアルファベットと数字で表記される。この表記は、国土座標において1,000m×1,000mの大区画を設定し、その中での位置を示すものである。大区画をさらに100m×100mに分割し、北～南方向を1～10の数字で、西～東方向をA～Jで示す。この一例が7Jである。次に、各100mグリッドをさらに5m×5mの小グリッドに分割し、北～南方向を1～20、西～東方向をa～tで示した。

### 遺構の検出・掘削および攪乱

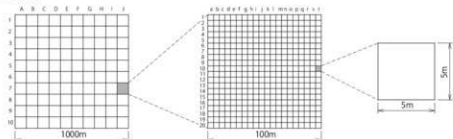
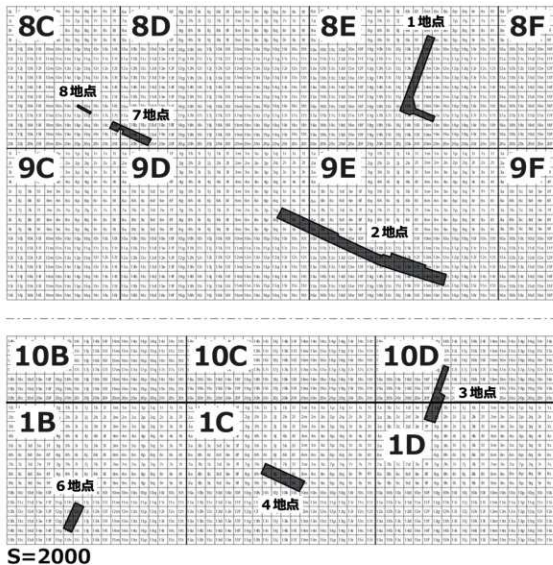
既往調査と同様に基本的には1面調査である。層序については第2章を参照されたいが、まず表土や客土などの近現代層（I層）と近世層（II層）の大部分を重機によって掘削し、以下包含層（III層とIV層）を人力によって掘り下げ、地山面（V層上面）を調査面とした。ただし、II層とIII層の分別が困難なところも多く、包含層として人力掘削したものはII層を含んでいる。

今回の調査でも遺構と攪乱の分別は不明確になってしまった。上層からの掘り込みが層位的に確認できたものや近世～近代の陶磁器や物品が出土するものは攪乱としたが、時期不明の遺構の中には攪乱とすべきものも含まれているだろう。また、遺構として調査・記録したものが、出土遺物から後日攪乱と判明したものもある。現地調査中に判明した場合は攪乱としたが、調査終了後については近世もしくは近現代遺構として記録に残している。

記録整理・遺物整理・報告書作成

写真や図面等の整理業務および遺物洗浄は現地調査と併行して実施し、現地調査終了後に校正等を行ないまとめた。遺物への注記はジェットマーカの自動注記マシーンを用い、遺跡略号とグリッド、遺構番号・種別を注記した。取上げ番号を付けた遺物は、取上げ番号も注記した。

遺物整理においては接合・復元を行ない、抽出した遺物は記録化を行なった。遺物の実測は通常の手測り実測であるが、トレースはデジタルトレースを行なった。報告書の作成においては、遺構図、写真図版も含め、すべてデジタル編集で行なった。



第5図 調査区・グリッド位置図

## 第5節 調査の経過

委託契約後の平成28年5月19日から準備作業を開始した。調査は最も北に位置する1地点からであり、東海市社会教育課職員の監督の下、6月8日に開始した。1地点の調査は7月5日に高所作業車からの全景撮影を行ない、7月7日に終了した。続いて、最も南に位置する6地点の調査を行なった。6地点は面積も狭く7月11日に開始し、同月19日には調査を終えた。続いて4地点の調査を行ない、夏季休暇前の8月8日に終了した。6、4地点調査時は毎日が猛暑日であり、こまめな休憩と水分補給を心がけ、日よけシートを張るなど熱中症対策にも留意しながら調査を進めた。

夏季休暇明けからは2地点の調査を始めた。2地点は排土置き場の問題から東西に分け、西区を先に調査した。8月22日から重機による表土掘削を行なったが、大部分が攪乱であり、遺構面は東西両端にわずかに残るのみであった。西区は9月9日に調査を終え、埋め戻しやフェンス移動などの後、9月26日から東区の調査を開始した。2地点東区は最も成果の得られた調査区であった。特に2つの大量出土銭の発見は特筆に値する。この調査区では10月29日に現地説明会を開催し、60名ほどの参加を得た。11月1日に高所作業車による全景撮影を終え、その後埋め戻しを行なった。なお、2つの大量出土銭がともに北壁付近から出土したことから北側にトレンチを開削（拡張区と表記）して追加の調査を行なったが、残念ながら新たな発見はなかった。大量出土銭については12月9日に報道陣が取材に訪れ、東海市長も視察に訪れた。

次に3地点の調査を11月21日から開始したが、2地点西区と同様に大部分が大規模な攪乱を受けており、北端に遺構面が残るのみであった。そのため11月28日には調査を完了した。その後、5地点の調査がなくなり、代わりに7地点が設定された。しかし、年内は成果品の整理等の室内業務を行ない、年明けの平成29年1月10日からの開始とした。7地点は湧水レベルが検出面とほぼ同等のTP2.5mであったため複数の排水溝を掘削し、常時ポンプを稼働しながらの調査となった。7地点は1月23日に埋め戻しまで完了し、同日にさらに追加となった8地点の調査も行ない、遺構・包含層が無いことを確認し、調査を終えた。

出土遺物と図面等の整理作業は現地調査と併行して開始した。遺物の洗浄は現場事務所にて雨天の日等を利用して行なった。遺物の注記作業および図面の整理・校正は平成29年1月～3月の間に行なった。同年3月28日付けでこれらの成果品を納入した。

2次整理作業及び報告書作成業務について、東海市教育委員会と株式会社アコード名古屋営業所は業務委託契約を平成29年5月26日に締結した。その後社会教育課職員の監督の下、遺物の接合や実測等の記録化作業などの2次整理作業及び報告書作成業務を実施し、本報告書の刊行に至った。



写真1 現地説明会



写真2 報道関係取材

## 《調査日誌抄録》

160608 (水) 晴れ

1地点の重機による表土掘削を開始。南東部から開始したが攪乱で地山まで壊れていた。その後西に進めるとTP3.7mほどでⅢ層と思われる包含層が検出された。

160614 (火) 晴れ

表土掘削は終了した。北側は既往調査成果の通り、TP3.9mくらいで包含層が見られた。南側よりも掘削時に遺物が多いように思われる。

160627 (月) 晴れ

調査区南側の壁面土層の観察と記録を行なった。1030SDは少なくとも2条に分かれる。東西壁面で埋土や断面形状に相違がある。

160630 (木) 晴れ

1146SXを掘り下げたところ径1mほどの円形土坑が検出された。さらに周辺を精査すると埋土が既土の掘り方らしきものが検出された。1152SKは井戸かもしれない。

160705 (火) 晴れ

1地点全景を12時頃に高所作業車から撮影した。明日、補足調査を行ない1地点の調査は終了する予定である。

160711 (月) 晴れ

6地点の調査を開始。地表面60cm程度でV層が検出された。赤褐色の耕作土とV層の間にわずかに包含層らしきものがあるが、遺物は微小なものが少量あるのみ。

160714 (木) 晴れ

6010SDから小型の長頸壺と小型丸底鉢が2個体寄り添って出土した。周溝墓の可能性もある。大部分の遺構の調査を終えたので、明日全景の予定。

160719 (火) 晴れ

6地点の埋め戻しを完了。東海市関係者(社会教育課と中心街整備事務所の職員)の立ち合いのもと午後には確認して頂き、6地点の作業を終えた。午後からは4地点の表土掘削を開始した。

160728 (木) 曇り

調査区南壁から西に弧状に延びる4011SDの掘削を行なった。黒色の埋土が特徴的である。2か所深いところがある。出土遺物は弥生時代中期を主とし、当該期の遺構であろう。

160804 (木) 晴れ

4地点の全景撮影を行なった。4011SDや4052SKなどの遺構の配置は方形周溝墓のプランを思わせるものがあり、昨年の隣接調査区の成果と合わせて、この一帯が墓域の可能性はある。

160810 (水) 晴れ

2地点のフェンス設置を行なった。明日から15日まで夏季休暇なので、周辺の片付け等を行なった。

160822 (月) 晴れ

2地点西区の重機掘削を西から開始。結局大部分が攪乱(近代以降の大規模な掘り返しと客土か)であり、西端に一部遺構面が残るのみであった。

既往調査成果を見ると、集落中心部、常蓮寺の正面に位置する南北に延びている道一帯は大きな攪乱でこれまでも遺跡がほとんど残っていない(22年度の4地点、23年度の5地点など)。

160905 (月) 曇り

調査区東側の遺構調査を行なった。地山砂層の酸化など二次的变化が著しく、遺構の認識が困難である。遺構と思つて掘削したものが、二次的变化層に過ぎないものもある。

160909 (金) 晴れ

調査区西側の完掘状況と西壁等の撮影・測量を行なった。これをもって2地点西区の調査完了。



写真3 1地点機械掘削状況



写真4 6地点調査状況



写真5 4地点調査状況



写真6 2地点西区調査状況

160926 (月) 晴れ

2地点東区の重機による表土掘削を東側より開始した。この一帯のV層は数mm程度の小礫が混ざる粗粒砂層であり、湿り気がある。

161004 (火) 晴れ

先週以来の重機による表土掘削と人力による包含層掘削を西に進めた。少しずつV層は土が着いている。調査区中央北壁際に瀬戸の壺瓶が埋まっている。頸から口縁部は失われている。下部まで残っているのかは不明だが、優品である。

161013 (木) 曇り

調査区中央部の遺構の掘削・調査を進めた。埋納瀬戸三耳壺は銭貨が詰まっていた。紐で結ばれた一単位 10cm 程度の粗銭がらせん状に詰め込まれている模様。銭一枚一枚はさびのため判別できない。紐は一部観察できた。

黒色土の 2114SD は現代の 2 次的な影響で溝状に黒色化していただけで遺構は無い。

161014 (金) 曇り

隅丸長方形の土坑 2156SK から独立柱（密教法具）が出土した。ほぼ土坑の底部に無造作に埋まっていたようだ。この土坑はプランから土壌層の可能性も考えられるが、他に目立った遺物や埋土の特徴はない。

161019 (水) 晴れ

貝を含む土坑の下から山形の破片を蓋にした常滑壺が埋納されているのが発見された。埋納銭の可能性はある。

161028 (金) 雨

雨天のため調査休止。明日の現地説明会のための準備、特に遺物展示の準備を行なった。

161102 (水) 晴れ

常滑壺の一角を掘削し、平面記録を完了し蓋を外した。その結果、やはり埋納銭であることが判明した。

161107 (月) 晴れ

本日より西端から埋め戻しを開始。中央部は 2120SD のベルトの記録と掘削を行なった。東側は北壁の記録を行なった。

161115 (火) 曇り時々晴れ

2地点東北側の拡張区の重機掘削を行なった。最大の目的である埋納銭はなかった。3地点はフェンス設置等の準備工を午前中のみ行なった。

161122 (火) 晴れ

3地点の表土掘削を行なう。2地点西区のような大掘乱となり、褐色の小石の混ざった粗粒砂で埋められている。その砂も2地点西区と同じ様相である。

161128 (月) 晴れ

3地点の全景と壁面の記録（撮影と測量）を行なった。これをもって3地点の調査は終了した。

161209 (金) 晴れ

埋納銭の取材に記者が来訪。遺物の撮影等が行なわれた。東海市長も視察に訪れた。

170110 (火) 晴れ

7地点の表土掘削を開始。TP2.4 mまで達するとV層が検出できるが、湧水もひどく、まともに検出できない。

170116 (月) 晴れ時々雪

午前には湧水と雪による水の排水を行ない、調査は出来なかった。午後からの調査で、大型遺構 7005SX と 7010SD の掘削を行なった。

170123 (火) 晴れ

追加でトレンチ調査を行なうこととなった8地点の調査を行なった。その後、7地点も含め埋め戻しを行なった。これをもって現場調査業務は完了。



写真7 2地点東区調査状況 (2120SD)



写真8 2地点東区調査状況 (2120SD)



写真9 大量出土銭B調査状況



写真10 7地点調査状況

## 第2章 遺構

### 第1節 遺構の概要と基本層序

#### 1. 遺構の概要

今回の調査で検出された遺構の総数は542基になる。調査区・種別の遺構数は表2の通りである。遺構密度は1mあたりの平均遺構数である。1地点が最も密度が高く、4地点も高い数値を示す。3地点は大部分が掘乱であったので参考にならないが、2、6、7地点は同程度である。

種別では柱穴と土坑が多いが、柱穴は明確に建物を構成すると判断できるものはなく、土坑の多くは性格不明である。これらに対し、溝は多くの遺物が出土した2120SD（調査全体の3割強）や大量銭を伴う区画溝群などがあり、中世の畑間遺跡について考える一定の成果を得られた。また、弥生時代の方形周溝墓と思われる溝もある。よって遺構の記述は溝を中心としたものになる。また、SXとした遺構はプランが不整形な遺構などを含むが、厳密な分類となっていない。大量銭が出土した二つの遺構もSXとした。それぞれ調査時の遺構番号・記号は2140SX、2190SXであるが、本報告では2140SXを大量（出土）銭Aもしくは（銭貨）壺A（古瀬戸三耳壺）、後者の2190SXを大量（出土）銭Bもしくは（銭貨）壺B（常滑壺）とも呼称する。大量出土銭という名称は遺物名称であって遺構名称としては、大量銭出土遺構や銭貨埋納遺構とすべきと考える。しかし、今後の調査研究や活用に向けて、一般的な大量出土銭という名称を用いる（註8）。

遺構の時期であるが、出土遺物や層位・切り合い関係から判断できた遺構のみを当遺跡の区分案（表3）に沿った時期を一覧表に記しており、各調査区の時期別の遺構数は表2の通りである（註9）。古代以前の遺構は23基と少ないが、1地点は古代、4地点は弥生時代の遺構が比較的多い。ただし、まとめて遺物が出土した遺構、竪穴建物といった性格が明確な遺構は無い。

中世（V期）の遺構が最も多く、その中でも、鎌倉時代にあたるV-2期（山茶碗第5～7型式期）と室町時代中期にあたるV-4期（山茶碗第10～11型式期）の遺構が多い（註10）。中世の時期区分に関しては、第3章に主要な遺物編年との対照表を提示している（表5）。なお、第6～7型式期の山茶碗のみが出土する遺構が多いものの、これをそのまま遺構の年代と判断できるのか難しい。多くの遺構は帰属時期の決め手に欠ける。

次に基本層序と調査面について説明し、次節からは調査地点ごとに報告してゆく。まず概要を述べ、次に主要な遺構について種別ごとに記述する。紙幅の関係ですべての遺構を詳述できないが、他の遺構に関しては、遺構一覧表と全体図を参照されたい。

	種別遺構数						時期別遺構数							
	SD	SE	SK	SP	SX	遺構数	面積(m <sup>2</sup> )	密度/m <sup>2</sup>	I	II	III	IV	V	VI
1地点	10	0	54	110	13	187	225	0.83	0	0	0	7	87	16
2地点	32	0	62	104	14	212	575.7	0.37	0	2	3	0	100	3
3地点	3	0	1	0	0	4	135.2	0.03	0	0	0	0	2	0
4地点	9	1	26	52	2	90	135.9	0.66	0	5	1	0	34	5
6地点	3	0	7	15	1	26	74.2	0.35	0	0	5	0	0	0
7地点	5	0	3	7	8	23	83.8	0.27	0	0	0	0	5	9
8地点	0	0	0	0	0	0	9.6	0	0	0	0	0	0	0
	62	1	153	288	38	542	1239.4	0.44	0	7	9	7	228	33

表2 遺構数一覧

時期	時代・土器型式
I	1 縄文時代晩期以前
	2 縄文時代晩期末～弥生時代初頭
	3 弥生時代前期（榎王式期～水神平式期）
II	1 弥生時代中期前半（岩滑式期）
	2 弥生時代中期後半（貝田町式・瓜棚式期～凹線紋系・古井式期）
III	1 弥生時代後期（八王子古高式期～山中式期）
	2 弥生時代終末期～古墳時代前期（罫間式期～松河戸Ⅰ式期）
	3 古墳時代中期（松河戸Ⅱ式期～宇田式期）
IV	1 古墳時代後期～終末期（東山10号窯式期～東山44号窯式期）
	2 奈良時代（東山50号窯式期～黒笹14号窯式期）
	3 平安時代前期（黒笹90号窯式期～東山72号窯式期）
V	1 平安時代後期（山茶碗第2～4型式期）
	2 鎌倉時代（山茶碗第5～7型式期・常滑窯3～6a型式期）
	3 鎌倉時代末～室町時代前期（山茶碗第8～9型式期）
	4 室町時代中期（山茶碗第10～11型式期）
	5 室町時代後期（瀬戸大窯式期）
VI	江戸時代

表3 時期区分

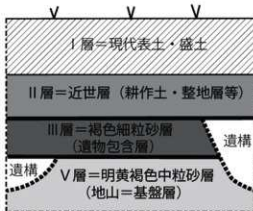
## 2. 基本層序と調査面（第6図）

基本層序は各地点とも共通であり、本節でまとめて記述する。基本的には2014年に刊行された平成11～19年度調査の報告書で示されたⅠ～Ⅴ層に分けた層序の通りである。現代土や盛土がⅠ層、耕作土や整地層等の近世層がⅡ層である。Ⅲ層は褐色～にぶい黄褐色の細～中粒砂層、いわゆる遺物包含層である。今回の調査区では縄文～弥生時代の包含層（Ⅳ層）は4地点の一部（西側）でわずかにみられたのみであった。Ⅴ層が地山（基盤層）であり、明黄褐色の中～粗粒砂層である。

Ⅲ層については、その形成時期を10～11世紀頃とする考えを平成25年度調査報告で述べたが、今回の調査において、その点を補強する成果も否定する成果もなかった。ただし、中世遺構はⅢ層上面から形成されており（残っているというべきか）、Ⅲ層が中世以前に堆積した層であることは間違いない。

次にⅤ層（基盤層）の各調査区の平均的な標高を記しておく。南に位置する6地点は最も低くTP2.6～2.8mである。狭い調査区内でも南西方向に下がっており、砂堆南西隅の状況を示している。6地点よりも北側にある3地点と4地点はやや高く、TP3.2m前後である。最も北に位置する1地点はTP3.7m前後とさらに高い。1地点は南北に長い調査区であるが、調査地内での標高差はほとんどない。2地点のⅤ層のレベルはTP3.3～3.6mである。調査区の東西端が低くなっている。その西に位置する7地点は良好に残っている部分ではTP2.7m前後であり、2地点西端より下がる。なお、そのすぐ西の8地点ではTP2.0mまで下げたが、攪乱を受けており、Ⅴ層を確認できなかった。

最後に調査面について述べる。Ⅲ層の形成時期は中世以前と考えられ、よって中世遺構はこのⅢ層上面からの遺構である。しかし、検出の困難さと時間的制約からⅤ層上面で検出を行なった（註11）。よってⅤ層上面のⅠ面調査である。



第6図 基本層序模式図

## 第2節 1地点の遺構

### 1. 概要 (図版1～6)

1地点では187基の遺構が検出された。遺構密度は0.83/m<sup>2</sup>(表2)、最も高い調査区である。その大部分は時期不明の柱穴、土坑であるが、建物を構成する柱穴や性質の明らかな土坑は少ない。柱穴は3基ほどが等間隔で並ぶものはあるが、遺物、深さや埋土なども検討した上で建物や柵を構成していると判断できる事例はない。

主な遺構としては3条の東西方向の溝が挙げられる。これらの溝は調査区の方位(=近世以後の地割の方位)に沿っており、同様の溝は既往調査でも多くみついている。調査区南側で検出した1030SDは、東で24年度1・2地点のSD2010、西では平成25年度2地点の110SDや160SDと連なる可能性がある。東西方向の溝は調査区中央(1040SD)と北端(1050SD)にもある。1040SDは現代まで残る地境に位置し、ここを境に検出面=V層上面の状況が変化した。南側に比べ北側は高いレベルでV層が残っていた(写真11)。調査時には微地形の変化とも思ったが、南側もV層が良好に残っている部分は北側と標高差はなかった。よって、この高低差は溝の南北で土地利用が異なった結果(南側は近世以降に大きな土坑の掘削や削平などが行われた)である。1040SDは同じ位置に近代溝もあるが、中世まで遡る溝と考えている。既往調査でも中世から近世を経て現代に至る地境が多く確認されている。1040SDは南の1030SD、北の1050SDの中間に位置しており、その間とはともに約16～18mとなる。特に1040SDと1050SDの間は柱穴や土坑が密集する一帯であり、これらは屋敷地などの南北を区画する溝の可能性もある。

調査区南端にある1022SX(写真12)は貝殻片を多く含む近世の遺構である。南に隣接する平成23年度調査の2地点でも近世の混貝砂層や純貝層が報告されており、それらと一連のものであろう。

調査区北側には1062SX、1072SX、1146SX、1150SXとした大きい遺構があり、当初は竪穴建物かと考えた。しかし、いずれも1段下げたところ、土坑など(それぞれ、1190SK、1152SK、1113SK、1194SX)が検出され、これらに伴う窺いと判断した。ただし、1062SXと1150SXは竪穴建物の可能性があり、これについては個別遺構として報告する。なお、すぐ北の平成21年度5地点で古代の竪穴建物らしき遺構が報告されていること、同時期の竈跡と考えられる1180SXの存在から、この一帯は古代(7～8世紀ごろ)の居住域であった可能性がある(註12)。

遺構の時期については、中世と近世が多い。1186SKは弥生時代の土器が出土しているが、後述のように遺構としての帰属時期が弥生時代なのか疑問がある。層的に近世と確認できる遺構においても中世遺物しか見られない場合もあり、その時期決定は難しい。



写真11 1地点北側検出状況(南西から)



写真12 1022SX(北東から)



## 2. 溝

### 1030SD (第7図)

1地点南部で検出した中世の東西溝群である。方位はE-12～22°-Sである。1030SDは東側は平成24年度1・2地点のSD2010、西では平成25年度2地点の110SDや160SDなどと連なる位置にあり、当初から溝の存在は想定していた。検出段階では、浅い落ち込みのようであったが、平成25年度調査においても複数の溝が重なり合っている状況があったので、同様の状況を想定して慎重に掘削したところ、a～dの4条の溝に分かれた。既往調査の溝では一定量の遺物が出土しているが、1030SDからの出土遺物は非常に少なかった。第6～7型式の山茶碗が出土しており、中世の溝と考えているが、同じ場所に近世溝が開削されている事例も多く、1030SDの帰属時期も決め手に欠く。

検出面からの深さは25cm程度、cは10cm程度しか残っていなかった。これは1地点が砂堆中央部でV層の標高が最も高い地点であり、それゆえに近世以降の開発(削平)の影響を受けやすかった結果であろう。1030SDの底部標高はTP3.35mであるが、これに対し、平成24年度調査のSD2070の底がTP2.8m、25年度調査の110SDがTP2.45mである。底レベルは単純に地形に対応しており、水路として一定方向に水を流すようには開削されていない。

1030SDは東側で収束している。ただし、底部しか残っていないので、これは掘削単位であって、当時の地表面では溝が続いていた可能性もある。仮に1030SDが既往調査の溝と一連とすれば、最長で東西約190m以上となる。これに対して、1030SDがこの地点で収束しており、これらの溝は1条の溝ではなく複数の溝が同じ方位で軸線を揃えていた場合は、複数の区画が存在したことになるのだろうか。この問題によって、この溝とそれによって形成される区画の性格も変わる。この点については第4章で検討しており、参照されたい。

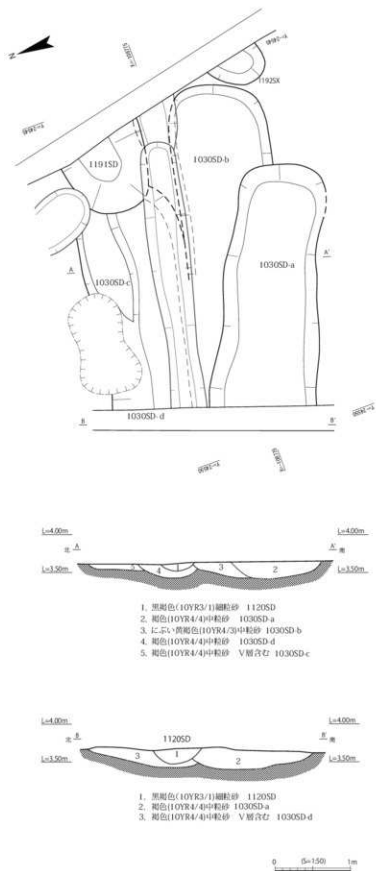
東に続く位置には1191SDと1192SXがある。1192SXは伊万里焼が出土しており、確実に近世遺構である。1030SDとは断面形状が異なることから、これらが1030SDと一連の溝ではないと判断しているが、その位置を踏襲した近世溝の可能性はある。

### 1040SD (第8図)

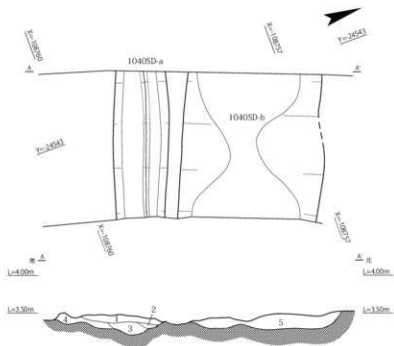
1地点中央部で検出した東西溝である。方位はE-23°-S、調査区とほぼ直交する。調査時の検出状況は1030SDと同様であった。つまり幅2.7mほどの幅広に検出されたが、掘削してゆくと2条の溝に分かれた。あまりにも幅が異なるので別の遺構とすべきであったかもしれないが、残っているのは底部のみであり、同じ位置に繰り返し掘削されている溝の事例も多いことから同じ番号とした。第7型式の山茶碗などが出土しており、13世紀の遺構と考えているが、少量であり帰属時期の決め手に欠ける。

1040SD-aは椀型の断面形状、1040SD-bは皿形の断面で浅い。1040SD-b底部は中央部がくびれるようになっていたが、これは掘削単位であろう。

この溝の位置は現代の地境と同じ位置にあり、このような事例は数多く本遺跡で報告されている(註13)。問題となるのは、概要でも述べたように、南北の1030SDと1050SDとの関係である。1040SD-aが1050SDと、1040SD-bが1030SDと同じ区画の溝とすれば、それぞれ断面形状が似ており、ともに間隔が約18mとなる。逆の組み合わせの場合は距離は約16mとなるが、これは80mほど東に位置する平成20年度3・4地点の方形区画(024SDによって形成)の1辺とほぼ同じである。いずれにせよ、この溝の南北で遺構の密度やV層の残存状況が変わることは注意を要する。特に北側の区画は柱穴などの遺構が多く、屋敷地などの区画を形成していたと考えられる。

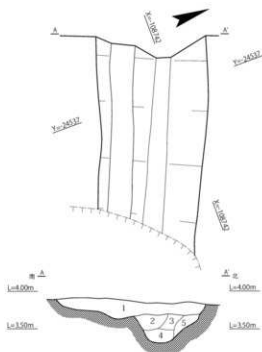


第7図 1030SD



1. オリーブ褐色(2.5Y4/6)中粒砂 1040SD 上層
2. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)中粒砂 1040SD a
3. 黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂 1040SD a
4. 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂 1040SD a
5. オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂 V層含む 1040SD b

1040SD



1. 暗褐色(10YR3/3)中粒砂
2. 暗褐色(10YR3/4)中粒砂
3. 暗褐色(10YR3/4)中粒砂 V層含む
4. 暗褐色(10YR3/3)中粒砂 V層含む
5. 黒褐色(2.5Y3/2)中粒砂 V層含む

1050SD



第8図 1040SD・1050SD

### 1050SD (第8図)

1地点北端で検出した東西溝である。方位は1040SDとほぼ同じE-26°-Sである。既に述べたように1040SDの北側の溝として区画を形成する溝と考えている。この溝の南側、1040SDとの間には多くの柱穴・土坑がある。

1050SDは1030SDや1040SDに比べ残存状況は良好である。上層は幅2.7m、深さ20cmほどの皿形の溝であり、北側に幅80cmほど、深さ40cm程度の深碗形断面の下層の溝が存在する。出土遺物は少量の中世陶器のみである。

## 3. 土坑・その他の遺構

### 1060SK (第9図)

1地点北側で検出した径約1mの円形土坑である。断面は緩やかなV字状をなす。数枚の山茶碗と山皿(第5～6型式=常滑窯編年4～5型式)が上層部でまとまって出土した。埋土は黒色を呈しており検出時に目立っていた。埋土が黒色を呈する遺構は比較的遺物が多く、同様の土坑は1152SKや1160SKなどがある。これは有機物も含めた廃棄土坑であり、その結果としての黒色化なのではないだろうか。

### 1102SK・1108SK・1160SK (第9図)

1地点北側で1060SKの数m北に並ぶ径1～1.5mの円形土坑である。1102SKは深さ20cmほど、1108SKは深さ20cmほど、1160SKは30cmほど、どれも1060SKに比べて浅い。先述のように埋土は他の遺構に比べて黒色もしくは地山の砂があまり混入していないため暗い色調を呈する。

### 1152SK (第9図)

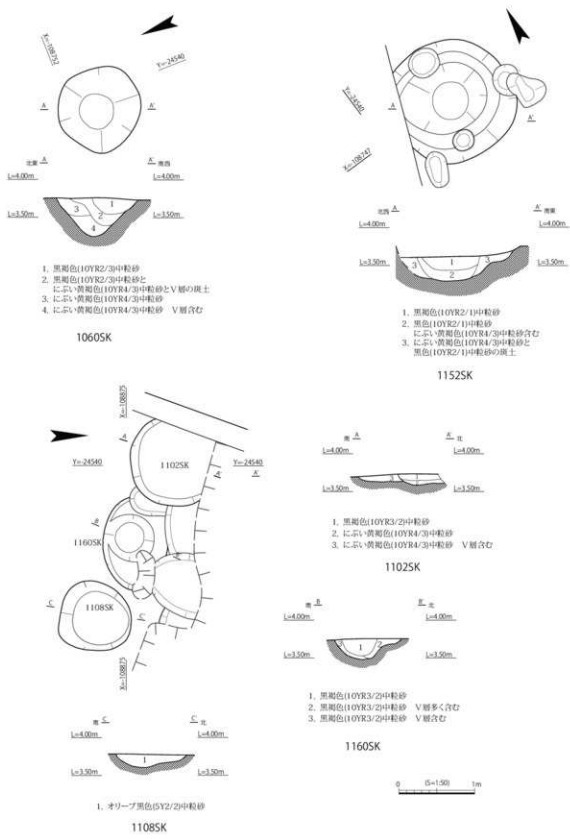
1地点北側で検出した円形土坑である。外縁部の埋土が斑土状であり、掘削後すぐに人為的に埋めた、つまり井戸掘り方と考えた。しかし、既往調査事例の井戸をみれば、深さはV層上面から1mを超え、絶対高でもTP2m以下まで達し、大きさも径2m以上である。これに比べて1152SKは小さく浅い。よって井戸とは考えにくい。中央部が別遺構の可能性もあり、本報告では土坑と判断したい。



写真13 1102SK (東から)



写真14 1108SK (南東から)



第9図 1060・1102・1108・1160・1152SK

## 1062SX・1150SX (第10図)

1062SXは埋土に焼土片がみられ、少量ながら古代の土器が出土する。多くの中世遺構に切られており、プランもよく把握できなかった。1062SX-bには多くの焼土片が含まれており、目立っていた。この部分からは山茶碗が出土しているが、これは中世以降に擾乱を受けた結果であり、上層や1062SX-bの焼土片や炭化物はかつては存在した竪穴建物に由来するのかもしれない。層位的にみて、中層(断面図の4)と下層(断面図の7～9)は竪穴建物の一部であった可能性もある。

1150SXは焼土片などはないが、周辺の遺構も含め、やはり古代の遺物が出土する。プランも方形竪穴建物を思わせる(写真16)。

ともに中世以降の遺構で大部分が失われており、周壁溝や床面、支柱穴など積極的な証拠は見出せなかった。後述するように1180SXは7世紀の竈や炉跡の可能性があり、すぐ北の平成21年度調査5地点では古代の竪穴建物らしき遺構が報告されている。1062SXと1150SXが古代の竪穴建物であったとすれば、後述の1180SXも含めて、この一帯は古代(7～8世紀ごろ)の居住域と言える。

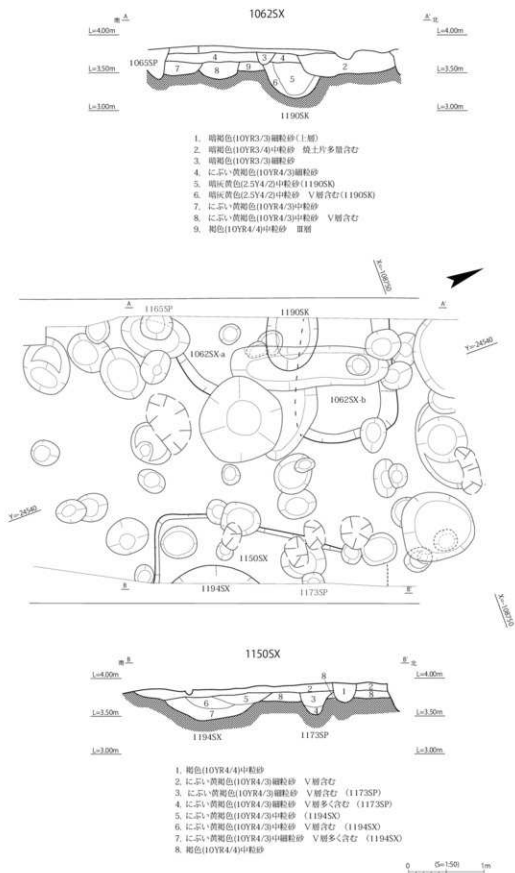
ただし、平成21年度調査の事例も残存状況は不良で、調査時には竪穴建物と判断できず報告書段階で再評価している。いずれも状態が悪い点が共通しており、本遺跡における古代の遺構は弥生時代の遺構よりも中世～近世による擾乱を受けているように思われる。時期ごとの遺構の立地状況とも関連し、今後の検討課題である。



写真15 1062SX (北西から)



写真16 1150SX (西から)

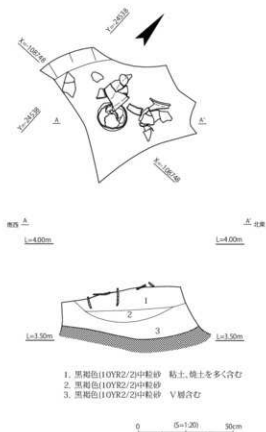


第10図 10625X・11505X

## 1180SX (第11図)

1地点北側で検出した遺構で、竈や炉跡の可能性がある。埋土上層は粘土や焼土片が多く混ざる。竪穴建物の竈や炉跡の痕跡と考えているが、大部分を攪乱や中世遺構で壊されており、詳細は不明である。この遺構が竈や炉の跡と考えれば、先述の1150SXなどが古代の竪穴建物であった蓋然性も高まる。

出土遺物は7世紀代の甕が2点出土している。手づくねの不整形甕(図版24-50)は粘土層に立てられたような状況で出土していた。もう1点の甕(図版24-49)は粘土層の上に散在していた。

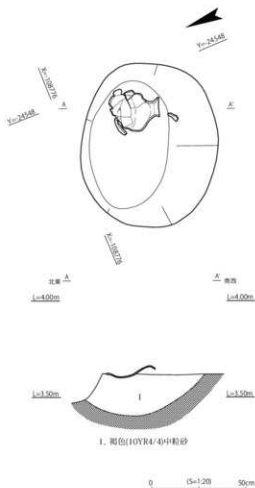


第11図 1180SX

## 1186SK (第12図)

1地点南側、1030SDの南で検出した土坑である。80×60cmほどの楕円形土坑で、ほぼ半分残った1個体の弥生中期の壺(図版23-25)が出土した。横に倒れた状態で上側は失われていた。

出土した壺の残存率が高いが、この遺構の帰属時期が中世以降の可能性がある。完掘後、周辺に残っていた包含層(もしくは遺構の一部か)を掘削したところ山茶碗が出土した。1186SKは山茶碗の出土する包含層(もしくは遺構)を切っていたことになる。そもそも1030SDとの切り合い関係も埋土が類似しており判断に悩んだが、弥生土器の存在から1186SKを古いと判断したのが正直なところである。よって、中世以降に弥生土器を廃棄したものかもしれない。



第12図 1186SK



### 第3節 2地点の遺構

#### 1. 概要 (図版7～15)

2地点は本年度の調査において最も広く、かつ最も成果を得た調査区である。西区と東区に分けて調査を行ない、一部拡張部もあるが一つの調査区として報告する。特筆すべき成果は2つの大量出土銭および独鈷杵と和鏡片の出土である。大量出土銭A(2140SX)は古瀬戸三耳壺の中に、大量出土銭B(2190SX)は片口鉢の破片を蓋として常滑壺の中に銭貨が納められていた。大量銭Aは検出段階で上部がわずかに見えていた。大量銭Bは壁際の遺構=2157SKを掘削したところ一部が露出し、壁面部を拡張し調査した。内部の銭貨に対する本格的な調査は実施していないが、大量銭Bには永楽通宝が含まれていることが判明した。また、周辺の溝などから出土する銭貨も北宋銭を主としつつも永楽通宝が最も多い。大量出土銭の時期も15世紀以降と考えられる。

独鈷杵は大量出土銭Bの近くに位置する隅丸長方形土坑2156SKから出土した。銅製である。伝世品や経筒との共伴例はあるが、集落遺跡の発掘調査における出土事例は少ない。和鏡の破片は調査区東側の浅いくぼみ(2152SX)から出土した。

大量出土銭と独鈷杵は方形区画溝埋没後の遺構に作っている。これらの溝は区画の南西部にあたる。南北方向の溝(2148、2158SDなど)と東西方向の溝(2115、2199SDなど)、南北から東西に曲がる溝(2105SD)など10条以上が確認された。区画内の様相は全く分からないが、大量出土銭や独鈷杵がこの区画に関連することは間違いないであろう。

次に特記すべき遺構は調査区中央を斜めに横切る2120SDである。幅4m、深さは70～80cmをはかる。本遺跡では最大規模の中世溝である。方向性と規模から平成24年度4地点の4031SDと同一溝と考えられる。出土遺物は非常に多く、<sup>西暦</sup>1150調査全体の3割強を占める。

2120SD以東は遺物の出土が少なくなり、V層も小礫が混ざり周辺と異なる。遺跡の縁辺部といった様相を示す。ただし、東壁以東にも延びる東西溝2090SDからは多くの近世陶器が出土している。中世以前の遺物が少ないことと対照的である。

主な2地点の中世遺構の年代的な位置付けは右の表4の通りである。溝は時期幅があり、その判断は難しい。2120SD下層については、開削時と埋没時とを表4に記している。第6型式の山茶碗は多く出土しているが、この段階の遺構は少ない。2地点においては、15世紀の遺構が最も多い。

調査区の西側は大規模な攪乱を受けており、西端にわずかに遺構面が残されるのみであった。ただし、大攪乱の中で貝殻廃棄遺構(2060SX)の一部が残っており、ここからは

西暦 1150 1200 1250 1300 1350 1400 1450	V 1	第4型式新	
		第5型式古	2120SD下層(開削)
	V 2	第5型式新	
		第6型式	2120SD下層(埋没)→中層 2100SD
	V 3	第7型式	
		第8型式	
		第9型式	
	V 4	第10型式	2160・2165・2186SK 2135・2144SD 2120SD上層 2180SD
		第11型式	方形区画溝群(2115・2205SDほか) 2153SX遺構群 2120SD最上層 2140SX(大量出土銭A) 2190SX(大量出土銭B) 2156SK(独鈷杵出土)

※開削遺跡の時期区分と山茶碗編年

表4 2地点遺構編年

常滑焼の水瓶(写真17・第50図-334)や13世紀の山茶碗などが出土している。

2001SKや2002SXなど大型の遺構は近世のものである。大擾乱の東側一帯には多くの土坑、柱穴が密集しているが、明確に建物などを認識できない。この一帯の遺構は出土遺物が少なく、時期は不確定であるが近世の遺構が主と考えている(検出時に近世銭貨=1863年初鑄の文久永宝が出土している)。また、近代土坑(擾乱)からは、すぐ北に位置する常蓮寺に関係すると思われる近代陶磁器類が出土している。なお、この一帯の地山砂層や遺構埋土には多くの酸化鉄(俗称鬼板)が含まれており、砂層の色調も赤味を帯びていた。

遺構の多くは中世～近世であるが、弥生時代と考えられる遺構は2010SK、2200SK、2221SKと2222SKなどがある。前2基は黒色の埋土が特徴的で、後述する4地点の弥生時代の遺構と類似する。後2基はともに1個体の弥生土器が出土したピット状遺構である。

## 2. 溝

### 2100SD(第13図)

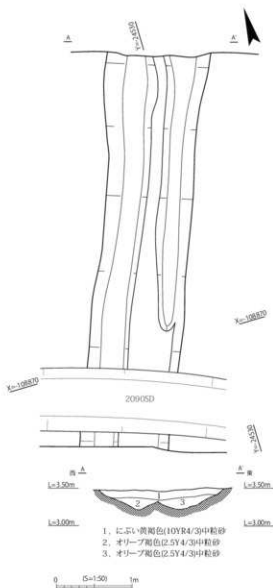
2地点東端で検出した。下層は2条の小溝に分かれた。既往調査でも多くみられる調査区と直交する方位(N-20°-E)の溝である。直交する近世の東西溝(2090SD)に切られている。遺物は少量であるが、第6～7型式の山茶碗の小片などが出土している。

2100SDの東側にも遺構は検出されているが、遺物はほとんど無い。遺跡範囲の東端とされる位置にあたり、中世のある時期には居住域の東端であったのだろう。このことから区画溝と考えられる。

平成26年度2地点の001SD、もしくは002SDと同一溝の可能性がある。002SD以東からは遺物の出土が激減することから、これらは同様に集落の端を区画する溝と指摘されている。



写真17 2060SX(北から)



第13図 2100SD

## 2120SD (第14～16図)

2地点東側で検出した幅約4mの大溝である。出土遺物は非常に多く、調査全体の3割強を占める。12世紀～16世紀にわたる遺物が出土しているが、13世紀代と15世紀代が主である。

溝の方位はE-20°-Nで、調査区の方位とも異なり、これまでの調査ではあまり見られない方位の溝である。方向や規模から平成24年度4地点の4018・4031SDと連なることが明らかとなった(註14)。これらが同一溝であれば、畑間遺跡の中央、砂堆くびれ部を東北東から西南西に横断する250mを超える大溝となる。埋土がグライ化によって暗い色調を呈しており、集落の中央を貫く水路であったと考えられる。この大溝については第4章でも触れており、参照されたい。

溝は最上層・上層・中層・下層の4段階に分けることができる。ただし、これは断面観察および出土遺物の検討の結果であり、調査時の分層とも少し異なる(註15)。調査時には湧水も多く、正確な分層掘削ができなかった。

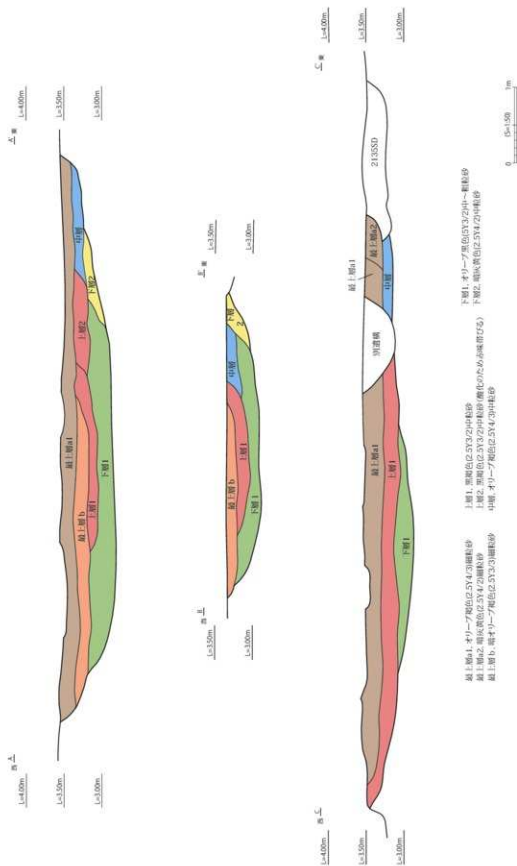
最上層は包含層として掘削している。周辺より暗色を呈し、遺物が多いことから何らかの遺構の存在は認識していたが、Ⅲ層上面での正確な検出は困難と判断し、通常通りV層上面で検出を行ない、そこから溝としての掘削を開始した。そのため断面記録のうち調査区内土層観察ベルトのものは最上層aがない。

最上層からと断定できる遺物がないのだが、1433年初鑄の宣徳通宝が2120SD検出段階で出土している。また少量出土している16世紀代の常滑焼などを最上層に帰属すると判断すれば、15世紀後半～16世紀にかけてゆっくり埋没していったと考えられる。最上層aを一つの溝としてみれば、幅は4mと広いが、深さは現状で25cmほど、断面形状は皿形を呈する。当時の地表面は不明だが、幅に比して浅い溝であったと考えられる。一方、最上層bは北西側のみで確認され、南壁面にはみられない。幅2.5mで、西に寄った位置に同方向で開削された溝と復元される。南側に続いていなかったのか、浅かったため最上層aによって失われたのかは分からない。

上層は最も多くの遺物が出土した。第16図の遺物出土状況図のうち赤色で示した遺物は上層に、青色は中層に伴う。北側は常滑焼の甕片が多く、遺物の密度が高い。南側は貝殻や有機物も含まれている。調査時には、上層と中層のレベルがほぼ同じであるため、同段階の遺物として検出していた。しかし、出土遺物は二つの線状分布を示しており、これと断面観察を合わせて検討した結果、赤色で示した上層の遺物と青色で示した中層の遺物に分かれることが明らかとなった。

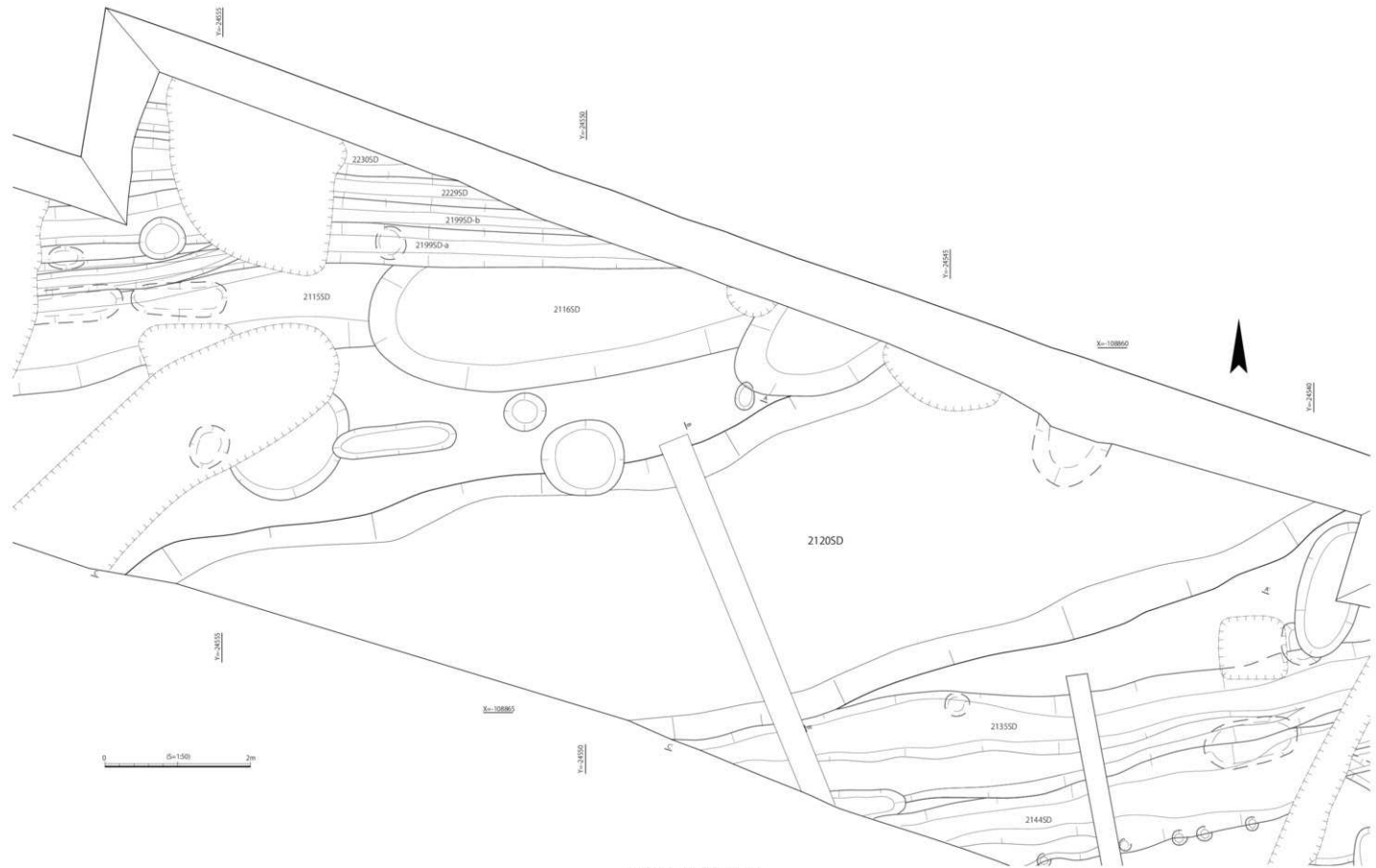
上層は断面観察と遺物出土状況から2120SD本来の方位とは異なるプランが認識される。上層は調査区北壁では東端に寄り、南壁では最上層よりも西側に広がっている(断面図C参照)。この方向性は周辺の溝(2115SDや2135SDなど)とほぼ同じである。本来の2120SDの方向性(この方位で平成24年度4地点の4031SDと連なる)とは異なる。上層は下層～中層が埋没した段階で別の溝として開削されたのだろう。このように考えた場合、上層段階の溝は平成24年度4地点まで続く大溝ではなく、南西側の2135SDなどと同じ一群となる。ただし、2135SDは遺物は少なく、埋土の様相も異なる(註16)。上層の出土遺物は北側は大部分が常滑焼の破片、南側は鍋釜や鉢や貝類などと様相が異なる。出土遺物の年代は古いものも含むが、14世紀末～15世紀半ばを主とする。

中層は溝の東側に残る。第16図の青色で示した遺物は中層に伴うものである。第7型式の山茶碗を含むが、第5型式の山茶碗が比較的多く、上層の遺物よりも古相を示す。杏葉唐草文軒平瓦はこの層から出土している。遺物の量は上層より少ない。

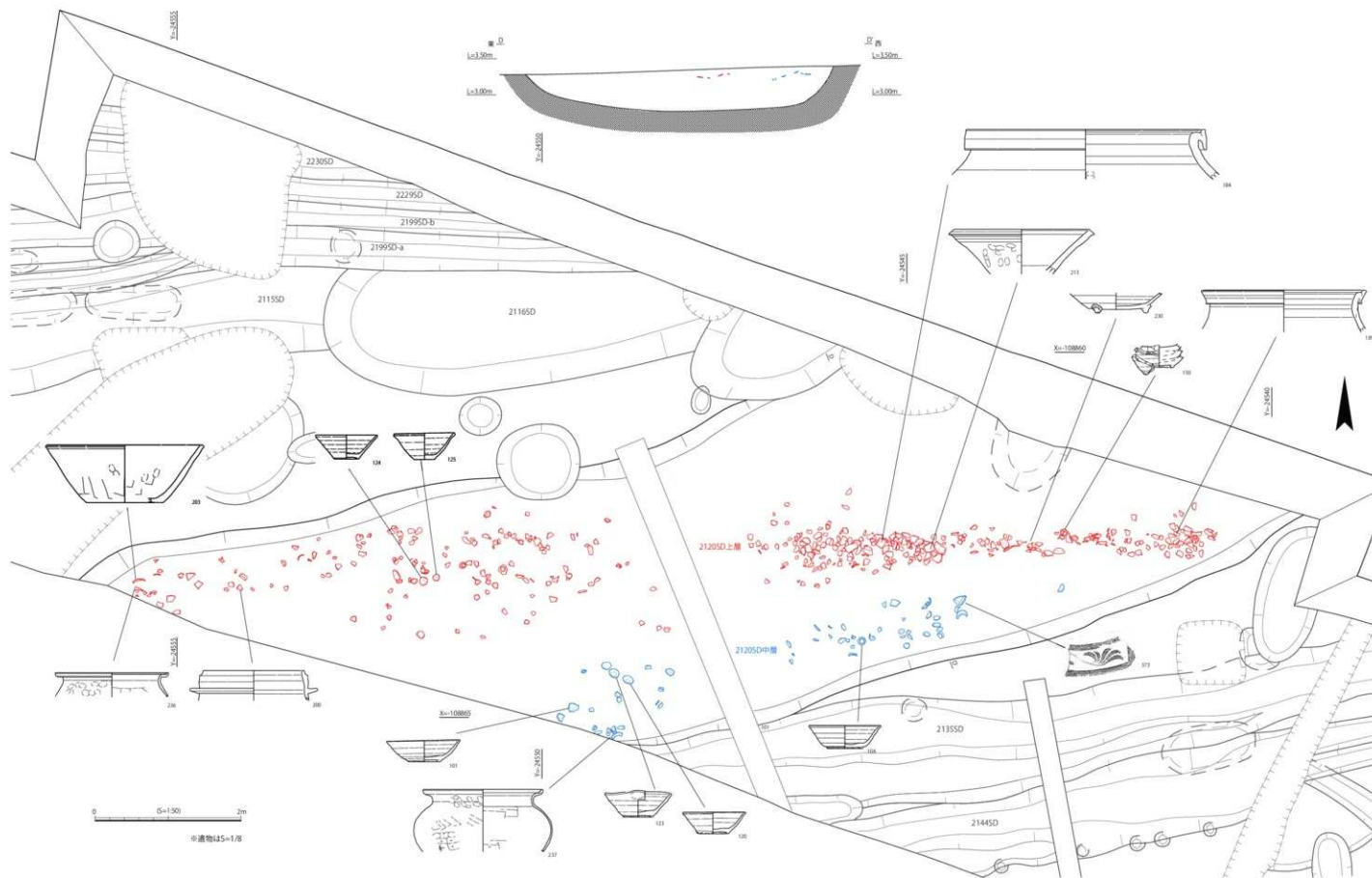


最上層a1、ホリ一ツ層(色はSY4、3)粗粒砂  
 最上層a2、明水層(色はSY4、2)粗粒砂  
 最上層b、ホリ一ツ層(色はSY4、3)粗粒砂  
 最上層c、ホリ一ツ層(色はSY4、3)粗粒砂  
 中間層、ホリ一ツ層(色はSY4、3)粗粒砂  
 下層1、ホリ一ツ層(色はSY4、2)中粒砂  
 下層2、明水層(色はSY4、2)中粒砂

第14図 2120SD 断面図



第15図 2120SD 平面図



第16図 2120SD遺物出土状況図

下層は下層1と2に分かれる。下層2は東側肩部に残る層である。正確な分層掘削ができていないため、確実なことは言えないのだが、数多く出土している第5～6型式の山茶碗は下層に属する遺物と考えている。

各層の上記の分析から2120SDの変遷を述べてゆく。まず、下層～中層の段階である。出土遺物に第5～7型式の山茶碗が含まれることから、12世紀末に溝が開削され、その後13世紀後半までに埋没したと考えられる。この段階では、平成24年度4地点まで続く集落を横断する大溝であった。その後、上層が開削されたが、これは2135SDなどと同じ方向性であり、本質的には2120SDの再掘削とは言えない。第16図に示した上層出土の遺物は常滑窯8～9型式の甕や鉢が主で、古瀬戸なども含まれている。14世紀末に開削し、15世紀半ばには埋没したと考えられる。その後、再び幅4m以上の大溝として2120SD最上層が開削された。少量の16世紀の遺物があったことから、16世紀を最後に埋没したと思われる。

なお、平成24年度調査の4031SDからは第4～7型式の山茶碗が出土し、再掘削された4018SDからは第9型式の東濃型山茶碗が出土している。よって、4031SDが下層～中層の段階、4018SDが上層～最上層に相当するとみられる。

#### 方形区画溝群(2115・2148・2199・2205SDほか)(第17～19図)

2地点中央部で検出した一群の南北溝と東西溝は方形区画の南西隅を画するものと考えられる。これらの溝の上に大量出土銭A(2140SX)と鉄釘鉋が出土した2156SKが存在している。南北方向の溝は2148・2149・2158・2196SDの4条、東西方向の溝は2115・2198・2199・2201・2209・2211・2223・2224・2229・2230SDの10条、南北から東西に曲がる溝は2205SDの1条、計15条の溝からなる。ただし、2224と2230は同一溝の可能性が高く、2205SDと2199SDは部分的にaとbに分けている。溝および区画の方位は多少の幅がある。南北溝の方は2205SDを除きほぼ真北であるが、東西溝はE-3～8°Nである。2116SDも当初は同じ群をなす溝と考えていたが、深さや形状が異なるので、直接関連しない遺構と判断した。

あまりにも多くの溝があり、個々の溝の形状や数値を羅列しても煩雑であろう。それらは第17～19図などを参照されたい。以下、調査時の所見と溝の埋没・開削過程について詳述する。

溝の埋土にはぶい黄褐色～灰黄褐色の中粒砂で、差異はあまりなく、個々の溝の正確な把握は難しかった。溝の幅は2115SDが約1m、2223SDは50cm以下と少し差がある。2116SDは2mを超えるが、これは同じ区画溝には属さない可能性がある。いずれにせよ、同じ場所に何度も掘り返されており、埋土が類似し、重なる溝と溝の間にあるわずかな底部の立ち上がりを観察し得なかった場合は複数の溝を一つの溝と誤認してしまう。後述の2144SDと2136SD・2137SDの検出時の問題と同じである。このように正確さには多少の不安はあるが、遺構の変遷過程を変えるような誤認はないと考えている。以上の点を踏まえて、各溝の層位関係を検討したところ溝群の開削は4段階に分けることができる。第17、19図は各段階に溝を色分けして示している。

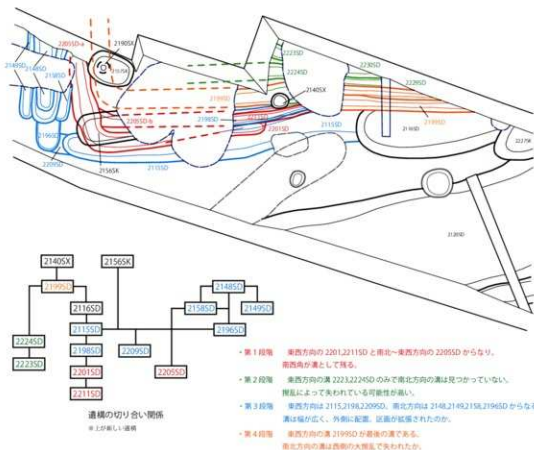
最古段階の溝と考えられるのは東西溝の2201SDと2211SD、南北から東西に曲がる溝2205SDである。これらの溝は底のレベルがTP約3.1mと最も低い群である。しかし、2201SDなどは東に向かって浅くなるためか、東では残っていない。2201SDの東にある2118SKは貝殻廃棄土坑であるが、元来は2201SDの一部であったのだろう。2211SDはより新しい溝によって失われており東側の様相は不明である。南北溝は攪乱内に位置するか、もしくは新しい溝によって失われた可能性が高い。

第2段階は東西方向の2223SD (2229SD)、2224SD (2230SD) からなる。その位置は内側に移り、南北方向の溝は攪乱の中に位置していたか、調査区外であろう。

第3段階は東西方向は2115SD、2198SD、2209SD、南北方向は2148SD、2149SD、2158SD、2196SDからなる。第2段階の溝とは直接切り合い関係はなく、前後関係は不明であるが、順次溝が浅くなると考えて、より底部のレベルが高いこの一群を第3段階とした。この段階の溝は最も外側に開削されており、区画が拡張されたのかも。溝は浅いが、幅は広い。2116SDはこの段階の溝が埋まった後に掘削されている。

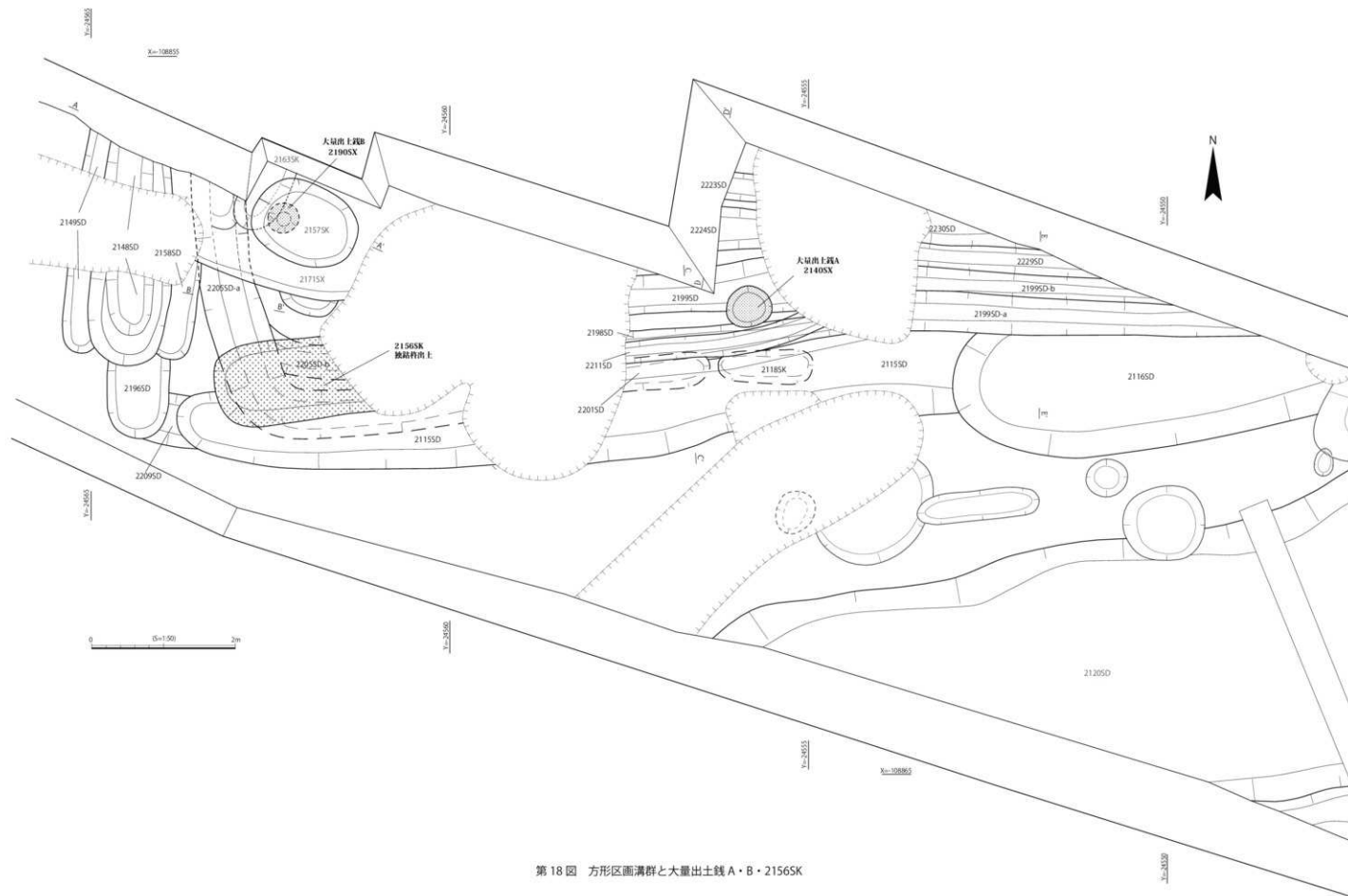
最終の第4段階は2199SDである。位置はやや内側に移る。後述するが大量出土銭Aは2199SDの上には位置している。この段階の南北溝は攪乱もしくは2157SKや2171SXなどによって失われた可能性が高い。なお、この想定位置に大量出土銭Bがある。よって、大量出土銭は同じ段階の溝の上に位置している蓋然性が高く、これらの溝によって形成される区画廃絶後に埋められている。

この方形区画溝群からの出土遺物は少ないが、第2段階の2205SDから15世紀半ばの遺物や永楽通宝が出土しており、第1段階＝溝の開削が15世紀前葉、最終埋没は15世紀半ば～後半と考えている。頻繁に溝を掘り直しているが、人為的に埋めて再開削しているのかは分からない(註17)。その位置が第1段階以降、内→外→内と移動するのは、埋没した場所を避けて再開削しているのではないだろうか。2重堀の可能性もあるが、間隔が狭く考えにくい。いずれにせよ、限られた期間に何度も埋没と開削を繰り返しており、大量出土銭の存在も含め特殊な区画を形成する溝群であったと考えている。

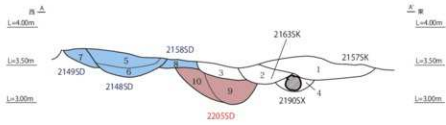


第17図 方形区画溝群模式図





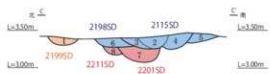
第18回 方形区画溝群と大量出土銭A・B・2156SK



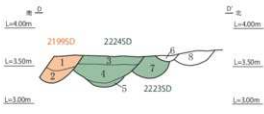
1. 暗褐色(7.5YR3/3)細粒砂 貝殻含む 21575K
2. 褐色(7.5YR4/4)細粒砂 貝殻含む 21635K
3. にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂 V層含む 22105P
4. にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂 V層多く含む 21905X(出土残部)
5. にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂 21485D
6. 灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂 V層含む 21485D
7. にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂 V層含む 21495D
8. 褐色(7.5YR4/3)中粒砂 21585D
9. 暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂 22055D
10. 暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂 V層含む 22055D



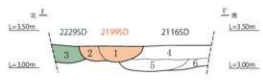
1. にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂 V層含む
2. 灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂
3. 暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂



1. 灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂 21995D
2. にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂 21155D
3. 灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂 V層含む 21155D
4. にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂 V層少量含む 21155D
5. 暗褐色(10YR3/3)中粒砂 貝殻多量を含む 土塊か
6. 灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂 21985D
7. 暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂 22015D
8. 暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂とV層の混土 22115D



1. 褐色(10YR4/4)中粒砂 21995D上層
2. にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂 V層含む 21995D下層
3. 褐色(10YR4/4)中粒砂 22245D
4. 褐色(10YR4/4)中粒砂 貝殻多量を含む 22245D
5. オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂 V層含む 22245D
6. にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂
7. にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂 V層多く含む 22235D
8. にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂 V層含む



1. 灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂 わずかにV層含む 21995D上層
2. にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂 21995D下層
3. にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂 V層含む 22295D
4. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)中粒砂 21165D
5. オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂 V層含む 21165D
6. 暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂 21165D



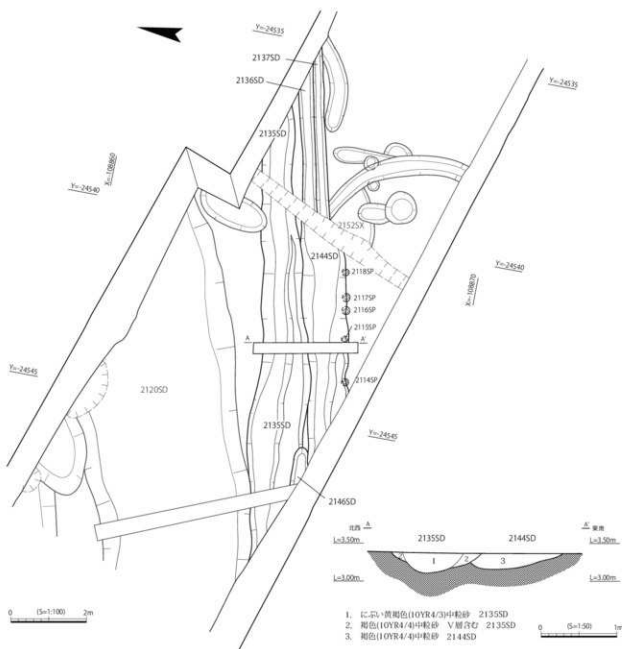
第19図 方形区画溝群断面図

2135・2136・2137・2144SD (第20図)

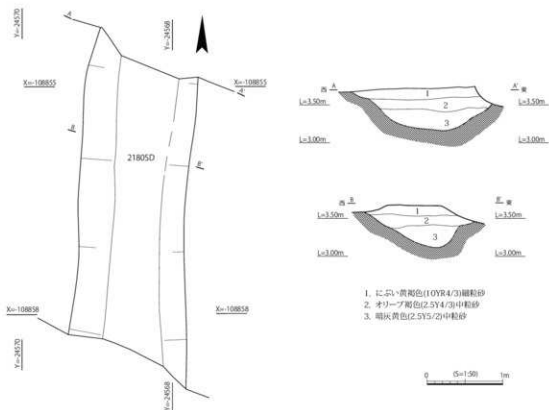
2地点東側で検出した幅1m程度の溝群である。方向性はE-10°-N、先述のように2120SDの上層と同じである。2144SDの南肩には杭列があり、溝機能時のものであろうか性格等は不明である。

同じ位置に同様の溝が何度も掘り返されたものである。2144SDが掘戻の東側で2136SDと2137SDに分かれているのは、深さの差と軸のずれのため底部に溝間の稜が残り、二つの溝と認識できた結果である。2144SDも本来は二つに分かれると考えられる。2135SDは南西側で中段部があり、これも掘削単位の一つであろう。2146SDも同一群の溝と考えている。

出土遺物は少ないが、古瀬戸や第9～10型式の東濃型山茶碗が出土している。調査時は2120SDに先行する（切られている）とみていたが、出土遺物や断面記録の再検討などから、これらの溝は2120SDの上層と同時期の溝と判断した。



第20図 2135・2136・2137・2144SD



第21図 2180SD

### 2180SD (第21図)

2地点中央部で検出した幅1.5～2m、方位はN-3°-Eの南北溝である。埋土は3層に分かれる。上層は明るい色調でⅢ層と類似し、中層もやや暗いが同様の色調である。調査時はこの2層を上層とし、下層と遺物を分けた。下層は明らかに暗い色調を呈する。

遺物はコンテナ2箱分出土し、貝殻片も含まれていた。出土遺物は常滑焼の甕、第7型式頃の山茶碗の破片が多いが、第10型式の東濃型山茶碗や古瀬戸中期の碗や盤、15世紀の上師器羽釜の破片も含まれており、遺構の帰属時期は15世紀と考えられる。上層と下層の差異が明瞭であるが、遺物の出土傾向に差はなく、上下層の時期差はないようだ。

溝の方位は区画溝群の2148SDなどとほぼ同じであり、位置もそれほど離れてはいない。しかし、埋土や断面形状、遺物出土量から同一群の溝ではないと考えている。むしろ、2120SDの上層と埋土や遺物出土量が類似するが、断面形状は異なる。

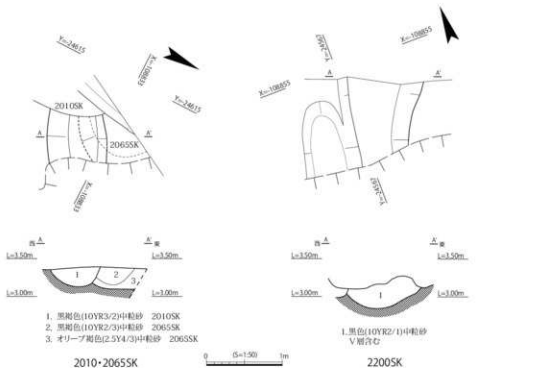


写真18 2180SD断面(南から)

### 3. 土坑 (弥生時代)

#### 2010・2065SK・2200SK (第22図)

これらの土坑は、畑間遺跡の弥生時代の遺構で多くみられる黒色の埋土が特徴的であり、2010・2065SKは2地点西端、2200SKは調査区中央部(2180SD近辺)で検出された。2065SKと2200SKからは弥生中期の壺(図版23-23)、2200SKからは後期の壺(図版23-32)が出土している。



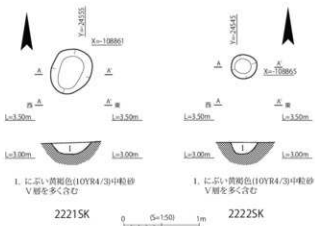
第22図 2010・2065SK・2200SK

#### 2221SK・2222SK (第23図)

弥生時代後期～終末期の土器が出土したビット状土坑である。2221SKからは壺の底部(第44図-36)、2222SKからは小型の長頸壺(第44図-35)が破片状態で出土し、接合の結果、高い残存率の一個体の遺物と判明した。

2221SKは周辺に二次的な変色を及ぼしていた攪乱底部(註18)から検出されたため、そのプランの正確さには不安が残る。一方、2222SKの埋土は基盤層たるV層を多く含み、当初は植生痕が浅い窪みのように捉えてしまい、ともに詳細な観察が出来なかった点が悔やまれる。

調査区の方位＝地形に沿って並ぶかのような配置をなし、ともに壺1個体のみが出土しており、何らかの意味のある遺構とも考えたい。2120SDが間削される以前には同じような遺構が列を成していたのかもしれない(註19)。



第23図 2221SK・2222SK

#### 4. 土坑・その他の遺構（中世）

##### 2022・2170・2172・2182SK（第24図）

2地点中央部東側一帯で検出した楕円～隅丸方形の土坑群である。2044、2045SKも同様の土坑であろう。2022SKはⅡ層から、2172SKはⅢ層からの遺構であることが調査区壁面の観察から分かる。同様の土坑が中世～近世にかけていくつも掘削されたのであろう。

土壌墓の可能性を考えて調査を進めたが、積極的にそれを示すような状況は見出せなかった。出土遺物は第6～7型式の山茶碗や常滑焼の破片が少量出土した程度である。

##### 2153SX遺構群（第26図）

2地点中央部で検出した貝殻廃棄遺構群である。広範囲にわたる貝殻の散布状況が検出され、これを2153SXとした。これを掘り下げていったところ、2204SKなど複数の遺構（土坑やピット状遺構）が検出された。

2194・2195・2204SKは調査区外に続くものの、径2.5m程度の円形土坑と考えられる。形状や規模は西側の2165SKなどと類似するが、多量の貝殻を含むことが、この一群の特徴である。また、2195SKのすぐ西に位置する2164SPは、小さい巻貝であるウミニナ、イボウミニナ、カワアイガイがピットを充填するように埋まっていた。ウミニナなどは食用とされるのだが、なぜ、これらの小さい塔型巻貝を集中的に小さなピットに廃棄したのか不明である。その他2175・2176SKも貝殻を多く含む土坑である。

出土遺物は13世紀の山茶碗などもふくまれているが、15世紀代のものが多く、遺構の帰属時期は15世紀後半と考えられる。

##### 2160・2165・2186SK

##### （第25図）

2地点中央部東側一帯で検出した大型土坑群である。すぐ横に近代井戸があり、これらも中世～近世にかけて掘削された井戸とも考えた。しかし、井戸枠は無く、枠内と掘方のような土層も観察されない。先述の1152SKと同様にこれらの遺構も井戸としては浅い。

東に隣接する2194SKなどとプランや規模は類似するが、これらの土坑は



写真19 2182SK（西から）

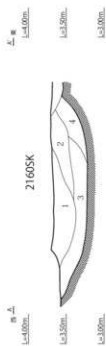


写真20 2164SP（南から）



写真21 2153SX（南から）

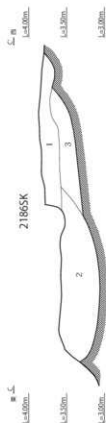




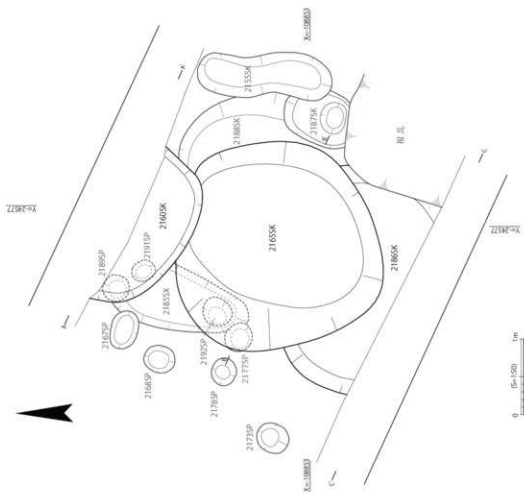
1. 土色(黄褐色)10YR5/4中粒砂
2. 土色(黄褐色)10YR6/4中粒砂
3. 暗灰褐色(2.5Y4/2)中粒砂
4. 暗灰褐色(2.5Y4/2)中粒砂 粘土とV層を含む



1. 褐色(10YR4/4)中粒砂
2. 土色(黄褐色)10YR4/2中粒砂
3. 赤土層(褐色)10YR4/2中粒砂と灰褐色(10YR4/2)中粒砂とV層の混入
4. 褐色(10YR4/4)中粒砂と灰褐色(10YR4/2)中粒砂とV層の混入



1. 褐色(10YR3/2)中粒砂
2. 赤土層(褐色)10YR4/2中粒砂
3. 赤土層(褐色)2.5Y4/2中粒砂



第25図 2160・2165・2186SK





大量の貝殻片を含むのに対して、2165SK などには貝殻片はほとんど見られない。出土遺物は2165SK から第10型式の東濃型山茶碗や古瀬戸の破片が出土しており、その帰属時期は14世紀末～15世紀と考えられる。

2156SK (第27図)

2地点中央部で2205SDなどの方形区画溝埋土上面で検出した隅丸方形土坑である。ここから独鈷杵が出土した。埋土は2205SDなどの区画溝と比べて明るい色調を呈する。

独鈷杵は土坑の北西側、断面形状に沿うように少し斜めに位置していた(写真図版27)。墓の可能性も考えたが、独鈷杵の出土状況も含め、何ら特異な状況は観察できなかった。

独鈷杵以外には第7型式の山茶碗や古瀬戸の破片が出土しているのみである。遺物の年代は13～14世紀頃であるが、遺構の帰属時期は区画溝群よりも新しく15世紀後半以降である。



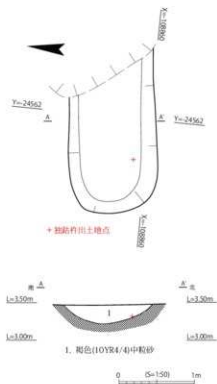
写真 22 2186SK・2172SK (北から)



写真 23 2165SK (南から)



写真 24 2156SK 断面 (西から)



第27図 2156SK

東部柱穴列（2102SPほか）（第28図）

2地点東部で検出した柱穴は数基が東西方向に列をなす。調査区が狭いため建物を構成しているかどうかは不明である。深さは10～20cmほどしか残っていない。しかし、2105SPや2119SPのように明らかに柱痕跡の観察できたもの（写真26・27）もある。出土遺物は第6～7型式の山茶碗や土師器の小片のみである。周辺の包含層からの出土遺物も少ない。列の方位はE-12°-S、2135SDや2144SDに近い数値であり、同様に中世の遺構と考えられる。



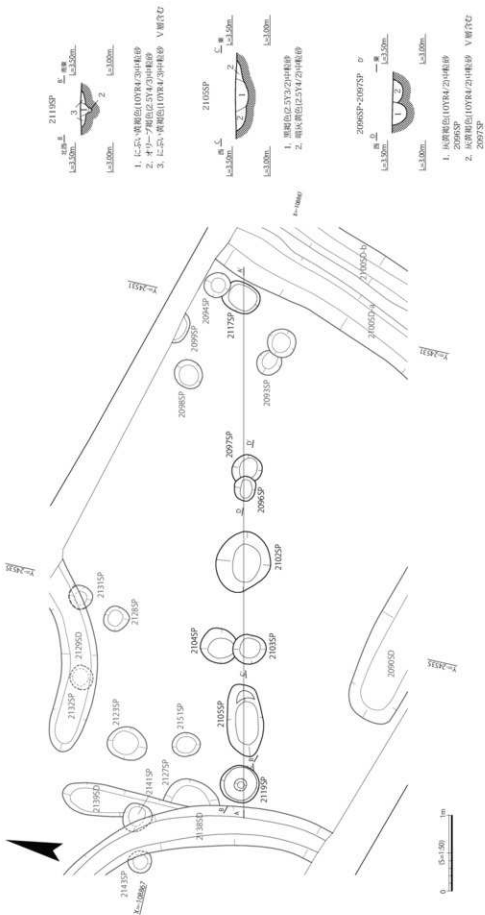
写真25 東部柱穴列（東から）



写真26 2119SP（南から）



写真27 2105SP（南から）



第28図 東部柱六列 (2102SP ほか)

## 5. 大量銭出土遺構 (第 29 図)

### 2140SX (大量出土銭 A 古瀬戸三耳壺)

2140SX は調査区中央部北壁際で発見された古瀬戸三耳壺に納められた大量銭出土遺構である。内部の銭貨は未調査である。

容器の三耳壺は古瀬戸前期=13世紀の製品である。口縁部と耳を意図的に打ち欠いている。検出時には掘削時に破損したと思い破片を懸命に探したが見つからなかった。しかし、三耳がすべて欠けていることが分かり、口縁部も含め意図的に打ち欠いたものと考えられる。蔵骨器においては、このような意図的な打ち欠きは類例があるが、大量銭の容器では管見ながらこのような例をみない。祭祀的な意味合いが感じ取れる。また、高台部にも複数の傷があり、意図的な打ち欠きをしようとしたのかもしれない。

蓋はなかったが、壺内部からは板状の黒い有機物らしきものが出土しており、分析の結果、未焼成の粘土と判明した(付論1参照)。検出時の状況から粘土を詰めたのではなく、粘土板を蓋とし、それが割れて壺内に一部が残ったと考えている。写真28の内部に見えている黒い物質が粘土片である。内部の銭貨は孔にひも状のものを通した網銭とバラ銭がともに観察される(写真図版55)。掘方や周辺からの銭貨の出土はない。

2140SX は方形区画溝群の2198SDと2199SDの埋土上に形成された遺構である。特に2199SDは区画溝群最後の溝であり、ほぼその位置に埋められていたことは、この区画溝と大量銭の関係を示しているように思われる。なお、当初の壁面観察では壺直上の層を包含層と判断していたが、拡張部の観察によって、その層が2199SD上層であり、その上から2140SXが存在すると判明した。第29図や図版14の掘方破線部はその部分を示している。掘方は失われた当時の地表面も含めれば、80cm以上の深さと推定される。埋土は他の遺構と同様の黄褐色中粒砂で、特異な状況は何ら観察されなかった。

遺構の帰属時期であるが、2199SDなどの方形区画溝から古瀬戸後期後半の皿や永楽通宝(1403年初鑄)が出土しており、これに後出することから15世紀後半以降と考えられる。

### 2190SX (大量出土銭B 常滑焼壺)

2190SXも同じく調査区北壁際で検出された。こちらは大部分が壁面内に埋まっていたので、壁部を1mほど拡張し調査した。常滑焼壺も古瀬戸三耳壺と同様に口縁部を打ち欠いている。常滑焼編年第9~10段階=15世紀代の製品である。こちらは蓋がされており、山茶碗系片口鉢の胴部片であった。蓋を外して観察できた内部の銭貨は網銭であった。11枚の銭種が判明し、最新銭は永楽通宝である。

壺はやや斜めに倒れていたが、それは上に存在する2157SKや2163SK掘削時の影響かもしれない。2157SKは壺まで達しており、掘削時に壺は見えていたと考えられる。にもかかわらず内部の銭貨が取



写真28 2140SX 壺内部



写真29 2140SX 検出(南から)

り出されていないことから、土坑を掘った人は壺と銭貨の存在に気付いたうえで取り出さなかった可能性がある。また、壺内に小さい貝殻片が入っていたが、これは2157SKに由来すると考えられる。

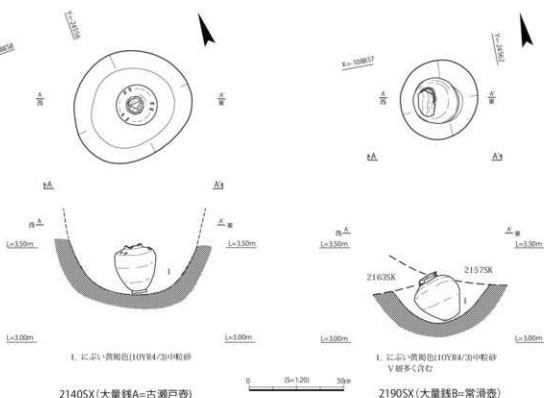
掘方底部のレベルは2140SXよりも20cmほど低い。底部に何か据えていた痕跡など、何ら特異な状況はない。埋土も他の遺構と同じ黄褐色の中粒砂である。

2190SXの位置は、方形区画溝2205SDのすぐ東である。位置的には区画内とみえるが、先に述べたように新しい遺構や攪乱によって失われた区画溝があった可能性があり、2140SXと同様に本来は溝埋土の上に位置した蓋然性が高い。区画溝と関連性をもってこの場に埋められたと考えている。2190SXの帰属時期も、区画溝群との関係から2140SXと同じく15世紀後半以降と考えている。

また、2190SXの2mほど南から独鈷杆が出土している。2地点一帯の遺跡北東部は既往調査において、祭祀遺構や瓦の出土が多いことから、寺院など宗教施設が存在する可能性が指摘されている。独鈷杆の出土も含め、2199SDなどによって形成される区画はそうした宗教施設に伴うものではないだろうか。ただし、方形区画溝群から瓦の出土はない。大量出土銭については、内部の観察や分析および出土状況等について、第4章で考察しており、参照されたい。



写真 30 2190SX と 2157SK (南東から)



第 29 図 2140SX (大量出土銭 A)・2190SX (大量出土銭 B)

## 第4節 3地点の遺構

### 1. 概要 (図版16)

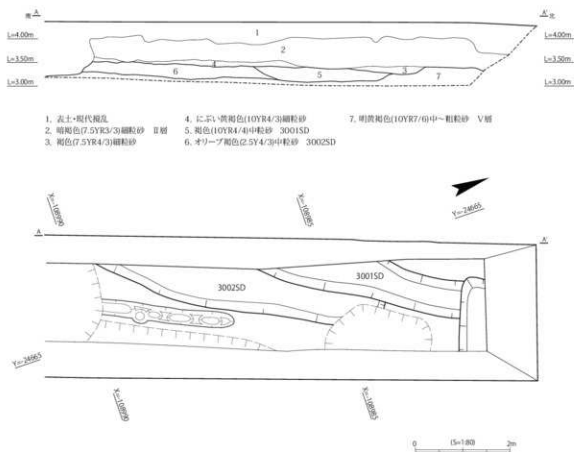
3地点は大部分が攪乱を受け、粗粒砂で埋められており、遺構は北側に残るのみであった。この部分からは3条の南北溝が検出された。

3地点は明治時代の地籍図をみれば、八剣社境内西側の緑に塗られた一帯にあたり、境内を画す樹林があったようだ。明治42年に八剣社廃止の際に、境内の巨木が抜かれて競売にかけられたらしく、3地点の大攪乱は巨木伐採後に客土を埋めた結果かもしれない。しかし、2地点西区も含めて、これまでの調査でも砂堆中央部では大規模な攪乱が多く存在していた。3地点以外には、この説明は適用できず、大攪乱の背景は不明なままである。

### 2. 溝

#### 3001・3002SD (第30図)

3地点北側で検出した平行する南北溝である。ほぼ現在の地割に沿った(N-30°-E)南北溝である。この方向性の溝は既往調査でも多く見つかっている。ただし、既往調査の溝で3001・3002SDと連なるものはない。遺物は3001SDから少量出土したのみで、15世紀の土師器の小片であった。遺構の帰属時期も15世紀頃と考えられる。



第30図 3001・3002SD

## 第5節 4地点の遺構

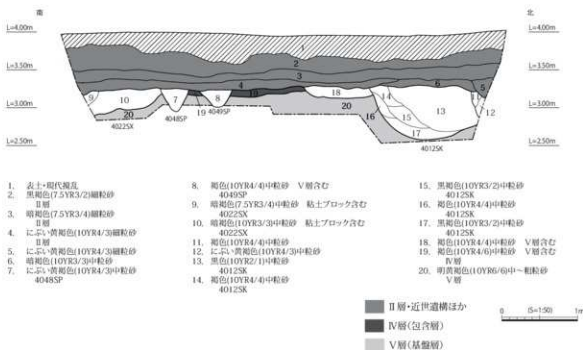
### 1. 概要 (図版17・18・第31図)

4地点からは90基の遺構が検出された。種別では柱穴が多いが、明確に建物を構成するものはない。調査区中央の南北溝4043SDの両側に沿って4071SPなど数基の柱穴が並んでいるが、同様に溝に作る柱穴が周辺の平成27年度4地点と7地点でも見つかった。

3分の2の遺構から遺物が出土しておらず、多くの遺構が時期不明である。包含層の出土遺物は中世遺物よりも弥生土器片の方が多く、西側にはIV層も存在する。しかし、遺構の時期として確実に弥生時代と判断できるのは4011SD(4016SX)、4012SK、4030SK、4065SD、4090SKのみに過ぎない。4011SDは本遺跡の弥生時代の遺構に特徴的な黒色の埋土であり、弥生中期の遺物を有する。4012SKも類似の埋土で、弥生時代前期～中期前葉の条痕文系の深鉢が出土している。しかし、調査区東隅の4031SKは同質の黒色埋土であるが、山茶碗や常滑焼が出土している。また、北壁際にある4028SKは出土遺物はすべて弥生土器であるが、層位と切り合い関係から確実に中世の遺構である。

調査区西端の4011SDなどの弥生中期の遺構は、西に隣接する平成27年度4地点で検出されている溝とともに方形周溝墓を構成している可能性がある。平成27年度調査において、4地点から6地点にかけての遺跡南西部で複数の方形周溝墓が検出されており、弥生時代の墓域が展開していた可能性が考えられる。

一方で中世の遺構と断定できるものも少ない。調査区西側で検出した4008SEは、出土遺物の多くが中世陶器であったが、底部から近世のすり鉢が出土し、近世遺構と判明した。遺物が少量の遺構については帰属時期の決定は難しいが、北側に位置する1地点や2地点に比べれば、遺物に占める弥生土器の比率は高く、上記他にも弥生時代の遺構が存在すると思われる。



第31図 4地点西壁断面図



## 2. 溝 (弥生～古墳時代)

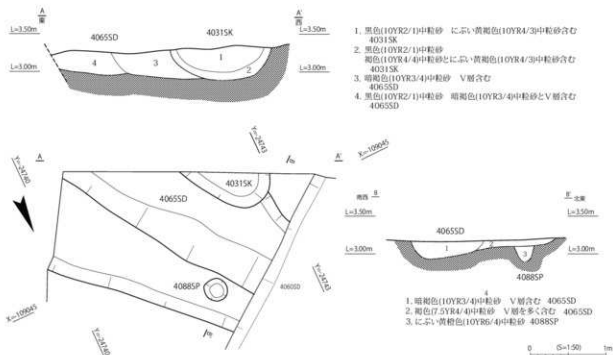
### 4011SD (第33図)

調査区西側で検出した南から北西に湾曲する溝である。ただし、中央部が楕円形の土坑状に深く、北側は浅く広がる(調査時に4016SXとしていた)。南側は一旦浅くなり再度深くなっている。よって複数の土坑が列状をなしているものかもしれない。埋土は黒色を呈し、検出段階から非常に目立っていた。弥生中後葉の土器が出土している。

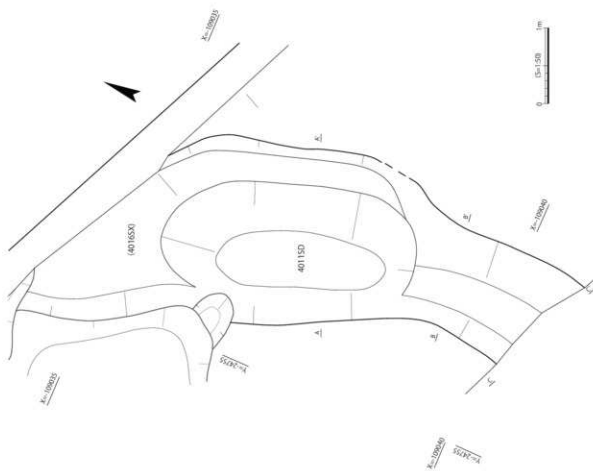
西に隣接する平成27年度4地点で、類似の遺構(SD4042)が検出されており、方形周溝墓の可能性が指摘されている。その溝を北西部、4011SDを南東部とすれば、15m程度の方形周溝墓が復元できる。この場合、4011SDの西側が墳丘部にあたる。その一帯には包含層(Ⅳ層)があり、これが墳丘盛土という可能性も意識して観察したが、わずかにしか残っておらず、判断はできなかった。

### 4065SD (第32図)

調査区東側で検出した溝である。西端は4060SDに切れ、それ以西は続いていない。埋土はⅤ層を多く含み、検出時にはあまり目立たなかった。弥生時代の遺構は黒色土で目立つ遺構とⅤ層=地山層と類似して認識しづらい遺構に分かれるように思われる。弥生時代末～古墳時代前期の台付甕(図版23-33)が出土しており、遺構の時期も同時期と考えている。



第32図 4065SD



1. 緑色(10784/4)中粒砂 左平下に褐色面巾巻
2. 緑色(10784/4)中粒砂
3. 土上、黄褐色(10785/4)中粒砂 V層合芯
4. 黄色(10782/1)中粒砂
5. 黄色(10782/1)中粒砂 緑色(10784/4)中粒砂付合
6. 黄色(10782/1)中粒砂 土上、黄褐色(10785/4)中粒砂付合
7. 土上、黄褐色(10785/4)中粒砂 V層合芯
8. 黄色(10782/1)中粒砂 緑色(10784/4)中粒砂付合
9. 土上、黄褐色(10785/4)中粒砂 V層合芯
10. 土上、黄褐色(10785/4)中粒砂 V層合芯
11. 土上、黄褐色(10785/4)中粒砂 V層合芯付



1. 黄色(10782/1)中粒砂
2. 緑色(10784/4)中粒砂



1. 土上、黄褐色(10785/4)中粒砂
2. 黄色(10782/1)中粒砂 土上、黄褐色(10785/4)中粒砂付合
3. 緑色(10784/4)中粒砂 V層合芯付
4. 黄色(10782/1)中粒砂 V層合芯付
5. 土上、黄褐色(10785/4)中粒砂 (当該層付)

第33図 40115D

### 3. 溝 (中世)

#### 4043SD (第34図)

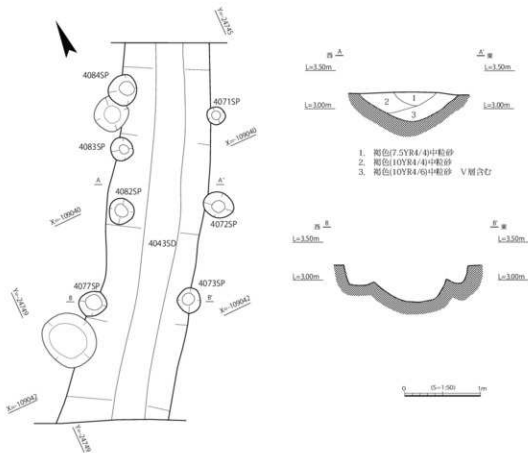
調査区中央で検出した南北方向の溝である。調査区と直交する方位 (N-29° E) は本遺跡によくみられるものである。その両側には柱穴が沿うように存在する。まったく同じような遺構が西に隣接する平成27年度の4地点で検出されている (SD4028)。これらは同じ区画を形成する東西の溝であろう。溝間の距離は東西約30mである。

同じような柱穴を伴う溝が、さらに南に位置する平成27年度調査の7地点でも検出されており (SD7312)、同じく東西30mほどの区画を形成している。平成27年度報告では護岸のための杭とされている。しかし、柱穴は溝埋没後に掘削されている。溝そのものに伴うのではなく、溝によって示されていた境界に伴うものであり、堀などの可能性がある。

遺物は第6～7型式の山茶碗や常滑焼が少量出土したのみであるが、平成27年度調査のSD4028やSD7312も同様で、遺構の帰属時期は13世紀と考えられる。



写真31 4043SD (南から)



第34図 4043SD



#### 4. 土坑

##### 4012SK・4090SK (第36図)

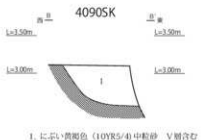
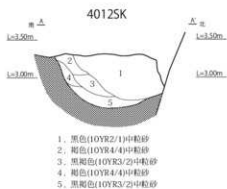
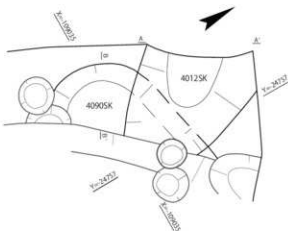
ともに4地点西端で検出され、弥生前期から中期前葉の土器が出土している。4012SKの埋土は黒色を呈し、4011SDと共通であり、土坑ではなく溝の可能性もあろう。先に述べたように4011SDが二つの土坑が連なったものであれば、その位置関係から同一群の遺構に属する可能性もある。

4090SKは大部分を4008SEに切られ、4012SKと一部重なっている。楕円～隅丸長方形の土坑と考えられる。埋土は黄褐色を呈し、地山の砂を含む。

##### 4030・4052SK (第37図)

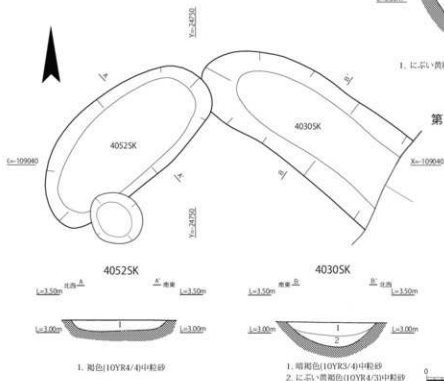
4地点中央で検出された長楕円～隅丸長方形の土坑である。プランから方形周溝墓とも考えたが、東側の溝は検出されていない。また4052SKは深さ10数cmしかなく、既往調査における方形周溝墓の溝に比べれば浅く、底部のレベルも高い。

出土遺物は弥生土器の小片のみであり、方形周溝墓であることを積極的に示すものはない。



0 (0=150) 1m

第36図 4012SK・4090SK



1. 褐色(10YR4/4)中粒砂



1. 暗褐色(10YR3/4)中粒砂  
2. に近い黄褐色(10YR4/3)中粒砂

0 (0=150) 1m

第37図 4030・4052SK

## 第6節 6地点の遺構

### 1. 概要 (図版19・20)

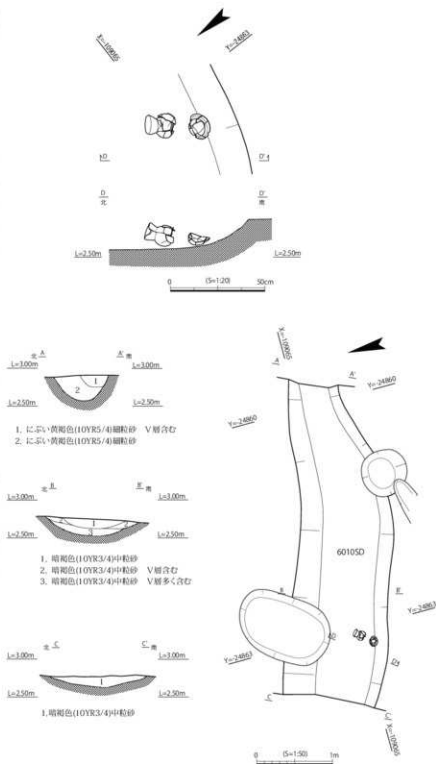
今回の調査において最も南側に位置する調査区であり、砂堆の南西隅にあたる。主な遺構は調査区南で検出した6010SDである。長頸壺と小型鉢がままとって出土した。他に土坑、溝、柱穴があるものの、遺構・遺物ともに少なく、いかにも集落遺跡の周縁部といった様相を示す。V層のレベルはTP2.8～2.6m前後と低く、調査区内でも西南方向に下がっている。

### 2. 溝

#### 6010SD (第38図)

6地点南側で検出した東西溝である。ほぼ完形に残っていた古墳時代前期の小型長頸壺(第44図-37)と小型鉢(第44図-38)の2個体が、溝の南側でままとって出土した。調査区北端にわずかに検出した6008SXと対になる方形周溝墓の可能性もある。その場合は、調査区の大部分が墳丘部となるが、そのような痕跡はまったく認められなかった。

小型壺などが出土した溝の西側は広く、埋土も黒色を呈するが、東側は細く埋土も明るい。東壁側(断面A)は別遺構を誤認している可能性がある。



第38図 6010SD

## 第7節 7地点の遺構

### 1. 概要 (図版 21・22)

7地点は砂堆の西端に位置する。V層は中央部北壁付近のみ TP2.7 mのレベルで残っていたが、大部分では近代以後の擾乱によって TP2.4 mあたりまで失われていた。西側はより深く大きな擾乱を受けており、遺構面は完全に失われていた。さらに湧水レベルが TP2.5 mのため複数の排水坑を掘削し、常時ポンプによる排水をしながらの調査であった。

7地点の遺構はすべて近世に帰属する可能性がある。調査区の南側には貝殻を多く含む大型遺構が複数ある。廃棄土坑であろう。何度も掘削が繰り返されたようだ。近世の遺構であるが、古代の遺物(製塩土器や須恵器)が比較的多く含まれていた。

### 2. 溝

#### 7010・7011・7015・7016SD (第40図)

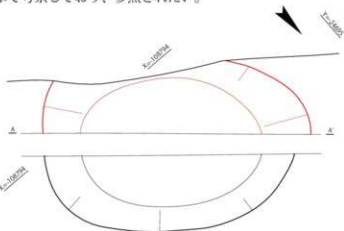
7地点中央部西寄りで検出された南北溝群である。7011SDを除き調査区と直交する方位(N-22°-E)であり、1030SDなどと同じく、既往調査で多くみられる方位である。7011SDは7010SDに取り付くような溝で、その方位はほぼ真北である。

出土遺物は山茶碗や常滑焼の小片が主で、その量は少ない。調査時には中世の遺構と考えていたが、7011SD出土遺物に1点の近世陶器が含まれており、近世遺構かもしれない。ただし、その場合も中世以来の溝である可能性は残る。7地点以西では標高も下がり、遺物・遺構とも減ることから主たる居住域の西端を示す溝とも考えられる。しかし、さらに西に位置する平成23年度調査の3地点(龍雲院遺跡)の021SD・025SD(13~15世紀に比定)との間隔が109m程度=1町となることから一連の溝の可能性はある。これらの溝については第4章で考察しており、参照されたい。

### 3. その他の遺構

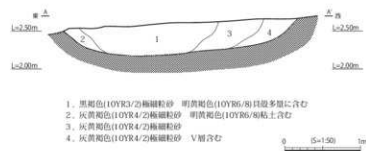
#### 7001SX (第39図)

調査区中央で検出した楕円形の大型遺構である。貝殻片を多く含み、廃棄土坑であろう。近世の遺構であるが、須恵器や中世陶器を多く出土した。南半分のみV層の残りがよく、高いレベルで検出している(第39図の赤い部分)。



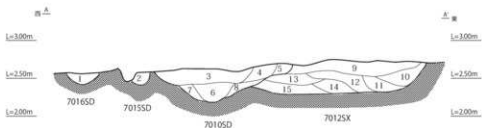
#### 7012SX (第40図)

7010SDと7011SDに切られる大型の遺構である。埋土がV層よりも下の層から由来すると思われる粗粒砂を含むことから深い井戸かと考えていたが、調査区内では深さ50cm程度であり、井戸と考えられる状況は見出せなかった。出土遺物は土師器の小片のみであり、帰属時期の決め手に欠ける。

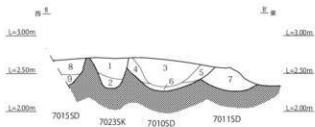
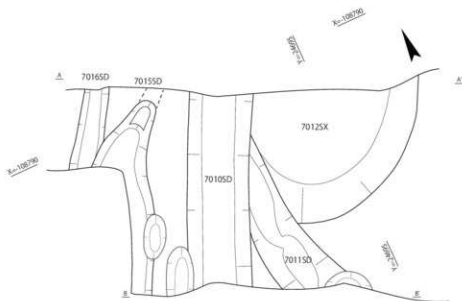


1. 黒褐色(10YR3/2)極細粒砂 明黄褐色(10YR6/8)貝殻多量に含む
2. 灰黄褐色(10YR4/2)極細粒砂 明黄褐色(10YR6/8)粘土含む
3. 灰黄褐色(10YR4/2)極細粒砂
4. 灰黄褐色(10YR4/2)極細粒砂 V層含む

第39図 7001SX



- |                                 |   |                                  |
|---------------------------------|---|----------------------------------|
| 1. にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂<br>70165D | 6. 暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂<br>70105D                           | 11. 黄褐色(10YR7/8)粗粒砂<br>70125X    |
| 2. 灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂<br>70155D   | 7. オリーブ褐色(2.5Y4/3)粗～中粒砂<br>70105D                       | 12. にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂<br>70125X |
| 3. 灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂<br>70105D   | 8. オリーブ褐色(2.5Y4/3)粗～中粒砂<br>にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂を含む 70105D | 13. 灰褐色(7.5YR4/2)細粒砂<br>70125X   |
| 4. にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂<br>70105D | 9. 褐色(10YR4/4)細粒砂 径5～10mmの小礫 V層含む                       | 14. にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂 V層多量を含む   |
| 5. 褐色(10YR4/4)細粒砂<br>70105D     | 10. にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂<br>70125X                        | 15. 褐色(7.5YR4/4)細粒砂<br>70125X    |



- |                                   |
|-----------------------------------|
| 1. 灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂 V層含む 70235X   |
| 2. 灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂 70235X        |
| 3. 灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂 70105D        |
| 4. オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂 70105D      |
| 5. オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂 V層含む 70105D |
| 6. オリーブ褐色(2.5Y4/3)粗粒砂 V層含む 70105D |
| 7. 暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂 70115D        |
| 8. 灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂 70155D        |
| 9. 灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂 V層含む 70155D   |

0 5=150 1m

第40図 7010・7011・7015・70165D・70125X



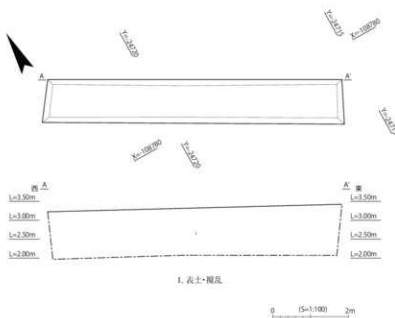
## 第8節 8地点の遺構

### 1. 概要 (第41図)

8地点は7地点の10mほど西に位置する。7地点西側と同様の深い攪乱によって遺構は完全に失われていた。掘削土の中に遺物もほとんどなく、常滑焼1破片のみであった。既往調査でも7地点と8地点の間で基盤層のレベルが低下することなどから、主たる居住域からは外れていると考えられる。ただし、さらに西には龍雲院遺跡や郷中遺跡が存在する。8地点の北西側に位置する郷中遺跡では近世の遺構は多く見つかっている。また先述のように7地点の7010SDと龍雲院遺跡の021SD・025SDの間が約1町であり、両者が関係する溝であれば、8地点は何らかの区画内であったことになる。



写真33 8地点(西から)



第41図 8地点平面・断面図

# 第3章 遺物

## 第1節 遺物の概要

出土した遺物は土器・陶磁器類を主とし、金属製品、貝類や骨などの自然遺物が含まれる。土器・陶磁器類の出土量は整理用コンテナ（内寸＝W534×D334×H137mm）で52箱、自然遺物が6箱の計58箱であった。土器・陶磁器類は52箱中、2地点が38箱、そのうち22箱を2120SDが占める。1地点は8箱あるが、その他の調査地点は1～2箱程度である。遺物の年代は弥生時代から近世にわたるが、大部分を中世陶磁器（特に山茶碗と常滑焼）が占める。

弥生土器は4地点で、古代の須恵器は1地点で多く出土した。しかしながら、弥生土器や須恵器が一つの遺構からまとまって出土することはなかった。弥生土器や須恵器は出土量は少ないが、破片資料も出来る限り図化し掲載した。

今回の出土遺物の中で特筆すべきは2つの大量出土銭と2つの銅製品（独鈷杵と和鏡片）である。大量出土銭と独鈷杵は方形区画溝群埋没後の遺構から出土している。和鏡片はやや離れているものの、同じ2地点からの出土である。大量出土銭は大量銭A＝古瀬戸三耳壺と大量銭B＝常滑焼壺の2つがある。本章では容器である壺と銭貨を個々に報告する。銭貨は遺構や包含層からの個別出土銭として41枚出土しており、これまでの調査では最も多い。石器と木製品はなかった。石製品では石臼の小白が出土した。これは2120SD直上から出土しており、2120SD最上層に伴うものかもしれない。貝類は非常に多く出土したが、一部をサンプルとして採取することにした。獣骨や人骨も出土している。

遺物に関しては、まず土器・陶磁器類を時期別に、続いて瓦や金属製品などを報告する。弥生土器や須恵器など中世以前の遺物は、特定の遺構からの

まとまった出土がないため種別ごとに報告する。中世の土器・陶磁器は特定の遺構や遺構群から一定量がまとまって出土しており、これらについては遺構単位の報告とする。ただし遺物に時期幅があり、必ずしも一括性の高い資料ではない。このような資料を一括提示する意味に疑問もあるが、その時期幅も含めて、遺構の様相を示すものと考えて提示した。また、包含層・その他の遺構から出土した中世の土器・陶磁器は器種別に報告する。

本報告では、個々の遺物の形状や一般的な技法等については実測図による表現と遺物一覧表に委ね、各器種の出土状況や全体の傾向、特記事項を記述する。なお、出土遺物の型式や年代観は文末の基本参考文献を基準とした。また、最も遺物の多い中世については、畑間遺跡時期区分と各種遺物編年の対照表（表5）を提示しておく（註20）。

西暦	時期区分	山茶碗	常滑焼	古瀬戸	土器器種	羽釜
1150	Y I 2	第4型式新	常滑2		伊勢鍋 A2	
		第5型式古	常滑3		伊勢鍋 A3	
1200		第6型式新	常滑4		伊勢鍋 A4a	
	Y I 3	第7型式	常滑5	前 I・II	伊勢鍋 A4a	
1250		第7型式	常滑6a	前 III・IV	伊勢鍋 A4b	羽釜 A1
	Y I 3	第8型式	常滑6b			
1300		第8型式	常滑7	中 I・II	伊勢鍋 A5	羽釜 A2
		第9型式	常滑8	中 III・IV	伊勢鍋 A5	羽釜 A3
1400	Y I 4	第10型式	常滑9	後 I・II	伊勢鍋 A6	羽釜 A4
1450		第11型式	常滑10	後 III・IV	内耳鍋 A1	羽釜 B1
1500						

表5 中世遺物編年対照表

## 第2節 弥生～古墳時代の土器

弥生土器は4地点からの出土が多かったが、2地点においても包含層や中世遺構から出土しており、図示した遺物の4割ほどは2地点からの出土遺物である。時期的には前期と中期が主であった。

### 1. 弥生前期から中期前葉の土器（第42・43図）

第42図は弥生前期から中期前葉の土器である。1～5は内傾し端部が肥厚する口縁部という要素を共有する。これらの土器は近接する烏帽子遺跡でも多く出土している（註21）。1は内傾口縁の深鉢である。2は内側に突出する口縁部が特徴的で、内外面とも摩耗が著しく調整等は不明である。

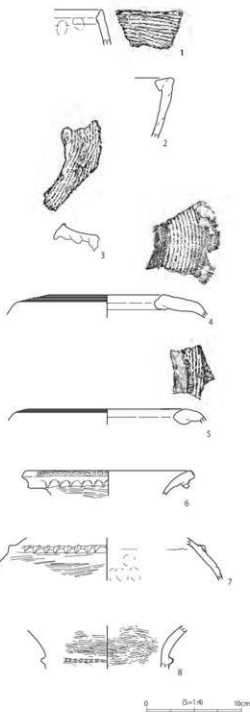
3～5は厚口鉢とされる器形で、口縁部が内部を塞ぐように屈曲する独特の形状を呈する。口縁端部が肥厚し、上部に条痕文を施す。岩滑式期に比定される。6と7はともに条痕文系土器の壺である。6は口縁部、7は肩部、ともに押圧突帯で飾られている。6の口縁端部は連続刺突も施されている。1や2と同じく弥生前期に比定される。8は遠賀川式系の壺である。内外面ともミガキがなされ、頸部には押圧突帯を施す。

第43図は弥生前期～中期前葉の条痕文系の深鉢である。器表面の状態の良好なものは拓本で図示している。9は口縁部から頸部は横方向、体部は縦方向の条痕を施す。11の条痕は羽状である。これらは、口縁端部にも条痕による沈線を施している。9、14、15は4012SK、12と13は4090SKから出土している。ともに4地点北西隅に位置する遺構である。

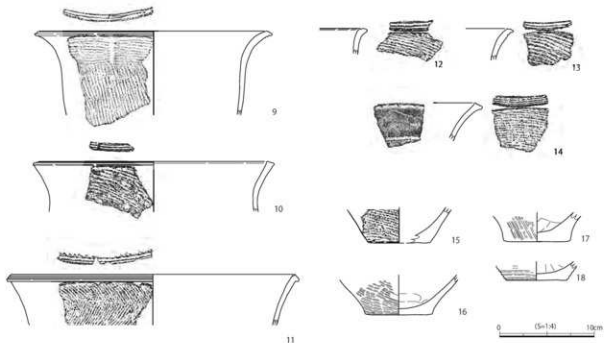
### 2. 弥生中期から古墳時代前期の土器 （図版23・第44図）

図版23は弥生中期～終末期および古墳時代前期の土器である。

19～24は弥生時代中期の壺である。それぞれ特徴的な装飾が施されている。19はなだらかな波状文と肩が張り太い胴部が特徴的で、口縁端部には刻み目を、頸部には斜格子文を施す。20は横ハケのち斜めハケのち波状文を施す。21は頸部に波状文を施す壺である。これら波状文を施された3点の壺は4011SDから出土しており、長床式期に比定される。なお、7と8も4011SDからの出土遺物である。23はなだらかな肩部をなす、貝田町式の細頸壺である。



第42図 弥生前期～中期前半の土器



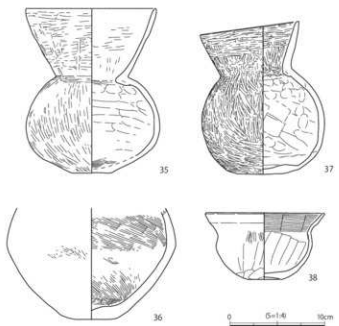
第43図 弥生前期～中期の条痕文系土器

25は1186SKから出土したもので、高蔵式から山中式期の壺であろう。胴部最大径の位置が中心よりやや低い位置になる。頸部の沈線以外に文様は観察できない。

28～32は竹管文や刺突文が施された山中式期の壺である。32は2200SKから出土した。28～31も2200SK近辺の中世遺構や包含層から出土したものである。

33は台付甕、34は高坏の脚部、それぞれ廻間式から松河戸式期のものであろう。

第44図の35は口縁部が内湾する廻間式期の長頸壺、外面と口縁部内面はミガキが施されている。36は表面が摩滅しており、調整等が不明瞭であるが、山中式～廻間式期の壺であろう。35は2222SK、36は2221SKから出土したものである。ピット状の小さい土坑からそれぞれ1個体の土器のみが出土した。



37と38は6010SDからまとめて出土した。37は外面と口縁部内面は丁寧にミガキが施されている。38は外面が摩滅し不明瞭だが、ミガキが施されていたとみられる。口縁部内面は横方向のハゲが施される。松河戸式期頃の土器と考えている。

第44図 2221・2222SKと6010SD出土土器

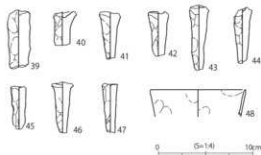
### 第3節 古代の土器・陶磁器

古代（本報告のⅣ期）の土器も少なく、残存率の低い破片資料が主である。最も目立つのは製塩土器の脚部片である。知多式4類が最も多い。須恵器や土師器も製塩土器と同時期（Ⅳ-2期=7~8世紀）のものが多く、前後する時期（Ⅳ-1期と3期）の遺物は少ない。古代の遺物は、1地点と7地点が比較的多く出土している。灰釉陶器を6点図示しているが、平安時代の遺物は非常に少ない。これは既往調査成果においても同様である。

#### 1. 製塩土器（第45図）

製塩土器は破片数で46点出土し、10点を図化した。46点のうち、3点が杯部片、残り43点は脚部片である。脚部片43点のうち1点のみ知多式3類（39）、残りは、4A類もしくは4B類である。全体の残るものはないが、脚長は6cm前後とみられるもの=4A3類（8世紀）が主である。

地点別では、1地点で25点、7地点も11点出土しており、出土遺物が最も多い2地点は7点であった。



第45図 製塩土器

#### 2. 古代の土師器・須恵器・灰釉陶器（図版24・第46図）

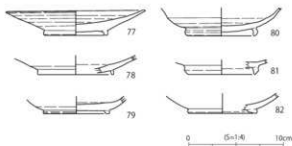
49~52は土師器の甕である。49と50は同じ1180SXから出土した。49は頸部はやや絞まり、口縁端部はわずかに上方につまみ出されている。7世紀半ば頃のものである。50は粗い指ナデや指オサエで成型し、粘土組織が残る小型の甕である。1地点のすぐ北に位置する平成21年度の調査の5地点から類似の甕が出土している。51と52も同時期の甕と考えられる。

須恵器は7世紀のH-50窯式から奈良時代のO-10号窯式までのものがあるが、8世紀前葉のI-41号窯式期頃の製品が多い。製塩土器知多式4類の年代とほぼ重なる。1地点からの出土が多いが、特定の遺構からまとまったの出土はない。小破片のものが主で、接合するものもほとんどなかった。

53~61は坏、碗類である。60は酸化焙焼のため褐色を呈する。53はH-50窯式の坏Hである。62~65は坏蓋である。62のつまみは扁平で、63~65は端部に返りが無い。いずれもI-41~C-27窯式期に比定される。66~68は壺瓶類の底部、70~72は壺甕類である。69は有台盤、胎土はやや軟質である。8世紀後半のものであろう。

74は甕である。口縁部は丁寧なナデと沈線を施す。体部はタタキ目が残り、ここにも1条の沈線が施されている。75と76は甕もしくは鍋の把手、ともに胎土は軟質で白色を呈す。

77~81は灰釉陶器の碗もしくは皿である。灰釉陶器の出土量は少ない。9世紀前半のK-14窯式の製品（77~79）、K-90窯式（80）、O-53窯式（81）のものがある。82はいわゆる蛇の目高台である。本来は緑釉陶器の素地である。内面のみ灰釉が付着している。K-90窯式の製品である。



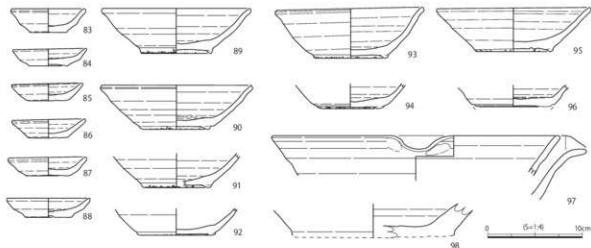
第46図 灰釉陶器

## 第4節 中世の土器・陶磁器

今回の調査で出土した遺物の大部分を、この時期（中世＝本報告のV期）の土器・陶磁器が占める。ただし、V-1期とV-5期の遺物は極めて少ない。1060SK、2120SD、2180SD、2153SX 遺構群、方形区画溝群と大量出土銭は遺構ごとに、それ以外の遺構や包含層からの出土遺物は種別ごとに報告する。

### 1. 1060SK 出土の土器・陶磁器（第47図）

1060SKからは第5型式の山茶碗と小皿が出土した。残存率の高い個体が多かった。小皿（83～88）は体部と底部の境が明瞭で、器高も高く古い形状と言えよう。今回の調査では高台のある小碗が出土していない。既往調査でも小碗の出土数は少なく、中世畑間遺跡初期の遺物群と言える。97は常滑焼片口鉢Ⅱ類である。Ⅱ類の片口鉢が少ない常滑窯2～3型式期のものである。98は常滑焼甕の底部片である。97と焼成具合や胎土が非常に似ており、同じ窯の製品かもしれない。



第47図 1060SK 出土の土器・陶磁器

### 2. 2120SD 出土の土器・陶磁器（図版25～30）

2120SDからはコンテナ22箱、破片数で約4000点の遺物が出土した。第2章でも述べたように、正確に遺物を層位ごとに取上げることができなかったが、整理作業において上層部（最上層・上層）と下層部（中層・下層）と分けることは可能であった（註22）。上層部の方が出土量が多い。破片数では山茶碗が上層部で約6割、下層部では約7割を占める（註23）が、大きさと重量から常滑焼が目立つ。上層では帯状に多くの遺物が出土し、北側では常滑焼片がまとめて廃棄されていた。また瓦も48点出土しており、その中には杏葉唐草文軒平瓦がある。銭貨も5枚出土しており、1433年初鑄の宣徳通宝が含まれている。16世紀の遺物も少量含まれている。これらは溝埋没最終段階の遺物と考えられるが、調査の不備によるもの、つまり2120SD埋土上面の未検出遺構に由来する可能性もある。また南西側では貝類などの自然遺物も出土した。なお、瓦や自然遺物については、後節で報告している。

図版25の99～150は尾張型の山茶碗および小皿である。第5～8型式のものがある。101～111と118～123は下層部（下層・中層）から、他は上層部からの出土である。下層部出土の山茶碗は古相（第5型式）（101～111）と新相（第6～7型式）（118～123）に分かれる。前者が下層、後者が中層に由来すると考えられる。127～132は長石などの細粒が多く混入し、白色を呈する胎

土から瀬戸産と考えられる。6点図示したが、瀬戸産の山茶碗は破片数では3%と少なかった。畑間遺跡では第8型式期には比較的高い比率で瀬戸産が含まれる傾向(註24)があるのだが、2120SDは第8型式期の遺物が少ないため、瀬戸産山茶碗も少ないのだろう。123はやや大ぶり、わずかに口縁部がゆがむ、片口山茶碗を意図した製品であろうか。114や129は高台がきれいに剥離している。常滑産山茶碗においても、6a型式期に無高台山茶碗が存在するとされるが、図示した中で確実に無高台のものは125のみである。第5型式の山茶碗が下層の開削時期を、第7型式が中層の埋没時期を示すものと考えている。

小皿も同様に第5～8型式のものがあるが、型式差があまりなく、明確に個々の時期は判断しづらい。138と139のみが下層部出土である。133～141は底部と体部の境が明瞭であり、器高も2cm以上であり、第5型式(常滑窯3型式)に比定される。142～149は第6～8型式に比定される。146は胎土から瀬戸産と考えられる。

150は窯内で軸着した山茶碗底部の塊である。山茶碗は第6型式のものであろう。2地点包含層からもう1点(第50図-331)、既往調査でも2点出土している。何のために集落に持ち込まれたのかは分からないが、窯業生産地域の集落らしい遺物と言えよう。武豊町のウスガイト遺跡でも同じものが出土している(註25)。

図版26の151～160は東濃型山茶碗と小皿である。第8型式から第11型式のものまで存在する。14世紀後半～15世紀の遺物は多いものの、東濃型山茶碗は少ない。

161～170は山茶碗系(常滑窯の片口鉢1類)の鉢、第4～7型式のものがある。162～164は玉縁状の口縁をなす、常滑窯編年6a型式のものである。161はやや古い常滑窯4型式のものである。165、166は体部下半が丸みをもち、胎土も精良であることから常滑窯2～3型式のものと考えられる。170は高台が省略されている。

171～217(図版26～29)は常滑焼である。甕と鉢に加え、壺や小型の鉢、羽釜などがある。時期的には常滑窯初期(1a型式=12世紀前半の短頸壺)から16世紀まで含まれているが、最も多いのは6型式～10型式の製品である。上層では、甕は8～9型式のものが多いが、鉢は9～10型式のものが多く、甕の方が古相を示す。

171～192は甕である。171は薄手で、口縁端部がわずかに上方に突起し受け口状を呈する。12世紀代(常滑窯2～3型式)の甕である。172と173も口縁部の突帯が発達していない段階、4～5型式のものである。図版27は常滑甕6～8型式のものである。甕の口縁は時期を追うごとに口縁部の外反が強まり、突帯が上下に発達していく。図版28の甕は突帯が頸部と一体化している。これらは9～10型式の製品である。

2120SD上層・上層

総破片数 3141

器種	器形	破片数
山茶碗	碗	1828#
	皿	106
	鉢	27
常滑焼	甕	869
	壺	7
	鉢	76
	その他	6
	碗	8
古瀬戸	鉢/盤	13
	甕・瓶	7
	その他	2
	皿(網)	32
土師器	網	88
	甕	
	その他	
輸入陶磁器	碗杯皿	6
	鉢・盤	
	甕・瓶	
	その他	1
瓦	軒丸	2
	軒平	2
	丸	19
	平	1

不明・発生はカ-29 土製品=12  
 ※ 瀬戸産62点 東濃型37点

2120SD中層・下層

総破片数 934

器種	器形	破片数
山茶碗	碗	604#
	皿	43
	鉢	43
常滑焼	甕	157
	壺	
	鉢	3
	その他	3
古瀬戸	碗	
	鉢/盤	
	甕・瓶	1
	その他	
土師器	皿(網)	4
	網	23
	甕	
輸入陶磁器	その他	
	碗杯皿	
	鉢・盤	
	甕・瓶	
瓦	軒丸	3
	軒平	1
	丸	20
	平	1

不明・発生はカ-17 土製品=12  
 ※ 瀬戸産6点

表6 2120SD破片数

193～197は壺である。193は灰色を呈する短頸壺である。体部外面に $\pi$ のような線刻がある。短頸壺としては少し頸部が長い。縦方向のケズリ後に横方向のナデを施すが、ナデが粗く表面は凹凸がある。常滑窯1a型式の製品である。198と199は浅い箱状の鉢である。199は口縁部がわずかに注口状に指オサエで凹みが形成されている。13世紀後半頃の製品であろう。200と201は羽釜である。ともに土師質に焼成されている。

図版29は常滑焼の片口鉢、常滑窯片口鉢Ⅱ類とされるものである。内面は摩耗しているものが多い。常滑窯3～10型式までのものがある。鉢は202や203のように口縁端部が丸みのあるものから、端部が平らに、そして、端部が上下に突起するもの(209～213)へと変化する。213のように上下に突起し、端部に凸部が見られるものが最も新しい。なお、217は図では古い型式にみえるが、軟質化し口縁部のナデ調整が粗雑な16世紀以降の製品である。本来は2120SDに帰属しない可能性(註26)もあるが、最上層埋没の最終段階の遺物と考えるべきであろう。

図版30の218～234は古瀬戸である。折縁小皿、天目茶碗や仏供、盤など多様な器形がある。古瀬戸中期と後期のものが多いが、221は16世紀以降の製品かもしれない。折縁深皿(218、219)や盤類(226～230)は後期、231の花瓶や232の柄付片口は中期のものである。

235～245は土師器の鍋釜である。235～241は伊勢型鍋である。235と236はA3類、237～240はA4類、241はA5類である。A5類は器壁が薄く特徴的だが、出土量は少ない。242と243は羽釜A類とされるもので、242がA2、243はA4、それぞれ14世紀初めと15世紀前半の製品であり、伊勢型鍋に後出する煮炊具である。244と245はさらに後出の内耳鍋である。ともに体部から口縁が内傾しておらず、内耳鍋の初期、15世紀半ば～後半のものと考えられる。246～250は土師器皿、246～248は山茶碗の小皿と同じ形状をしている。249と250は手づくねである。

251～256は輸入陶磁器である。251と252は蓮弁文の青磁の碗で、253は青磁の碗、見込みに櫛描文が施されている。255は青白磁の合子である。これらは13世紀頃の製品と考えられる。254の青磁は他に比べ軸がやや暗い緑色を呈する。他の青磁より後出、15世紀のものであろう。256は玉縁白磁碗の底部である。

2120SDの出土遺物は13世紀の山茶碗と15世紀の常滑焼が非常に多く、前者が下層部、後者が上層部の時期を示す遺物と考えられる。14世紀の遺物は少なく、これは既往調査における全体的な傾向と一致する。

### 3. 2180SD 出土の土器・陶磁器 (図版31)

2180SDからはコンテナ2箱分の遺物が出土した。貝や骨などの自然遺物も出土している。破片数では50%以上を山茶碗が占めている。破片数としては第6型式の山茶碗が多いが、主たる遺物の時期は14～15世紀である。土師器の鍋釜類が破片数の約10%あり、古い山茶碗を別とすれば、供膳具・調理具・貯蔵具・煮炊具が偏りなく出土していると言えよう。貝などの出土も含め、近接する生活空間からの日常的な廃棄物のように思われる。

山茶碗は第6～8型式のものが出土している。第6型式のものが多いが、小破片が主であった。258、264、265は瀬戸産である。263～265の山茶碗は底部が小さく無高台であり、第8型式に比定される。

266～269は常滑焼の片口鉢である。いずれも口縁端部が突起し、常滑窯編年9～10型式=15世紀代に比定される。一方、広口壺(271)や鉢(272)は13世紀代の製品である。



273～276は古瀬戸である。273は古瀬戸の折縁深皿、274は天目茶碗である。ともに古瀬戸後期に比定される。276は壺の胴部下半である。薄緑の灰釉が均一に施されている。

277～282は土師器の鍋釜である。277は伊勢型鍋A 4類、13世紀の製品であり、上述の山茶碗と同時期の遺物である。278～282は羽釜A類である。278はA 2類、279はA 3類、280～282はA 4類である。12世紀後半～15世紀前半の製品である。

2180SDでは、上述のように13世紀～15世紀後半までの遺物があり、上層と下層ごとに遺物を取上げたのだが、出土遺物は上下=新旧と対応してはいない。第8型式の山茶碗も出土しており、長い時期の遺物が一定量含まれる。

#### 4. 2153SX 遺構群出土の土器・陶磁器 (図版 32)

図版 32は2153SX 遺構群(貝殻廃棄遺構群)から出土した土器・陶磁器である。複数の遺構からの出土遺物であるが、すべての遺構から貝類が出土しており、出土遺物からも一定の期間の中で形成された1つの遺構群と考えている。各遺物の出土遺構は遺物一覧表を参照されたい。

破片数ではほぼ50%を山茶碗が占めており、やはり第5～7型式のものが多い。これを除いて2180SDと比べれば、土師器の皿が多く、常滑焼の鉢が少なくと言える。土師器の鍋釜や古瀬戸の盤や鉢もあり、貝殻も含め、食事に伴う廃棄物という様相が見て取れる。

283～289は山茶碗と小皿である。2180SD 同様に第6型式の山茶碗が多いが、第8～11型式の山茶碗も出土している。286は焼成不良の東濃型第8型式の山茶碗と思われるが、土師器杯もしくは皿の可能性もある。

290～293は常滑焼である。290は発達した突帯が頸部に接着するようになった常滑窯編年10型式の甕である。291と292は突帯が非常に発達した常滑窯9型式のものである。293の鉢は口縁端部が上下に突起しており10型式に比定される。

294～300は古瀬戸である。古瀬戸後期の製品が主である。深皿(297～299)は後期Ⅲ・Ⅳ期に比定される。300は鉢もしくは皿の片口部の破片であるが、中期の製品であろう。

301～306は土師器である。301と302は手づくねの土師器皿である。非常に薄手であるが、焼成は良好で締まりもある。303～306は土師器の鍋釜である。伊勢型鍋もあるが、羽釜A 4類が主である。303は鈚の先端が上方に向き、口縁とほぼ同じ位置まで達している。304と305は303に比べ厚手で器壁の凹凸が目立つ。系統の異なるものであろうが、いずれも羽釜A類の中でも後出のものとは比定され、その年代は15世紀半ばである。

出土遺物は13～14世紀の遺物も含むが、主体は15世紀半ば～後半であり、貝殻も含め、この時期に廃棄されたものであろう。

2180SD

総破片数 386		
器種	器形	破片数
山茶碗	碗	206*
	皿	9
	鉢	10
常滑焼	甕	88
	甕	2
	鉢	14
	その他	
古瀬戸	碗	3
	鉢/盤	2
	甕・瓶	3
	その他	
土師器	皿(碗)	4
	鉢	41
	甕	
	その他	
輸入陶磁器	碗/杯皿	
	鉢・甕	
	甕・瓶	
	その他	

不明・発生ほか=3 土製品=1  
\* 瀬戸産25点 東濃型9点

2153SX 遺構群

総破片数 356		
器種	器形	破片数
山茶碗	碗	181*
	皿	7
	鉢	2
常滑焼	甕	70
	甕	5
	鉢	
	その他	
古瀬戸	碗	5
	鉢/盤	6
	甕・瓶	1
	その他	
土師器	皿(碗)	41
	鍋	30
	甕	
	その他	
輸入陶磁器	碗/杯皿	
	鉢・甕	
	甕・瓶	
	その他	

不明・発生ほか=5 土製品=3  
\* 瀬戸産16点 東濃型16点

表7

2180SD・2153SX 破片数

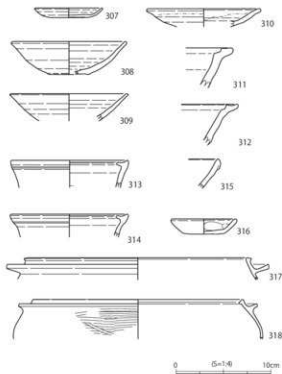
## 5. 方形区画溝群出土の土器・陶磁器と大量出土銭の容器壺（第48・49図）

2115SDや2148SDなどの2地点の方形区画溝群からの出土遺物は少なかった。307～309は第10～11型式の山茶碗と小皿である。310は古瀬戸の緑釉小皿、311と312は折縁深皿で、いずれも古瀬戸後期の製品である。313と314は青磁の香炉である。同一個体の可能性があるが、断面等がやや異なることから2点図化した。釉葉は厚く、やや濃い緑色を呈しており、14世紀後半～15世紀の製品と考えられる。315は玉縁口縁の白磁碗、13世紀の製品である。316は土師器小皿である。317は土師器の羽釜で、A3類、318も同じくA4類、13世紀末～14世紀前半に比定される。

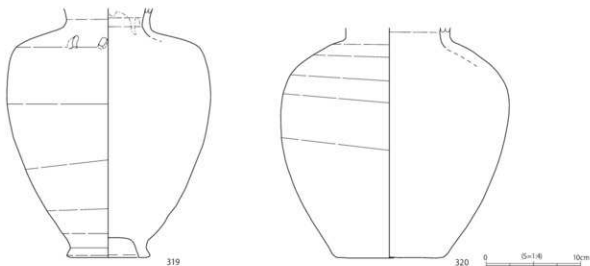
第7型式の山茶碗なども出土しているが、最古段階の溝である2205SDから永楽通宝が出土しており、溝群の所属年代は少なくとも1403年以後であることは確実である。出土する遺物も15世紀半ばのものがあり、銭貨の年代と整合性がある。

319と320は大量出土銭の容器として使用された壺である。319は大量銭Aの古瀬戸三耳壺。口縁部と耳は打ち欠きされている。釉葉は濃緑色を呈し、縞状に流下している。高台はやや外に張る断面形状を呈す。肩部が張り、沈線はない。古瀬戸前期I・II期＝13世紀前半の製品に比定される。

320は常滑焼の壺、319と同じく口縁部が欠けているが、玉縁口縁壺であろう。丸みを帯びた形状や自然釉や胎土の色調から15世紀後半の製品と考えられる。外面下半は表面がきれいに摩滅している。なお、蓋に用いられていたのは、13世紀頃の山茶碗系片口鉢の胴部片（写真図版56）である。



第48図 方形区画溝群出土の土器・陶磁器



第49図 大量出土銭の容器壺

## 6. 包含層・その他の遺構出土の土器・陶磁器（第50図・図版33）

第50図の321～331は山茶碗と小皿、鉢である。第6～11型式までのものがある。323と324は1040SDから出土したものである。329、330は山茶碗の片口鉢。331は2120SD出土の150と同じ山茶碗底部が軸着したものである。山茶碗は第6型式のもの、2地点包含層からの出土である。

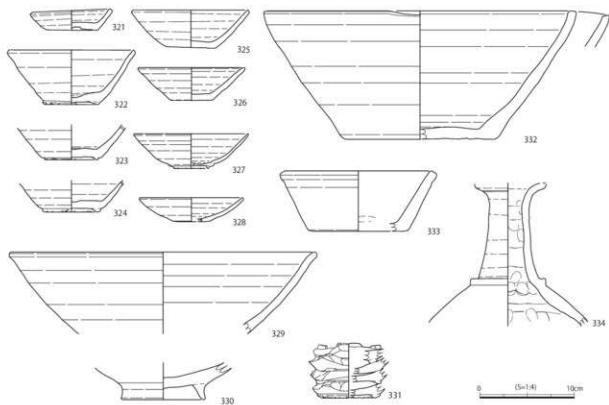
332～334は常滑焼。332は片口鉢、333は小型の浅い鉢である。2120SD、2180SDからも同様の鉢（198、199、272）が出土している。334は金属器を模したとされる肩部に稜がある水瓶で、12世紀後半の製品と考えられる。口縁端部はわずかに欠けていた。

図版33の335～351は土師器皿である。335～340は手づくね、341～351はロクロ成形である。335～337は内外面ともに指オサエの凹凸が残るが、338～340は内面は丁寧に仕上げている。347～351は口縁部を丁寧に横ナデし、外反させ、端部がわずかに上方につまみ出されている。これは戦国期の京都系土師器皿と共通する形状である。341と344は2地点、345と346は4地点から、他はすべて7地点からの出土である。

352～356は土師器の鍋釜である。354～356は7地点からの出土である。354、355は内耳鍋である。355は354よりも口縁が内傾しており、354が内耳鍋A類、355はB類である。A類は15世紀末、B類は16世紀前半に比定される。356は茶釜型の羽釜である。鉤が比較的長く、胴部下半はケズリが施されており、15世紀末から16世紀前葉に比定される。

357～367は古瀬戸である。364は高台内に卸目が造られている底卸目皿である。高台も高く、13世紀、古瀬戸前期の製品と思われる。357～361の碗皿類は古瀬戸後期の製品である。

368は蓮弁文の龍泉窯系の青磁碗である。1地点からの出土である。今回の調査では輸入陶磁器は破片数で18点出土し、青白磁1点、白磁3点、他は青磁であった。



第50図 包含層・その他の遺構出土の土器・陶磁器（山茶碗・常滑焼）

## 第5節 瓦・土製品・石製品

### 1. 瓦 (図版33・34・第51図)

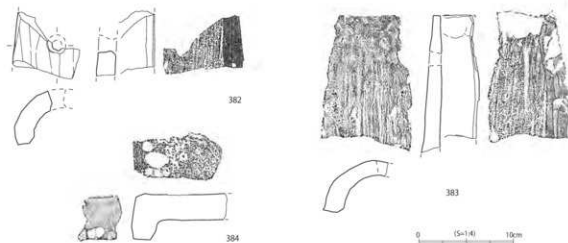
瓦は近世のものや小片で時期や形の判断のできないものを除き、77点を抽出した。そのうち70点が2地点、さらに2120SD出土が70点中48点であった。1地点は3点のみ、3地点と4地点は各2点であった。本遺跡の瓦については、遺跡北東部からの出土が多いとの指摘があった。今回は1地点と2地点が北東部にあたり、2地点から多くの瓦が出土した。

77点中、軒瓦は軒丸瓦が5点、軒平瓦が4点で、すべて2120SDからの出土である。軒丸瓦はすべてが巴文であった。軒平瓦では熱田神宮との関係を示す杏葉唐草文軒平瓦が1点出土した。

瓦について特記すべきことは、軒瓦を除けば、ほとんどが丸瓦で、平瓦が極めて少ないことである。抽出した中で、丸瓦が63点に対し平瓦は5点と少なく、大きな破片のものは無かった。特に2120SDにおいて平瓦は1点に過ぎない。既往の調査でも同様の傾向はみられたとのことである。遺跡南東の丘陵地帯(加木屋地区)には12～13世紀前半の瓦陶兼業窯があり、その生産や流通に畑間遺跡が関わっていた可能性もある。丸瓦への偏重は何らかの生産・流通過程を反映した事象かもしれない。しかし、まとまって出土しているわけでもなく、丸瓦ばかりなのは、通常の瓦葺きの建築物でない、丸瓦を主に使用する特殊な建築物が存在したのか、もしくは、本来とは異なる用途に利用された結果ではないだろうか。

図版34と35は2120SDから出土した瓦である。369～372は巴文軒丸瓦である。369は径15.0cm、左まわりの三巴文で24個の珠文を配している。畑間遺跡の北東4kmほどに位置する社山古窯の軒丸瓦V類とされるものである。他の巴文も同じくV類と考えられる。373は杏葉唐草文軒平瓦、胎土は灰黄色を呈し、焼締まりが弱い。顎貼り付け技法で成形し、瓦当裏面の補強粘土が厚い。瓦当部上縁が面取りされている。369～373は社山古窯などで12世紀後半から13世紀初め頃に焼成された瓦である。杏葉唐草文軒平瓦の左右非対称な瓦当文様は非常に珍しく、特徴的である。周辺の社山古窯と論田古窯で出土しており、他には同じ大田町内の観福寺と熱田神宮寺での採集品が知られるのみである。畑間遺跡と熱田神宮の関係を示す重要な遺物である。本遺跡では12点目の出土となる。

374は無文の軒平瓦である。本来文様のある瓦当部に強い指ナデを施す。375は煙焼により黒色を呈する。瓦質土器の火舎などと類似する雷文が施されている。やや小ぶりであり、瓦ではない可能性



第51図 瓦 (1・2・4地点出土)

がある。374、375と同じものは既往調査でも出土している。

376～381は2120SD出土の丸瓦である。376は香葉唐草文軒平瓦と一緒に出土した(写真図版17-2)。379には吊るし紐痕がある。いずれの丸瓦も陶器質で焼成は良好であり、381を除き、自然釉が掛かっている。378は端部が広がる形状で通常の丸瓦ではない。

第51図の382と383は釘穴がある。384は374と同じく無文の軒平瓦とみているが、軒先以外に使用する瓦かもしれない。

## 2. 土製品・石製品(第52図)

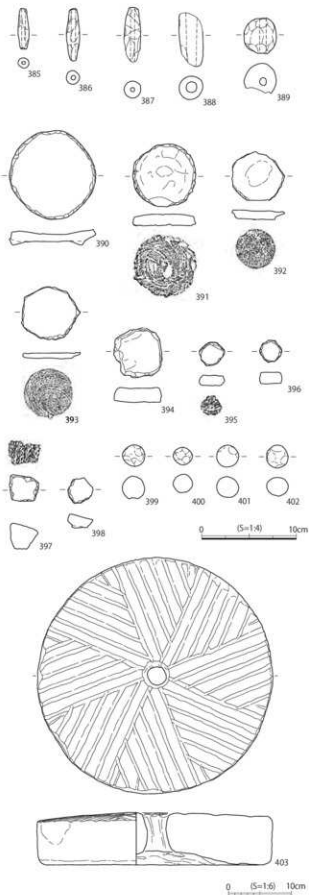
土製品としては、土鍾、加工円盤、陶丸がある。土鍾は22点出土した。1地点が6点、2地点が13点、7地点が3点である。土鍾は主に海で使用されたのか、川で利用されたのか分からないが、1地点と7地点に多いのは製塩土器と同じ傾向である。389のみが球形、385～388は通常の円錐型、すべて土師質である。

加工円盤は小型が3点、大型が19点の計22点出土した。15点は山茶碗を素材とし、他に常滑焼や土師器を素材としている。390～392、395は山茶碗の底部、393は土師器皿の底部、394は常滑焼甕の胴部、396は須恵器を素材としている。加工円盤は1地点からの3点以外、すべて2地点からの出土であった。

397と398は陶片を方形に加工したもので、加工さいころと呼んでいる。397は瓦片、398は山茶碗を素材としている。

陶丸は18点出土し、2地点が最も多く12点、1地点が5点、4地点から1点出土した。白い陶器質のもの(399、400)と褐色の焼締陶器質のもの(401、402)がある。

石臼(403)は2地点包含層、2120SDから方形区画溝近辺で出土した。花崗岩製で8分画6溝の下臼である。径37.4cm、厚みは8.3cmをはかる。重量は18.5kgあった。



第52図 土製品・石製品

## 第6節 金属製品（銭貨・独鈷杆・和鏡）

### 1. 金属製品の概要

金属製品としては、銭貨・独鈷杆・和鏡が出土した。独鈷杆と和鏡が通常の集落遺跡において発掘調査で出土することは珍しく貴重な資料である。銭貨はすべて2地点からの出土である。遺構や包含層からの個別出土銭は41枚であった。また、大量出土銭A内部の銭貨は取り出していないが、大量出土銭Bは内部の砂取りの際に肩部片が割れ、その際に外れた6枚と、内部に残っているが表面が観察できた5枚の計11枚の銭種が判明した。これらを除き、大量出土銭壺内の銭貨は未調査であるが、現状を観察したところ、緞銭とバラ銭がみられる（図版38）。大量出土銭A、Bともに上部は緞銭、下部はバラ銭で納められている可能性がある。壺内の状況等については、第4章で詳細に報告しており、参照されたい。ここでは銭種等を資料化できた52枚の銭貨について報告する。

全体として金属製品は非常に少なく、大部分は器種不明の金属片や釘などであった。なお、銭貨と独鈷杆・和鏡については、第4章と付論でも触れており参照されたい。

### 2. 銭貨（表9・図版36～38）

銭貨の銭種や法量等は表9の通りである。近世の文久永宝（1863年初鑄）が1枚含まれていたが、残りすべて中世の銭貨である（註27）。8種計20枚については金属組成の成分分析を行なった。これについては、付論1を参照されたい。中世の個別出土銭は2地点東区の2115SDなどの区画溝と2120SD周辺の限られた範囲から出土した。ただし、大量出土銭A・Bともに内部の銭貨が散在した様子はなく、これらの銭貨は大量出土銭前後の時期に人々が使用していた銭貨と考えられる。

銭種別では最も多いのは永楽通宝である。大量出土銭B内の銭貨においても永楽通宝が11枚中4枚と最も多く、最新銭である。よって、大量出土銭の帰属時期は15世紀半ば以後と考えられる。

永楽通宝に続いて多い銭種は、元豊通宝や皇宋通宝などの全国規模の銭種出土数順位（註28）における上位の銭貨が顔を揃えており、一般的な銭種構成である（表8）。唯一出土例が少ないのは948年初鑄の漢通元宝で、これは五代の後漢発行の銭貨である。最古の銭種は621年初鑄の開元通宝であるが、背面に京の字が記されているものは845年（会昌5年）に補鑄された通称「会昌開元」と呼ばれるものである。中世渡来銭の最新銭は1433年初鑄の宣徳通宝、2120SD上層から出土している。

畑間遺跡における銭貨の出土量はさほど多くはない。既往調査においては、計46枚の銭貨（近世除く）が出土している。畑間遺跡中央から南部を主とした平成11～19年度調査においては30枚の銭貨が出土しているが、この中には永楽通宝は1枚も含まれていない。中世のものとしては1174年初鑄の淳熙元宝が最も新しく、遺跡北部に位置する2地点との相違を示している。また平成20～27年度までの調査では16枚出土している。この中に永楽通宝は1枚のみである。遺跡北側の方が明銭など新しい銭貨が出土する傾向がある。

銭種	枚数	王朝	初鑄年	順位※
永楽通宝	12	明	1408年	6位
元豊通宝	7	北宋	1078年	2位
開元通宝	5	唐	621年	5位
皇宋通宝	4	北宋	1039年	1位
熙寧元宝	4	北宋	1068年	3位
元祐通宝	4	北宋	1086年	4位
聖宋元宝	3	北宋	1101年	10位
祥符元宝	2	北宋	1008年	12位
天聖元宝	2	北宋	1023年	7位
漢通元宝	1	後漢	948年	—
景德元宝	1	北宋	1004年	—
至和元宝	1	北宋	1054年	—
嘉祐通宝	1	北宋	1056年	15位
天禧通宝	1	北宋	1071年	14位
宣徳通宝	1	明	1433年	36位

※全国の大規模における出土数の順位  
（註28文献より）

表8 銭貨種別出土数

	銭種	王朝	初鋳年	字体	重量(g)	径(cm)	内径(cm)	厚み(cm)	遺構
1	開元通宝	唐	621年	真書	2.6	2.419	1.978	0.109	2115SD
2	開元通宝	唐	621年	真書	3.2	2.395	2.115	0.150	2205SD
3	開元通宝	唐	621年	真書	2.8	2.431	2.085	0.132	2150SX
4	開元通宝	唐	621年	真書	4.1	2.401	1.802	0.169	2150SX
5	開元通宝	唐	621年	真書	2.8	2.467	1.966	0.125	2150SX
6	漢通元宝	後漢	948年	真書	3.2	2.51	1.963	0.153	Ⅱ、Ⅲ層
7	景德元宝	北宋	1004年	真書	—	—	—	—	大量銭B
8	祥符元宝	北宋	1008年	真書	4.0	2.508	1.95	0.161	Ⅱ、Ⅲ層
9	祥符元宝	北宋	1008年	真書	—	—	—	—	大量銭B
10	天聖元宝	北宋	1023年	真書	3.7	2.522	2.082	0.156	大量銭B
11	天聖元宝	北宋	1023年	篆書	2.9	2.460	2.131	0.121	2201SD
12	皇宋通宝	北宋	1039年	真書	3.2	2.428	2.044	0.109	2115SD
13	皇宋通宝	北宋	1039年	真書	3.0	2.249	1.891	0.122	2120SD
14	皇宋通宝	北宋	1039年	真書	3.6	2.451	1.964	0.169	Ⅱ、Ⅲ層
15	皇宋通宝	北宋	1039年	真書	3.1	2.456	1.97	0.135	Ⅱ、Ⅲ層
16	至和元宝	北宋	1054年	篆書	3.9	2.425	1.933	0.183	2227SK
17	嘉祐通宝	北宋	1056年	真書	2.7	2.361	1.972	0.121	大量銭B
18	熙寧元宝	北宋	1068年	真書	3.6	2.435	1.901	0.149	2115SD
19	熙寧元宝	北宋	1068年	真書	2.9	2.358	1.939	0.142	Ⅱ、Ⅲ層
20	熙寧元宝	北宋	1068年	篆書	2.6	2.465	2.09	0.091	2115SD
21	熙寧元宝	北宋	1068年	篆書	4.4	2.401	2.027	0.131	2115SD
22	天禧通宝	北宋	1071年	真書	5.3	2.551	2.002	0.143	2115SD
23	元豐通宝	北宋	1078年	真書	3.7	2.630	2.097	0.125	2115SD
24	元豐通宝	北宋	1078年	行書	3.4	2.492	1.877	0.136	大量銭B
25	元豐通宝	北宋	1078年	行書	3.9	2.481	1.933	0.168	2227SK
26	元豐通宝	北宋	1078年	行書	3.0	2.514	1.921	0.155	Ⅱ、Ⅲ層
27	元豐通宝	北宋	1078年	篆書	4.1	2.413	1.921	0.142	大量銭B
28	元豐通宝	北宋	1078年	篆書	3.7	2.478	1.887	0.131	2205SD
29	元豐通宝	北宋	1078年	篆書	3.7	2.476	2.008	0.146	2205SD
30	元祐通宝	北宋	1086年	行書	3.8	2.487	2.103	0.139	2205SD
31	元祐通宝	北宋	1086年	行書	3.1	2.383	1.935	0.144	2205SD
32	元祐通宝	北宋	1086年	篆書	3.7	2.451	1.956	0.134	2150SX
33	元祐通宝	北宋	1086年	篆書	3.3	2.507	2.033	0.155	Ⅱ、Ⅲ層
34	聖宋元宝	北宋	1101年	真書	3.2	2.492	1.801	0.135	2205SD
35	聖宋元宝	北宋	1101年	篆書	3.3	2.472	1.888	0.122	2120SD
36	聖宋元宝	北宋	1101年	篆書	3.5	2.475	2.047	0.156	大量銭B
37	永樂通宝	明	1408年	真書	2.8	2.474	2.132	0.137	2120SD
38	永樂通宝	明	1408年	真書	4.8	2.481	2.096	0.170	2115SD
39	永樂通宝	明	1408年	真書	3.7	2.532	2.149	0.121	2115SD
40	永樂通宝	明	1408年	真書	3.0	2.487	2.123	0.131	2205SD
41	永樂通宝	明	1408年	真書	3.5	2.554	2.106	0.134	2205SD
42	永樂通宝	明	1408年	真書	3.4	2.506	2.098	0.139	2205SD
43	永樂通宝	明	1408年	真書	3.8	2.477	2.089	0.156	2205SD
44	永樂通宝	明	1408年	真書	3.3	2.514	2.06	0.146	Ⅱ、Ⅲ層
45	永樂通宝	明	1408年	真書	3.7	2.487	2.092	0.143	大量銭B
46	永樂通宝	明	1408年	真書	—	—	—	—	大量銭B
47	永樂通宝	明	1408年	真書	—	—	—	—	大量銭B
48	永樂通宝	明	1408年	真書	—	—	—	—	大量銭B
49	宣德通宝	明	1433年	真書	3.7	2.551	2.092	0.146	2120SD
50	不明	—	—	—	1.5	2.493	1.926	0.109	2120SD
51	不明	—	—	—	3.0	2.485	1.82	0.145	Ⅰ、Ⅱ層
52	文久永宝	江戸	1863年	—	4.1	2.714	2.167	0.152	Ⅱ層

4=孔部破損 背京(会昌開元) 5=穿孔2つあり 背上月 50=欠損(1/2) 咸平もしくは治平元宝か

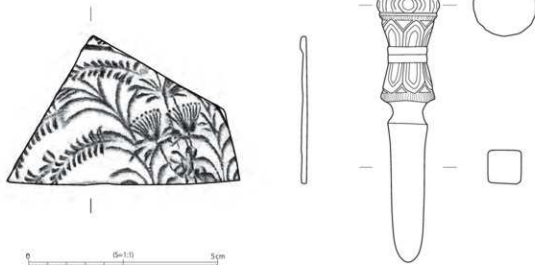
表9 出土銭貨一覧

### 3. 独鈷杵・和鏡 (第53図)

独鈷杵は密教法具の一つであり、その形の由来はインド神話の武器という。独鈷杵は金剛杵という法具の基本形であり、先端の鈷が3つのものは三鈷杵、5つのものは五鈷杵となる。独鈷杵は大量出土銭Aと同じく方形区画溝群(2115SDや2205SD)埋没後に形成された遺構=2156SKから出土した。その位置は大量出土銭Bの2mほど南であった。銅製で全長13.7cm、鈷の長さが4.25cm、把部が5.2cm、把部(鬼目)の厚み1.6cm、重さ103.5gである。

把部は中央に鬼目が4つ、その上下に6葉の蓮弁帯がある。蓮弁帯それぞれ2条の紐帯で締められている。蓮弁帯と鈷部、鬼目帯との接合部には蕨を表すという細かい線刻が多数ある。独鈷杵は平安時代などの古いものほど、鈷部が尖り、把部に対して長い傾向がある(註29)。本事例は鈷部が把部に比べ短く、その比率は0.82である。また、鈷部の尖りも弱いことから14世紀前半の製品と考えられる。なお、隣接する知多市の法海寺に鎌倉時代後葉の製品と評価されている独鈷杵が伝世しており、その法量はほぼ一致する(註30)。ただし、法海寺のものは蓮弁が8葉で、文様も本事例よりも全体にシャープであり、鈷部の尖りもやや鋭い。法海寺の独鈷杵はわずかに先行する時期の製品であるが、同じ工房で造られた可能性が考えられる。

和鏡片は2地点東側の2152SXから出土した。破片資料であり、全様は分からないが、わずかに界隈と思われる凸部が残っており、そこから径は15~18cm程度と推定される。重さは22.3gである。文様は秋草文、12~13世紀の製品と考えられている。意図的に破砕したのかは不明だが、割れ口が滑らかになっており、磨いている可能性がある。なお、すぐ北に位置する弥勒寺遺跡でも、文様は異なるが和鏡片が出土している。



第53図 独鈷杵・和鏡



## 第7節 自然遺物（貝・骨類）

### 1. 自然遺物の概要

中間遺跡では貝類は非常に多く検出される。ただし、包含層や近世遺構からのものも多く、今回は遺構のものを主に一部を採取し、6つの遺構の貝類を分析・同定した。なお、貝類は任意で採取したサンプルの分析であり、全量・定量分析ではない。骨類はコンテナ1箱分が出土し、全点を分析・同定した。なお、これら自然遺物の分析・同定は株式会社パレオラボに依頼した。本節の内容の多くは株式会社パレオラボに負うものである。

### 2. 貝類（表10・写真34）

貝類は2地点の2115SD（方形区画溝）、2120SD、貝殻廃棄遺構群の2153SX、2164SP、2195SKと7地点の7001SXから出土したものについて報告する。2地点の遺構は中世（13～15世紀）の遺構であるが、7001SXは近世（17世紀）の遺構である。

貝類の種類と点数は表10の通りである。点数が多いのは小さい塔型巻貝のウミニナ、イボウミニナなどであるが、これらは小さい上に2164SPから集中的に出土したため数が多くなっている。全体としてはハマグリ、シオフキガイが多く、既往調査成果の傾向と一致する。

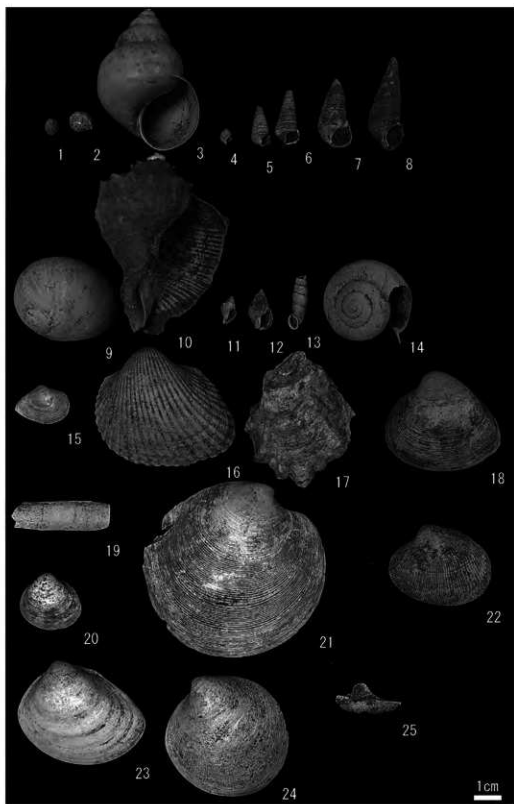
中世では、内湾の砂泥底に群生するウミニナやイボウミニナが多く採集された。同じく内湾の砂泥底に生息するカワアイガイ、ヘナタリガイ、ハマグリ、シオフキガイ、あるいは内湾の砂礫底に生息するアラムシロガイなども比較的多く見られ、貝類採集は主に遺跡周辺の内湾で行われたと考えられる。近世遺構の7001SXでは、内湾の砂泥底に生息するハマグリ、シオフキガイ、ウミニナ、イボウミニナ、アサリや、岩礁や砂礫底のカキ礁に生息する貝が出土している。中世に続いて、貝類採集は主に内湾で行われたと考えられるが、対象の変化も認められる。

### 3. 骨類（表11）

出土した骨類は表11の通りである。ウマやイヌ、ニホンイシガメなどに加え、人骨も出土した。3点の人骨が1地点南西部のトレンチで出土しているが、周辺に墓のような遺構はなく、近世の貝殻廃棄遺構（1022SX）に帰属すると思われる。また2180SDからも人骨（頭蓋骨片）が出土している。ウマの骨も多く、7001SX出土の中節骨には炎症によると思われる病変があった。ニホンイシガメの骨も各地点で出土している。ニホンジカやイノシシは狩猟によるものであろうが、ウマとイヌは飼育されていたと考えられる。本遺跡では平成24年度7地点において14～15世紀に比定されているウマとイヌの墓が検出されている。

	2115SD	2120SD	2153SX	2164SP	2195SK	7001SX
カサガイ目	0	0	0	24	0	0
イボキサゴ	0	0	0	11	0	1
マルタニシ	0	0	0	0	0	16
カワサンショウガイ	0	0	0	16	0	0
カワアイガイ	0	0	9	474	14	7
ヘナタリガイ	1	0	6	87	2	6
ウミニナ	16	9	52	4230	153	31
イボウミニナ	7	3	20	2491	43	77
ツメタガイ	0	0	0	0	0	1
アケニシ	0	9	0	1	0	7
アケガイ目	0	0	0	85	0	0
アラムシロガイ	2	1	5	554	14	0
キセルガイ目	0	0	0	0	0	6
マイマイ類	0	0	0	0	0	1
不明巻貝	0	0	0	74	12	11
ハナエガイ	左	0	0	1	0	0
	右	0	0	0	0	0
サルボウガイ	左	0	0	0	0	15
	右	0	0	0	0	1
マカネ	左	0	0	31	4	13
	右	0	1	18	3	2
シオフキガイ	左	23	64	178	2	341
	右	32	62	174	2	330
マダガイ類 (破片)	左右不明	1	0	10	0	135
シジミ類	左	0	4	0	2	1
	右	0	3	0	2	0
カガミガイ	左	0	0	0	0	1
	右	0	0	1	0	4
アサリ	左	5	2	4	0	5
	右	6	2	4	0	2
ハマグリ	左	97	54	330	3	221
	右	92	55	308	0	233
オキシジミ	左	0	0	0	0	1
	右	0	0	0	0	0
オオノガイ	左	0	0	1	0	0
	右	0	0	0	0	2
不明二枚貝	左右	0	0	0	0	3
フジツネ類 (破片)		0	0	0	1	0

表10 出土貝類



1. カサガイ目 2. イボキサゴ 3. マルタニシ 4. カワザンショウガイ 5. カワアイガイ 6. ヘナタリガイ 7. ウミニナ  
 8. イボウミニナ 9. ツメタガイ 10. アカニシ 11. アクキガイ科 12. アラムシロガイ 13. キセルガイ科 14. マイマイ類  
 15. ハナエガイ 16. サルボウガイ 17. マガキ 18. シオフキガイ 19. マテガイ科 20. シジミ属  
 21. カガミガイ 22. アサリ 23. ハマグリ 24. オキシジミ 25. オオノガイ

写真 34 出土貝類

地点	グリッド	遺構	分類群	部位	左右	部分・状態	数量	備考	
1	8E16k	1022SK	ニホンジカ	上腕骨	右	遠位端～骨幹	1		
	8E17k	1041SK	哺乳綱?	不明	不明	破片	1		
	8E9m	1050SD	ウシ?ウマ?	寛骨	不明	破片	8		
	8E9m		哺乳綱	不明	不明	破片	1		
	8E11l	1060SK	ニホンイシガメ?	背甲・腹甲	一	破片	22	一部焼	
	8E11l	1066SP	ニホンイシガメ?	甲羅	一	破片	3		
	8E10m	1114SP	哺乳綱	四肢骨	不明	骨幹破片	1		
	8E16j,17j	トレンチ		ヒト	上腕骨	右	ほぼ充存	1	
				ヒト	尺骨	右	近位端～骨幹	1	
				ヒト	四肢骨	不明	骨幹破片	7	
2	9E12j	2116SK	イヌ	脛骨	右	近位端	1		
	9E12k	2119SP	カメ目?	甲羅?	一	破片	1		
	9E13l	2120SD	ニホンイシガメ?	腹甲	一	破片	3	焼	
	9E13l		ニホンイシガメ?	腹甲	一	破片	2		
	9E13k		ウマ	上顎臼歯	左	破片	1		
	9E13k		哺乳綱	四肢骨	不明	骨幹	1		
	9E13k		哺乳綱	不明	不明	破片	1		
	9E13l		ウマ	上顎第2前臼歯	左	ほぼ充存	1	歯冠高16.1mm	
	9E13k,13l		ウマ	上顎第3/4前臼歯	左	ほぼ充存	1	歯冠高43.0mm	
	9E13l		ウマ	上顎第3/4前臼歯	右	ほぼ充存	1	歯冠高38.2mm	
	9E13k		ウマ	大腿骨	左	遠位端～骨幹	1	破片化	
	9E13k		ウマ	大腿骨	右	骨幹破片	1		
	9E13k,13l		ウシ?ウマ?	四肢骨	不明	骨幹破片	5		
	9E13k		哺乳綱	四肢骨	不明	骨幹	1		
	9E14l		2135SD	イヌ?	上腕骨	右	骨幹	1	焼
	9E13l,14l			ウマ	上顎臼歯	左	1/4欠	1	II・III層
	9E12g	2154SD	ウマ	下顎臼歯	右	破片	1		
	9E12g	2180SD	ニホンイシガメ?	腹甲	一	破片	17		
			ヒト	頭蓋骨	不明	破片	1		
	9E11f	2195SK	哺乳綱	不明	不明	破片	1		
	9E9a,9b	II・III層	イノシシ?	踵骨	左	ほぼ充存	1		
	9E14m,15h	II・III層	ウマ	上顎臼歯	不明	破片	1		
9E12j	II・III層	イヌ?	上腕骨	左	骨幹	1			
9E12i	II・III層	哺乳綱	不明	不明	破片	1	関節面		
9E11f,12f	II・III層	哺乳綱	不明	不明	破片	1			
7	8D19b	7001SX	ニホンジカ	中足骨	左	骨幹	1		
	8D19b	7001.7005SX	ウマ	上腕骨	左	近位端	1		
			ウマ	橈骨	左	遠位端～骨幹	1	破片化	
			ウマ	手根骨	左	充存	3		
			ウマ	第3中手骨	左	近位端～骨幹	1		
			ウマ	第4中手骨	左	充存	1		
			ウマ	基節骨(前肢)	左	充存	1		
			ウマ	中趾骨(前肢)	左	充存	1	病変	
	8D19b	7005SX	スズキク	主髌蓋骨	右	ほぼ充存	1		
	8D20c	II・III層	ニホンイシガメ?	背甲	一	破片	1		
8D18a	II・III層	哺乳綱	四肢骨	不明	骨幹破片	1			
		ヒト?	橈骨	右	骨幹	1			
		ウシ	中足骨	左	骨幹	1			
8D20b	II・III層	ウマ	上腕骨	左	遠位端～骨幹	1			

表11 出土骨類

# 第4章 考察

## 第1節 如間遺跡大量出土銭の検討

### 1. はじめに

如間遺跡における中世大量出土銭（大量出土銭A = 2140SX = 古瀬戸三耳壺と大量出土銭B = 2190SX = 常滑壺）は愛知県下で13例目（註31）、発掘調査における発見としては初事例であった。もちろん、東海市においても初めての発見である。個人的なことであるが、私が鳥取県の遺跡調査に従事していた2015年、すぐ近くの鳥取市下坂本清合遺跡にて備前焼の四耳壺に入れられた大量出土銭が発見（註32）されたとき驚いたが、翌年自らも遭遇するとは思ってもみなかった。下坂本清合遺跡の大量出土銭も発掘調査における発見としては鳥取県初事例とのことである。このように発掘調査において発見された大量出土銭は非常に貴重な資料と言えよう。

本節では、まず大量出土銭壺内部の観察記録について報告する。次に銭種と年代、出土状況などを他事例や先行研究を参考に考察する。そして、如間遺跡および大量出土銭研究史の両面において本事例の性格や意義について述べておきたい。

ここで重視したことは、「大量銭出土遺構」という視点である。大量出土銭は不時発見が多いこと、古銭学の伝統などもあって遺物たる銭貨の分析に主眼が置かれていた。内部の銭貨が未整理段階ということもあるが、今回は発掘調査時の発見であり、大量銭出土遺構としての検討を主としたい。なお、今後の保存・活用や内部銭貨の調査等については、東海市教育委員会において検討中である。よって本論は調査時の所見を主とした現段階の一考察である点を断っておく。

### 2. 壺内部の観察と記録

2つの大量出土銭はともに埋められた状態を保持していた。大量銭Aは粘土板を蓋としていた可能性（付論1参照）があり、Bは鉢の破片で蓋がされていた。ともに内部の銭貨は錆がひどく、固着している。固まっていたことで状態が維持され、調査時の取上げや状態の観察は比較的容易であった。

内部の状況は口部（壺の頸部）からわずかに観察できるのみであった。しかし、大量銭Bの常滑壺は内部の砂を除去する作業時に肩部の破片が外れ、内部をある程度観察することができた。

内部の清掃後に壺内の状況を把握するために名古屋市工業研究所にてCTスキャンによりX線撮影を行なった（写真35～38）（註33）。管電圧210KVで撮影したものの、重量のある金属の塊であるためX線が透過せず全体が黒く映り、銭貨の状況について詳細な分析は不可であった。しかし、壺内に有機物などで底上げした様子もなく、隙間なく銭貨が詰められていることは把握できた。

さらに通常の図化記録（図版38、第55～56図）に加えレーザーによる3次元計測を行ない、肉眼では見えにくい部分も記録化した（第54図）。なお、3次元計測によって容量も計ることができた。その結果、Aが約4.8ℓ、Bが約6.0ℓであった。また、そのうち銭貨の部分はそれぞれ、3.7ℓと5.2ℓであり、容量に対してAは約77%、Bは約86%銭貨を詰めている（第58図）。容器の容量と銭貨の枚数については、1ℓあたり平均的には750枚程度との実例から導かれた数値（註34）と壺壺の場合は1ℓあたり850枚入るという実験報告（註35）がある。それぞれを今回の数値に当てはめると、前者ではAは3,600枚、Bは4,500枚、後者ではAは3,145枚、Bは4,420枚となる。

重量はAが15.3kg、Bが20.5kgである。重さに関しては、1連が332g程度との報告（註36）がある。本事例は壺内に砂もあり、あまり参考にできないが、壺をA = 5kg、B = 6kgとして（破片



写真 35 大量銭A壺内上部C T撮影



写真 37 大量銭B壺内上部C T撮影



写真 36 大量銭A壺内下部C T撮影



写真 38 大量銭B壺内下部C T撮影

の重さなどから推定) 計算すると、Aは31連、Bは44連となり、容量からの予測と近い数値となる。现阶段ではAが3,200枚、Bは4,500枚と推定しておきたい。

先に述べたようにA、Bともに口部からは網銭で納められている銭貨が確認できる。しかしながら、下部はいわゆるバラ銭で詰められている可能性がある。Bは10連の網銭が、壺上部(肩部あたり)まで観察できるのだが、その下は銭貨の状態が異なり、観察できる範囲では、数枚以上の銭貨が固着して連をなした状態のものが見られない。しかし、下部の銭貨にも孔部に紐と考えられる有機物が付着しているものもある。本事例と同じく壺に納められていた山口県防府市下右田遺跡の大量出土銭は網銭を入れて後に紐を抜いたと報告されており、連結している銭貨と散らばっている銭貨が混在していたとのことである(註37)。銭貨が散在したような状況でありながら、孔部に紐の痕跡が残るB壺内の様相は、元来は網銭であったものから紐を抜いた、もしくは切った可能性がある。この行為の意味は極めて重要と思われるが、この点は後述する。

Aは6連の網銭が確認できる。下部は観察できないが、壺の中心部、網銭の下に見える銭貨はバラ銭である(第55図)。なお、上部は網銭、下部はバラ銭という詰め方は新潟県中郷村の小重遺跡と長野県中野市の西条岩船遺跡の大量出土銭でみられる(註38)。上部は網銭、下部はバラ銭と異なるのは如何なる理由であろうか。見える上部だけきれいな網銭を入れたのだろうか。いずれにせよ、上部と下部で銭貨の詰め方が異なるとすれば興味深い。埋める以前から壺内に納めていた銭貨と埋める直前に詰めた網銭といった時間差を考えることも可能である。銭種の分析においてもこの点を考慮すれば、何か知見が得られるかもしれない。



写真 39 大量銭A 壺内部



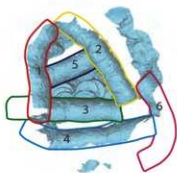
写真 40 大量銭B 壺内部



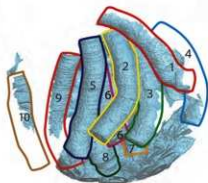
大量銭A 3次元計測画像(上から)



大量銭B 3次元計測画像(上から)



大量銭A 褶銭単位



大量銭B 褶銭単位

\*番号が上からの重なる順序を示す  
\*空白部分は計測レーザーを照射できなかった部分

0 5(=1/4) 10mm

第 54 図 壺内銭貨 3次元計測図



写真41 大量銭B出土銭



第55図 大量銭A壺内銭貨実測図

また網銭の詰め方がAとBで異なる(第54～56図)。Aは網銭1～6が廻るように位置している。少なくとも1～4は連なっているようにも観察される。一方、Bは個々の網銭が同一方向に並べて納められている。Aは壺の頸部が狭い(約7cm)ことから、紐で結ばれた複数の網銭をとぐるように壺内に納め、一方のBの方が頸部が少し広い(約9cm)ので、1連ずつ壺内に手を入れて納めたのではないだろうか。

1網の枚数は、錆がひどく正確に数えることができないが、網銭の長さは12.5cm程度であり、銭貨の厚みを0.13cmとすれば、96枚となる。いわゆる「省陌」がなされていたのであろう。A、Bともに銭貨の孔付近や中の砂に紐の一部と思われる有機物が残っていた。これらは分析の結果、イネ科の植物と判明した(付論2参照)。砂除去作業時に網銭から外れた6枚の銭貨(写真41)については錆を取り銭種同定を行なったが、その際に観察したところ、表裏は不規則であり、網を作る際に表面を合わすことはしていないようである(註39)。

いずれにせよ、壺内の状況に関しては、簡易の調査・観察を行なったのみである。大量出土銭B内部の銭貨もある程度の錆取りは行なったが、十分な保存処理を行っていない状況では崩れる危険があり、本年度は出土状況の維持を最優先とした。

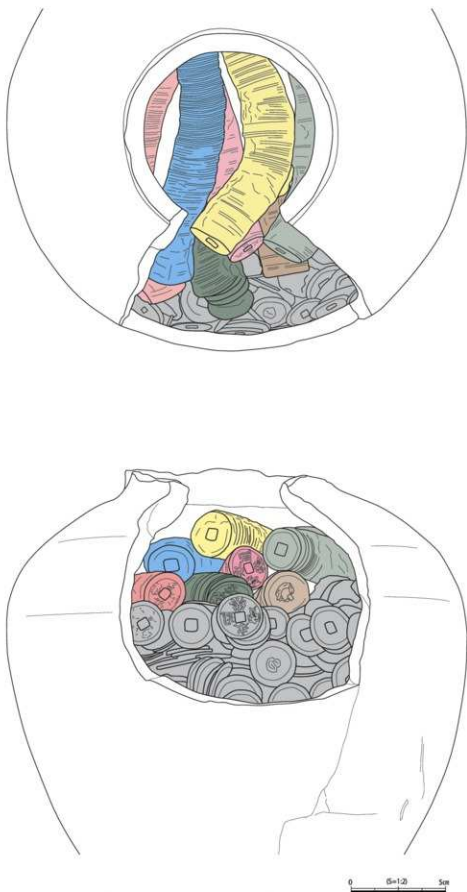
### 3. 銭種と年代

銭貨については、大量銭Bでは11枚の銭種が判明している。永楽通宝(1408年初鑄)が最新銭であり、4枚と最も多い。他は元豊通宝(1078年初鑄)など北宋銭である。大量出土銭の鈴木編年(表12)では4期=15世紀第2～3四半世紀となる(註40)。これは大量銭Bの常滑壺の年代や先行する方形区画溝の年代とも整合性がある。しかしながら、銭貨と年代に関して、今後の課題として2点挙げておきたいことがある。

一つの課題は大量銭Aの銭貨についてである。遺構としては15世紀後半以降であることは確実だが、Bと比べ、壺の製作年代が200年以上古いことから、内部の銭貨がBよりも古い可能性も考えられる。

	年代	主な最新銭(初鑄年)
1期	13世紀第4四半世紀～14世紀第1四半世紀	景定元宝(1260年)
2期	14世紀第2四半世紀～第3四半世紀	至大通宝(1310年)
3期	14世紀第4四半世紀～15世紀第1四半世紀	洪武通宝(1368年)
4期	15世紀第2四半世紀～第3四半世紀	永楽通宝(1408年)
5期	15世紀第4四半世紀	朝鮮通宝(1423年)
6期	16世紀第1四半世紀～第2四半世紀	宣徳通宝(1433年)
7期	16世紀第3四半世紀	世高通宝(1461年)
8期	16世紀第4四半世紀	弘治通宝(1503年)

表12 大量出土銭編年



第 56 図 大量銭 B 袋内銭貨実測図



もう一つは大量銭出土遺構の時期が16世紀まで下がる可能性である。今回の出土銭においては永楽通宝の比率が高い。大量出土銭の他事例や博多遺跡群における個別出土銭の分析では、永楽通宝が最も多くなる時期は16世紀とされる(註41)。永楽通宝は東国では基軸通貨のように使用されたとも言われ、その流通には伊勢商人が関わっていたとの説もある(註42)。伊勢湾に面する畑間遺跡において永楽通宝の比率が高いことは注目に値する。その年代も含めて今後の検討課題である。

また、近接する2120SDからは宣徳通宝が出土している。これらは大量銭に前後する時期、同じ集団・個人に使用・蓄財されていた銭貨であろう。よって大量銭にも宣徳通宝が含まれている可能性がある。宣徳通宝が最新銭となれば鈴木編年6期=16世紀前半となる。もっとも永楽通宝と宣徳通宝の初鑄年の差は25年であるのに対し、鈴木編年では宣徳通宝の有無で最大125年の差が生じることについては「永楽通宝を最新銭とする4期の実年代を15世紀の中頃としたうえで、前後の時期に実年代を割り当てたもの」と述べており(註43)、仮に1433年初鑄の宣徳通宝が最新銭であっても埋納銭の時期を16世紀まで下がると断定されるわけではない。鈴木編年5期以後に関しては、最新銭だけで時期を決定するのは困難である。調査所見として、大量銭出土遺構の帰属時期は1470~90年代と判断しており、16世紀まで下がらないと考えている。しかしながら、帰属時期のみではなく、永楽通宝の流通なども含め、銭貨の検討によって明らかにすべき課題もある。

#### 4. 出土状況の検討

大量出土銭Aは平面的には方形区画溝群の中、層位的にはその上に位置した。一方、大量出土銭Bは層位的に区画溝との関係を直接的には判断できない。現状では区画の内側に位置するように見えるが、後世の遺構や擾乱によって失われた溝が出土銭B直上にあつた可能性がある。しかも、区画溝の段階ごとの位置関係からその溝は2199SDと同じ最終段階の溝であつたと考えられる(第2章第17図参照)。大量出土銭AとBは容器に時期差はあるものの、層位と位置の関係から同時期と判断している。よって、大量銭とこの区画が有意の関係にある(埋めた人々が区画の存在を意識していた)蓋然性は高い。また溝群の最終段階にあたる2199SDの位置に埋められていたことから、この区画が廃絶してからさほど時期を経ずに埋められたと考えている。

溝からの大量銭出土と言えば、誰もが『一遍聖絵』の一場面(写真42)を思い起こすであろう。まさに、本事例はこの絵の通りの状況である。中世において溝に大量の銭貨を埋める行為、もしくはそこから見つかるということがある程度みられた事象であつたのだろうか。

発掘調査事例でも、同じく溝からの出土事例がある。山形県酒田市の梵天塚遺跡(註44)では明代の染付などが出土する16世紀頃の溝(SD160)の底から1757枚の銭貨が網銭の状態で出土した。8本の小刀状の鉄製品が共伴しており、有機物の容器や袋があつたと推測される。最新銭は1433年初鑄の宣徳通宝である。この溝は墓域の区画溝と考えられる。報告書によれば、銭貨周辺が窪んでいたが、銭貨の重量による可能性もあり、掘り込みがあつたのか分からないとのことである。墓地形成の早い段階での埋納という指摘(註45)があるが、その場合、溝が開放さ



写真42 『一遍聖絵』(清浄光寺蔵)

れた状況で底に置かれた、もしくは埋納後に溝が開削されたことになるが、いずれも考えにくい。溝埋没後、墓域としての役割を終えた段階（中断も含む）で埋納された可能性を考えたい。溝上面での掘り込みは観察されなかったことから、埋没途中の段階で埋められた可能性もあろう。

群馬県前橋市の大渡道場遺跡でも溝から大量銭が出土している（註46）。W-3溝の底部で6連の網銭が土坑状遺構から検出された。容器の痕跡はなく、有機物の袋に納められていたと推定されている。溝底部での検出であるが、埋土などの状況から銭貨の埋納は溝の埋没途中や埋没後の可能性があると思われる。報告書においては、W-3溝が墓を伴う屋敷地の溝であることから、地鎮行為や境界祭祀に伴う埋納銭の可能性も指摘されている。他に溝内（埋没中～後）からの大量銭出土事例は青森県浪岡町の浪岡城館跡（註47）などがある。

次に大量出土銭Bの出土状況について考察する。第2章で述べたようにBの常滑壺は傾いて出土しており、それは後に掘削された土坑(2157SKと2163SK)の影響と考えられている。そのように考えた場合、これらの土坑を掘削した人々は、常滑壺（少なくとも何か入れていたような壺）を視認したことは間違いなく、意図的にこれを掘り返さなかった可能性がある。これは当時の人々が、埋納された銭貨は掘り出しはけないものと認識していたことを示すのではないだろうか。

同じような事例が中世京都の七条町、平安京左京八条三坊七町で検出された大量出土銭においてみられる（註48）。大量出土銭は2基（P160とP234）並んで検出され、径40～50cm程度の曲げ物に網銭の状態で納められていた。P160は16,880枚、P234からは14,535枚が出土し、最新銭は至大通宝（1256年）であった。2基のうちP160は上部の銭貨が網の状態を損なっているのだが、それはP160の上で検出されている土坑（P42）掘削によるものと推定されている。P42からは11枚の銭貨が出土しており、これはP160に由来する。P42の年代が14世紀～15世紀とあまり明確ではないが、いずれにせよ、後に土坑が掘削され、その際に大量の銭貨を見つけたにもかかわらず、それを取り出さなかったことは明らかである。

ところで、大量銭Bの蓋に鉢の破片を使用していたのは、土坑掘削中に元来の蓋を破損したためではないだろうか。元の蓋がこの鉢なのか、破損した蓋の代わりに周囲にあった鉢片を蓋として使用したのかは分からないが。

2157SKを自ら掘削した時に、掘削途中に壺の姿が現れてしまい疑問を感じた。当初は「昔の人が壺を見つけたら取り出すので、土坑底部は壺まで達しない」と思い込んでおり、拡張前の壁面の観察では2157SKと2163SK底部を壺よりも上と判断していた（註49）。しかし、写真43を見れば分かるように2157SKの埋土（貝殻片を含む暗い細粒砂）が壺の上部が見える段階でも残っており（この段階で2190SXの掘り方は見えない）、壺上部が2157SK掘削時には姿を現していたことは間違いのない。蓋に関しては想像に過ぎたかもしれないが、当時の人々は壺の存在を認識した上で取り出さなかったことは間違いのない。



写真43 大量銭B検出状況1



写真44 大量銭B検出状況2

## 5. 錢貨収納容器としての壺

今回の大量出土銭はともに壺に納められていた。大量銭Aは古瀬戸三耳壺、Bは常滑焼壺である。前者は古瀬戸前期Ⅰ・Ⅱ期=13世紀前半、後者は常滑焼10型期の製品で15世紀後半にそれぞれ比定される。二つの壺の製作年代は非常に差があるが、埋められた年代は同時期=15世紀後半と考えられる。古瀬戸三耳壺の製作年代と埋納時期は250年ほどの時期幅があり、長い伝世を経た壺である。容器の年代と銭貨が埋められた時期が一致しないことは多くの事例があるものの、これほど時期差のあるものは少ない(註50)。また蔵骨器として使用された古瀬戸壺類では、平均的な伝世期間は四半世紀から半世紀という研究成果(註51)があり、やはり本事例の伝世期間は長いと言える。

大量出土銭の容器については、これまでのいくつかの研究・報告がある。個人的には、壺よりも甕が多く使用されている印象であったが、100例以上を集成した報告によれば、最も多いのは壺であり、集計された131例中37例が壺であった(註52)。ただし、5万枚以上の大量出土事例では壺を容器としたものは1事例もない。甕との容量差から考えて当然であるが、注目されやすい大量発見によって容器=甕の印象が強かったのだろう。銭貨の量と容器の関係性について、東海地方の事例から3,000枚以上ならば常滑甕、それ以下ならば瀬戸壺が主体的に選択されたという指摘(註53)があるが、むしろ主体的に容器を選んだ結果として銭貨量の差が生じたとも言えないだろうか。量が少なく、しかも再利用のための備蓄であれば、有機物の箱や袋で十分である。あえて三耳壺や四耳壺などの優品を容器に使用することに何らかの意図があったとも考えられる。大量出土銭容器における壺の使用率は高いが、埋納遺構に使用された古瀬戸の壺瓶類の大部分は蔵骨器として使用されており、蓄銭容器としての利用は数例に過ぎず集成資料の1%に満たない(註54)。

今回の壺はともに口縁〜頸部が失われており、特に大量銭Aの古瀬戸三耳壺は三耳を打ち欠いている。高台部にも小さい破損が複数みられ、打ち欠きしようとした痕跡かもしれない。このような打ち欠き行為は蔵骨器には多く見られるが、銭貨や他の遺物の埋納では完形のものが多いとのことである。また、頸部の欠損は壺よりも瓶子や水注に多くみられることから、口径の大きさと関係する可能性も指摘されている(註55)。しかし機能的な意味が無い三耳の欠損は、この壺の世俗との関係を絶とうとする意図を感じさせる行為(精抜きか精入れか?)である。本事例が祭祀的な意図をもって埋納された可能性を示す。

一方で、口径の大きさというのも大事な視点ではなかろうか。学問的ではないのだが、今回の調査時に非常に強く感じたことは、壺に銭貨は「入れにくく出しにくい」ということである。成人男性の平均的な手幅は8.2cm、これに対して壺Aの口部は約7cm、Bの口部は約9cmである。銭貨を取り出す際は壺を掘り出し削る、もしくは逆にすれば済むものの、備蓄して再利用を意図しているならば、「口が小さく出し入れしづらい容器を選択するのだろうか」という疑問は発見時から感じていた。

大量出土銭は不時発見例が多く、調査時の発見でも容器の上部まで残る良好な事例は少ない。よって、壺に銭貨は「入れにくく出しにくい」という単純な事実があまり意識されてこなかったのではないだろうか。例えば、山梨県の小和田館遺跡では古瀬戸後期の四耳壺が容器として使用されているが、上部が破損した状態で検出されている。小和田館遺跡では他に2つの地点から大量銭が出土しているが、これら大量銭の出土地点が居住域と墓域の境界と考えられることから、祭祀遺構の可能性が指摘されている(註56)。壺の法量は口径9.5cm、胴部最大径22.0cm、高さ27.6cm(図面からの推定)、口部の最小径は6.4cmとなる。

同じように調査時の発見で壺に入った大量出土銭として、先述の下右田遺跡の事例がある。備前焼の玉縁口緑壺で、口部の最小径は約5.4cmである。石の蓋がなされていたが、土坑周辺の特別な施設はなかったと報告されている。出土地点は屋敷地内の建物が無い一帯に埋められていた。先述のように内部の銭貨は緋銭で入れたのち、紐を抜いたとされている。壺内に手を入れて取り出すのは困難である。そもそも備蓄して再利用するのであれば、紐を抜いてしまう意味が分からない。大量銭Bも同じく緋銭の紐を抜いた(切った)可能性があり、壺を壊さなければ非常に取り出しにくい。下右田遺跡では銭貨を柱穴に埋めた建物が複数発見されている。大量出土銭も二度と取り出す意図がないように思われ、祭祀的な埋納銭の蓋然性が高い(註57)。

壺の使用=祭祀的な埋納銭と言うつもりはないが、少量の備蓄なので壺を使用するとは単純に考えられない。壺という容器を大量銭の性格を判断する上で一つの要素として考える必要性だけは指摘しておきたい。

## 6. 大量出土銭と独鈷杵

密教法具の独鈷杵が大量銭と極めて近い遺構から出土したことも本事例の性質を考える上で示唆に富む。独鈷杵が出土した2156SKは大量銭と同じく方形区画溝群埋没後の遺構である。独鈷杵は大量出土銭の共伴遺物ではないが、近接する位置、区画溝との切り合い関係からみて、大量銭と関係すると考えている。独鈷杵の年代については次節で検討しているが、14世紀前半に比定される。方形区画溝群が15世紀半ばであるので、2156SKもそれ以降の遺構である。古瀬戸三耳壺に比べると少し短いが、独鈷杵も150年以上、伝世・使用されていたのであろう。

大量銭と独鈷杵が共伴する事例は静岡県にある。掛川市の大竹遺跡では瀬戸産祖母懷茶壺に3,000枚ほどの銭貨が詰められ、付近から青磁碗や天目茶碗、花瓶、金剛盤、独鈷杵、三鈷杵、五鈷杵など多くの宝物や法具が出土した(註58)。明治34年に発見され、出土状況の詳細は不明であるが、祭祀遺構であろう。同44年にはすぐ近くから2,900枚の銭貨も新たに見つかり、容器などはなかったとのことである。銭貨の多くが散逸しているが、報告されている中では永楽通宝が最新銭であり、かつ最も多い。共伴する陶磁器などの遺物から遺構としての帰属時期は16世紀後半と判断されている。遺構の性格としては地鎮のための法具埋納遺構と推定されている。

本事例と比較すれば、大竹遺跡は共伴する遺物が非常に豊富である。大竹遺跡の独鈷杵は、鈷部が短く本事例より後出の製品である。本事例は独鈷杵1点のみ、しかも土坑の底部に廃棄されたかのような出土状況であり、大量銭との関係について断定できる材料はない。つまり、何らかの密教祭祀などが行われ、同時に埋められたと言えるような直接的な関係は見出せない。とは言え、このような稀有な遺物が偶然近接して出土することは考えにくい。大量銭と独鈷杵は、同じ個人・集団が保有していたものであろう。その場合、今回の大量銭を埋めた主体は、寺院などの宗教関係者と考えられる。ただし、寺院と大量銭の関係は、祠堂銭を用いた経済活動との結び付きを示すものとの解釈(註59)もあり、確実に祭祀・宗教的な意味をもつと言いつつ言い切れない。

また、少し離れた位置であるが、同じ2地点からは和鏡片も出土している。銭貨・独鈷杵(密教法具)・和鏡という組み合わせは、経塚でみられる(註60)。経塚では多くの場合、銭貨は少量で脇役であるが、本事例では大量の銭貨が主役のようである。残念ながら、これらの遺物が直接的に結び付くような出土状況が検出されたわけではないが、このような遺物が集まっていたことは、この空間が非常に特異な場であったことを示している。

## 7. 県内事例における如間出土銭

冒頭に述べたように、愛知県内ではこれまで12例の中世大量出土銭があるが、発掘調査に伴うものは今回の事例のみである。既往の12例は『愛知県史 資料編5』にまとめられており、これら先行研究を参考に本事例を加えて作成したのが表13と第57、58図である(註61)。これまでは本事例と類似の状況が見出される他事例を選択的に取上げたが、ここでは県内事例との比較およびその中で位置付けをみてゆく。

銭貨の時期区分では第1期が3例、第2期が2例、第3期が1例、第4期が3例、第6期が3例である。本事例は第4～6期の可能性があり、県内事例の半数が当該期にあたる。銭種の詳細な分析がなされたものは6例であるが、宣徳通宝を最新銭とする6期の3例は永楽通宝の比率が非常に高い。本事例との比較でこの点は示唆的である。地域的には尾張地方が4例、三河地方が7例、知多島嶼が1例となり、知多半島内では初事例となる。また、それぞれの出土地の地形的状況を平地(海拔50m以下)、丘陵地(同50～100m)、山地(同100m以上)に分けた。

県内事例に関して、資料作成過程で気付いた点が2点あり指摘しておきたい。一つは、丘陵地と山地出土例は第4期以降に集中していることである。これは銭貨の利用が平地部において先行していたことを示すのかもしれない。もっとも如間遺跡は平地だが第4期以降である。もう一つは近距離に位置する2つの大量出土銭が3組もあることである。豊川市の篠東AとBは同じ市内、愛西市の諸桑と津島市の百町は同じ日光川流域で南北3kmほど、豊田市の大平と蔵平は尾根を挟み東西2kmほどの距離である。わずか12例のうち半数が近距離で組をなすことは注目に値する(註62)。このように狭い地域内で集中して大量出土銭が見つかることは他地域において既に指摘されている。これは備蓄された銭が偶然残された結果とは考えにくく、埋納銭論の根拠の一つとされている(註63)。なお、本事例や諸桑出土銭のような同一地点の複数事例は、確実に同じ個人・集団によるものであり、上記の3組と少し意味合いが異なる。

次に容器についてであるが、13例中、10例が陶器の壺・甕を使用している(複数例があるので実質は13点)。先に挙げた全国集成では121例中、陶器が76例であるので、窯業地ゆえに陶器の比率が高いと言えるかもしれない。

4事例で容器の壺・甕が図示されており製作年代が確定される。

正法寺出土銭 銭貨2期 = 14世紀第2～3四半世紀・常滑壺7型式 = 14世紀前半  
社口田出土銭 銭貨4期 = 15世紀第2～3四半世紀・常滑壺9型式 = 15世紀前半  
蔵平出土銭 銭貨6期 = 16世紀第1～2四半世紀・美濃・瀬戸鉄軸甕 = 15世紀後半  
日影出土銭 銭貨6期 = 16世紀第1～2四半世紀・常滑甕9型式 = 15世紀前半

前2者は容器の製作時期と銭貨の年代が近く、後2者は時期差がある。しかし、これは先にも述べた大量出土銭6期の年代観の問題があるので、銭貨と容器の年代が近づく可能性がある。本事例の場合、Bの常滑壺の年代は近いが、Aの古瀬戸三耳壺は200年以上の時期差があり、県内事例と比較しても非常に伝世期間の長い容器を使用していることが分かる。

第58図は容器の大きさの比較として、社口田出土銭と正法寺出土銭の常滑焼甕と本事例の三次元計測図を並べた。本事例の容量はAが4.8ℓ、Bが6.0ℓであるが、2例の大まかな容量は前者が53ℓ(26,284枚)と後者が13ℓ(6,805枚)である。先述の基準(1ℓあたり750枚)から言えば、この2例の銭貨枚数は容量に比して少ない。

	出土地	地形	最新銭 初繰年	時期	備考
1	中根出土銭 名古屋市瑞穂区中根町 (旧昭和区弥富町字西大門)	平地	寛定通宝 1208年	1期	約20貫出土。容器などは無し
2	篠東A出土銭 豊川市篠東町郷中 (旧小坂井町大字篠東)	平地	咸淳通宝 1265年	1期	容器は渥美・湖西産の甕、蓋に瓦
3	篠東B出土銭 豊川市篠東町郷中 (旧小坂井町大字篠東)	平地	咸淳通宝 1265年	1期	容器は古瀬戸三耳甕
4	諸桑出土銭 愛西市諸桑町中江 (旧佐織村大字諸桑)	平地	至大通宝 1310年	2期	常滑焼の甕2点と古瀬戸壺の計3点 銭貨は85貫出土したとされる
5	正法寺出土銭 南知多町篠島字神戸	平地	至大通宝 1310年	2期	容器は常滑焼の甕 銭貨は6,805枚
6	百町出土銭 津島市百町光善地 (旧神守村大字百町)	平地	洪武通宝 1368年	3期	容器は瀬戸美濃焼の甕 銭貨は約16貫出土したとされる
7	西萩原出土銭 一宮市西萩原字若宮前	平地	永楽通宝 1403年	4期	常滑焼の甕の破片とともに出土 銭貨は1,103枚現存
8	大平出土銭 豊田市大平町字上大屋敷 (旧小原村大字大平)	山地	永楽通宝 1403年	4期	約20貫出土。容器などは無し
9	社口田出土銭 岡崎市舞木町字社口田	丘陵地	咸元通宝 1403年	4期	容器は常滑焼の甕 銭貨は26284枚
10	乙ヶ林出土銭 豊田市乙ヶ林町字信田 (旧小原村大字乙ヶ林)	山地	宣徳通宝 1433年	6期	礎石のような石とともに鉄状のもの に包まれ約18貫出土したとされる
11	葦平出土銭 豊根村下黒川字葦平	山地	宣徳通宝 1433年	6期	容器は瀬戸美濃焼の甕 銭貨は8,776枚
12	日影出土銭 岡崎市米河内町字日影	丘陵地	宣徳通宝 1433年	6期	容器は常滑焼の甕 銭貨は2,471枚現存
13	畑間出土銭 東海市大田町畑間	平地	永楽通宝か 1403年		古瀬戸三耳壺と常滑焼壺の2点 銭貨は未調査

表 13 愛知県内大量出土銭一覧



第 57 図 愛知県内大量出土銭出土地点



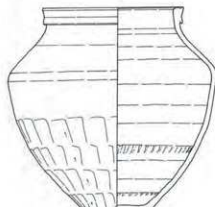
畑間出土銭A



畑間出土銭B



正室寺出土銭



社口田出土銭

(註 61 文献より)

0 5=1:10 20cm

第 58 図 大量銭容器壺甕実測図

## 8. 畑間遺跡における位置付け

第3章で述べたように畑間遺跡の既往調査においては、計46枚の銭貨(近世除く)が出土している。20,000㎡以上の調査で46枚に対し、大量出土銭の見つかった2地点(約570㎡)だけで40枚(近世除く)の個別出土銭がある。なお、これまでの調査では永楽通宝は1枚のみであり、この点も2地点の特徴の一つと言える。このように、畑間遺跡全体でみても、銭貨は2地点=方形区画溝群一帯で集中的に出土しており、そのような場所で2つの大量出土銭は見つかったのである。

経済的な価値=中世の銭貨と現代の貨幣価値との比較については、多くの研究成果があり、それらを参照されたいが、畑間遺跡における銭貨の価値を考える上で興味深い文書記録がある。畑間遺跡のある大田町(旧大里村)は中世熱田社領の大郷郷に比定されており、複数の文書に記録が残っていることは知られているが、この中で貢租銭納についての記載がある。文和3年(1354年)の『熱田社領目録案』には、25の社領(うち3社領は別納)の約329町の定田に対して、1,291貫文の年貢が定められていると記録されている。田畠による差異もあろうが、単純計算では大郷郷は定田が約20町で、約78貫文の年貢が課せられていたことになる。大量銭Aが3,200文、Bが4,500文と推定されることから、今回の大量出土銭は大郷郷が熱田社領に納める年貢の約1/10に相当する。文書記録と出土年代には1世紀の時間差があるが、おおまかな価値として押さえておきたい。

次に出土地点およびその状況についてである。2つの大量出土銭が出土した2地点周辺=遺跡北東部は、既往調査報告において宗教性の高い場所であると度々指摘されていた。その根拠の一つとして、瓦の出土がこの一帯に多いことが挙げられている。例えば香葉唐草文軒平瓦はこれまで12点出土しているが、うち8点が北東部一帯である。そして、この一帯の宗教性を示す祭祀遺構が2地点の北東100mほどに位置する平成20年度調査の3・4地点で検出されている。

この遺構は「隆珠」(人名か)「六親 七世父母 □□□」(孟蘭盆經の一部)などの文字が書かれた墨書土師器皿が埋納されており、先祖供養の祭祀とされる。注目すべきは、この墨書土師器皿埋納遺構が2140SX(大量出土銭A)と同じく方形区画を形成する溝(034SD)の埋土上に形成されていることである。さらに方形区画を形成する溝がわずかに位置を変えて何度も再開削されている状況、そして遺構の時期も15世紀後半に比定されており、空間・時間ともに類似する。

墨書土師器皿埋納遺構と今回の大量出土銭の検出状況や時期の類似性は偶然の一致とは考えにくい。両者に共通する性質があることや、先述の様々な要素(壺Aの打ち欠きや壺Bが掘り出されなかった可能性など)から考えて、今回の大量出土銭は祭祀性を伴ういわゆる埋納銭の蓋然性が極めて高い。畑間遺跡では既往調査の成果から15世紀以後に遺構・遺物が減少することが判明している。この時期、集落に大きな変化が起こったことは確かである。墨書土師器皿埋納遺構と大量出土銭が時間的にも空間的にも近接することは中世畑間遺跡を考える上で非常に重要な事象である。

また出土銭と関連する方形区画の性質も自ずと推定される。独結弁の存在から寺院の可能性もあるが、区画溝から瓦の出土はない。同じく溝内から大量出土銭が見つかった山形県梵天塚遺跡や群馬県大渡道場遺跡の事例から墓域も候補となろう。いずれにせよ、この区画が宗教的な場であった蓋然性は高い。そして、大量銭Bの上に掘られた2157SKが廃棄土坑と考えられることや16世紀の遺物が少ないことから、宗教的な場がその役目を終える時に大量の銭貨が埋納されたと考えている。梵天塚遺跡や大渡道場遺跡も同様の段階での埋納と考えたい。溝という面的な境界だけではなく、宗教的な場を世俗的な場へと変換させる時間の境界にも大量銭は位置していたのである。

## 9. 本事例の性質～備蓄か埋納か～

大量出土銭は、貨幣として流通していた銭貨を備蓄のため埋めたものとする研究者が多い。広義の備蓄銭も狭義では平時の備蓄銭と非常時の埋蔵銭に分けられる(註64)。これに対し、祭祀的な性質を想定した埋納銭との評価がある。ここまで述べてきたように、本事例は、埋納銭と呼ぶべき祭祀的性質の大量出土銭である蓋然性が高い。その根拠として以下を挙げる。

- 1 区画の廃棄に伴うと考えられるその配置
- 2 出土銭Bが2157SK・2163SK 掘削時に掘り返されなかったこと
- 3 周辺からの密教法具(独鈷杆)の出土
- 4 入れにくく出しにくい口の小さい壺の使用
- 5 壺の口頸部や三耳の打ち欠き

1に関しては、これまでの埋納銭論において、「境界の結界」に埋納されたという説、普請に伴う埋納といった説があり、これらと関連すると言えよう。本事例は区画溝埋没後＝区画の廃絶に伴うと考えているが、土地に対する祭祀という点では同じである。安易な境界祭祀論は慎みたいが、平成20年度調査の墨書土師器皿埋納遺構との検出状況の類似性を本事例を祭祀性のある遺構と考える根拠として挙げておきたい。

2については、1との関連で述べておきたいことがある。先の『一遍聖絵』の評価である。この絵は大量出土銭が境界に埋められた事例として、その祭祀性を主張する際に提示されるが、この絵の人々は嬉々とした表情で掘り出している。『一遍聖絵』の人々と畑間遺跡の人々の違いは何ゆえだろうか。おそらくは埋納祭祀の記憶の有無であろう。2157SKと2163SKは廃棄土坑である。よって方形区画は大量銭埋納後は特別な場ではなくなったと考えられる。埋納位置の記憶はあいまいなため二度も掘削してしまったが、この埋納銭を掘り出すことで、この場所を利用できなくなるという意識や不吉なことが起きるといった感覚があっただろう。一方で、このような記憶や禁忌の意識が無い場合は取り出されてしまうのだろう。なお、埋納銭を誤って掘ってしまうのは、地表に目印となるような構造物はなかったためと考えている。

3については、単に同じ遺跡から宗教的な遺物が出土すれば埋納銭とするのは早計であるが、面的にも層位的にも非常に近い遺構、同じ区画溝埋没後の遺構から出土していることを重視したい。また唯一の共伴事例であった大竹遺跡では多くの法具が出土しており、祭祀的な大量銭と考えられる。なお、和鏡片については少し離れた位置からの出土であり、直接的な関係があるのか、評価は難しい。しかし、銭貨・独鈷杆・和鏡という組み合わせが軽塚に多く見られることは示唆的である。

4は感覚的なものであり、5の頸部の打ち欠きは、それゆえに行なわれたのかもしれない。しかし、三耳の打ち欠きは機能的な意味はない。蔵骨器では多くの類例があるものの、管見の限り大量銭の容器では確認できなかった。そもそも銭貨を備蓄するなら大量に存在する常滑焼の甕を用いる方が便利である。また壺B内部のバラ銭が元来網銭であったものを紐を抜き出した(もしくは切った)とすれば、通常は網銭で使用するということからも、再利用する意図が無かったと推定される。

1～5の一つだけで埋納銭と判断するのは早計であろう。例えば、壺は蔵骨器として用意していたものを緊急時に埋蔵銭に利用したと考えることも可能であり、溝との関係性は大量銭の年代が16世紀まで下があれば弱くなる。しかしながら、複数の状況証拠から、調査所見として本事例を祭祀的な性質を伴う埋納銭と判断する。



## 10. 本事例の意義と課題

本事例が埋納銭である蓋然性が高いことは理解されるだろう。では、本事例のような祭祀性を示す状況証拠の無いものをすべて備蓄銭としてよいのだろうか。備蓄銭論は埋納銭論に対し個別的反論は示すものの、それ自体の体系的論理展開はない(註65)という。本事例においても、埋納銭である蓋然性を高めることはできても、備蓄銭の可能性を否定することはできない。例えば、先に述べたように、個別出土銭の出土が多い一帯、つまり普段から銭貨を使用していた場所に大量銭が存在していることから、単なる備蓄銭と考えることもできる。また、発見された大量出土銭の年代が遺構・遺物が激減する15世紀後半であることから、備蓄銭が何らかの緊急事態が発生したために残されてしまった、もしくはその際に隠したという解釈も成り立つだろう。

大量出土銭に備蓄銭もしくは埋蔵銭があったとは思いますが、祭祀性のある埋納銭を極めて少ない事例とする見解には同意できない。備蓄銭論者も認める事例として京都府福知山山城事例(註66)がある。しかし、これは大量銭出土遺構と言うよりは、純粋な地鎮遺構であろう。地鎮祭祀において大量銭も一つの祭具・宝物として使用されたに過ぎない。議論すべきは大量銭出土遺構の性質なのである。

銭貨＝貨幣というものが呪術的な力を持つという考えは人類学においても以前から提示されている(註67)。考古学的にも六道銭や地鎮遺構において銭貨が使用されていることから、その呪術的な力への信仰は古代以来明らかである。問題は大量銭の評価である。地鎮などの祭祀遺構では少量の銭貨が使用(埋納)されるため、大量であれば備蓄と考えられるようだが、大量であれば呪術的な力も大きいと考えても不自然ではない。

密教法具と共伴する静岡県大竹遺跡などを除けば、特殊な埋納状況を示す事例はほとんどない。祭祀的な状況は地表面に存在していた場合もあるかもしれないが、先の述べたようにその可能性は考えにくい。考古学的に明確に把握できるような形式的・祭祀的な埋納状況が存在しないのは、村落における民間信仰ゆえではないだろうか。大量＝呪術的な力も大きいという感覚も庶民的な感覚として理解しやすい。銭貨を用意したのは領主層や名主層もしくは寺院であろうが、大量の銭貨を用意することは一般村民に対し気前の良さを示し、その地位や威厳を意識させる効果もあり、人類学で言うポトラッチのような要素(返礼や再分配はない)があったのではないだろうか。

では、如何なる性質の祭祀なのか、これが最後の疑問となる。類似の区画溝で検出された祭祀遺構の墨書土師器には先祖供養の経文が書かれていたことから、大量銭も同じ性質の祭祀遺構と考えている。つまり、区画溝埋没＝区画の廃絶後に、この区画に関わった先祖の供養や地鎮として執り行われた祭祀ということである。区画内ではなく溝の位置に埋納される背景には、「境界」に対する意識があるとみてよいだろう。また、先祖供養としては過去を、地鎮としては未来(今後の土地利用)に意識が向いており、時間的にも「境界」に位置する祭祀と言えよう。

上記のような解釈論はともかく、我々発掘調査に関わる者としては、個々の出土状況＝遺構としての記録と検討が肝要である。しかし、多くの大量出土銭が不時発見である以上、それも困難であり、本事例も不時発見であれば、祭祀性を示すことは困難であっただろう。多くの情報に恵まれた本事例から他事例を検討すれば、山口県下右田遺跡、山梨県小和田館遺跡や京都七条町などの大量銭が埋納銭である蓋然性を高めたとと言える。循環論法の危険もあるが、本事例は大量出土銭を検討する上で重要な資料となる。ここで記した調査所見の当否はともかく、大量銭出土遺構としての視点からの考察が可能な本事例は極めて重要である。

## 11. おわりに

畑間遺跡は大郷郷という中世の荘園村落に比定されている。出土する遺物は山茶碗、常滑焼、土師器の銅釜が主であり、輸入陶磁器や古瀬戸の優品は極めて少ない。私自身が調査経験のある中世京都や愛知県稲沢市の下津宿遺跡のような都市遺跡と比べれば、その出土遺物の量と質には雲泥の差があり、決して豊かな遺跡とは思えない。もっとも大量銭の出土地は「都市部でない辺鄙なところが多く」（註68）、荘園年貢の代銭納については、「自然と社会の環境が稲作経営以外の生業を強制するような地域と階層が、銭貨をまず吸引する」（註69）と述べられている。このような指摘は、大量銭を畑間遺跡が経済的に豊かであったことを示すものという解釈からは遠ざける。実際、考古学的に示される物質的な「豊かさ」を畑間遺跡がもっているとは既往調査成果をみる限り言い難い。しかし、大量出土銭は、「銭貨を吸引する辺鄙なところ」のある種の「豊かさ」を示しているように思われる。

銭貨を埋めた主体について、その階層や組織についてはほとんど検討することが出来なかった。大量出土銭の性格を考える上で表裏一体の問題である。銭貨の分析とともに今後の課題であろう。

今回の大量出土銭の性質が如何なるものであれ、その時期が15世紀後半以降であることは重要な意味をもつ。この時期以降の遺構・遺物は激減する。遺跡の大きな転換期であり、歴史的には荘園制の解体期であり、戦乱の世が始まる。この時期に大量銭が残されたのは偶然ではなからう。今回見つかった2つの大量出土銭は、それが意図的に残された埋納銭であれ、不本意ながら取り出せなかった備蓄銭であれ、畑間遺跡における歴史の転換点に位置している。

## 第2節 畑間遺跡出土の独鈷杆

大量出土銭Bに近接する土坑(2156SK)から出土した独鈷杆について、他事例との比較から、その年代などについて考察したい。

### 1. 独鈷杆の年代

独鈷杆については、大量出土銭と関連する遺物として前節で取り上げ、大量銭と共伴する事例として掛川市大竹遺跡について触れた。他にも菅見の限り、10点ほどの発掘調査における出土事例があるようだ。伝世品については、寺院所蔵のもの、博物館や個人所蔵も含め、多数の独鈷杆が存在し、広島県厳島神社のものは国宝に指定されている。これらのうち発掘調査における出土品を主に、把部と銚部の比率を把握できた計10点の資料を表14に示し、その中に本遺跡の独鈷杆を位置づけてみた(註70)。また第59図には発掘調査報告書で実測図の示されているものから3点を比較のため掲載した。第3章でも述べたように独鈷杆は時代が下がる又把部に対する銚部の比率が短くなるとされており、表14ではその比率順に並べてみた。

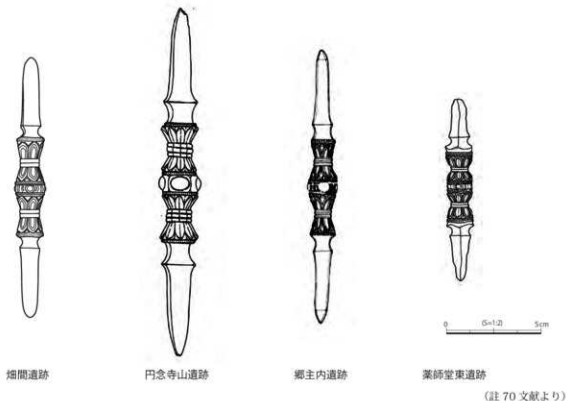
時代が下がる又把部に対する銚部の比率が短くなることは、表14の通り発掘資料においても追認される。12～13世紀とされる独鈷杆の数値が0.99～0.87であるのに対し、15世紀以降とされるものは0.77～0.64と明らかに変化する。この中で本事例の数値は0.82と中間的な数値を示す。

10例の中には年号を記した共伴物のある2例も含まれているが、その他の表で記した年代は独鈷杆の製作年代そのものではなく、遺構や共伴遺物の年代である。例えば、富山県円念寺山遺跡出土の独鈷杆は、埋納年代は12世紀としているが、遺物の製作年代は11世紀の可能性があると指摘されている。密教法具という性格からして、製作後すぐに埋納や廃棄されることは少なく、円念寺山遺跡のように1世紀ほど伝世することが多いのであろう。そのように考えれば、表中唯一の伝世品である神奈川県極楽寺の独鈷杆が、同じ13世紀とされる宮城県郷主内遺跡と福島県長井前ノ山縁塚に比べ、銚部比が低いことの意味が明らかとなる。つまり、郷主内遺跡と長井前ノ山縁塚の独鈷杆の製作年代は極楽寺のものよりも古く、一定期間伝世した後に埋納されたのであろう。

上記のことから畑間遺跡出土独鈷杆の年代について考えてみたい。銚部比が最も近似値なのは紀年銘資料が共伴する鎌倉市極楽寺のものである。把部の形状は異なる(極楽寺のものは鬼面を作っており太い)が、銚部先端の形状は類似する。銚部比や文様の精密さから畑間遺跡のものよりも少し古いと考えられる。遺構としての帰属年代は千葉県笹子城跡が最も近い。銚部比からみれば、本事例の方がやや古いと考えられるが、把部の太さや銚部の尖り、文様などは類似する。笹子城の独鈷杆につい

遺跡・出土地・所蔵地	長さ	銚部比	年代(遺構や共伴物から)	備考
1 山形県南陽市 別所山縁塚	15.7 cm	0.99	12世紀(保延6年=1140年)	保延6年銘縁塚と共伴
2 富山県中新川郡上市町 円念寺山遺跡	18.2 cm	0.98	12世紀後半	1-1号石塚(埋納遺構)本来は縁塚か
3 福島県会津坂下町 長井前ノ山縁塚	15.0 cm	0.95	13世紀	縁塚
4 宮城県角田市 郷主内遺跡	14.5 cm	0.92	13世紀	仏具埋納遺構
5 神奈川県鎌倉市 極楽寺蔵	19 cm	0.87	13世紀(建長7年=1255年)	伝世品(建長7年銘共伴物あり)
6 愛知県東海市 畑間遺跡	13.7 cm	0.82		15世紀後半の土坑(2156SK)
7 京都府八幡市 石清水八幡宮護国寺跡	18 cm	0.77	近世	輪宝を伴う祭祀遺構
8 千葉県木更津市 笹子城跡	15.3 cm	0.75	15世紀半ば～16世紀半ば	埋納遺構
9 静岡県掛川市 大竹遺跡	13.2 cm	0.70	16世紀後半	大量銭を伴う祭祀埋納遺構
10 茨城県小美玉市 石川西遺跡	9.4 cm	0.70	不明	包含刷
11 宮城県仙台市 薬師堂東遺跡	9.6 cm	0.63	18世紀	木箱墓

表14 独鈷杆の量測と年代



第59図 独結杵実測図

ては、出土状況等の詳細が分からないが、一定期間の伝世を経たと考えられる。

上記のような他事例との比較から、本事例の製作年代は14世紀前半（鎌倉時代後期～南北朝期）と位置付けられる。製作年代の推定が正しいとすれば、伝世期間は150年ほどとなる。

## 2. 独結杵出土の背景

第3章で述べたように、隣接する知多市の法海寺に同時期の密教法具一式が伝世しており、その中に1点の独結杵が含まれている。法海寺の独結杵は蓮弁が8弁、文様はよりシャープで結部もやや尖りが鋭く、本事例と異なる。しかし、長さは同じ13.7cmであり、重量や質感も非常に近い（註71）。本事例より先行するものと考えられるが、同じ工人や工房によって製作された可能性は十分に考えられる。法海寺と畑間遺跡の歴史的な関係の検討も今後の課題となる。

また、独結杵はないものの、南知多町岩屋寺の密教法具一式（鎌倉時代前期）は国の重要文化財に指定されており著名である（註72）。知多半島という限られた空間に2例の伝世密教法具が存在するのである。ほかに県内では、経塚遺跡である旧鳳来町の鏡岩下遺跡出土の五結杵、平成28年に県指定文化財とされた豊橋市赤岩寺所蔵の3点の金剛杵（うち1点独結杵）がある（註73）。赤岩寺の独結杵は結部が長く尖りも強い。11世紀後半～12世紀前半の作とされている。

そもそも畑間遺跡を挟むように南北の丘陵地に位置する観福寺（大宝2年＝702年創建）と弥勒寺（天平勝宝元年＝749年創建）は前者が天台宗、後者が真言宗、ともに密教系寺院である。なお、近接する常蓮寺は浄土宗であり、1493年創建と伝えられるが、直接的な関係は不明である。発見時には「何故こんなところに」と驚いたのだが、独結杵が出土する背景は存在していたのである。

### 第3節 調査成果からみた中世大郷郷

#### 1. はじめに

畑間遺跡のある大田町という町名は大里村と木田村が合併して名付けられたものであり、畑間遺跡の位置する旧大里村は中世における熱田神社領大郷郷に比定されている。よって中世の畑間遺跡(東畑・郷中・熊雲院遺跡も含めて)は大郷郷遺跡と呼ぶべき中世荘園村落遺跡である。

本年度調査の主たる成果は中世の遺構・遺物であり、既往調査成果も含めれば、中世の畑間遺跡について考える材料が蓄積されている。特に今回の調査では、大量出土銭や独結片といった貴重な資料にも恵まれた。本節では、まず大郷郷に関する文書記録について概観し、今回の成果と既往調査成果から中世荘園村落(大郷郷)として、畑間遺跡について考えてみたい。

調査成果については、溝とそれによって形成される区画に絞って考えたい。調査地点が狭く、建物などの様相が把握出来ないため、考察対象が溝に限定されるという現実もある。しかし、屋敷地が溝で区画されるなど、中世は考古学的に「溝の時代」とも言われている(註74)。今回の調査においても、2120SDからは、12～15世紀にわたる多量の遺物が出土しており、溝からは中世畑間遺跡の平面的な様相に加え、時間的な変遷も考えることができる。もちろん、溝は開削年代の決定が難しいなど、考察する上での課題もある。しかし、畑間遺跡では各調査地点が狭いため、一つの溝が複数の調査地点に伸び、結果として複数回の調査を経ることによって多くの情報や一定の客観性が得られるという利点もある。本節では溝という遺構に絞って中世の畑間遺跡を検討し、そこから熱田社領大郷郷の歴史の一端に迫ってみたい。

#### 2. 熱田社領大郷郷

大郷郷に関する文書記録の内容を表15にまとめた。5つの記録が残っている。永仁6年(1298年)～文和3年(1353年)、半世紀程度の短い期間に集中している。考古学的には山茶碗第8～9型式、常滑窯7型式期、古瀬戸中期に相当する時期である。大郷郷の文書記録については、荘園制や熱田社に関する論考や『東海市史』などの地域史における先行研究がある。しかし、熱田社領全体の中で断片的に触れられているのみであり、大郷郷に絞った論考はない。よって、それらを参考とし、大郷郷について簡潔にまとめておく(註75)。

まず、永仁6年(1298年)、熱田社領が国衙方からの「勘落濫責」を訴えた注進状に伴う注文状の中に大郷との記録がある。「勘落濫責」とは土地の接取・横領とそれに伴う乱暴狼藉などを指す。この時期は荘園に対して、国衙領の回復を目指す動きがあったようで、伊勢神宮領からも同様の訴えがなされている。大郷郷では、このような中で、国衙方から様々な雑事の強制や物品の要求がなされた記録されているわけである。

次の文書は正安元年(1299年)の「熱田社領大郷百姓等陳状案」(猿投神社文書)である。他の文書は熱田社側の荘園管理のための記録であるが、これは村人が作成した陳状書である。内容は、大郷郷の村民が荒尾郷の観音冠者という人物の殺害事件(犯人は大郷郷の村民か)に関して、同じ東海市内に位置する荒尾郷(国衙領)の村民から受けている圧力に対する反論と陳情である。この中に、「於市町・浦浜・野山・道路等～(中略)～被懸咎否～(中略)～関東御式目而明白也～」との記述がある。つまり、市町・浦浜・野山・道路などで起こった争いに対して村民として咎を受けることがないと述べており、この記述を網野善彦が「無縁・公界・楽」において、市や野山が「無縁」の場であったことの「疑う余地なし」証拠として挙げている(註76)。

獵投神社文書
永仁6年(1298年)六月
熱田神宮社領
国衛方押妨注文案
国衛の干渉に対する注文状
大郷
度々雑事札根用途色々
経入注文到来

獵投神社文書
正安元年(1299年)八月
熱田神宮社領大郷郷
百姓等陳状案
観音冠者という人物の殺害事件につき荒尾郷村人の訴えに大里郷の村人が反論した陳情
大郷百姓等理弁申 欲被停止早荒尾郷村人等無道濫訴 観音冠者間事件条者、観音冠者殺害事大郷村人等須以不覚悟者也(中略)
恐々被陳言上如件

獵投神社文書
正安二年(1300年)
熱田社領大郷早田検見注進状案
大郷郷の田地検見の目録
合參拾參町八反二百七拾歩者
除田八町一反大 常一反
木田押領半
水上宮神田一丁二反
当郷新宮田二町六十歩
寺田五反 科野殿跡三丁
郷町給一丁三反
定田二五町七反三〇歩
早田一三町一反半 晚田

楓軒文書纂
正和五年(1316年)
熱田社領別納等注進状写
別納(国衛に対して)の社領の注文状。
そこに当知行の社領として追記

熱田神宮文書
文和三年(1354年)
熱田社領目録案
熱田社権宮司尾張仲勝らが社領の一円領知行分を注進
田畠三十三町八段小三十歩
除 已上 拾三町四段三十歩
定 式拾町四段小

表 15 大郷郷に関する文書記録

大郷郷について考える上で注目したい点は、文書の中で村人がその根拠として関東御式目を挙げている点である。そもそも、市町・浦浜・野山・道路では連座制が適用されないと言った内容の法令は確認できないとのことである(註77)。しかし、この法令の有無は別として、法を根拠に示した陳状書を作成する能力を村民が有していたこと、また、個人的な争いに端を発する事件に対し、村として対応しており、そこから大郷郷が貢納や支配の単位というだけでなく、村民が連帯感を持つ一つの村落として成り立っていたことがうかがえる。

正安2年(1300年)と文和3年(1353年)の文書はともに田畠等の面積が記録されている。ともに33町と記載され、50年を経てほとんど変化がない。ただし、後者は田畠とされており、畠地の扱い次第では変化があったとも考えられる。また、除地とされる田畠が8町から13町に増加しており、これは熱田社が年貢を取取できない田畠の増加であろう。また、後者には他の社領の記録も含まれており、第1節で触れた年貢銭納額が記載されている。この記録から14世紀半ばには熱田社領では年貢は銭納化されており、大郷郷では約20町での定田に対し、約78貫文の年貢が課せられていたことになる。

前者の記録には多くの情報が記載されており、それが早田検見注進状である点も興味深い。13～14世紀には早田や早米などの言葉が頻繁に文書記録にみられ、これは品種分化＝農業技術の発展とされていた。これに対して、早米は冷害に強くその収穫量も安定性が高く、領主側に確実に年貢を得られるという利点があることから、早田や早稲という言葉が頻出するのは、寒冷化による生産環境の悪化への対応として領主側から求められた結果との説が提示されている(註78)。このようにみれば、この文書は、領主である熱田社の早田に対する関心と大郷郷に対する管理体制の強さをうかがわせる。

次に注目すべきは郷司の存在である。この郷司は国衛領の在庁官人としての郷司ではなく、荘園の下司としての郷司であり、その名の通り、大郷郷の管理者に相当する役職であったと考えられる。この早田検見注進状は郷司により作成されたのだろう。他の熱田社領においても郷司やそれに相当する

役職の記録がみられ、その職に任じられる人物は権宮司もしくは在地の有力者であり、前者の方が熱田社の支配が強かった。大郷郷に関しては、早田検見注進状の存在から熱田社の直接支配が強くと、郷司に任じられる人物は前者の蓋然性が高いと考えられる(註79)。この郷司は一丁三反の除田を有している。他にも氷上宮、科野殿跡などの除田が記されている。また現代においては合併して同じ大田町となっている木田郷に土地が押領されているとの記録もある。木田郷も同じ熱田社領であるが、横領とされており、対立関係にあったのだろうか。

正和5年(1316年)の「熱田社領目録写」(楓軒文書纂)は熱田社領の「別納」について記載しており、ここにも大郷郷が記されている。この「別納」については、二つの解釈がある。「別納」とは、その字の通り、本来の貢租徴収とは別の納め方が存在することであるが、この文書における「別納」は熱田神宮にとって「別納」の社領であるという解釈と、国衙に対して「別納」つまり、この別納分を熱田社が得ている社領という解釈がある。近年の研究では後者の解釈がなされている(註80)。その理由として、この文書は先の国衙による「勘落」に対して熱田社の権利を主張する性格の文書であること、1354年の熱田社領目録において、これらの社領が一円社領とされていることとの整合性からである。よって、この時期の大郷郷は熱田社領であったと考えられる。

大郷郷について直接的に触れている文献史料は以上であるが、関連するものに少し触れておく。まず熱田社領の中で最も早くその存在が記録されている御幣田郷についてである。御幣田郷は東海市内に位置すると考えられており、大郷郷より北側の現在の荒尾町一帯、南側の加木屋町一帯の2説がある。後者であれば、社山古窯などの瓦陶兼業窯がそこに含まれ、杵唐草文軒平瓦などが御幣田郷で生産されたことになる。「吾妻鏡」の建久2年(1191年)条に、熱田大宮司一族内で御幣田郷に関する相論があったこと、そこに源頼朝が関わったことなどが記されている。この中で、所領の本家であった上西門院(鳥羽天皇第2皇女、文治5年=1189年没)在世中から相論があったことなどが記され、御幣田郷は12世紀半ばから熱田社領(熱田大宮司一族の荘園)であったと考えられている。少なくともこの時期から知多半島北部、東海市周辺に熱田社領が存在していたわけである。

次に大郷御箇についてである。猿投神社文書に含まれる「熱田社領新別納郷等注文案」(1298年頃か)に記録されている。同じ熱田社領の記録において、八嶋郷・八嶋御箇など表記が異なる事例があり、大郷御箇を大郷郷とみることにはできる。記されている面積は325町6反であり、早田検見注進状よりもはるかに広い。これは山林などを含めたものとの見解がある。御箇とは元来は供物のための野菜などを栽培する土地を意味しており、大郷御箇という記録は野菜に限らず、様々な供物を山林などから入手し、熱田社に納めていたことを意味しているのかもしれない。この記録の解釈はともかく、入会地として山林なども含めて集落が形成されていたことは間違いない。発掘調査から田畠や入会地などについて考えるのは難しいが、集落全体を考える上で必須な課題である。

つづいて木田郷についてである。木田郷については15世紀にも記録がある。応永2年(1413年)の記録では、「熱田社領尾張国木田郷 一色」と記されている。この時期にも熱田社領であったわけだが、三河守護の一色氏との関係もうかがえる。一色氏は知多郡の分国守護の立場にあり、木田にある観福寺は宝徳2年(1450年)に一色氏の援助で再興されている。木田の地の支配者は熱田社から一色氏へと移っていったと考えられる。大郷郷や木田郷に限らず、15世紀以降、熱田社領の記録は減少し、見られなくなる。基本的には、その背景として国人層の台頭や大名領国制への変動があるのだろうが、大郷郷における具体的な様相はまったく分からない。

### 3. 畑間遺跡の溝と区画

これまでの調査で多くの中世の溝が検出されている。遺跡北部の中世溝については、平成25年度調査報告で検討した。また『愛知県史 資料編5』においても調査成果がまとめられている。本論ではその後の成果も加えて、遺跡全域について、特に遺跡の立地する砂堆や周辺の地形等との関連性、遺跡内での差異などについて、より詳細に検討したい。

既往調査の成果から主な中世溝を抽出し、同一溝群や形成される区画を溝間の距離や方位、出土遺物などから推定し、第60図に示した。さらに、これらの溝を周辺の地形等がよく分かる航空写真の上に反映させたのが第61図である。第61図には既往調査報告や『東海市史』を参考とし、大田川の旧河道や砂堆の範囲も示した。これらの図を見れば大まかな様相が把握できると思うが、以下、各溝や区画について調査成果を概観してゆく。

#### ①中央大溝

今回の調査成果を既往調査成果に位置付ける作業において最も明確な成果は、2120SDが平成24年度調査4地点の4018・4031SDと連なり、その結果、砂堆中央部を横断する畑間遺跡最大規模の溝の存在が判明したことである。以下、これを中央大溝と呼びたい。

中央大溝は幅4～5mをはかる。幅1～2m程度の溝が多い本遺跡で最大規模の溝である。第61図を見れば分かるように本遺跡の位置する砂堆は佐渡島状の形をなし、中央部がくびれている。2120SDはまさにこの部分を横断している。12世紀末に開削し、その後埋没と再開削を経て、15世紀末にはその機能を終えている。

#### ②砂堆北部の町単位の区画溝群

遺跡北部では1町を基本単位として区画溝群が形成されている。例えば、平成25年度2地点で検出した170SDと平成24年度1.2地点のSD2077との距離が109mとなり、平成25年度1地点と2地点の040SD・110SD・190SDは約55m＝半町四方の方形区画を形成している。さらに7地点の7010SDと平成23年度3地点の020SXと021SDとの距離も105～110mであった。

これらの溝の方位は現在の道路や家屋の方位とほぼ一致しており、さらに溝の位置が現代の地境と一致する事例もあった。これらの溝は近世に再開削されているものもあり、そのため現代まで続いたと考えられる。溝の方位は正方位

に対して、約20°傾くものと約30°傾くものの2者に分かれている(表16)。現代(再開発以前)の小路や家屋の方位にも両者が並存しており、前後関係を判断できない。

主として第5～7型式の山茶碗や同時期の遺物が出土しており、12世紀末から13世紀前半に開削され、13世紀後半には埋没したと考えられる。一部の溝では14～16世紀の遺物が出土しており、14世紀後半から15世紀に再開削されている。

年度	調査区	遺構番号	時期	備考
H21	5地点 6地点	SD 6	13世紀前半	
		SD 2～5	12世紀末～13世紀	
		SD5	12世紀末・15世紀	
H23	3地点	SD7～11	13世紀	
		020SX	12世紀末・15世紀	
		021SD	時期不明	
H24	1,2地点	SD2010	15～16世紀→近世	SD2077の再掘削
		SD2079	12世紀末～13世紀	
		SD2077	時期不明	
H25	1地点 2地点	001・020SDほか	13世紀	H21-SD 5より連った溝
		040SD	13世紀→14～15世紀→近世	
		110・190SDほか	13世紀→近世	
		130・131SD	14～15世紀	
		160SD・210SD	13世紀	
H26	1地点	009SD	13世紀・14～15世紀 →近世	H25-040SDと一帯の溝
		030SD	13世紀 → 近世	

主軸方位が30°前後のもの  
 主軸方位が20°前後のもの

表16 町単位溝一覧



### ③砂堆南西部の方形区画群

第2章で述べたように、4地点において検出された柱穴を伴う溝（4043SD）と同じ構造の溝が隣接する平成27年度調査4地点でも見つかっており、二つの溝の間は約30mであった。さらに平成27年度調査7地点にも同様の柱穴を伴う溝があり、同規模の東西約32mの方形区画を形成していた。前者を区画A、後者をBとした。南北規模は不明であるが、同距離と仮定しておく。

この2つに加え、その中間に位置する平成27年度調査5地点では、調査区の西と中央にそれぞれ並行する3条（計6条）の溝があり、それらも同一規模の区画を形成していた可能性がある。これらの溝の東西間距離は最短で22m、最長で36mであるが、埋没のたびに西もしくは東にずれたとすれば、東西約30mの区画となる。これを区画Cとしている。

これらの溝や区画は、いずれも調査区とほぼ直交もしくは平行する方位であり、同一規模（東西30m程度）の方形区画が複数並存していたと考えられる。仮に南北も同じ30mとすれば、ほぼ1反規模の区画となる。出土遺物はいずれの溝も13世紀のものであるが、その量は少ない。

### ④砂堆北東部の小型方形区画

砂堆北東部には3つの小型方形区画を想定している。墨書土師皿を伴うまじない遺構が見つかった平成20年度3・4地点の小型区画をa、大量銭の出土した区画をb、1040SDと1050SDによる区画をcとした。区画aとcは溝間の距離がともに約16mであり、16m四方の方形区画と考えられる。区画bについては、規模は不明であるが、第1節で指摘したように区画aと類似の性格をもつと想定し、同規模の区画として第60図に示した。区画の帰属時期は、小型区画aが12世紀後葉～15世紀中葉、bは15世紀半ば～後半、区画cは13世紀代である。区画aが時期の異なる複数の溝で形成され、長い期間存在していたと考えられるのに対し、bとcにはそのような時期幅はみられない。

### ⑤砂堆南東部の町単位の方形区画

砂堆南東部は今回の調査地点には含まれないが、既往調査の成果を再検討したところ、北部と同じ1町を単位とする大きな区画が見出された。方位はN-7°-10°-EとW-7°-10°-Sである。この方位は現代の耕作地や推定される旧大田川の流れとほぼ一致する。地形に則したものであろう。

これらの溝のうち、平成21年度2地点のSD1からは大窯期の天目茶碗が、SD5からは古瀬戸後期の鉀皿が、平成25年度3地点の002SDからは大窯期の碗がそれぞれ出土している。このことから、この方形区画は15世紀後半～16世紀に比定される。

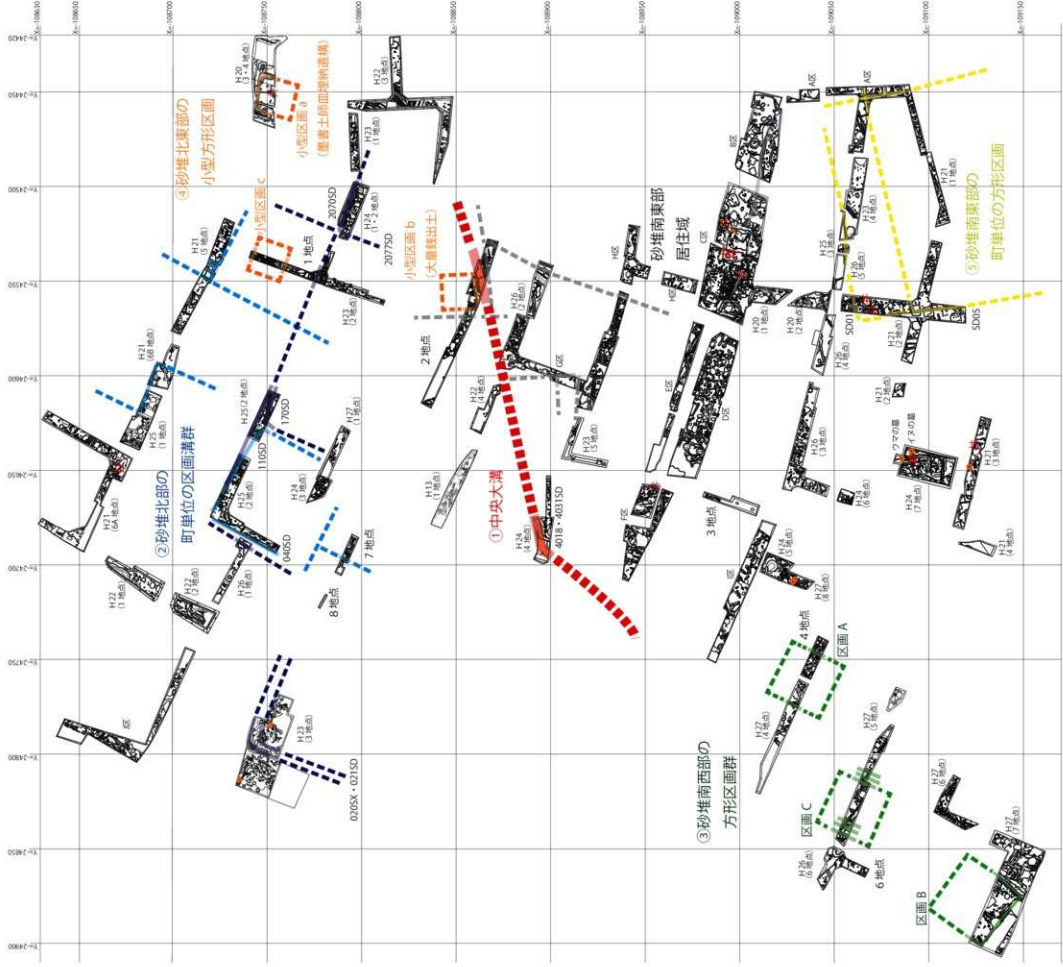
## 4. 溝・区画の性格

### ①中央大溝

中央大溝の規模はこれまで畑間遺跡で検出されている溝の中で最も大きく、幅は5m、深さ1m、距離も250m以上と推測される。砂堆中央を横断し、集落を南北に分断するその景観は象徴的なものであり、大きな区画溝としての機能を有していたのではないだろうか。その規模も含め、大郷郷成立段階において領主層の主導によって計画的に開削された溝と考えられる。

一方で、当然ながら水路としての機能も有している。平成24年度4地点4031SDの底面レベルは2120SDより60cmほど低いTP2.2m、その西端は南に曲がり、砂堆南西部の低地に水が流れ込むようになっている。砂堆の北東部は大田川や渡内川の洪水時にその水を受けるため、これらを排水する溝であったのだろう。

遺構の変遷については第2章で述べているが、中央大溝は12世紀末に開削され、その後、13世紀



1M  
 H121年～H21年頃遺構  
 7.5メートルメートル単位  
 所収図は計測図  
 遺構の正確な位置は  
 調査報告書に準ずる  
 ● 遺構  
 ○ 遺構  
 縮尺は1:2000

第60図 畑間遺跡の溝・区画



第61図 周辺環境と溝・区画

後半には埋没する。14世紀末に上層が削削されるが、近接する2135SDなどと同じ方位・規模の溝として削削されており、中央大溝とは言えない。上層が15世紀半ばに埋没し、その後中央大溝として最上層が再削削される。中央大溝としては、15世紀後半に機能したものの、15世紀末にはその機能は失われ、その後はゆっくりと埋没していったと考えられる。

中央大溝は集落の基幹となる溝であり、領主層を主とし、集落全体で維持管理（註81）を行っていた溝であろう。しかし、14世紀～15世紀前半にはその機能は停止していたのである。

#### ②砂堆北部の町単位の区画溝群

今回の調査でこの方位の溝＝1030SDが検出され、平成25年度1地点の110SD～平成24年度の2010SDまで一連の溝が200m以上続く可能性が示された。もっとも、この東西溝が単一の溝なのか、半町程度の屋敷地が軸を揃えて東西に並んでいたのかが問題である。屋敷地が規則的に並ぶ事例は多く、武豊町のウスガイト遺跡やあま市の阿弥陀寺遺跡などの遺跡において、本遺跡のように細く狭い調査区が複数設定されていれば、類似の状況になるだろう（註82）。1030SDと同じ軸線上に位置する東西溝は表16に赤字で示したが、両方の方位の溝が含まれており、これらの溝は複数の区画が軸を揃えて並んでいたと考えるべきであろう。

区画の規模であるが、1町単位の広さを有する屋敷地であれば、他事例では、溝の規模もより大きく、出土遺物にも有力者の存在を示すようなものがみられ、後に居館に発展する場合もある。これに対し、砂堆北部の溝はその規模も小さく、出土遺物からも有力者の存在は考えにくい。屋敷地とした場合もその規模は半町四方と考えるべきであろう。整然とした方格地割が存在し、少なくとも5～8区画ほどを想定できる（第60図）。しかしながら、区画の形成時期の詳細は不明であり、当初から整然とした地割であったのかは今後の検討課題である（註83）。内部の状況も不明である。なお、既往調査成果からは、この区画が古代の条里に遡る蓋然性は低いと考えている。

#### ③砂堆南西部の方形区画群

東西約30m、仮に南北も同規模とすれば、その面積はほぼ1反である。規模に統一感はあるが、北部ほど整然と並んでいる様相は感じられない。遺物は少ないが、区画内に建物が復元される柱穴もあり、通常の屋敷地と考えられる。ただし、溝に伴う柱穴列の存在が疑問である。この柱穴列は溝埋没後の遺構であり、護岸とは考えにくく、柵や塀のような区割施設ではないだろうか。柵や塀などを築きながら遺物が少ないことから、ウマやウシなどを飼育していた牧草地等の可能性が考えられる。

#### ④砂堆北東部の小型方形区画群

先に触れたように、区画aとbが祭祀的な場であった蓋然性は高い。小型区画aは中心に井戸があるが、生活用ではなく、何らかの祭祀用の井戸であろう。小型区画bについては、内部の状況がまったく不明である。寺院と考えたいが、2115SDなどから瓦の出土はない。墓も候補となろうが、既往調査成果からは特定の墓域はなく、各屋敷地やその周辺に点在している状況がみられる。しかし、郷司など集落の支配者層の特別な墓であった可能性はある。いずれにせよ、小型区画aと同じく祭祀的な場と考えており、溝から出土した青磁や銭貨は個人的な奢侈品などではなく、供物と考えている。

小型区画cも同様に考えたいところだが、積極的な証拠はない。区画内の遺構は柱穴が多く、通常の屋敷地のようである。また、区画aとbは複数の溝を頻りに再掘削している様相が見られるが、cの1040SDと1050SDには見られない。現状では、aとbのような特殊な区画と考えることはできないが、同一規模の区画として一群にしておいた。

### ⑤砂堆南東部の町単位の方形区画

砂堆南東部の1町単位の区画は、これまでの溝と異なり、その時期は15世紀後半～16世紀である。区画内(北西隅)には常滑甕を枠に再利用した15世紀の井戸があり、区画溝の時期と一致する。井戸の存在からは屋敷地とも考えられるが、この時期の遺構・遺物が非常に少ない。区画の中央部の平成21年度調査1地点ではほとんど中世の遺構がなく、近くに位置する平成25年度4地点(区画の外側であるが)では13世紀以降(近世以前)の畝跡が検出されている。この区画は耕作地として整備され、井戸も畠に伴うものであったと考えている。この1町単位の区画が15世紀後半以降に形成されたとすれば、それは畑間遺跡において遺構・遺物が激減し、2120SDが埋没し、大量出土銭の埋められた時期でもある。

この区画の北西部=平成21年度2地点では、複数の掘立柱建物が検出されているが、これらは切り合い関係や遺物から溝に先行する12～14世紀の遺構と判明している。平成23年度4地点では本遺跡では出土数が少ない山茶碗の小碗が一定数出土しており、12世紀半ば=畑間遺跡における中世集落形成期から人間活動の痕跡が垣間見える。

## 5. 集落の様相

ここで平面的な様相をまとめてみたい。まず中央大溝は砂堆を横断し、集落は大きく南北に分けられる。砂堆北部には町単位の溝が開削されており、ブロック状に整然とした方格地割が存在する。半町程度の屋敷地が並ぶ居住域として使用されていたと考えている。区画内の大部分が未調査地であり、詳細は不明であるが、規模に比べて出土遺物や遺構は少なく感じられることから、屋敷地内は畠地が多かったのではないだろうか。土地利用としては、こちらもウマなどの飼育、尾張地域でさかんな養蚕も考えられよう。畑間遺跡の西側は今でこそ多くの干拓地・埋立地が広がるが、中世には、海は近く、高潮や塩害の危険があり、水田に向けた土地ではなかつたろう。南東側の旧大田川一帯の低地も同様であり、主な耕作地(水田)は北東側と思われるが、決して好条件とは考えにくい。屋敷地を広く設定し、そこを畠や牧草地などを確保し、生活の糧を得ていたのではないだろうか。

北部において、区画内がある程度の調査をされているのは、平成23年度3地点(龍雲院遺跡)の020SXと201SDによって形成される区画である。この区画内では短刀が副葬された土壇墓が検出されているが、溝以西にも3基の墓が見つかっており、この区画溝は墓域を示すものではなからう。墓の年代が13世紀とされる一方で、溝からの出土遺物は12世紀後半と15世紀代の山茶碗と報告されている。このことから、12世紀後半に区画が形成され、13世紀には廃絶し、一帯が墓域となり、15世紀に再度区画が形成されたと考えられる。020SXと201SDと7010SDの距離は約1町であり、一つの区画を形成していた可能性はあるが、7地点西側～8地点は攪乱によって遺構が失われていた。

一方の砂堆南西部は1反規模の屋敷地が南北に位置する。近世の大里村から現代に至るまで集落は北の郷中と南の的場に分かれており、その在り方が中世以来のものであることは非常に興味深い。しかし、区画溝は13世紀のうちに埋没し、再開削されていないようだ。近世以降の状況から考えて、南西部においても居住域としての利用が続いていたと考えているが、少し東に移動しているのかもしれない。13世紀末以降は遺物も極めて少なく、その様相は不明である。ウマなど家畜牧草地の可能性を指摘したが、溝埋没後の柱穴列の段階=13世紀末以降の土地利用として想定できるのではないだろうか(註84)。北部の区画も含めて、畠や牧草地のような土地利用から生み出されたものが、熱田社に納められ、それが大郷御園と呼ばれた背景にあるのかもしれない。

南東部は集落形成期には居住域であったようだが、15世紀には耕作地となり、後に東畑と呼ばれる姿になっている。なお、この一帯の北側（B区・C区）は、実は中世の遺構密度の最も高い一帯である。明確な区画溝はないが、中世の井戸や墓が検出されている。時期不明の柱穴や土坑の多くも中世に帰属する可能性があり、第3の屋敷地群として想定される。遺構・遺物の詳細は既往報告を参照されたが、13世紀の遺構が多く、つづいて14世紀後半～15世紀後半の遺構もある。よって时期的な様相は他の地域と同じである。

上記のような区画の在り方、その背景には何があるのだろうか。3つの屋敷地群が時期ごとに移動した結果とは考えにくいことから、階層（名主層と小百姓など）や出自（古代以来の住民と中世の新住民など）、職業（副業として漁業、窯業など）などが異なる集団によるものと考えられる。区画の規模からは北部が上層農民の居住域にも思われるが、先述のように様々な土地利用が考えられる。砂堆中央部一帯は区画溝はないが、井戸などの遺構は多く、遺物も豊富である。多くの人々が密集して居住していたエリアのようである。また南西部と北部も様相にも差異がある。今後の課題としては、出土遺物の詳細な分析が必要である。

砂堆北東部の区画aとbは、通常の居住域と異なる特殊な区画である。砂堆北東部一帯は熱田社との関連を示す杏葉唐草文軒平瓦が多く出土しており、中世集落の形成当時から、特殊な一帯とみられ、その終末段階に大量出土瓦が納められているのである。

## 6. 中世大郷郷の変遷

以下、大郷郷に関する文書記録と溝およびそれによって形成される区画を主とした発掘調査成果を総括し、畑間遺跡の時期区分（表3・5）を基準として、中世大郷郷の変遷に迫ってみたい。

### V-1期（1130年代～1170年代＝山茶碗第4型式期）

この段階の遺構・遺物は極めて少ない。無人の地であったとさえ思えるが、半農半漁の小さい集落であったのだろう。砂堆上にわずかな住居が散在していた状況であったと思われる。この時期に加木屋地区の社山古窯や吉田古窯で京都に供給される瓦が焼成されていた。

### V-2期前葉（1180年代～1210年代＝山茶碗第5型式期）

遺構・遺物はこの段階から明らかに増加する。1町単位の区画溝群もこの時期に形成されている。今回の調査では1060SKがこの時期の遺構であり、2120SD下層からも第5型式の山茶碗が多く出土している。畑間遺跡の地が熱田社領大郷郷として成立した時期である。歴史的にも頼朝政権の成立とともに熱田社領が発展したと考えられ、これを大郷郷成立の背景とみてよいだろう。御幣田郷は前段階から社領となっていたと考えられ、少し遅れての社領化となる。どのような経緯でこの地が熱田社領になったのかは不明であるが、これを契機とし、中央大溝の開削、溝を伴う屋敷地、宗教施設などが形成された。

この時期は愛知県内で多くの中世集落が一齐に成立する（註85）。しかし、開削された溝の規格性や熱田神宮との関係性を示す杏葉唐草文軒平瓦の存在から、中世畑間遺跡の成立は在地勢力の自然的な展開ではなく、熱田社の主導によるものと考えている。杏葉唐草文軒平瓦（図版34-373）はこの時期の畑間遺跡を象徴する遺物である。これまで12点出土しており、基本的な製作技法に変化はないが、顎形態に多少の個体差がある。社山古窯などの瓦陶兼業窯における瓦の中では後出の製品であり、京都へ供給される瓦が生産終了後も引き続き造られていたのであろう（註86）。それらが大郷郷にもたらされ、寺院などの建築物に用いられていたと考えられる。

## V-2 期中葉～後葉（1220年代～1270年代＝山茶碗第6～7型式期）

最も遺構・遺物が多い時期という点からは最盛期と言える。ただし、山茶碗生産が最盛期であり、その結果として集落からの遺物出土量が多くなっているだけなのかもしれない。しかしながら、大郷郷の住民が窯業生産に何らかの関わりを持っていた可能性は既に指摘されている（註87）。今回の調査でも重ね焼きで軸着した山茶碗片（150、331）が出土しており、遺跡の立地的にも工人の居住地や出荷場となっていた可能性は当然考えられる。出荷場としてはより海に近い横須賀（註88）の方が適しているだろうが、大郷郷にも窯業生産に関わっていた人々が住んでいたであろう。よって山茶碗生産の増加に伴い、大郷郷の人口や経済的な活気がピークを迎えていたと考えたい。

## V-3 期（1280年頃～1370年頃＝山茶碗第8～9型式期）

知多半島における山茶碗生産が終了し、畑間遺跡においても山茶碗の出土量が激減する。ただし、これをそのまま集落の衰退とすることはできない。文書記録が残っており、耕作地の面積も安定しており、大きな変化や衰退は認められない。常滑窯編年6b型式期における山茶碗生産の終焉＝山茶碗の激減は地域全体の現象であり、14世紀の集落遺跡が検出されにくいことも指摘されている（註89）。これらをどう評価するのは難しい問題である。

知多半島における山茶碗生産の終焉は瀬戸や東濃窯での生産拡大と軌を一にしており、工人の移動があったとされる（註90）。大郷郷にも窯業に関わる住民がおり、移住に伴い放棄された屋敷地もあっただろう。一方、この時期に残された「熱田社領大郷百姓等陳状書」は村落としての安定と村民の結合が見て取れる記録である。確かにこの時期の遺物は少ないが、常滑窯7型式の甕や伊勢型鍋A5類も出土し、当該期の瀬戸産山茶碗も流入している。住民の減少があったとしても、村民の生活は継続していたはずである。ところで、上述のような陳状書を提出する村民は名主層を主体としたものであろう。これに対し、減少した住民は小百姓や下人層なのではないだろうか。これらの人々は浮遊性が高いとされており、山茶碗生産や領主の直管田に関わり、経済的な事情や領主による強制からこの地を離れ、それがこの時期の遺構・遺物減少の背景となったと考えたい。一方、名主層などには大きな変化もなく、生活を継続していたのであろう。

熱田社側に目を向ければ、この時期、熱田社領が国衙方からの圧力を受け、社領支配が貫徹し得ない状況が記されている。そもそも正和5年の文書記録は、このような状況の中で熱田社側の権利を主張するために作成されたと考えられている。また文和3年に作成された社領注進状においては、大郷郷も含め多くの社領が一円御神領とされているが、この文書も決して熱田社によって安定した支配が貫徹していたことを示すのではなく、国衙や地頭との対立は続いており、その中で熱田社が「社領支配の強化を内外に示した」文書とのことである（註91）。

多くの溝は第7型式期に埋没しており、再開削されていないことから維持・管理体制の弱体化があったことは間違いなく、遺跡の状況なども勘案すれば、国衙と熱田社との相克の中で、溝などの公共施設の開発行為や維持・管理が十分になされなかったのだろう。

## V-4 期（1380年代～1480年頃＝山茶碗第10～11型式期）

再び遺構・遺物が増加傾向を示す時期である。この傾向は既往調査でもみられ、1町単位溝の再開削などの動きがこの時期の前半から始まる。2地点の遺構はこの時期の後半に比定されるものが多く、特に2120SD最上層の開削は、中央大溝としての機能を取り戻すための多大な労働力を要する再開削行為である。

このような変化の背景は何であろうか。15世紀初めには隣接する木田郷の経営に三河から知多半島に進出した一色氏が関わっている。木田の観福寺が宝徳2年(1450年)には一色佐馬介らの援助で再興されており、木田郷は15世紀前半に熱田社領から一色氏の支配下に入ったと考えられる。同じ頃、大郷郷も熱田社領としての歴史を終え、一色氏の支配下となったのではないだろうか。大郷郷と一色氏を結ぶ直接的な証拠はないが、一色氏が観福寺再興のような再開事業を大郷郷でも行なったものが、2120SDの再開削や2地点の方形区画の形成と考えておきたい。

15世紀は全国的にも荘園制の解体期であり、この時期に廃絶する中世集落も多い。また国人領主の頭領や大名領国制の成立期でもある。大郷郷も熱田社領から離れ一色氏など在地勢力の支配下となった可能性は十分に考えられる。もっとも一色氏の時代もすぐに終わる。応仁の乱で西軍に組したため、応仁2年(1468年)に知多郡の分部守護の地位を幕府に没収されたのである。

15世紀後葉以降の大郷郷や周辺の歴史的状況についてはよく分かっていないが、荒尾氏が支配していた可能性を指摘したい。荒尾氏はもともと大郷郷の北に位置する国領衝荒尾郷を本領とする御家人であるが、寛正6年(1465年)の文書に荒尾氏が知多市寺本一帯の代官として記録されており、大郷郷の南北の地を荒尾氏が支配していたわけである。今回出土した独結杵が知多市寺本に位置する法海寺伝世の独結杵と類似しており、この時期に大郷郷にもたらされたとすれば、何らかの関係を示すものと言えよう。また、16世紀には木田城の城主として荒尾氏の名が残っており、大郷郷も同様に荒尾氏の支配化にあった蓋然性は高い。よって、15世紀前半代の再開削は一色氏、そして、大量出土銭と独結杵は荒尾氏と、支配者層の変遷が遺構の背景にあると考えておきたい。

#### V-5期(1480年頃~16世紀=大窯期)

大量銭の埋納を二期としてこの時期が始まる。ただし、前節で述べたように大量出土銭が先祖供養の遺構とすれば、その意識は前代に向いており、V-4期の最後とも言える。大量出土銭に関しては、今後の調査・分析によって、その帰属時期も変更を迫られるかもしれないが、それはV-5期の中の議論となる。

この時期の遺構は少なく、今回取り上げた遺構群では砂堆南東部の1町単位の区画がこの時期に属するが、周辺に当該期の遺構は少ない。2120SDもほぼ埋没する。既往調査でも16世紀の遺構・遺物が少ないことから、15世紀末に大きな変化があったことは確実である。ただし、集落として廃絶したとは考えられない。本調査においても、7地点ではこの時期の茶釜型の羽釜や土師器皿が出土している。そして、大郷郷は江戸時代には大里村として存在し、北部の区画溝は現代まで受け継がれているのである。

現状では、砂堆北部に中心を移した集落の再編がなされたと考えられる。畑間遺跡のすぐ北に位置する弥勒寺遺跡は16世紀の遺構・遺物を主とし、「天文15年」(1546年)銘の硯が出土している(註92)。集落の中心が北に移動したと考えているが、砂堆北部の多くが土地区画事業地外であるため、この一帯は未調査である。近世には砂堆の北部が郷中と呼ばれ集落の中心であった。中世後期に現在の居住域と重なる場所に集落が移ることは、これまでも指摘されている(註93)が、本遺跡群では、その名の通り近世大里村の中心域である郷中遺跡において近世の遺構・遺物が多くみられ、これを例証している。

ただし、このような大きな変化の背景はまったく不明である。支配者層によるものと考えているが、大郷郷だけの動きなのか、地域的にみられるものなのか、今後の課題である。



## 7. おわりに

中世畑間遺跡からは、規格性の高い溝や屋敷地、浮遊性の高い住民、大量の銭貨など一見すると都市的な要素も見出しうるが、畑間遺跡は決して都市的な場ではなく、通常の村落遺跡である。近世に兵農分離や村と町の区別が進み、村から都市的な要素は激減するが、中世においては「村落自体の中に都市的要素が現代・近世よりもより多く混有」（註94）しており、中世畑間遺跡＝大郷郷はその多様さの一端を示している。

先に述べたように中世において溝を伴った集落が形成・再編成される動きは全国的に共通するものである。中世集落遺跡は溝によって区画された屋敷地、さらに都市的な集落では環濠のような溝もみられる。大規模な水路開発の記録もあり、溝は中世の遺跡を象徴する遺構と言える。県内においても多くの遺跡でこのような様相がみられる。この中で畑間遺跡は溝の規模や遺物の質や量からみれば一般的な集落に過ぎない。しかし、溝を検討した結果、その配置に明確な規格が見出される。これは計画的な開発によって集落が形成されたことを示しているのだろう。香葉唐草文軒平瓦の存在は熱田社と大郷郷の関係性を示す遺物である。このような状況から12世紀末における第1砂堆の開発と大郷集落の形成の契機は熱田社領としての荘園開発と考えるのが最も妥当である。砂堆という限定された範囲とその立地（熱田と知多南部の中間点）が計画的な開発に適していたと考えられる。なお、12世紀後半は、東海地方で中世集落が一斉に形成される時期と指摘されており、多くの中世集落遺跡との比較が今後の課題である。本論では報告書という性格上、必要最低限しか取上げなかったが、同じ熱田社領との比較を試みれば多くの知見を得られるであろう。

14世紀には遺構・遺物の減少がみられ、その背景には、国衙の介入により熱田社の支配が弱まり、村の開発や維持管理が滞ったこと、浮遊性の高い小百姓や下人層などの減少があったと考えている。ただし、大郷郷の文書記録が残っており、継続的な村民の生活があったことは間違いない。14世紀末～15世紀にかけて再開発がなされているが、区画溝の規模に変化はみられない。居館の堀と思われるような遺構は未だ確認されておらず、集落の質的な変化は認められない。いわゆる集村化は16世紀以降と考えているが、大郷郷では、12世紀末の集落成立段階から、砂堆という環境下で、散村とは少し異なり、まとまりと規格性のある村落景観をなしていた。

溝や区画からは、集落における面的な多様性が示された。特に既往調査でも指摘されていた砂堆北東部の特殊性は、今回の大量出土銭の発見でより明確となった。他の区画や居住域の差異は住民の階層や職業、土地利用の在り方が反映しているのだろう。しかしながら、調査地の制約から区画内の様相については不明な点が多い。文書に記された郷司の館や氷上宮、科野殿などについては、何ら追及できなかった。

畑間遺跡の大まかな変遷は、これまで中世集落の研究で指摘されている傾向と一致しており、中世大郷郷も中世史の大きな流れの中に位置していることが分かる。12世紀末～13世紀初頭の大郷郷開発は熱田神宮と鎌倉政権との関係が、13世紀後半以降の遺構・遺物の減少は知多半島における山茶碗生産の終了が、14世紀の停滞は国衙と熱田社の相克、15世紀の変動は守護勢力の伸長や国人層の台頭に伴う荘園制の崩壊がそれぞれの背景にみえてくる。14世紀末以降の再開発を一色氏によるものと考えたが、それに対抗する熱田社側の動き、惣村化による村民による再開発などの可能性もある。いずれにせよ、多くの村民の日常生活は途絶えることなく、中世の大郷郷から近世大里村、そして大田町に至るのである。

## 第5章 総括

最後に各時代ごとに遺跡の様相や変遷について、平成28年度調査の成果を総括しておく。

弥生時代から古墳時代に関しては、本年度の調査では、あまり成果を得ることはできなかった。主たる遺構は4地点の4011SDと6地点の6010SDである。水路や区画溝とは考えにくく、既往調査成果と合わせれば、周溝墓の可能性が考えられる。第4章第3節で試みたような調査成果の統合を当該期に関しても行なえば、一定の様相が見出されるだろう。

古代の遺構・遺物は既往調査成果同様に限定的であるが、7世紀後半から8世紀の遺物が多い。この時代に関しては、北に位置する松崎遺跡との関係が重要となろう。古代の遺構は1地点でわずかにその痕跡が見出されたのみであるが、7地点も比較的古代の遺物が多かった。7地点のすぐ北側に位置する平成25年度1地点では、調査区の南側で須恵器が多く出土した。古代の遺構は、中世や近世の遺構と重なり、1150SXや1180SXのように詳細な様相が把握できない遺構が多いが、遺物の詳細な分析から面的な様相も把握可能と思われる。

中世は今回の調査で最も多くの成果を得られた時代である。既往調査同様に10～11世紀の遺構・遺物がほとんどなく、12世紀後葉に中世集落が突然形成される状況が確認された。その背景には熱田社による荘園化があると考えられる。13世紀は知多半島における山茶碗生産の最盛期であり、畑間遺跡でも多くの遺構と遺物が検出される。ところが、山茶碗生産終了とともに遺構・遺物とも減少する。ただし、前章で述べたように、村人の生活は継続している。また中世畑間遺跡の面的な多様性を前章で提示したが、その性格や時期をより詳細に把握するには遺物の分析が必要である。時間などの制約もあったが、方法論も含めて、今回は十分に取り組むことができなかった。

14世紀における遺構・遺物の減少は既往調査でも指摘されており、今回の調査成果も同様の傾向を示した。ただし、文書記録から集落が継続していることは間違いない。もっとも、14世紀における遺構・遺物の減少は全国的に指摘されており、本書の範囲を超える問題であるが、人々の流動性が高まったことは、その背景として考えられるのではないだろうか。

14世紀末から15世紀前半には再開発のような動きもみられるが、15世紀後半以降再び遺構・遺物の減少がみられる。大量出土銭はこの時代の画期に位置すると考えている。中世畑間遺跡の変遷については前章で述べており、ここでは触れないが、大量出土銭や独鈷杆など貴重な資料が出土したことは大きな成果であった。特に大量出土銭が発掘調査において発見される事例は少なく、愛知県内初事例であった。さらに遺構との関係性を検討できる検出状況であったことも特筆される。もっとも、検討に耐えうる調査と報告を行えたのか不安もあるが、調査担当者としての見解は提示した。今後、内部の銭貨の検討も含め、さらに研究・議論が進むことを期待したい。

得られた成果に比して、多くの課題を残す報告となってしまったが、今後の調査・研究に向けて興味深い課題が多い。調査成果を安易に文献史と関連付けることには批判もあるだろうが、地域史を構築するには、やはりそこに挑む必要がある。前章では、その第一歩としての拙論を提示した。今後は文献史学者や郷土史家なども含めた多方面から調査成果を検討してゆく必要があり、畑間遺跡にはその価値があることを今回の調査成果は示している。

## 註

### 第1章

- (註1) 愛知県教育委員会 1999年『愛知県知多半島遺跡詳細分布調査報告書』  
(註2) 東海市教育委員会 1997年『愛知県東海市東畑遺跡等試掘調査報告』  
(註3) 横須賀町史編纂委員会編 1969年『横須賀町史』横須賀町  
(註4) 知多市教育委員会 1979年『法海寺遺跡』(知多市文化財報告第15集)  
(註5) 愛知県史編さん委員会 2010年『資料編4 考古4 飛鳥～平安』  
(註6) 永井仲明・宮澤浩司 2007年『伊勢湾を望む海辺の遺跡—東畑遺跡等発掘調査概報—』

『研究報告とうかい』創刊号 東海市教育委員会

宮澤浩司 2009年『伊勢湾を望む海辺の遺跡(2) —平成19年度畑間・東畑遺跡発掘調査の概要—』

『研究報告とうかい』第2号 東海市教育委員会

- (註7) 永井仲明ほか 2014年『愛知県東海市畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告—平成11～19年度調査』東海市教育委員会

### 第2章

- (註8) 調査時は埋納銭という呼称を用いていたが、埋納銭は一定の性格を付与する用語であることから、大量出土銭という呼称に改めた。  
(註9) 出土遺物の年代観や型式分類の基準とした論文等は参考文献に挙げている。  
(註10) 中世(V期)は平成25年度報告において3期区分としたが、今回はさらに細分し5期区分とした。  
(註11) III層は包含層として掘削しているが、この段階で認識できた遺構は測量や部分的な掘り下げなど個別に対応した。ただし、III層と遺構埋土の区別が困難であり、正確なプランが検出できないことが多い。  
(註12) 21年度調査では、調査時に不明遺構としていたものを報告書で堅穴建物と変更しており、今回はその逆となる。その判断は難しいが、この一帯に古代の遺物が多くみられる点は留意すべきである。  
(註13) 一つの例として、平成23年度調査の3地点(龍雲院遺跡)のO20SX(流路または溝)を挙げておく。13世紀頃の遺構であるが、江戸時代以来の旧家の敷地境と一致していた。  
(註14) 平成24年度のSD4031の底点レベルはTP2.25 mほど、2120SDの底点レベルがP2.80 mほどなので、西へ120～140 m、約55cm下がっている。  
(註15) 調査時の記録は最上層とA～E層に分けており、A層が最上層も、B層が上層、C層が中層、D、E層が下層である。  
(註16) 2120SDと2135SDの切り合いは調査時には前者が後者を切っているとしていた。しかし、2135SDから15世紀の遺物が出土していること、2120SD上層との関係性から、2135SDは2120SDの中～下層より新しい溝であり、切り合い関係を認識していたと判断する。ただし、他の遺構も含め、調査時の記録の改変は行っていない。  
(註17) 本遺跡は砂堆に立地し、遺構埋土も大部分は砂質である。必然的に埋まりやすいこともあって多くの遺構は自然埋没と判断しているが、人為的に埋めているであろう大量出土遺構の埋土も他の遺構と何ら差異はなく、埋没状況の判断は困難である。  
(註18) この擾乱は当初は2114SDとしていたが、掘削と壁面観察の結果、現代擾乱の影響で地山層まで二次的な変色によって黒色化していることが判明した。この黒色化の中で、2221SKは遺物の存在とわずかな埋土の緩さから検出したが、正確さは不安が残る。  
(註19) 平成23年度調査の4地点では列状に土器棺墓が見つっている。2221・2222SKは土器棺墓にしては小さい壺であるが、列状の土器埋納遺構の可能性は考えられる。

### 第3章

- (註20) この表は本報告における記述の基準として提示しており、各編年の対応関係や実年代についての厳密さを追求しているものではない。また、担当者の力量から詳細な型式分類ができないことも考慮したものであることを断っておきたい。なお、各編年の参考とした論文は巻末の参考文献に記している。  
(註21) これらについては製塩土器という指摘もあるが、今回の資料では被熱痕などは見出せなかった。石黒立人 2003年『鳥帽子遺跡II』(財)愛知県埋蔵文化財センター 考古学フォーラム編 2010年『東海上土器製塩研究』考古学フォーラム  
(註22) 上層の図化(第16図)した遺物の取上げ日を基準に、調査日誌なども参考として分けた。  
(註23) 愛知県内の中世遺跡における破片数計測データは以下の論文に提示されているが、12～14世紀では山茶碗の比率は8割を超えるものも多い。  
尾野善裕 1996年『東海地方の尾張地域を中心とした中世の土器・陶磁器組成について』  
『中近世土器の基礎研究11』中世土器研究会  
川井啓介 2000年『三河地域の中世集落』  
『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』第1号(財)愛知県埋蔵文化財センター

- (註24) 以下の論文で第7型式は33%、第8型式では95%が瀬戸産というデータが提示されている。遺構や調査地点の差もあろうが、2153SXや2180SDと比べても2120SD出土の瀬戸産山茶碗は少ない。  
中野晴久 2013年『中世常滑窯の研究』愛知学院大学学位請求論文
- (註25) 愛知県史編さん委員会編 2017年『資料編5 考古5 鎌倉～江戸』愛知県
- (註26) グライ化のため周辺も含め変色しており、上面に存在した遺構を見逃している可能性がある。
- (註27) 模範銭については、判断に不安があり本報告では記載しない。
- (註28) 鈴木公雄 1999年『出土銭貨の研究』東京大学出版会
- (註29) 時代が下がると鋳部の尖りが弱く、把部に対して短くなるという。  
石田茂作 1977年『仏教考古学論叢 五 仏具編』思文閣出版
- (註30) 法海寺の独站弁は、長さは13.7cm、重量は100.1gと法量はほぼ同じである。質感も類似するが、使用による手ずれがみられる。鋳部はわずかに長く4.4cmで、鋳部比は0.89となる。法海寺・知多市歴史民俗博物館のご厚意により実見させて頂いた。記して感謝したい。  
知多市誌編さん委員会編 1983年『知多市誌 資料編2』  
第4章第1節
- (註31) ただし近世の1例(新城市＝旧鳳来町の下吉田出土銭)を加えれば14例となる。  
愛知県史編さん委員会編 2017年『資料編5 考古5 鎌倉～江戸』愛知県
- (註32) 下坂本清合遺跡については、以下の鳥取県のHPによる。  
<http://www.pref.tottori.lg.jp/251795.htm>
- (註33) 撮影は名古屋市工業研究所に依頼して行なった。  
使用機材はTOSCANER 32252  $\mu$  h (最大管電圧225kV)である。
- (註34) 岩名健太郎 1999年『東海地方における大量出土銭の収納容器』  
『出土銭貨』第5号 出土銭貨研究会
- (註35) 永井久美男編 1994年『中世の出土銭』兵庫埋蔵銭調査会
- (註36) 辻本武 1996年『吉野遺跡出土埋蔵銭の緒』  
『出土銭貨』第12号 出土銭貨研究会
- (註37) 山口県教育委員会 1980年『下右田遺跡 第4次調査概報』
- (註38) 永井久美男編 1996年『中世の出土銭 補遺1』兵庫埋蔵銭調査会
- (註39) 藤沢広広 1997年『長野県中野市西条・岩船遺跡群出土の備蓄銭』『出土銭貨』第12号  
紐の痕跡が残っていた銭貨を1枚目とし、外しながら裏裏を確認した。結果は下記の通りであった。  
(表→表→裏→裏→裏→表)
- (註40) 鈴木公雄 1999年『出土銭貨の研究』東京大学出版会  
なお鈴木編年の6期以降を再検討した永井編年では宣徳通宝を最新銭とする6期を15世紀第2四半世紀から1560年代までとしており、5期以降の年代決定は最新銭だけでは困難と認められる。  
永井久美男編 1996年『中世の出土銭 補遺1』兵庫埋蔵銭調査会
- (註41) 鈴木公雄 1999年『出土銭貨の研究』東京大学出版会  
櫻木晋一 2015年『貨幣考古学の世界』ニューサイエンス社
- (註42) 永原慶二 1993年『伊勢商人と永楽基標準通貨圏』  
『知多半島の歴史と現在No.5』日本福祉大学知多半島総合研究所
- (註43) 鈴木公雄 1999年『出土銭貨の研究』東京大学出版会
- (註44) 山形県埋蔵文化財センター 1996年『土塚遺跡・梵天塚遺跡・中谷地遺跡発掘調査報告書』
- (註45) 橋口定志 1999年『銭を埋めること』『越境する貨幣』歴史学研究会編 青木書店
- (註46) 前橋市教育委員会 2011年『大渡道場遺跡』
- (註47) 工藤清泰 1995年『城館生活の一断面』『中世の風景を読む1』網野善彦ほか編 新人物往来社  
浪岡城では堀から銭貨と数珠が伴って出土しており、祭祀性が指摘されている。
- (註48) 京都文化財団 1988年『平安京左京八条三坊七町』
- (註49) 写真図版25と図版12は拡張前の分層線を示す。第29図の破線は写真44の段階の図面であり、土坑掘削時に壺が見えていたと判断したものである。  
出土銭貨研究会 1999年『出土銭貨』第12号
- (註50) 藤澤良祐 2001年『埋納された古瀬戸製品』『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要XVII』
- (註51) 鈴木公雄 1999年『備蓄銭の容器について』『出土銭貨』第12号 出土銭貨研究会
- (註52) 足立順司 2002年『中部地方』『出土銭貨研究の最前線』季刊考古学第78号
- (註53) 藤澤良祐 2001年『埋納された古瀬戸製品』『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要XVII』同上
- (註54) 同上
- (註55) 同上
- (註56) 長坂町教育委員会 1986年『小和田館跡』

- (註 57) 山口県教育委員会 1980年『下右田遺跡 第4次調査概報』
- (註 58) 足立順司 1981年『掛川市大竹遺跡の研究』『森町考古16』森町考古学研究会
- (註 59) 鈴木公雄 1999年『出土銭貨の研究』東京大学出版会
- (註 60) それぞれが経塚に伴う事例は多いが、銭貨・独結件(密教法具)・和鏡が3点そろって出土する経塚は少ない。愛知県新城市鳳来町の鏡岩下遺跡(五結件)や京都市鞍馬寺経塚があるが、1基の経塚に伴うわけではないようだ。  
鳳来町教育委員会 1967年『鳳来町史 文化財編』  
難波田徹 1977年『鞍馬寺経塚遺宝書』鞍馬弘教総本山鞍馬寺出版部
- (註 61) 愛知県史編さん委員会編 2017年『資料編5 考古5 鎌倉～江戸』愛知県  
県史においては、1,000枚以上の出土事例を大量銭としており、豊橋市本郷遺跡を含めていない。本郷遺跡では長径1m、短径0.8mの楕円形土坑から6連の緋銭(1緋が96～115枚)を含む総計896枚の銭貨が出土した。最新銭は咸淳元宝(初铸年1265年)である。土坑は黄白色の粘質土で意図的に埋め戻しており、祭祀性が指摘されている。  
柴垣勇夫 1986年『愛知県における銭貨埋納容器の諸例』『愛知県立陶磁資料館研究紀要5』
- (註 62) 篠島では正法寺出土銭に加え、伊勢湾台風後に海岸で見つかった前浜出土銭が伝えられている。現存する銭貨は188枚(最新銭は1423年初铸の朝鮮通宝)であるが、近隣に埋まっていた大量銭が台風によって破壊され散在したものであるとすれば、これも近距離の事例に加わる。  
奥川広成 1989年『付載第二 篠島前浜出土の備前銭』『神明社貝塚』南知多教育委員会
- (註 63) 橋口定志 1999年『銭を埋めること』『越境する貨幣』歴史学研究会編 青木書店
- (註 64) 峰岸純夫 1999年『中世埋蔵銭についての覚書』『越境する貨幣』歴史学研究会編 青木書店
- (註 65) 橋口定志 2002年『中世大量出土銭貨の性格』『出土銭貨研究の最前線』季刊考古学第78号
- (註 66) 杉原和雄・森島康雄 1993年『京都府出土の備前古銭』『摂河泉文化資料』42・43号 摂河泉文庫
- (註 67) 栗本慎一郎 2013年『経済人類学』講談社
- (註 68) 櫻木晋一 2015年『貨幣考古学の世界』ニューサイエンス社
- (註 69) 大山喬平 1978年『日本中世農村史の研究』岩波書店
- 第4章第2節**
- (註 70) 下記の資料をもとに作成した。  
石田茂作 1977年『仏教考古学論攷 五 仏具編』思文閣出版  
足立順司 1981年『掛川市大竹遺跡の研究』『森町考古16』森町考古学研究会  
茨城県教育財団 2009年『石川西遺跡』  
上市町教育委員会 2002年『黒川上山古墳群発掘調査第7次調査概報』  
上市町教育委員会 2005年『上市町黒川遺跡群発掘調査報告書』  
千葉県教育振興財団 2015年『はるかなる西上総の歴史』  
仙台市教育委員会 2011年『築師堂東遺跡』  
福島県立博物館 2002年『博物館だより67』  
宮城県教育委員会 2001年『名生館遺跡ほか』  
八幡市教育委員会 2014年『護国寺跡現地説明会資料』
- (註 71) 註30参照
- (註 72) 南知多町誌編さん委員会 1997年『南知多町誌 資料編6』
- (註 73) 鳳来町教育委員会 1967年『鳳来町史 文化財編』  
愛知県のHPより、文化財の指定にともなう以下のPDF資料を参照した。  
<http://www.pref.aichi.jp/uploaded/attachment/202722.pdf>
- 第4章第3節**
- (註 74) 原田信男・浜江芳浩 1994年『中世村落の景観復原について』札幌大学女子短期大学部紀要23
- (註 75) 表15は下記の文献をもとに作成した。本節の文書記録に関する記述も下記の文献を参照した。  
愛知県史編さん委員会編 2001年『愛知県史 資料編8 中世1』愛知県  
上村喜久子 2012年『尾張の荘園・国衙領と熱田社』岩田書院  
大府市誌編さん委員会 1986年『大府市誌』大府市  
新修名古屋市史編集委員会編 1998年『新修名古屋市史 第二巻』名古屋  
東海市史編さん委員会編 1990年『東海市史 通史編』東海市  
知多市誌編さん委員会編 1981年『知多市誌 本文編』知多市  
半田市誌編さん委員会編 1989年『半田市誌』半田市  
藤本元啓 2003年『中世熱田社の構造と展開』続群書類従完成会

- (註 76) 網野善彦 1978 年『無縁・公界・楽』平凡社
- (註 77) 同上
- (註 78) 磯貝富士男 2002 年『中世の農業と気候』吉川弘文館
- (註 79) 藤本元啓 2003 年『中世熱田社の構造と展開』統群書類従完成会
- (註 80) 同上
- (註 81) 灌漑施設などの維持管理は名主層が担うことが多いという(註 69 文献)。ただし、中央大溝は単なる水路ではなく、集落を南北に分ける区画溝としての機能もあり、根本的には領主層の管理下にあった溝と考えている。
- (註 82) 石黒立人ほか 1990 年『阿弥陀寺遺跡』愛知県埋蔵文化財センター  
奥川弘成・立松彰 1998 年『ウスガイト遺跡の記憶』武豊町教育委員会
- (註 83) 本格的な方格地割は 15 世紀以降に形成され、それが近世以降に砂堆北部(郷中遺跡)へ展開していった可能性もあり、これが大郷郷から大里村への動き=集村化であったのかもしれない。しかしながら、13 世紀の遺物のみが出土する溝もあり、1 町もしくは半町単位の溝群が 12 世紀末～13 世紀から形成され始めたことは間違いないと考えている。
- (註 84) 今回および既往調査でもウマの骨が出土している。また、遺跡南部に位置する平成 24 年度調査の 7 地点では 14～15 世紀に比定されるウマの墓が見つかっている。埋葬されていたウマは中世の平均的なウマよりも大きく、特別な存在であったのではないかと指摘されている。  
安部みき子 2015 年「東海市東畑遺跡出土の埋葬馬の分析」  
『畑間・東畑遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会
- (註 85) 考古学フォーラム編 2002 年『東海の中世集落を考える』
- (註 86) 香葉唐草文軒平瓦は吉田 1・2 号窯(常滑窯編年 1b～2 型式期)では出土しておらず、後出する社山古窯(1b～3 型式期)で出土している。香葉唐草文軒平瓦は京都に供給された瓦よりは後出の在地向けの瓦と考えられ、常滑窯 3 型式期に生産されていたとすれば、畑間遺跡の状況と整合性がある。なお、畑間遺跡ではこれまでに 12 点出土している。いずれも顎貼り付け技法で成形されているとみられるが、互当周縁部の面取りや、顎貼り付け時の補強粘土の多寡によって外見上はかなりの個体差がみられる。これらを時期差とできるのか分からないが、より詳細な検討を要する。  
大府市誌編さん委員会編 1990 年『大府市誌 資料編 考古』  
愛知県史編さん委員会編 2012 年『別編 窯業 3 中世・近世常滑系』愛知県  
柴垣勇夫 1982 年「尾張における平安末期の瓦生産」『愛知県陶磁資料館研究紀要 1』  
杉崎章・橋崎彰一ほか 1956 年『横須賀町史別冊 横須賀の遺跡』横須賀町史編纂委員会  
永井邦仁 2014 年『愛知県における中世瓦の展開とその特徴』愛知県埋蔵文化財センター研究紀要第 15 号
- (註 87) 中野晴久 2013 年『中世常滑窯の研究』愛知学院大学学位請求論文  
上記論文においては、瀬戸産山茶碗の出土比率から、「生産者の居住域としては理解しづらい」とも述べられている。しかし、後述するように、知多半島における山茶碗生産の終焉と瀬戸における生産の拡大が工人の移動などを伴う一連の動きと考えられる(註 90 文献)ならば、瀬戸産製品の存在は両地域の結び付きを示すとの解釈も成り立つのではないだろうか。つまり、商品として瀬戸産山茶碗がもたらされたのではなく、何らかの人的交流(窯業に関わる交流や婚姻のような生活に関わる交流など)の結果ということである。
- (註 88) 範義という御家人が横須賀郷を所領し、常滑焼を東国に輸出していたという説が提示されている。  
福島金治 1997 年『金沢北条氏と称名寺』吉川弘文館
- (註 89) 考古学フォーラム編 2002 年『東海の中世集落を考える』
- (註 90) 愛知県史編さん委員会編 2012 年『別編 窯業 3 中世・近世常滑系』愛知県
- (註 91) 藤本元啓 2003 年『中世熱田社の構造と展開』統群書類従完成会
- (註 92) 東海市教育委員会 1998 年『知多弥勒寺遺跡発掘調査報告』
- (註 93) 広瀬和雄 1988 年「中世村落の形成と展開」物質文化 50  
少なくとも本遺跡においては、この指摘通りの状況が想定できる。
- (註 94) 清水三男 1996 年『日本中世の村落』岩波書店

## 参考文献

### 既往調査

- 1 愛知県教育委員会 1999年『愛知県知多半島遺跡詳細分布調査報告書』
  - 2 東海市教育委員会 1997年『愛知県東海市東畑遺跡等試掘調査報告』
  - 3 立松彰・永井伸明 2004年『愛知県東海市畑間遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会
  - 4 永井伸明・宮澤浩司 2007年『伊勢湾を望む海辺の遺跡—東畑遺跡等発掘調査概報—』『研究報告とうかい』創刊号 東海市教育委員会
  - 5 宮澤浩司 2009年『伊勢湾を望む海辺の遺跡(2)—平成19年度畑間・東畑遺跡発掘調査の概要—』『研究報告とうかい』第2号 東海市教育委員会
  - 6 棚山秀穂・宮澤浩司ほか 2009年『畑間・東畑遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会
  - 7 有馬啓介・宮澤浩司ほか 2012年『畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会
  - 8 箕和也・宮澤浩司ほか 2012年『畑間・東畑遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会
  - 9 坂野俊成・宮澤浩司ほか 2013年『畑間・東畑・龍雲院遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会
  - 10 箕和也・宮澤浩司ほか 2014年『畑間・東畑遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会
  - 11 永井伸明ほか 2014年『畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告—平成11～19年度調査』東海市教育委員会
  - 12 中村毅・宮澤浩司ほか 2015年『畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会
  - 13 坂野俊成・宮澤浩司ほか 2016年『畑間・東畑遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会
  - 14 丹生泰雪・宮澤浩司ほか 2017年『畑間遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会
- 遺物の年代観・用語等
- 15 愛知県史編さん委員会編 2003年『資料編2 考古2 弥生』愛知県
  - 16 愛知県史編さん委員会編 2005年『資料編3 考古3 古墳』愛知県
  - 17 愛知県史編さん委員会編 2010年『資料編4 考古4 飛鳥～平安』愛知県
  - 18 愛知県史編さん委員会編 2017年『資料編5 考古5 鎌倉～江戸』愛知県
  - 19 愛知県史編さん委員会編 2007年『別編 窯業2 中世・近世瀬戸系』愛知県
  - 20 愛知県史編さん委員会編 2012年『別編 窯業3 中世・近世常滑系』愛知県
  - 21 石黒立人・加納俊介編 2002年『弥生土器の様式と編年』東海編』木耳社
  - 22 石田茂作 1977年『仏教考古学論攷 五 仏具編』思文閣出版
  - 23 考古学フォーラム編 1996年『鍋と裏 そのデザイン』考古学フォーラム
  - 24 考古学フォーラム編 2010年『東海土器製塩研究』考古学フォーラム
  - 25 中世土器研究会編 1995年『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
  - 26 中野政樹編 1969年『和鏡』日本の美術42 至文堂
  - 27 中野晴久 2013年『中世常滑窯の研究』愛知学院大学学位請求論文
  - 28 藤沢良祐 2008年『中世常滑戸窯の研究』高志書院
  - 29 山崎信二 2000年『中世瓦の研究』奈良文化財研究所
- 銭貨・大量出土銭
- 30 坂詰秀一編 2002年『出土銭貨研究の最前線』季刊考古学第78号 雄山閣
  - 31 櫻木晋一 2015年『貨幣考古学の世界』ニューサイエンス社
  - 32 出土銭貨研究会編 1996年『出土銭貨』第5号 出土銭貨研究会
  - 33 出土銭貨研究会編 1997年『出土銭貨』第8号 出土銭貨研究会
  - 34 出土銭貨研究会編 1999年『出土銭貨』第12号 出土銭貨研究会

- 35 鈴木公雄 1999年『出土銭貨の研究』東京大学出版会
- 36 永井久美男編 1994年『中世の出土銭』兵庫理蔵銭調査会
- 37 永井久美男編 1996年『中世の出土銭・補遺1』兵庫理蔵銭調査会
- 38 永井久美男 2002年『新版 中世出土銭の分類図版』高志書院
- 39 歴史学研究会編 1999年『越境する貨幣』青木書店
- 考古学・歴史全般
- 40 愛知県史編さん委員会編 2001年『愛知県史 資料編8 中世1』愛知県
- 41 愛知県史編さん委員会編 2016年『通史編1 原始・古代』愛知県
- 42 網野善彦 1991年『日本中世土地制度史の研究』塙書房
- 43 網野善彦・石井進・稲垣泰彦・永原慶二編 1989年『荘園入門 講座日本荘園史1』吉川弘文館
- 44 上村喜久子 2012年『尾張の荘園・国衙領と熱田社』岩田書院
- 45 宇野隆夫 2001年『荘園の考古学』青木書店
- 46 大山喬平 1978年『日本中世農村史の研究』岩波書店
- 47 小野正敏編 2001年『図解・日本の中世遺跡』東京大学出版会
- 48 大府市誌編さん委員会 1986年『大府市誌』大府市
- 49 小山靖憲編 1987年『絵図にみる荘園の世界』東京大学出版会
- 50 金田章裕 1993年『微地形と中世村落』吉川弘文館
- 51 木村茂光 1992年『日本古代・中世畠作史の研究』校倉書房
- 52 考古学フォーラム編 2002年『東海の中世集落を考える』考古学フォーラム
- 53 坂詰秀一編 1992年『中世を考古学する』季刊考古学第39号 雄山閣
- 54 佐々木銀弥 1964年『荘園の商業』吉川弘文館
- 55 新修名古屋史編集委員会編 1997年『新修名古屋史 第一巻』名古屋市
- 56 新修名古屋史編集委員会編 1998年『新修名古屋史 第二巻』名古屋市
- 57 荘園史研究会編 2013年『荘園史研究ハンドブック』東京堂出版
- 58 高橋学 2003年『平野の環境考古学』古今書院
- 59 東海市史編さん委員会編 1990年『東海市史 通史編』東海市
- 60 知多市誌編さん委員会編 1981年『知多市誌 本文編』知多市
- 61 永原慶二 1998年『荘園』吉川弘文館
- 62 半田市誌編さん委員会編 1989年『半田市誌』半田市
- 63 藤本元啓 2003年『中世熱田社の構造と展開』続群書類従完成会
- 64 横須賀町史編纂委員会編 1969年『横須賀町史』横須賀町



# 付論

## 自然科学分析

- 付論1 大量出土銭A（古瀬戸三耳壺）内部出土の板状材の分析
- 付論2 大量出土銭壺内の繊維片の同定
- 付論3 金属製品の蛍光X線分析



## 付論1 大量出土銭A(古瀬戸三耳壺)内部出土の板状材の分析

藤根 久・竹原弘展(パレオ・ラボ)

## 1. はじめに

畑間遺跡は、東海市大田町地内の伊勢湾に面した砂地上に広がる弥生時代から中世を中心とした遺跡である。調査では、大量の銭貨が納められた中世(鎌倉～室町時代)の陶器壺(古瀬戸と常滑焼)が2点出土した。このうち、古瀬戸壺(三耳壺)の中から板状の物質が検出された。ここでは、この材質を調べるために、実体顕微鏡観察と蛍光X線分析を行った。

## 2. 試料と方法

試料は、古瀬戸壺(三耳壺)から出土した板状材1点である。

試料を実体顕微鏡で観察した後、粘土部分の蛍光X線分析を行った。試料は、マイラーフィルムのホルダに入れて測定した。分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製エネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200VXを使用した。装置は、X線管が最大50kV、1000 $\mu$ Aのロジウム(Rh)ターゲット、X線照射径が8mmまたは1mm、X線検出器はSDD検出器(Vortex)である。検出可能元素はナトリウム(Na)～ウラン(U)であるが、軽元素の感度は蛍光X線分析装置の性質上若干低い。測定条件は、管電圧・一次フィルタの組み合わせが15kV(一次フィルタ無し)・50kV(一次フィルタPb測定用、Cd測定用)の3条件で、測定時間は各条件100～300s、管電流自動設定、照射径8mm、試料室内雰囲気真空に設定した。定量分析は、酸化物の形で算出し、標準試料を用いないファンダメンタルパラメータ法(FP法)による半定量分析を行った。

## 3. 結果および考察

板状の蓋は、炭化植物遺体またはその痕(葉身の一部)が随所に含まれる灰黄色(2.5Y 6/2)の粘土である。この板状粘土は厚さ5mm前後で、炭化植物遺体と粘土が互層をなした層状粘土である(図版1-2～8)。また、この板状粘土は、比較的固結しているが、未焼成の粘土である。

粘土部分の蛍光X線分析では、ナトリウム(Na<sub>2</sub>O)、マグネシウム(MgO)、アルミニウム(Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)、ケイ素(SiO<sub>2</sub>)、リン(P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>)、カリウム(K<sub>2</sub>O)、カルシウム(CaO)、チタン(TiO<sub>2</sub>)、マンガン(MnO)、鉄(Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)、銅(CuO)、亜鉛(ZnO)、ルビジウム(Rb<sub>2</sub>O)、ストロンチウム(SrO)、イットリウム(Y<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)、ジルコニウム(ZrO<sub>2</sub>)、バリウム(BaO)、鉛(PbO)が検出された(表2)。

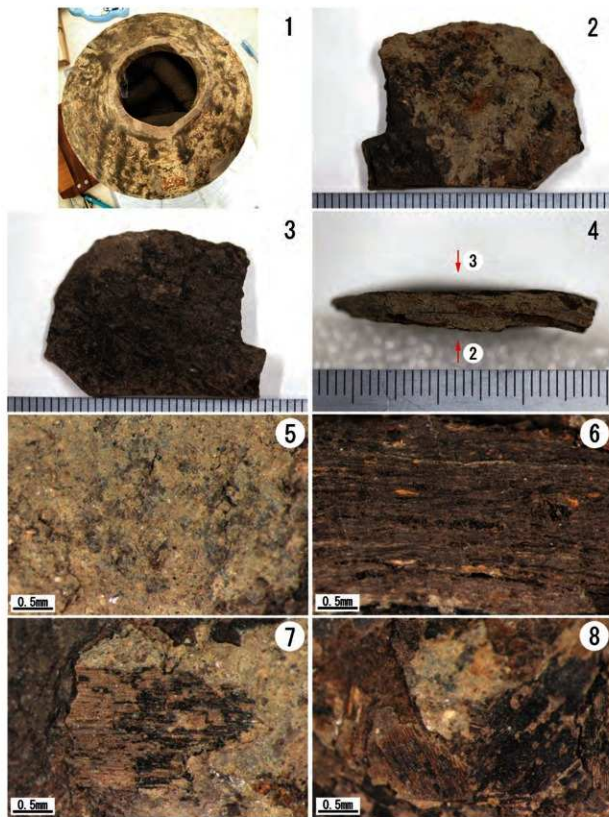
このうち、アルミニウム(Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)が23.52%検出されているため、粘土分が多いと推定される。なお、銅(CuO)が0.52%、鉛(PbO)が0.18%含まれていたが、これらは自然の堆積物には含まれない元素であり、壺内の古銭の成分による汚染と考えられる。

遺跡の東側には大府丘陵が位置し、新第三紀鮮新世の矢田川累層が分布する(図1;凡例Y1およびY2)。坂本ほか(1986)によると、未固結の砂層とシルト層とが数mmごとの厚さで繰り返す互層からなる。シルト層は灰白色・塊状で、時に植物破片を多く含んで暗褐色を呈したり、亜炭層を挟んだりする。

検討した板状の蓋は、炭化植物遺体と粘土が互層をなした層状粘土(またはシルト質粘土)であり、周辺の丘陵に分布する矢田川累層の剥離し易い板状粘土をそのまま利用したと考えられる。

表1 蛍光X線半定量分析結果(重量%)

分析No.	分析試料	SiO <sub>2</sub>	MgO	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O	CaO	TiO <sub>2</sub>	MnO	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	CuO	ZnO	Rb <sub>2</sub> O	SrO	Y <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	ZrO <sub>2</sub>	BaO	PbO	合計
1	灰黄色粘土	2.03	0.60	23.52	63.80	0.74	2.27	1.03	0.74	0.29	3.68	0.52	0.01	0.02	0.01	0.01	0.03	0.02	0.18	100.00



図版1 古瀬戸壺（三耳壺）と板状蓋の实体顕微鏡写真  
1. 古瀬戸壺 2. a面 3. b面 4. 断面 5. 粘土表面（a面） 6. 板状蓋の断面  
7-8. 炭化植物遺体痕（a面）

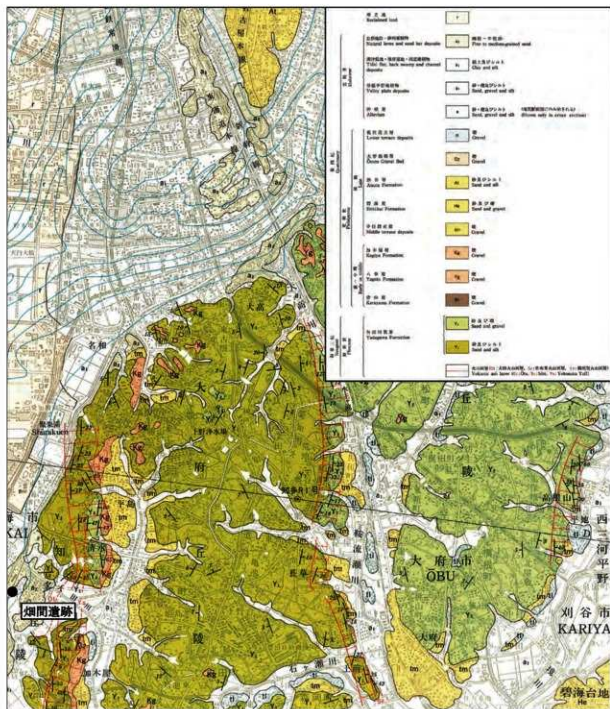


図1 畑間遺跡と周辺の地質  
(坂本ほか (1986) 名古屋南部地域の地質 (5万分の1地質図幅) を編集)

引用文献

中井 泉編 (2005) 蛍光X線分析の実際. 242p, 朝倉書店.

坂本 亨・高田康秀・桑原 徹・糸魚川淳二 (1986) 名古屋南部地域の地質. 地域地質研究報告 (5万分の1地質図幅), 55p, 地質調査所.

## 付論2 大量出土銭壺内の繊維片の同定

小林克也 (パレオ・ラボ)

### 1. はじめに

期間遺跡から出土した大量出土銭内部から抽出した繊維片の同定を行なった。

### 2. 試料と方法

試料は、大量出土銭A(古瀬戸三耳壺)から出土した繊維片(試料No.1:図版1-1)と、大量出土銭Bの常滑壺から出土した繊維片(試料No.2:図版1-2)の2点である。

繊維片の同定は、まず試料を乾燥させ、材の横断面、縦断面について、カミソリと手で断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡(KEYENCE社製 VE-9800)にて検鏡および写真撮影を行なった。

### 3. 結果

同定の結果、繊維片はいずれも単子葉植物のイネ科であった。

次に、同定された材の特徴を記載し、図版に走査型電子顕微鏡写真を示す。

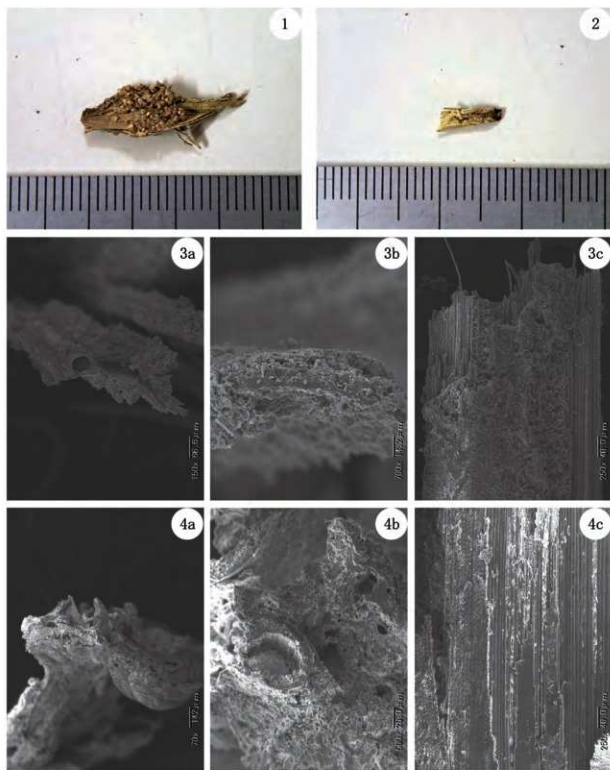
#### (1) イネ科 Gramineae 図版1 3a-3c(No.1)、4a-4c(No.2)

向軸側の原生木部、その左右の2個の後生木部、背軸側の篩部の三つで構成される維管束が散在する単子葉植物の程である。維管束の配列は不整中心柱となる。維管束鞘の細胞は比較的薄い。

イネ科はタケ亜科やキビ亜科など7亜科がみられる単子葉植物であるが、対照標本が少なく、種の同定までには至っていない。

### 4. 考察

繊維片は、いずれもイネ科であった。イネ科植物の茎を燃って紐を作り、銭指紐として利用したと考えられる。



図版1 畑間遺跡出土の絨指紐の試料写真・走査型電子顕微鏡写真

1. 同定試料 (No. 1)、2. 同定試料 (No. 2)、3a-3c. イネ科 (No. 1)、4a-4c. イネ科 (No. 2)

a: 横断面、b: 横断面拡大、c: 縦断面

## 付論3 金属製品の蛍光X線分析

竹原弘展 (パレオ・ラボ)

### 1. はじめに

2地点から出土した、金属製品(銭貨・独結杵・和鏡)の蛍光X線分析を行い、その材質を検討した。

### 2. 試料と方法

分析対象は、銭貨20点と和鏡片1点、独結杵1点である。分析は、非破壊で錆の上から測定した。分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV、1000 $\mu$ Aのロジウム(Rh)ターゲット、X線照射径が8mmまたは1mm、X線検出器はSDD検出器である。また、複数の一次フィルタが内蔵されており、適宜選択、挿入することでS/N比の改善が図れる。測定条件は、管電圧50kV、一次フィルタ・測定時間(s)の組み合わせがPb測定用・500s、Cd測定用・1000sの2条件、管電流自動設定、照射径8mm、試料室内雰囲気大気に設定した。定量分析は、MBH Analytical社の32X LB14(batch A)を用いて補正したファンダメンタル・パラメータ法(FP法)による半定量分析を装置付属ソフトを用いて行った。

なお、今回行った分析は、錆の上から非破壊で測定する分析である。銅合金製品の腐食は均一には進行せず、化学組成も大きく変化し得るため、今回得られた結果は厳密な値として比較検討すべきではなく、おおまかな、定性的な結果としてとらえる必要がある。

### 3. 結果

表1にFP法による半定量分析の結果を示す。アルミニウム(Al)、ケイ素(Si)、鉄(Fe)といった、表面の汚れに大きく影響される元素を除くと、ニッケル(Ni)、銅(Cu)、亜鉛(Zn)、ヒ素(As)、銀(Ag)、スズ(Sn)、アンチモン(Sb)、金(Au)、水銀(Hg)、鉛(Pb)、ビスマス(Bi)が検出された。

[銭貨]

(分析No.1～分析No.20)

いずれも銅(Cu)、スズ

(Sn)、鉛(Pb)が主に検出され、Cu-Sn-Pb系の青銅製と考えられる。分析No.6の開元通宝と分析No.20の文久永宝はスズ(Sn)がやや少ないが、全体的に銅(Cu)が比較的少なく、スズ(Sn)と鉛(Pb)が多い傾向がみられた。ただし、上述の通り非破壊分析であるため、これらの傾向が、銭貨本来の化学組成によるものか、腐食の影響によるものかは不明である。銅(Cu)、スズ(Sn)、鉛(Pb)以外の元素では、

表1 半定量分析結果(mass%)

分析No.	銭種・器種 分析種	Cu		Sn	Pb	As	Ni		Zn	Ag	Sb	Au	Hg	Bi
		K $\alpha$	K $\alpha$	L $\beta$	K $\beta$	K $\alpha$	K $\alpha$	K $\alpha$	K $\alpha$	K $\alpha$	L $\alpha$	L $\alpha$	L $\alpha$	
3	1 開元通宝	34.30	28.89	36.01	tr	0.04	—	0.08	0.20	—	—	0.48		
4	2 開元通宝	45.87	23.24	29.41	0.50	0.09	—	0.23	0.43	0.12	—	0.11		
5	3 開元通宝	38.80	6.32	49.59	2.51	0.08	—	0.41	0.78	—	—	1.51		
12	4 皇宋通宝	40.09	21.34	38.12	tr	0.04	—	0.18	0.05	—	—	0.17		
13	5 皇宋通宝	29.42	24.87	45.19	tr	0.02	—	0.09	0.07	—	—	0.33		
14	6 皇宋通宝	42.78	20.28	35.85	tr	—	—	0.04	0.09	—	—	0.96		
18	7 熙寧元宝	36.32	34.40	28.87	tr	—	—	0.18	0.05	0.08	—	0.10		
20	8 熙寧元宝	33.27	25.87	39.95	tr	0.02	0.32	0.01	0.14	—	—	0.42		
21	9 熙寧元宝	31.62	25.72	41.82	0.16	0.02	—	0.17	0.03	—	0.14	0.31		
24	10 元豊通宝	54.83	13.48	31.30	0.08	0.02	—	0.10	0.02	—	0.03	0.13		
27	11 元豊通宝	40.27	21.72	37.88	tr	—	—	0.02	0.02	—	—	0.08		
28	12 元豊通宝	38.24	21.25	40.13	tr	—	—	0.18	0.10	—	—	0.11		
30	13 元祐通宝	36.12	19.30	44.11	tr	—	—	0.14	0.21	—	—	0.12		
31	14 元祐通宝	37.60	19.83	41.28	tr	0.02	—	0.18	0.71	—	—	0.38		
32	15 元祐通宝	39.89	22.47	37.09	tr	—	—	0.22	0.17	—	—	0.17		
37	16 永楽通宝	30.04	23.67	45.33	tr	0.02	—	0.17	0.45	—	—	0.33		
41	17 永楽通宝	30.86	15.65	52.74	tr	0.02	—	0.09	0.31	—	—	0.32		
44	18 永楽通宝	55.77	10.21	33.52	tr	0.02	—	0.08	0.23	—	—	0.16		
49	19 宣徳通宝	34.05	20.97	44.00	tr	0.03	—	0.18	0.46	—	—	0.31		
52	20 文久永宝	64.32	2.84	30.72	0.98	0.02	—	0.08	1.04	—	—	—		
21	鏡片 鏡面 背面	53.39	32.63	8.03	4.59	0.01	—	0.29	0.55	0.08	0.19	0.24		
		53.55	34.16	6.45	4.66	0.02	—	0.29	0.55	0.08	—	0.24		
22	独結杵	26.69	0.47	69.91	1.88	0.02	—	0.78	0.09	—	—	0.15		

※tr:痕跡量



ヒ素 (As)、ニッケル (Ni)、銀 (Ag)、アンチモン (Sb)、ビスマス (Bi) が、ほとんどの試料から検出された。

分析 No.5 の開元通宝からは、微量の金 (Au) が検出された。

分析 No.6 の開元通宝は、上述の通り、スズ (Sn) がやや少ない一方、ヒ素 (As)、ビスマス (Bi) がやや多く検出された。

分析 No.7 と分析 No.8 の熙寧元宝からは、微量の亜鉛 (Zn) が検出された。分析 No.9 の熙寧元宝と分析 No.15 の元豊通宝からは、微量の水銀 (Hg) が検出されたが、水銀 (Hg) は铸造品には通常含まれない物質であるため、銭貨自体の材質に由来しないと考えられる。

江戸時代の銭貨である分析 No.20 の文久永宝は、スズ (Sn) が少ない一方、ヒ素 (As) とアンチモン (Sb) がやや多く検出された。

#### [和鏡片] (分析 No.21)

分析 No.21 の和鏡片からは、銅 (Cu)、スズ (Sn)、鉛 (Pb)、ヒ素 (As) が主に検出され、Cu-Sn-Pb-As 系の青銅製品と考えられる。微量成分としては、ニッケル (Ni)、銀 (Ag)、アンチモン (Sb)、ビスマス (Bi) に加え、金 (Au) が検出されたのが特徴的であった。また、鏡面からは、鏡背面では検出されなかった水銀 (Hg) が微量ながら検出された。鏡面の水銀 (Hg) は、鏡磨による鏡鍍の痕跡である可能性がある。

#### [独鋳杵] (分析 No.22)

分析 No.22 の独鋳杵は、スズ (Sn) は微量で、銅 (Cu)、鉛 (Pb)、ヒ素 (As) が主に検出され、Cu-Pb(As) の銅合金製と考えられる。ほかに、微量のニッケル (Ni)、銀 (Ag)、アンチモン (Sb)、ビスマス (Bi) が検出された。

中世の密教法具については、宮城県郷主内遺跡出土遺物の分析例があるが(松井, 2001)、いずれもスズ (Sn) を多く含有している。両分析とも非破壊分析ではあるが、郷主内遺跡の遺物は、スズ (Sn) をほとんど含まない今回の独鋳杵とは特徴が異なると推定される。

#### 4. おわりに

畑間遺跡から出土した、主に中世の金属製品の材質を分析した結果、銭貨 20 点は概ね Cu-Sn-Pb 系の青銅製、和鏡片は Cu-Sn-Pb-As 系の青銅製、独鋳所は Cu-Pb(As) の銅合金製と考えられた。

#### 引用・参考文献

五十川伸矢 (1999) 越中水見の鏡磨道具と鏡磨の歴史. 五十川伸矢編「鑄造遺跡出土遺物による日本歴史時代の鏡製作技術の復原研究」: 21-32. 京都橘女子大学.

岩崎住枝・網野善彦・高橋喜一・塩村耕校注 (1993) 七十一番職人歌合・新撰狂歌集・古今夷曲集. 新日本古典文学大系, 61, 621p. 岩波書店.

松井敏也 (2001) 郷主内遺跡出土密教法具の蛍光 X 線分析法による材質分析. 岩見和泰編「名生館遺跡ほか—郷主内遺跡」: 131-134. 宮城県教育委員会.

中井 泉編 (2005) 蛍光 X 線分析の実際. 242p. 朝倉書店.

西本右子・佐々木稔 (2002) 公鑄銭・模鑄銭の化学分析. ふんせき, 10, 585-586.

鈴木菜三編 (1998) 新装版日本職人辞典. 359p. 東京堂出版.



# 遺構一覽表

## ・遺構一覽表凡例

座標のグリッドは主たる位置を示す。

長軸、短軸、深さの単位はcmである。

( ) で記した数値は調査区外に続くものなど、調査時に計測できた部分の数値である。

平面形状・断面形状は下記の図による。

埋土と出土遺物は主たるものを記した。

時期は下記の本遺跡の時期区分で記した。

8地点は遺構がなかったため、表も無しとした。

断面形状



平面形状



時期区分表

時期	時代・土器型式
I	1 縄文時代晩期以前
	2 縄文時代晩期末～弥生時代初頭
	3 弥生時代前期（樫王式期～水神平式期）
II	1 弥生時代中期前半（岩滑式期）
	2 弥生時代中期後半（貝田町式・瓜郷式期～凹線紋系・古井式期）
III	1 弥生時代後期（八王子古宮式期～山中式期）
	2 弥生時代終末期～古墳時代前期（廻間式期～松河戸Ⅰ式期）
	3 古墳時代中期（松河戸Ⅱ式期～宇田式期）
IV	1 古墳時代後期～終末期（東山10号窯式期～東山44号窯式期）
	2 奈良時代（東山50号窯式期～黒笹14号窯式期）
	3 平安時代前期（黒笹90号窯式期～東山72号窯式期）
V	1 平安時代後期（山茶碗第2～4型式期）
	2 鎌倉時代（山茶碗第5～7型式期・常滑窯3～6a型式期）
	3 鎌倉時代末～室町時代前期（山茶碗第8～9型式期）
	4 室町時代中期（山茶碗第10～11型式期）
	5 室町時代後期（瀬戸大窯式期）
VI	江戸時代



平成28年度(2016年)畑間道路1地点(HM16-1)遺構一覧表

番号	記号	グリッド	発見	埋藏	深さ	平面形状	断面形状	出土物	時期	備考
1001	SK	BE17m	102	45	27	楕円形	溝型	暗赤褐色(2.5Y3.2)中粒砂	V	近辺埋没はか
1002	SP	BE17m	43	33	21	円形	溝型	暗褐色(10YR3.4)中粒砂 V層含む	不明	無し
1003	SK	BE17m	60	70	13	楕円形	溝型	褐色(10YR4.4)中粒砂	V	山笠塚はか
1004	SK	BE17	118	75	11	不明	溝型	にぶい濃褐色(10YR5.4)中粒砂	V	土層部
1005	SK	BE17	62	(82)	16	不明	溝型	褐色(10YR4.4)中粒砂	不明	無し
1006	SP	BE17	(82)	61	9	楕円形	溝型	暗褐色(10YR3.3)中粒砂	V	近辺埋没
1007	SP	BE17	37	30	15	楕円形	溝型	にぶい濃褐色(10YR4.3)中粒砂	V	山笠塚
1008	SP	BE17	53	34	18	楕円形	溝型	にぶい濃褐色(10YR4.3)中粒砂	V	常置機
1009	SP	BE17	46	40	27	楕円形	溝型	暗褐色(10YR3.4)中粒砂	不明	無し
1010	SK	BE16	114	(27)	35	不明	溝型	にぶい濃褐色(10YR4.2)中粒砂	V	山笠塚
1011	SK	BE17	78	75	53	円形	溝型	にぶい濃褐色(10YR4.3)中粒砂	V	山笠塚はか
1012	SD	BE16A	(151)	35	12	直線状	溝型	にぶい濃褐色(10YR4.3)中粒砂	V	山笠塚 近辺埋没
1013	SP	BE16	70	64	26	円形	溝型	暗褐色(10YR3.3)中粒砂	V	山笠塚
1014	SP	BE16	52	(41)	11	円形	溝型	にぶい濃褐色(10YR4.3)中粒砂	不明	不明小片
1015	SP	BE16A	31	22	38	円形	溝型	褐色(10YR4.4)中粒砂	不明	無し
1016	SP	BE16A	41	27	14	円形	溝型	にぶい濃褐色(10YR4.2)中粒砂	不明	山笠塚はか
1017	SK	BE16A	82	79	23	円形	溝型	褐色(10YR4.4)中粒砂	V	山笠塚はか
1018	SP	BE16A	61	60	18	円形	溝型	褐色(10YR4.4)中粒砂	不明	無し
1019	SP	BE16	52	33	18	楕円形	溝型	褐色(10YR4.6)中粒砂	V	山笠塚 土層部はか
1020	SK	BE16	116	32	19	長楕円形	溝型	暗褐色(10YR3.3)中粒砂	V	常置機はか
1021	SK	BE16A	139	82	12	不整形	溝型	暗褐色(10YR3.3)中粒砂 貝殻片大量を含む	V	山笠塚 常置機 灰層埋没
1022	SK	BE16A	(794)	(228)	23	不整形	溝型	にぶい濃褐色(10YR4.2)細粒砂 貝殻片含む	V	山笠塚
1023	SK	BE16	70	47	20	楕円形	溝型	にぶい濃褐色(10YR4.3)中粒砂	V	山笠塚はか
1024	SP	BE16	51	42	58	不明	溝型	にぶい濃褐色(10YR4.3)中粒砂	V	山笠塚はか
1025	SP	BE16A	52	39	12	円形	溝型	にぶい濃褐色(10YR4.3)中粒砂	不明	無し
1026	SP	BE16A	49	40	10	円形	溝型	にぶい濃褐色(10YR4.3)中粒砂	不明	無し
1027	SK	BE16	(136)	66	16	長楕円形	溝型	にぶい濃褐色(10YR4.3)中粒砂	V	不明小片(近辺分)
1028	SP	BE16A	46	27	13	楕円形	溝型	にぶい濃褐色(10YR4.3)中粒砂	V	不明小片(近辺分)
1029	SP	BE16A	39	20	14	楕円形	溝型	にぶい濃褐色(10YR4.3)中粒砂	不明	不明小片
1030	SD	BE16A	—	—	—	直線状	溝型	黄7層砂	V	山笠塚はか
1031	SK	BE15	(32)	—	15	不明	溝型	暗褐色(2.5Y2.0)中粒砂 V層含む	不明	無し
1032	SK	BE13	109	91	24	円形	溝型	オリーブ褐色(2.5Y4.4)中粒砂 V層含む	V	山笠塚 常置機
1033	SP	BE17A	43	31	33	円形	溝型	暗褐色(10YR3.4)中粒砂	V	山笠塚はか
1034	SP	BE16A	50	30	21	楕円形	溝型	にぶい濃褐色(10YR4.3)中粒砂	V	山笠塚 近辺埋没はか
1035	SP	BE16A	43	37	14	円形	溝型	暗褐色(10YR3.4)中粒砂	V	無し
1036	SK	BE16A	56	(48)	19	不明	溝型	明黄褐色(10YR6/6)粗粒砂(V層)と灰黄褐色(10YR4.2)中粒砂(重層)	不明	無し
1037	SP	BE16	55	33	19	不明	溝型	暗褐色(10YR3.4)中粒砂 V層含む	不明	無し
1038	SP	BE17	52	44	22	円形	溝型	にぶい濃褐色(10YR4.3)中粒砂	V	山笠塚
1039	SP	BE17	41	(10)	13	不明	溝型	褐色(10YR4.4)中粒砂	不明	無し
1040	SD	BE12	—	—	—	直線状	溝型	黄8層砂	V	土層に近辺埋没はか

番号	記号	フリット	異種	埋込	深さ	平顔形状	断面形状	埋土	出土場所	時期	備考
1041	SK	8E17A	(96)	21	10	楕円形	扇型	黒褐色 (10YR5/2) 中粒砂	山形縄 須部快 芝田海岸	V	
1042	SK	8E14A	104	6(4)	25	圓丸方形	扇型	灰青色 (10YR5/2) 中粒砂 しまり砂	無し	不明	
1043	SP	8E16A	34	34	14	円形	扇型	にぶい濃褐色 (10YR4/2) 中粒砂 V埋込	無し	不明	
1044	SP	8E16A	31	29	20	円形	扇型	にぶい濃褐色 (10YR4/2) 中粒砂	山形縄ほか	不明	
1045	SP	8E10m	59	57	51	円形	扇型	暗褐色 (10YR3/2) 中粒砂	山形縄ほか	不明	
1046	SK	8E10m	98	81	16	円形	扇型	暗褐色 (10YR3/2) 中粒砂 V埋込	山形縄 常盤快ほか	V	
1047	SK	8E20m	78	61	35	楕円形	扇型	暗褐色 (10YR3/2) 中粒砂	山形縄 常盤快ほか	V	
1048	SK	8E20m	84	65	26	楕円形	扇型	暗褐色 (10YR3/2) 中粒砂	山形縄 須部快ほか	V	
1049	SK	8E20m	107	87	23	楕円形	扇型	暗褐色 (10YR3/2) 中粒砂	山形縄 常盤快ほか	V	
1050	SD	8E20m	(293)	139	43	直線状	扇型	紫灰色砂混	山形縄 常盤快ほか	V	
1051	SP	8E10m	86	47	41	楕円形	扇型	暗褐色 (2.5Y4/2) 中粒砂	山形縄 土師部ほか	V	
1052	SP	8E10m	(40)	49	22	不明	扇型	にぶい濃褐色 (10YR5/4) 中粒砂	山形縄 土師部ほか	V	
1053	SP	8E10m	(43)	(43)	5	円形	扇型	褐色 (10YR4/4) 中粒砂	山形縄 土師部ほか	V	
1054	SP	8E10m	41	(33)	30	円形	扇型	褐色 (10YR4/4) 中粒砂	山形縄 土師部ほか	V	
1055	SP	8E10m	33	(25)	26	楕円形	扇型	にぶい濃褐色 (10YR4/3) 中粒砂	山形縄 弥生土層	V	
1056	SP	8E10m	33	29	34	円形	U字型	暗褐色 (10YR3/3) 中粒砂	山形縄 常盤快	V	
1057	SK	8E20m	(55)	(27)	13	不明	扇型	暗褐色 (10YR3/4) 中粒砂	無し	不明	
1058	SP	8E17	63	43	11	楕円形	扇型	にぶい濃褐色 (10YR4/2) 中粒砂 V埋込	山形縄 土師部ほか	不明	
1059	SP	8E11m	47	41	28	円形	扇型	暗褐色 (7.5YR3/2) 中粒砂	山形縄 土師部ほか	V	
1060	SK	8E11m	113	107	54	円形	V字型	紫灰色砂混	山形縄 土師部ほか	V	
1061	SD	8E11m	(209)	55	33	直線状	扇型	暗褐色 (2.5Y3/2) 中粒砂 焼上片含む	山形縄 須部快	V	
1062	SK	8E11m	(287)	(166)	8	不明	扇型	紫灰色砂混	山形縄 須部快	不明	
1063	SK	8E11m	93	60	40	楕円形	扇型	にぶい濃褐色 (10YR4/2) 中粒砂 焼上片少量含む	山形縄 土師部 須部快	V	
1064	SP	8E11m	47	36	35	円形	扇型	灰青色 (10YR4/2) 中粒砂	山形縄 土師部 須部快	V	
1065	SP	8E11m	48	(31)	33	不明	扇型	暗褐色 (2.5Y3/1) 細粒砂 V埋込	山形縄 土師部 須部快	V	
1066	SP	8E11m	72	54	25	円形	扇型	暗褐色 (10YR3/2) 中粒砂 焼上片含む	山形縄 須部快ほか	V	
1067	SP	8E11m	(27)	34	11	不明	扇型	暗褐色 (10YR3/2) 中粒砂	無し	不明	
1068	SP	8E11m	(50)	(30)	28	不明	扇型	にぶい濃褐色 (10YR4/3) 中粒砂	山形縄 土師部	V	
1069	SK	8E11m	86	(10)	21	不明	扇型	紫褐色 (2.5Y5/3) 中粒砂	山形縄 土師部	V	
1070	SP	8E11m	28	24	23	円形	扇型	灰青色 (10YR4/2) 中粒砂	山形縄 土師部	V	
1071	SP	8E11m	52	43	31	円形	扇型	暗褐色 (10YR3/2) 中粒砂	山形縄 須部快ほか	V	
1072	SK	8E10m	(155)	(110)	20	不明	扇型	暗褐色 (10YR3/2) 中粒砂	山形縄 須部快ほか	V	
1073	SP	8E11m	58	47	33	円形	扇型	灰青色 (10YR4/2) 中粒砂	山形縄 須部快ほか	V	
1074	SP	8E11m	41	31	15	円形	扇型	灰青色 (10YR4/2) 中粒砂	無し	不明	
1075	SP	8E11m	(25)	37	15	不明	扇型	灰青色 (10YR4/2) 中粒砂 V埋込	弥生土層ほか	不明	
1076	SP	8E11m	38	33	26	円形	扇型	オリーブ褐色 (2.5Y4/2) 中粒砂	山形縄 土師部	V	
1077	SP	8E11m	47	44	25	円形	扇型	暗褐色 (2.5Y4/2) 中粒砂	山形縄 土師部	V	
1078	SP	8E12i	58	(20)	25	円形	扇型	オリーブ褐色 (2.5Y3/2) 中粒砂	山形縄 須部快	V	
1079	SP	8E12i	32	27	9	円形	扇型	オリーブ褐色 (2.5Y4/2) 中粒砂	弥生土層	不明	
1080	SP	8E12i	30	34	23	円形	扇型	暗褐色 (2.5Y4/2) 細粒砂	無し	不明	
1081	SD	8E12i	(204)	33	4	直線状	扇型	暗褐色 (2.5Y4/2) 中粒砂 目取片含む	不明小片	不明	

番号	記号	ワリツド	員数	廻輪	深さ	平組形状	新組形状	埋土	出土箇所	時期	備考
1082	SX	8E131	(290)	(97)	44	4形	筒型	褐色 (10YR5/3) 中粒砂	山形 湯野 近所遺跡	M	
1083	SK	8E131	107	(40)	18	柳門形	筒型	褐色 (2.5Y3/1) 中粒砂	山形 湯野ほか	V	
1084	S.P	8E14 K	56	(20)	不明	4形	筒型	褐色 (10YR4/4) 中粒砂	無し	不明	
1085	S.P	8E11m	49	35	24	円形	筒型	灰青褐色 (10YR4/2) 中粒砂	山形 湯野ほか	V	
1086	S.P	8E11m	32	24	16	円形	筒型	褐色 (10YR4/4) 中粒砂 V層含む	山形 湯野ほか	V	
1087	S.P	8E11m	51	(22)	32	不明	筒型	オリーブ褐色 (2.5Y4/2) 中粒砂	山形 湯野ほか	V	
1088	S.P	8E10m	37	(27)	21	4形	筒型	灰青褐色 (10YR4/2) 中粒砂	山形 湯野ほか	V	
1089	S.P	8E10m	26	24	22	円形	筒型	に赤い黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂	無し	不明	
1090	S.P	8E20m	41	(28)	12	4形	筒型	褐色 (10YR5/4) 中粒砂	山形 湯野ほか	V	
1091	SD	8E20m	(328)	51	11	直線状	筒型	褐色 (10YR5/2) 中粒砂 V層含む	山形 湯野ほか	V	
1092	S.P	8E20m	56	40	41	円形	筒型	暗灰褐色 (2.5Y4/2) 中粒砂	無し	不明	
1093	S.P	8E30m	37	35	19	円形	筒型	灰青褐色 (10YR4/2) 中粒砂	無し	不明	
1094	S.P	8E30m	54	(27)	11	柳門形	筒型	灰青褐色 (10YR4/2) 中粒砂 V層含む	無し	V	
1095	SK	8E20m	68	53	24	柳門形	筒型	暗灰褐色 (2.5Y4/2) 中粒砂	山形 湯野ほか	V	
1096	S.P	8E30m	49	34	8	柳門形	筒型	灰青褐色 (10YR4/2) 中粒砂	山形 湯野ほか	V	
1097	S.P	8E30m	48	45	10	円形	筒型	に赤い黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂	山形 湯野ほか	V	
1098	S.P	8E10m	40	38	19	円形	筒型	明褐色 (10YR6/3) 中粒砂	山形 湯野ほか	V	
1099	S.P	8E10m	41	37	19	円形	筒型	明褐色 (7.5YR3/2) 中粒砂	山形 湯野ほか	V	
1100	SK	8E10m	(108)	(93)	24	4形	筒型	暗褐色 (10YR5/3) 中粒砂	山形 湯野ほか	V	
1101	S.P	8E10m	47	(30)	24	4形	筒型	褐色 (10YR4/4) 中粒砂	山形 湯野ほか	V	
1102	SK	8E10	(106)	(103)	22	4形	筒型	褐色 (10YR4/4) 中粒砂	山形 湯野ほか	V	
1103	S.P	8E11m	49	41	16	円形	筒型	に赤い黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂	山形 湯野ほか	V	
1104	S.P	8E11m	29	27	32	円形	筒型	明褐色 (10YR5/4) 中粒砂	山形 湯野ほか	V	
1105	S.P	8E11m	25	19	16	円形	筒型	明褐色 (10YR5/4) 中粒砂	山形 湯野ほか	V	
1106	S.P	8E11m	51	(33)	31	不明	筒型	に赤い黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂	山形 湯野ほか	V	
1107	S.P	8E11	42	35	42	円形	筒型	に赤い黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂	山形 湯野ほか	V	
1108	SK	8E11m	95	81	22	不明円形	筒型	に赤い黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂	山形 湯野ほか	V	
1109	欠座	---	---	---	---	---	---	---	---	---	
1110	S.P	8E131	39	(26)	4	4形	筒型	に赤い黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂	無し	不明	
1111	SK	8E20m	103	(61)	12	不明	筒型	黒褐色 (10YR3/2) 中粒砂	山形 湯野ほか	V	
1112	S.P	8E10m	(24)	23	11	不明	筒型	褐色 (10YR4/4) 中粒砂 V層含む	無し	不明	
1113	SK	8E10m	85	51	33	柳門形	筒型	褐色 (10YR5/2) 中粒砂 目取片含む	湯野跡	不明	
1114	S.P	8E10m	30	28	30	円形	筒型	褐色 (10YR4/4) 中粒砂 V層含む	山形 湯野ほか	V	
1115	S.P	8E11m	32	30	25	円形	筒型	褐色 (10YR4/4) 中粒砂 V層含む	無し	不明	
1116	S.P	8E10 K	56	42	47	円形	筒型	褐色 (10YR4/4) 中粒砂 V層含む	山形 湯野ほか	V	
1117	SK	8E17 K	87	77	29	円形	筒型	黄褐色 (10YR5/6) 中粒砂	山形 湯野ほか	V	
1118	SK	8E15 K	108	66	12	柳門形	筒型	黒褐色 (10YR2/1) 黒粒砂 目取片含む	山形 湯野ほか	V	
1119	SK	8E171	104	50	41	柳門形	筒型	に赤い黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂	無し	不明	
1120	SD	8E15 K	(356)	41	12	直線状	筒型	黒褐色 (10YR5/1) 黒粒砂	無し	不明	
1121	S.P	8E171	54	(27)	11	4形	筒型	に赤い黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂 V層含む	無し	不明	

番号	記号	フリット	異種	埋輪	深さ	平座形状	断面形状	埋土	出土位置	時期	備考
1122	S.P	8E16A	48	30	24	円形	筒型	にぶい溝埋込 (OYR84/3) 中転砂 V層含む	無し	不明	
1123	SD	8E15A	(50)	47	9	直線状	筒型	にぶい溝埋込 (OYR84/3) 中転砂 V層含む	無し	不明	
1124	S.P	8E16A	58	44	24	円形	筒型	埋込 (OYR84/6) 中転砂	無し	不明	
1125	SK	8E16A	55	46	14	円形	筒型	にぶい溝埋込 (OYR84/3) 中転砂 V層含む	無し	不明	
1126	SK	8E17I	83	(40)	14	不明	筒型	にぶい溝埋込 (OYR84/3) 中転砂 V層含む	無し	不明	
1127	SK	8E15A	(58)	55	12	不明	筒型	にぶい溝埋込 (OYR84/3) 中転砂	無し	不明	
1128	SK	8E14A	(91)	(77)	9	不明	筒型	埋込 (OYR84/4) 中転砂 V層含む	無し	不明	
1129	SK	8E10m	(61)	(83)	13	楕円形	筒型	埋込 (OYR83/2) 備転砂 にぶい溝埋込 (OYR84/3) 中転砂とV層含む	外生土層	不明	
1130	SD	8E13A	(476)	(82)	20	不明	筒型	にぶい溝埋込 (OYR85/4) 中転砂	山形溝 笠形埋込	V	
1131	SD	8E13A	166	61	21	直線状	筒型	灰色 (OY841) 中転砂	山形溝 外生土層	V	
1132	S.P	8E10m	30	26	15	円形	筒型	にぶい溝埋込 (OYR84/3) 中転砂	山形溝	V	
1133	欠番	---	---	---	---	---	---	---	---	---	
1134	SK	8E3m	70	49	25	円形	筒型	にぶい溝埋込 (OYR84/3) 中転砂	山形溝 土層埋込はか	V	
1135	S.P	8E10I	43	(25)	29	不明	筒型	にぶい溝埋込 (OYR84/3) 中転砂	山形溝埋込はか	V	
1136	S.P	8E11m	58	(30)	26	不明	筒型	にぶい溝埋込 (OYR84/3) 中転砂	山形溝埋込はか	V	
1137	S.P	8E12I	42	30	21	楕円形	筒型	埋込 (O25Y5/3) 中転砂	山形溝埋込はか	V	
1138	S.P	8E12I	40	36	20	楕円形	筒型	埋込 (O25Y5/3) 中転砂	無し	不明	
1139	S.P	8E10m	29	24	12	円形	筒型	にぶい溝埋込 (OYR84/3) 中転砂	無し	不明	
1140	SK	8E3m	55	36	(10)	円形	筒型	にぶい溝埋込 (OYR84/3) 中転砂	無し	不明	
1141	S.P	8E11m	43	(18)	20	不明	筒型	埋込 (OYR83/2) 中転砂	山形溝埋込はか	V	
1142	S.P	8E10m	29	26	12	円形	筒型	にぶい溝埋込 (OYR84/3) 中転砂	山形溝埋込はか	V	
1143	S.P	8E10m	(31)	28	16	不明	筒型	にぶい溝埋込 (OYR84/3) 中転砂	無し	不明	
1144	SK	8E11m	(94)	(30)	37	不明	筒型	にぶい溝埋込 (OYR84/3) 中転砂	山形溝 外生土層埋込はか	V	
1145	S.P	8E11m	56	46	13	円形	筒型	にぶい溝埋込 (OYR84/3) 中転砂 V層含む	不明小片	不明	
1146	SK	8E10m	---	---	---	---	---	埋込 (OYR82) 中転砂 V層含む	無し	不明	
1147	S.P	8E11m	32	(23)	26	円形	筒型	にぶい溝埋込 (OYR84/3) 中転砂	山形溝埋込はか	V	
1148	S.P	8E12I	(25)	(20)	28	円形	U字型	にぶい溝埋込 (OYR85/4) 転土層シルト	無し	不明	
1149	S.P	8E12I	45	45	12	円形	筒型	埋込 (O25Y5/3) 中転砂とV層の混土	無し	不明	
1150	SK	8E11m	287	(78)	10	不明	埋込 (OYR84/3) 中転砂	埋込 (OYR84/3) 中転砂	山形溝 土層埋込	不明	
1151	SK	8E10m	89	(32)	26	不明	筒型	にぶい溝埋込 (OYR84/3) 中転砂 V層含む	無し	不明	
1152	SK	8E10m	162	(148)	47	円形	筒型	埋込 (OYR84/3) 中転砂	山形溝 埋込埋込はか	V	
1153	SK	8E10m	(60)	(53)	7	不明	筒型	にぶい溝埋込 (OYR84/3) 中転砂	山形溝埋込はか	V	
1154	S.P	8E11m	30	28	23	円形	筒型	にぶい溝埋込 (OYR84/3) 中転砂	埋込 土層埋込	V	
1155	S.P	8E11m	(26)	23	20	不明	筒型	にぶい溝埋込 (OYR84/3) 中転砂	無し	不明	
1156	S.P	8E11m	48	42	18	円形	筒型	にぶい溝埋込 (OYR84/3) 中転砂	土層埋込	V	
1157	SK	8E16A	75	40	24	楕円形	筒型	にぶい溝埋込 (OYR84/3) 中転砂 V層含む	埋込 土層埋込	V	
1158	S.P	8E11m	37	32	22	円形	筒型	にぶい溝埋込 (OYR84/3) 中転砂	無し	不明	
1159	S.P	8E10m	(51)	(17)	6	楕円形	筒型	にぶい溝埋込 (OYR84/3) 中転砂	無し	不明	
1160	SK	8E10m	(104)	(84)	33	円形	筒型	埋込 (OYR84/3) 中転砂	山形溝 埋込埋込はか	V	
1161	S.P	8E10m	(45)	(16)	13	不明	筒型	にぶい溝埋込 (OYR84/3) 中転砂 V層含む	無し	不明	



番号	記号	クワット	異輪	埋輪	深さ	平面形状	断面形状	埋土	出土遺物	時期	備考
1162	S.P	8E10m	—	37	楕円形	筒型	—	に赤い黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂 V層含む	山茶碗	不明	
1163	SK	8E3m	(03)	(60)	円形	筒型	—	に赤い黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂 V層含む	不明小片	不明	
1164	S.P	8E10m	30	27	28	円形	筒型	に赤い黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂 V層含む	山茶碗ほか	V	
1165	S.P	8E11m	25	22	27	円形	筒型	灰黄褐色 (10YR4/2) 中粒砂	上銅器	V	
1166	SK	8E11m	(54)	47	20	楕円形	筒型	灰黄褐色 (10YR4/2) 中粒砂	無し	IV	
1167	S.P	8E11	28	23	10	円形	筒型	灰黄褐色 (10YR4/2) 中粒砂	山茶碗ほか	V	
1168	S.P	8E11	29	26	14	円形	筒型	灰黄褐色 (10YR4/2) 中粒砂	無し	不明	
1169	SK	8E10m	47	42	13	円形	筒型	灰黄褐色 (10YR4/2) 中粒砂	上銅器	IV	
1170	SK	8E171	65	(42)	23	不明	筒型	灰黄褐色 (10YR4/2) 中粒砂	上銅器	IV	
1171	欠産	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
1172	S.P	8E11	(25)	32	15	円形	筒型	黒褐色 (10YR3/2) 中粒砂	山茶碗ほか	V	
1173	S.P	8E11m	30	(15)	19	円形	筒型	に赤い黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂	無し	不明	
1174	S.P	8E11m	50	(30)	26	円形	筒型	オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 中粒砂	古瀬戸 土銅器	V	
1175	欠産	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
1176	SK	8E10m	(65)	—	3	不明	筒型	に赤い黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂 目録片含む	無し	不明	
1177	欠産	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
1178	S.P	8E17m	35	32	9	円形	筒型	褐色 (10YR4/4) 中粒砂 V層含む	無し	不明	
1179	S.P	8E17m	36	31	15	円形	筒型	褐色 (10YR4/4) 中粒砂 V層含む	無し	不明	
1180	SK	8E10m	(44)	—	11	不明	筒型	黒110号参照	土銅器	IV	
1181	欠産	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
1182	S.P	8E17m	31	30	16	円形	筒型	褐色 (10YR4/4) 中粒砂 V層含む	無し	不明	
1183	S.P	8E17m	(38)	62	12	円形	筒型	褐色 (10YR4/4) 中粒砂 V層含む	無し	不明	
1184	欠産	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
1185	S.P	8E10m	33	27	18	円形	筒型	に赤い黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂 V層含む	山茶碗 土銅器ほか	V	
1186	SK	8E16k	85	(72)	27	不明形	筒型	黒120号参照	赤土土器	不明	
1187	SK	8E12m	(60)	(30)	16	不明	筒型	に赤い黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂	無し	—	
1188	S.P	8E10m	43	41	25	円形	筒型	に赤い黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂	山茶碗 漆器類	V	
1189	S.P	8E10m	(10)	(12)	22	不明	筒型	黒褐色 (10YR2/2) 中粒砂	無し	不明	
1190	SK	8E11	79	(50)	33	楕円形	筒型	黒100号参照	不明小片	不明	
1191	SD	8E16l	(151)	149	15	不明	V字型	同底6号参照	無し	不明	
1192	SK	8E16l	(48)	(68)	20	不明	筒型	同底6号参照	足甲陶器	V	
1193	欠産	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
1194	SK	8E16l	—	—	—	不明	筒型	黒100号参照	無し	V	
1195	S.P	8E17m	(28)	48	11	円形	筒型	暗褐色 (10YR3/4) 中粒砂 V層含む	無し	不明	
1196	SK	8E16l	—	—	—	不明	筒型	同底5号参照	無し	不明	

平成28年度(2016年)畑船遺跡2地点(HM16-2) 遺構一覧表

※ 2007まで西区、2008～東区

番号	記号	グリッド	面積	種類	深さ	平面形状	断面形状	土質	出土遺物	時期	備考
2001	SK	H086	305	190	30	楕円形	曲型	褐色(10YR2/2) 細粒砂	山形織 須恵部ほか	不明	
2002	SK	H07q	(267)	37	5	4形	曲型	褐色(10YR4/4) 細粒砂	無し	VI	
2003	SK	H07r	(136)	79	31	4形	曲型	褐色(10YR2/3) 細粒砂 褐色(10YR4/3) 中粒砂 オリーブ褐色(2.5Y4/4) 中粒砂 V層含む	無し	不明	
2004	SP	H08r	44	(41)	11	円形	曲型	オリーブ褐色(2.5Y4/4) 中粒砂 V層含む	無し	不明	
2005	SP	H08q	30	(24)	12	円形	曲型	オリーブ褐色(2.5Y4/4) 中粒砂 V層含む	無し	不明	
2006	SP	H08g	43	(26)	9	円形	曲型	オリーブ褐色(2.5Y4/4) 中粒砂 V層含む	不明小片	不明	
2007	欠番	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
2008	SP	H08e	35	30	21	円形	曲型	オリーブ褐色(2.5Y4/4) 中粒砂 V層含む	無し	不明	
2009	SK	H08e	114	(65)	25	4形	曲型	褐色(2.5Y3/2) 中粒砂	須恵器	不明	
2010	SK	H08e	81	(50)	34	4形	曲型	第22号銅貨	弥生土器	II	
2011	SK	H08e	(114)	(88)	25	4形	曲型	にごり褐色(10YR4/3) 中粒砂	山形織 土師器 須恵部ほか	不明	
2012	SP	H08e	37	(34)	41	円形	曲型	オリーブ褐色(2.5Y4/4) 中粒砂 V層含む	須恵 須恵器	V	
2013	SP	H010a	46	30	15	円形	曲型	褐色(10YR4/4) 中粒砂	山形織部ほか	V	
2014	SP	H010a	(20)	27	27	円形	曲型	褐色(10YR4/4) 中粒砂 V層含む	無し	不明	
2015	SP	H010a	36	34	33	円形	曲型	褐色(10YR4/4) 中粒砂	山形織	不明	
2016	SK	H010a	82	59	62	円形	曲型	灰褐色(10YR4/2) 中粒砂	山形織 弥生土器	不明	
2017	SK	H010a	(73)	67	22	楕円形	曲型	明灰褐色(2.5Y4/2) 中粒砂	山形織部ほか	不明	
2018	欠番	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
2019	SP	H09c	47	(21)	34	円形	曲型	褐色(10YR2/3) 細粒砂	山形織	不明	
2020	SP	H09c	(43)	39	29	円形	曲型	褐色(10YR4/4) 中粒砂	山形織部ほか	V	
2021	SP	H09c	50	41	32	円形	曲型	褐色(10YR2/3) 細粒砂	無し	不明	
2022	SK	H011d	(134)	126	32	長方形	曲型	第24号銅貨	無し	VI	
2023	欠番	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
2024	SP	H011d	32	26	31	円形	曲型	褐色(10YR4/4) 中粒砂	無し	不明	
2025	SP	H011d	41	20	44	円形	曲型	にごり褐色(10YR5/4) 中粒砂	無し	不明	
2026	SP	H010a	39	(23)	15	円形	曲型	褐色(10YR4/4) 中粒砂	無し	不明	
2027	SP	H010c	35	(29)	22	円形	曲型	褐色(10YR4/4) 中粒砂	無し	不明	
2028	SP	H010c	48	44	24	円形	曲型	褐色(10YR4/4) 中粒砂	山形織 須恵器	V	
2029	欠番	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
2030	SK	H010c	(66)	(60)	25	4形	曲型	褐色(10YR2/4) 細粒砂	無し	不明	遺構(編號記)多組に出土
2031	SP	H010c	39	(23)	25	円形	曲型	褐色(7.5YR4/3) 細粒砂	無し	不明	
2032	SK	H010c	(55)	(49)	46	不明	曲型	土師器 褐色(7.5YR4/3) 中粒砂	土師器	不明	
2033	SK	H09c	103	(60)	41	4形	曲型	褐色(7.5YR4/3) 細粒砂	山形織 須恵器	V	
2034	SK	H09c	(64)	23	10	4形	曲型	褐色(2.5YR3/2) 細粒砂 焼土含む	無し	不明	
2035	SP	H09c	35	33	42	円形	曲型	にごり褐色(10YR4/3) 中粒砂	不明小片	不明	
2036	SK	H010c	25	22	35	円形	曲型	にごり褐色(10YR4/3) 中粒砂	山形織 土師器	不明	
2037	SK	H010c	76	21	29	楕円形	曲型	褐色(7.5YR4/3) 細粒砂	無し	不明	
2038	SK	H010c	29	24	17	円形	曲型	褐色(7.5YR4/3) 細粒砂	無し	不明	
2039	SK	H010c	72	44	37	楕円形	曲型	褐色(7.5YR3/3) 中粒砂	山形織	不明	

番号	記号	クワッド	規模	埋藏	深さ	平面形状	断面形状	出土遺物	時期	備考
2040	SK	0E10 c	208 (63)	71	不明	扇型	扇型	褐色 (10YR4/4) 中粒砂	不明	後期の遺構上の埋みか
2041	SP	0E10 c	36 (20)	16	円形	扇型	扇型	扇型 (10YR2/4) 中粒砂	不明	
2042	SK	0E10 c	133 (52)	11	不明	扇型	扇型	扇型 (10YR2/4) 中粒砂	不明	
2043	SP	0E10 c	46 (41)	52	円形	扇型	扇型	扇型 (10YR2/4) 中粒砂	不明	
2044	SK	0E11 d	135 (116)	29	円形	扇型	扇型	オリーブ褐色 (2.5Y4/2) 中粒砂	不明	埋みか
2045	SK	0E11 d	119 (83)	26	不明	扇型	扇型	褐色 (10YR4/4) 中粒砂	不明	
2046	SP	0E10 c	52	48	32	円形	扇型	扇型 (10YR2/4) 中粒砂	不明	
2047	穴蓋	---	---	---	---	---	---	---	---	---
2048	SK	0E10 c	(68)	28	39	不整形	扇型	扇型 (10YR2/4) 中粒砂	V	須磨 山茶屋ほか
2049	SP	0E06	34 (18)	12	円形	扇型	扇型	にみい黄褐色 (10YR4/2) 中粒砂	不明	
2050	SP	0E06	(48)	---	60	不明	U字型	にみい黄褐色 (10YR4/2) 中粒砂	不明	
2051	SK	0E09 c	127 (45)	39	不明	扇型	扇型	褐色 (7.5YR4/2) 粗粒砂	不明	
2052	SP	0E09 c	31	30	25	円形	扇型	褐色 (7.5YR4/2) 粗粒砂	不明	
2053	SK	0E10 c	77	52	33	楕円形	扇型	にみい黄褐色 (10YR4/2) 中粒砂	V	山茶 湯治快 須磨屋ほか
2054	SP	0E06	45	43	42	円形	扇型	褐色 (7.5YR4/2) 粗粒砂	不明	
2055	SP	0E10 c	32	30	14	円形	扇型	褐色 (7.5YR4/2) 粗粒砂	不明	
2056	SP	0E10 c	69	43	47	楕円形	扇型	褐色 (7.5YR4/2) 粗粒砂	V	山茶 須磨
2057	SP	0E10 d	42 (18)	16	円形	扇型	扇型	褐色 (10YR4/4) 中粒砂	不明	
2058	SP	0E10 d	48 (20)	33	円形	扇型	扇型	褐色 (10YR4/4) 中粒砂	不明	
2059	SP	0E09 c	(55)	(26)	25	不明	扇型	褐色 (7.5YR4/2) 粗粒砂	不明	
2060	SK	0E08	(63)	---	11	不明	扇型	扇型 (10YR2/3) 粗粒砂 目録付穴蓋に含む	V	山茶 湯治快ほか
2061	穴蓋	---	---	---	---	---	---	---	---	---
2062	SP	0E08	39	36	11	円形	扇型	オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 中粒砂 V層含む	不明	
2063	SP	0E07	66	42	19	円形	扇型	オリーブ褐色 (2.5Y4/2) 中粒砂	不明	
2064	SK	0E06	(100)	45	27	楕円形	扇型	オリーブ褐色 (2.5Y4/2) 中粒砂上にみい黄褐色 (10YR4/2) 中粒砂の上	不明	
2065	SK	0E07	(78)	(67)	36	不明	扇型	第229号型	II	弥生 須磨
2066	SP	0E06	(60)	35	40	楕円形	扇型	褐色 (10YR4/4) 中粒砂	V	山茶 弥生 上層
2067	SP	0E06	24	21	11	円形	扇型	オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 中粒砂 V層含む	不明	
2068	SP	0E06	30	29	18	円形	扇型	オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 中粒砂 V層含む	不明	
2069	SP	0E10 c	36	35	26	円形	扇型	にみい黄褐色 (10YR4/2) 中粒砂	不明	
2070	SP	0E10 c	60 (110)	28	楕円形	扇型	扇型	にみい黄褐色 (10YR4/2) 中粒砂	不明	
2071	SP	0E10 c	53	39	17	円形	扇型	にみい黄褐色 (10YR4/2) 中粒砂	不明	
2072	SP	0E10 c	34 (20)	44	円形	U字型	扇型	にみい黄褐色 (10YR4/2) 中粒砂	不明	
2073	SK	0E10 c	136	77	34	楕円形	扇型	にみい黄褐色 (10YR4/2) 中粒砂	不明	
2074	SK	0E10 c	80 (52)	42	不明	扇型	扇型	褐色 (7.5YR4/2) 粗粒砂	V	山茶 須磨 須磨
2075	SD	0E10 c	(130)	92	49	板敷状	扇型	褐色 (10YR4/4) 中粒砂	不明	不明片付
2076	SP	0E10 c	(26)	(14)	19	不明	扇型	にみい黄褐色 (10YR4/2) 中粒砂	不明	
2077	SK	0E10 c	(48)	(26)	13	不明	扇型	にみい黄褐色 (10YR4/2) 中粒砂	不明	
2078	SP	0E06	46	32	11	楕円形	扇型	褐色 (7.5YR4/2) 粗粒砂	不明	
2079	SP	0E10 d	30	28	17	円形	扇型	褐色 (10YR4/2) 中粒砂	不明	

番号	記号	フリット	異輪	環輪	深さ	平座形状	断面形状	理土	出土遺物	時期	備考
2080	SP	0E10c	29	37	33	円形	U字型	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂	山茶羹	不明	
2081	SP	0E10c	38	37	45	円形	U字型	灰褐色 (10YR4/2) 中粒砂 V層含む	無し	不明	
2082	SK	0E10c	56	54	21	円形	碗型	オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 中粒砂	無し	不明	
2083	SK	0E10d	(120)	—	9	不明	碗型	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂 V層含む	無し	不明	
2084	SP	0E10c	31	(20)	41	円形	碗型	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂	無し	不明	
2085	SP	0E10c	54	(51)	28	円形	碗型	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂	無し	不明	
2086	SP	0E11d	40	35	14	円形	碗型	褐色 (7.5YR4/3) 中粒砂	無し	不明	
2087	SK	0E10d	(60)	(42)	34	不明	碗型	褐色 (7.5YR4/3) 中粒砂	無し	不明	
2088	SK	0E14e	(103)	(44)	15	不明	碗型	暗オリーブ色 (5Y4/3) 中粒砂	無し	不明	
2089	SP	0E14e	47	40	9	円形	碗型	暗オリーブ色 (5Y4/3) 中粒砂	足印陶器	V	
2090	SD	0E14e	(093)	82	39	直線状	碗型	同前15歩型	山茶羹	V	
2091	SK	0E15e	(80)	(82)	21	不明	碗型	暗灰褐色 (2.5Y4/2) 中粒砂	山茶羹	V	
2092	SP	0E14e	38	38	19	円形	碗型	暗灰褐色 (2.5Y4/2) 中粒砂	無し	不明	
2093	SP	0E14e	33	31	13	円形	碗型	オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 中粒砂	無し	不明	
2094	SP	0E14e	36	32	9	円形	碗型	オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 中粒砂	無し	不明	
2095	穴蓋	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
2096	SP	0E14e	33	28	27	円形	碗型	第28段歩型	無し	V	東部柱穴
2097	SP	0E14e	41	37	18	円形	碗型	第28段歩型	無し	V	東部柱穴
2098	SP	0E14e	38	36	13	円形	碗型	暗オリーブ色 (5Y4/3) 中粒砂	無し	不明	
2099	SP	0E14e	41	(14)	15	不明	碗型	にぶい黄褐色 (10YR5/4) 中粒砂	無し	不明	
2100	SD	0E14e	(523)	115	24	直線状	V字型	第13段歩型	山茶羹ほか	V	
2101	SP	0E14e	28	25	17	円形	碗型	暗オリーブ色 (5Y4/2) 中粒砂	無し	不明	
2102	SP	0E14e	82	71	20	円形	碗型	オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 中粒砂	無し	不明	
2103	SP	0E14e	44	37	23	円形	碗型	暗灰褐色 (2.5Y4/2) 中粒砂	無し	V	東部柱穴
2104	SP	0E14e	50	45	23	円形	碗型	オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 中粒砂	山茶羹 土器類	V	東部柱穴
2105	SP	0E14e	97	46	30	楕円形	碗型	第28段歩型	山茶羹	V	
2106	穴蓋	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
2107	穴蓋	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
2108	穴蓋	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
2109	SP	0E14e	57	(20)	18	不明	碗型	オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 中粒砂	無し	不明	
2111	SK	0E13	115	103	14	円形	碗型	暗褐色 (7.5YR3/1) 中粒砂	無し	不明	
2112	SP	0E13	59	53	14	円形	碗型	暗灰褐色 (2.5Y4/2) 中粒砂	無し	不明	
2113	SD	0E13	171	41	15	直線状	碗型	暗灰褐色 (2.5Y4/2) 中粒砂 V層含む	無し	不明	
2114	穴蓋	—	—	—	—	—	—	—	—	—	断面之判明、汚染により見切型
2115	SD	0E13	(1083)	106	34	直線状	碗型	第19段歩型	山茶羹 古銅片 漆器類ほか	V	方形区画遺跡(東西溝)
2116	SD	0E12	(403)	(165)	41	直線状	碗型	第19段歩型	山茶羹 漆器類 古銅片ほか	V	方形区画遺跡(東西溝) 古
2117	SP	0E14e	(44)	39	7	円形	碗型	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂 V層含む	無し	V	東部柱穴
2118	SK	0E12e	132	45	6	楕円形	碗型	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂 目録付多量に含む	山茶羹	V	2201SDの1号段跡出土坑
2119	SP	0E14e	51	49	17	円形	碗型	第28段歩型	山茶羹 漆器類	V	東部柱穴

番号	記号	ワリット	異輪	廻輪	深さ	直線形状	断面形状	積土	出土箇所	時期	備考
2120	SD	0E13h	(105φ)	431	65	直線状	筒型	第140号砂型	0E025~30号砂型	V	中外大溝
2121	SK	0E14m	87	84	20	円形	筒型	オリーフ型砲台 (2.5Y4/3) 中粒砂	山形砲 弾倉砲台ほか	V	
2122	SK	0E14m	(86)	52	19	円形	筒型	褐色 (10YR4/4) 中粒砂	古砲台	V	
2123	SP	0E14m	53	42	14	円形	筒型	オリーフ型砲台 (2.5Y4/3) 中粒砂	山形砲	V	東部柱穴内
2124	穴番	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
2125	穴番	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
2126	穴番	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
2127	SP	0E14m	72	(35)	13	6角形	筒型	オリーフ型砲台 (2.5Y4/3) 中粒砂 V層含む	山形砲 弾倉部 不明小片	V	
2128	SP	0E14m	34	31	26	円形	筒型	オリーフ型砲台 (2.5Y4/3) 中粒砂 V層含む	無し	不明	
2129	SD	0E13m	(230)	44	13	筒状	筒型	にび・黄褐色 (10YR5/4) 中粒砂	山形砲	不明	
2130	SK	0E14m	(263)	(50)	10	不明	筒型	にび・黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂	無し	不明	視察の遺構の一つと推定か
2131	SP	0E14m	32	31	19	円形	筒型	明灰褐色 (2.5Y4/2) 中粒砂	無し	不明	
2132	SP	0E14m	33	30	20	円形	筒型	明灰褐色 (10YR4/2) 中粒砂	山形砲	V	
2133	SP	0E14m	38	32	16	円形	筒型	にび・黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂	無し	不明	
2134	SK	0E13m	103	87	24	楕円形	筒型	オリーフ型砲台 (2.5Y4/3) 中粒砂	沼津砲 山形砲ほか	不明	
2135	SD	0E13m	(1087)	150	8	直線状	筒型	第200号砂型	沼津砲 山形砲 古砲台ほか	V	
2136	SD	0E13m	(434)	28	10	直線状	筒型	第200号砂型	山形砲	V	
2137	SD	0E14m	(423)	28	10	直線状	筒型	第200号砂型	山形砲	V	
2138	SD	0E14m	(422)	39	16	筒状	筒型	にび・黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂	山形砲 加工竹籠ほか	V	
2139	SD	0E14m	(144)	36	13	直線状	筒型	にび・黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂	無し	不明	
2140	SK	0E12i	65	56	19	六角形	筒型	第200号砂型	無し	不明	大田山上段(古砲台三柱部)
2141	SP	0E14m	39	37	10	円形	筒型	にび・黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂	無し	不明	
2142	穴番	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
2143	SP	0E14m	32	31	13	円形	筒型	オリーフ型砲台 (2.5Y4/3) 中粒砂	無し	不明	
2144	SD	0E14i	(523)	126	19	直線状	筒型	第200号砂型	山形砲 弾倉上蓋	不明	
2145	穴番	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
2146	SD	0E14h	(100)	45	16	直線状	筒型	褐色 (10YR4/4) 中粒砂 V層含む	無し	不明	
2147	穴番	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
2148	SD	0E12h	(294)	104	35	直線状	筒型	第100号砂型	沼津砲 山形砲 上蓋部ほか	V	方台区南溝部(南北溝)
2149	SD	0E12h	(300)	(43)	19	直線状	筒型	第100号砂型	山形砲 弾倉砲台ほか	V	方台区南溝部(南北溝)
2150	SK	0E13h	—	—	—	—	—	—	山形砲 弾倉砲台ほか	V	方台区南溝部の上層部分か
2151	SP	0E14m	37	31	6	円形	筒型	オリーフ型砲台 (2.5Y4/3) 中粒砂	無し	不明	
2152	SK	0E14m	(120)	—	8	6角形	筒型	にび・黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂	山形砲 弾倉砲台ほか	V	和輪柱出土
2153	SK	0E11g	623	—	6	6角形	筒型	第200号砂型	0E032号砂型	V	貝殻砲臺上蓋部上の包首層
2154	SD	0E11g	(386)	114	26	直線状	筒型	同前12号型	沼津砲 弾倉上蓋	V	
2155	SK	0E11e	178	51	26	六角形	筒型	にび・黄褐色 (10YR5/3) 中粒砂	沼津砲	V	
2156	SK	0E13h	(184)	113	26	円形	筒型	第270号砂型	にび・黄褐色 (10YR5/3) 中粒砂	V	和輪柱出土
2157	SK	0E12h	166	116	27	楕円形	筒型	明灰褐色 (7.5YR3/3) 細粒砂 貝殻含む	山形砲 古砲台ほか	V	大田山上段の上段
2158	SD	0E12h	(130)	39	14	直線状	筒型	第100号砂型	沼津砲 山形砲ほか	V	方台区南溝部(南北溝)
2159	SK	0E10d	80	26	10	楕円形	筒型	褐色 (10YR4/4) 中粒砂	無し	不明	
2160	SK	0E11e	221	(71)	17	6角形	筒型	第250号砂型	山形砲 弾倉砲台	V	

番号	記号	クワッド	異称	距離	深さ	平照形状	断面形状	埋土	出土遺物	時期	備考
2101	SK	0E10a	68	(33)	28	不明	異型	褐色 (7.5YR4/3) 中粒砂 V層含む	山瓦礫	V	
2102	SK	0E10a	30	28	9	円形	異型	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂	無し	不明	
2103	SP	0E12b	(102)	58	20	楕円形	異型	褐色 (7.5YR4/4) 細粒砂	無し	V	大田出上墓の1の上段
2104	SP	0E11f	32	30	16	円形	異型	貝殻片多量 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂多量	無し	V	貝塚発掘ピット
2105	SK	0E11e	276	272	45	楕円方形	異型	第250号参照	山瓦礫 土師器 古銅片	V	
2106	SP	0E10e	29	26	8	円形	異型	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂	無し	不明	
2107	SP	0E11e	44	36	28	楕円形	異型	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂	市原焼	V	
2108	SP	0E11e	41	36	22	円形	異型	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂	無し	不明	
2109	SP	0E11f	25	22	11	円形	異型	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂	無し	不明	
2110	SK	0E11e	142	80	15	楕円形	異型	第240号参照	山瓦礫 漆器類	V	
2111	SK	0E12b	(223)	—	5	不明	不明	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂	山瓦礫	V	
2112	SK	0E11d	133	(70)	25	楕円形	異型	第240号参照	山瓦礫 漆器類	V	
2113	SP	0E11e	44	38	28	円形	異型	暗褐色 (10YR3/3) 中粒砂	無し	不明	
2114	SP	0E11f	46	44	19	円形	異型	灰黄褐色 (10YR4/2) 中粒砂	土師器	V	
2115	SK	0E11f	(110)	85	5	方形	異型	にぶい黄褐色 (10YR5/4) 中粒砂 粘土含む	古銅片	V	
2116	SK	0E11f	105	(54)	15	不明	異型	黄褐色 (10YR5/2) 中粒砂	無し	不明	
2117	SP	0E11e	40	36	15	楕円形	異型	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂	骨片土層 (古大土師器分)	不明	
2118	SP	0E11e	37	33	22	円形	異型	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂	無し	不明	
2119	SP	0E11e	39	36	16	円形	異型	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂	無し	不明	
2120	SD	0E12k	(401)	131	45	中央移行	異型	第210号参照	0E231参照	V	
2121	SK	0E10a	75	34	9	楕円形	異型	褐色 (10YR4/4) 中粒砂	無し	V	
2122	SK	0E10a	138	79	27	楕円形	異型	第240号参照	市原焼 土師器 山瓦礫	V	
2123	SP	0E11d	40	30	23	円形	異型	第240号参照	無し	V	
2124	SK	0E11d	(74)	(43)	23	不明	異型	オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 中粒砂	無し	V	
2125	SK	0E11e	(176)	83	20	不明	異型	オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 中粒砂	無し	不明	
2126	SK	0E11e	(277)	(149)	14	不明	異型	第250号参照	山瓦礫 漆器類	V	
2127	SK	0E11e	99	73	31	楕円方形	異型	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂	無し	V	
2128	SK	0E11e	(165)	(50)	24	不明	異型	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂 V層多く含む	無し	V	
2129	SP	0E11e	38	35	17	円形	異型	オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 中粒砂	無し	V	
2130	SK	0E12b	44	42	16	円形	異型	第200号参照	無し	V	大田出上墓 (漆器類)
2131	SP	0E11e	32	27	14	円形	異型	オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 中粒砂	無し	V	
2132	SP	0E11e	40	37	21	円形	異型	暗灰褐色 (2.5Y4/2) 中粒砂	無し	V	
2133	SP	0E12f	28	26	24	円形	異型	暗褐色 (7.5YR3/3) 中粒砂	無し	V	
2134	SK	0E12f	273	(173)	20	不明	異型	第260号参照	0E232参照	V	
2135	SK	0E11f	250	(130)	35	不明	異型	第260号参照	0E232参照	V	
2136	SD	0E13b	(148)	87	26	直線状	異型	第190号参照	山瓦礫 漆器類ほか	V	方田区南溝部 (南北溝)
2137	SP	0E13a	(58)	68	15	不明	異型	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂 V層含む	不明小片	V	方田区南溝部 (南北溝)
2138	SD	0E12a	(273)	52	15	直線状	異型	第100号参照	山瓦礫 漆器類ほか	V	方田区南溝部 (東西溝)
2139	SD	0E12a	(828)	66	12	直線状	異型	第100号参照	山瓦礫 漆器類ほか	V	方田区南溝部 (東西溝)
2200	SK	0E12k	(116)	(98)	32	不明	異型	第220号参照	骨片土層	■	

番号	記号	フリート	規模	埋藏	深さ	平面形状	断面形状	出土遺物	時期	備考
2201	5D	0E12b	(522)	30	12	直線状	直型	第1008号 山茶碗 茶筒柄 石磨ノ足か	V	方形区画溝部(東西側)
2202	5K	0E12b	84	(24)	20	4形	曲型	不明小片	V	
2203	5K	0E13	180	(80)	8	円形	直型	黒い滑石(2.5V4.2) 中粒砂	V	
2204	5K	0E11f	(158)	(119)	5	4形	直型	第1002号砂	V	
2205	5D	0E12b	(588)	93	36	直線状	曲型	第1008号砂	V	
2206	5D	0E12b	(50)	(36)	16	4形	曲型	にぶい滑石(10YR4.3) 中粒砂 V層含む	不明	
2207	5D	0E12a	(213)	72	31	直線状	曲型	にぶい滑石(10YR4.3) 中粒砂 V層含む	V	
2208	5K	0E12f	111	(75)	25	4形	曲型	褐色(7.5YR4.3) 粗粒砂	V	
2209	5D	0E12b	73	(72)	7	直線状	直型	第1008号砂	V	
2210	5D	0E12b	76	(50)	25	4形	曲型	にぶい滑石(10YR4.3) 中粒砂 V層含む	V	
2211	5D	0E12a	(266)	42	17	直線状	曲型	第1008号砂	V	
2212	5D	0E12a	48	22	13	稍円形	曲型	にぶい滑石(10YR4.3) 中粒砂	V	
2213	5D	0E10a	42	40	36	円形	曲型	上層直型	V	
2214	5D	0E14a	20	19	5	円形	曲型	オリーブ灰(12.5Y4.3) 中粒砂	V	214450埋石(柱体)
2215	5D	0E14a	17	16	4	円形	曲型	無し	V	214450埋石(柱体)
2216	5D	0E14a	22	21	4	円形	曲型	無し	V	214450埋石(柱体)
2217	5D	0E14a	22	21	3	円形	曲型	オリーブ灰(12.5Y4.3) 中粒砂	V	214450埋石(柱体)
2218	5D	0E14a	20	17	7	円形	曲型	オリーブ灰(12.5Y4.3) 中粒砂	V	214450埋石(柱体)
2219	5K	0E14a	131	63	23	稍円形	曲型	オリーブ灰(12.5Y4.3) 中粒砂	V	214450埋石(柱体)
2220	5D	0E13a	66	(27)	26	円形	曲型	オリーブ灰(12.5Y4.3) 中粒砂 V層含む	V	
2221	5K	0E12a	62	53	18	円形	曲型	にぶい滑石(10YR4.3) 中粒砂 V層多く含む	■	
2222	5K	0E13a	35	33	15	円形	曲型	にぶい滑石(10YR4.3) 中粒砂 V層多く含む	■	
2223	5D	0E12a	(346)	53	17	直線状	曲型	第1008号砂	V	方形区画溝部(東西側)
2224	5D	0E12a	(417)	56	15	直線状	直型	第1008号砂	V	方形区画溝部(東西側)
2225	5D	0E13a	47	41	20	円形	曲型	黒い滑石(2.5V4.2) 中粒砂	V	
2226	5K	0E13a	126	(75)	23	4形	曲型	オリーブ灰(12.5Y4.3) 中粒砂	V	21205D下層土層の上段か
2227	5K	0E12a	199	(147)	53	4形	曲型	にぶい滑石(10YR4.3) 中粒砂	V	
2228	5D	0E13a	39	28	24	稍円形	曲型	オリーブ灰(12.5Y4.3) 中粒砂	V	
2229	5D	0E12	(244)	31	23	直線状	直型	第1008号砂	V	方形区画溝部(東西側)
2230	5D	0E12	(126)	48	20	直線状	曲型	山茶碗 古瀬戸	V	方形区画溝部(東西側)

平成28年度(2016年)畑間道路3地点(HM16-3) 遺構一覧表

番号	記号	グリッド	種類	埋藏	深さ	平面形状	断面形状	積土	出土遺物	時期	備考
3001	SP	I0017h	IC08	(350)	86	23	直線状	第3段階参照	土師器 赤生土層	V	
3002	SD	I0017h	IC08	(479)	(60)	14	直線状	第3段階参照	無し	V	
3003	SD	I0018g	IC08	(280)	32	44	直線状	褐色(17.5784/3) 細粒砂	山茶碗	不明	周郭の北エドモットの落ち込みを伴う溝
3004	SK	I0017h	IC08	(137)	(50)	21	不明	褐色(17.5394/3) 細粒砂	無し	不明	

平成28年度(2016年)畑間道路4地点(HM16-4) 遺構一覧表

番号	記号	グリッド	種類	埋藏	深さ	平面形状	断面形状	積土	出土遺物	時期	備考
4001	SP	IC08	IC08	56	51	47	円形	淡黄色(2.578/4) 粘土 褐色(10YR4/4) 中粒砂	無し	M	
4002	SP	IC08	IC08	45	34	15	円形	暗褐色(7.5YR3/4) 中粒砂	無し	M	
4003	穴垂	IC08	IC08	—	—	—	—	—	—	—	
4004	SP	IC08	IC08	36	35	16	円形	褐色(10YR4/4) 中粒砂	無し	M	
4005	SP	IC7i	IC08	30	36	47	円形	粘土質褐色(10YR4/3) 中粒砂	赤生土層	M	
4006	SP	IC08	IC08	50	47	24	円形	褐色(10YR4/6) 中粒砂 2~5mmの小石を含む	山茶碗	V	
4007	SK	IC7i	IC08	140	(71)	43	不明	暗褐色(7.5YR4/3) 中粒砂	無し	不明	
4008	SE	IC08	IC08	345	258	81	不明	粘土質褐色(10YR4/3) 中粒砂	山茶碗 滑石筒 灰田陶器 赤生土層	V	
4009	SK	IC08	IC08	74	63	48	円形	暗褐色(10YR3/3) 中粒砂	古瀬戸 赤生土層	V	
4010	穴垂	IC08	IC08	—	—	—	—	—	—	—	
4011	SD	IC08	IC08	(515)	228	50	長楕円形	第3段階参照	赤生土層	II	
4012	SK	IC7i	IC08	(142)	153	61	不明	第3段階参照	赤生土層	II	
4013	SP	IC08	IC08	76	(28)	38	不明	褐色(10YR4/4) 中粒砂 粘土質褐色(2.5Y6/4)	赤生土層	V	
4014	SP	IC08	IC08	60	(30)	26	楕円形	褐色(10YR4/4) 中粒砂	山茶碗 赤生土層	V	
4015	SK	IC08	IC08	(40)	56	32	不明	暗褐色(7.5YR4/3) 中粒砂	無し	不明	
4016	SK	IC08	IC08	(196)	(224)	17	不明	第3段階参照	赤生土層	不明	
4017	SP	IC08	IC08	41	37	15	円形	粘土質褐色(10YR4/3) 中粒砂 重褐色(10YR2/2) 中粒砂 炭化物を含む	赤生土層小片	不明	
4018	SP	IC08	IC08	34	32	15	円形	褐色(10YR4/4) 中粒砂	無し	M	
4019	SP	IC7i	IC08	48	47	23	円形	褐色(10YR4/4) 中粒砂	無し	M	
4020	SK	IC7i	IC08	(71)	49	38	楕円形	褐色(10YR4/4) 中粒砂 V層を含む	無し	不明	
4021	穴垂	IC08	IC08	—	—	—	—	—	—	—	
4022	SK	IC08	IC08	(383)	(110)	49	方形	陶器(滑石筒)	山茶碗 赤生土層	V	
4023	SP	IC08	IC08	51	(30)	24	円形	粘土質褐色(10YR4/3) 中粒砂	無し	V	
4024	SK	IC08	IC08	(106)	(62)	12	不明	褐色(10YR4/6) 中粒砂	無し	V	
4025	SK	IC08	IC08	143	91	21	楕円形	暗褐色(7.5YR3/4) 中粒砂 V層を含む	山茶碗 赤生土層	V	
4026	SK	IC08	IC08	243	92	27	長楕円形	褐色(7.5YR4/4) 中粒砂 V層を含む	赤生土層	不明	
4027	SK	IC08	IC08	119	80	15	楕円形	暗褐色(10YR2/4) 中粒砂 目付を含む	不明	不明	
4028	SK	IC08	IC08	108	(44)	29	不明	褐色(17.5394/4) 中粒砂	不明	不明	
4029	SK	IC08	IC08	108	(44)	29	不明	褐色(17.5394/4) 中粒砂	赤生土層	V	遺物は赤生土層層位に中間



番号	記号	クワッド	異輪	埋輪	深さ	平面形状	断面形状	埋土	出土遺物	時期	備考
4029	SP	IC9k	64	46	28	楕円形	楕円	褐色 (10YR4/4) 中粒砂	無し	不明	
4030	SK	IC9k	(296)	131	32	長楕円形	楕円	第35埋砂	赤生土層	不明	
4031	SK	IC10 l	(60)	(40)	37	不明	楕円	埋砂	山瓦礫 漆器類	V	
4032	SP	IC9m	72	43	36	楕円形	楕円	埋砂	赤生土層	Ⅱ	
4033	SP	IC9 l	56	52	24	—	—	オリーブ褐色 (2.5Y4/2) 中粒砂	無し	不明	
4034	久垂	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
4035	SP	IC9k	44	43	6	円形	楕円	褐色 (7.5YR4/4) 中粒砂	無し	不明	
4036	SD	IC9 l	328	30	20	直線	楕円	に赤い黄褐色 (10YR5/4) 中粒砂	漆器類 赤生土層 山瓦礫	V	
4037	SP	IC9k	75	48	22	楕円形	楕円	黄褐色 (10YR8/6) 中粒砂	山瓦礫	V	
4038	SP	IC9k	41	39	14	円形	楕円	に赤い黄褐色 (10YR5/4) 中粒砂	無し	V	
4039	SP	IC9k	60	57	36	円形	U字型	に赤い黄褐色 (10YR5/4) 中粒砂	不明小片	不明	
4040	久垂	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
4041	SP	IC9 l	47	43	26	円形	楕円	褐色 (10YR4/6) 中粒砂	無し	不明	
4042	SK	IC9k	322	102	36	不整形	楕円	褐色 (7.5YR4/4) 中粒砂	土層類 赤生土層	V	
4043	SD	IC9k	(502)	114	39	ほぼ直線	楕円	第34埋砂	山瓦礫 漆器類	V	
4044	SP	IC9 l	71	61	22	円形	楕円	褐色 (10YR4/6) 中粒砂	不明小片	不明	
4045	SK	IC9k	147	(83)	49	不整形	楕円	に赤い黄褐色 (10YR5/4) 中粒砂	無し	不明	
4046	SP	IC7 l	26	23	16	円形	楕円	に赤い黄褐色 (10YR4/2) 粗粒砂	無し	不明	
4047	SP	IC9k	23	20	44	円形	楕円	褐色 (10YR4/4) 中粒砂	赤生土層	不明	
4048	SP	IC9k	22	(13)	12	円形	楕円	褐色 (10YR4/6) 中粒砂	無し	不明	
4049	SP	IC9k	33	(17)	26	円形	楕円	に赤い黄褐色 (10YR5/4) 中粒砂	無し	不明	
4050	SK	IC9k	127	(74)	36	楕円形	楕円	褐色 (10YR4/4) 中粒砂	無し	不明	
4051	SD	IC9k	(122)	61	11	直線	楕円	褐色 (10YR4/4) 中粒砂	土層	不明	
4052	SK	IC9 l	265	111	23	長楕円形	楕円	第37埋砂	無し	不明	
4053	SK	IC9 l	74	66	19	円形	楕円	黒褐色 (2.5Y3/2) 中粒砂	無し	不明	
4054	SK	IC9k	95	64	39	楕円形	楕円	埋砂	赤生土層	不明	
4055	SP	IC9k	41	40	12	円形	楕円	埋砂	山瓦礫	V	
4056	SP	IC9 l	38	35	10	円形	楕円	褐色 (10YR4/4) 中粒砂	無し	不明	
4057	SK	IC9 l	(68)	58	8	楕円形	楕円	褐色 (10YR4/4) 中粒砂	無し	不明	
4058	SP	IC9 l	35	30	34	円形	U字型	褐色 (10YR4/6) 中粒砂	無し	不明	
4059	SD	IC9 l	(160)	23	9	直線	楕円	褐色 (10YR4/6) 中粒砂	無し	不明	
4060	SD	IC9 l	(537)	242	35	わずかに湾曲	楕円	第35埋砂	漆器類 山瓦礫 赤生土層	V	
4061	SK	IC9 l	76	53	20	楕円形	楕円	に赤い黄褐色 (10YR5/4) 中粒砂 V 埋砂	無し	V	
4062	SP	IC9 l	44	35	11	円形	楕円	に赤い黄褐色 (10YR5/4) 中粒砂 V 埋砂	無し	V	
4063	SD	IC9m	(168)	70	28	直線	楕円	に赤い黄褐色 (10YR5/4) 中粒砂	無し	不明	
4064	SK	IC10 l	135	(64)	33	不明	楕円	褐色 (10YR4/6) 中粒砂	赤生土層	不明	
4065	SD	IC10 l	(293)	(174)	37	わずかに湾曲	楕円	第35埋砂	無し	Ⅲ	
4066	SK	IC9k	75	65	17	円形	楕円	褐色 (10YR4/4) 中粒砂	無し	不明	
4067	SK	IC9k	77	(36)	18	楕円形	楕円	に赤い黄褐色 (10YR4/2) 中粒砂	山瓦礫	V	
4068	SP	IC9k	51	39	12	円形	楕円	褐色 (10YR4/4) 中粒砂	山瓦礫	V	
4069	SP	IC9 l	38	35	11	円形	楕円	褐色 (10YR4/4) 中粒砂	無し	V	

番号	記号	クワリット	異動	埋輪	深さ	平面形状	断面形状	埋土	出土履歴	時期	備考
4070	SP	IC91	58	47	20	円形	筒型	褐色 (10YR4/4) 中粒砂	無し	V	
4071	SP	IC8k	24	(17)	11	円形	筒型	褐色 (10YR4/4) 中粒砂	無し	V	4043SDCに伴う柱穴
4072	SP	IC9k	(34)	33	17	円形	筒型	に赤い黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂 V層含む	無し	V	4043SDCに伴う柱穴
4073	SP	IC9k	34	31	15	円形	筒型	褐色 (10YR4/4) 中粒砂 V層含む	無し	V	4043SDCに伴う柱穴
4074	SK	IC8k	118	(56)	28	不明	筒型	明褐色 (10YR2.5/4) 中粒砂	無し	不明	
4075	久藤		—	—	—	—	—	—	—	—	
4076	SP	IC8k	32	(20)	12	円形	筒型	褐色 (10YR4/4) 中粒砂	無し	V	
4077	SP	IC9k	36	33	19	円形	筒型	に赤い黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂	無し	V	4043SDCに伴う柱穴
4078	SK	IC91	87	57	34	楕円形	筒型	褐色 (10YR4/6) 中粒砂	無し	V	
4079	SP	IC8k	52	(30)	8	円形	筒型	褐色 (10YR4/4) 中粒砂 V層含む	無し	不明	
4080	SP	IC8k	37	35	16	円形	筒型	明褐色 (10YR2.5/4) 中粒砂	無し	不明	
4081	SP	IC8k	28	24	12	円形	筒型	褐色 (10YR4/6) 中粒砂	無し	不明	
4082	SP	IC9k	33	27	17	円形	筒型	に赤い黄褐色 (10YR5/4) 中粒砂	無し	V	4043SDCに伴う柱穴
4083	SP	IC8k	30	26	22	円形	筒型	褐色 (10YR4/4) 中粒砂	無し	V	4043SDCに伴う柱穴
4084	SP	IC8k	41	37	31	円形	U字型	明褐色 (10YR2.5/4) 中粒砂	無し	V	4043SDCに伴う柱穴
4085	SD	IC9k	(137)	32	16	直線	筒型	褐色 (10YR4/6) 中粒砂	無し	不明	
4086	SP	IC91	29	(25)	20	円形	筒型	褐色 (10YR4/6) 中粒砂	無し	V	
4087	SP	IC8	31	30	15	円形	筒型	褐色 (10YR4/6) 中粒砂	無し	不明	
4088	SP	IC91	32	29	22	円形	筒型	に赤い黄褐色 (10YR6/4) 中粒砂 V層含む	無し	不明	
4089	SP	IC28	59	(50)	23	不明	筒型	褐色 (10YR4/4) 中粒砂	無し	不明	
4090	SK	IC71	(180)	75	26	不明	筒型	赤黄土層 第36号埋輪	赤黄土層	Ⅱ	

平成28年度(2016年)畑間道路6地点(HM16-6)遺構一覧表

番号	記号	グリッド	発見	埋藏	深さ	平面形状	断面形状	埋土	出土遺物	時期	備考
6001	S0	B14b	(257)	30	3	直線	靴型	褐色(10YR8/6)中粒砂	赤土上部(土層部小)	不明	
6002	S8	B13b	127	85	19	楕円形	靴型	黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂	無し	不明	
6003	S8	B13b	82	(61)	28	円形	靴型	褐色(7.5YR4/3)中粒砂	無し	Ⅲ	
6004	S0	B13b	(30)	36	18	円形	靴型	褐色(2.0Y8/2)中粒砂	無し	不明	
6005	S0	B13b	(80)	24	17	円形	靴型	褐色(10YR4/4)中粒砂	無し	不明	
6006	S0	B12b	37	31	17	円形	靴型	褐色(10YR4/4)中粒砂	赤土上部	不明	
6007	S0	B12b	37	34	14	円形	靴型	褐色(10YR4/6)中粒砂	無し	不明	
6008	SX	B12c	—	—	13	4割	靴型	褐色(2.0Y8/2)中粒砂	無し	不明	
6009	S0	B12c	37	37	14	円形	靴型	褐色(10YR4/6)中粒砂	無し	不明	
6010	S0	B14b	419	124	28	わずかに湾曲	靴型	褐色(7.5YR4/3)中粒砂	土層部	Ⅲ	
6011	S8	B12c	145	78	29	楕円形	靴型	褐色(7.5YR4/3)中粒砂	赤土上部(土層部小)	不明	
6012	S8	B12b	47	42	38	4割	靴型	褐色(10YR4/4)中粒砂	赤土上部	不明	
6013	S8	B14a	72	(46)	13	円形	靴型	褐色(2.0Y8/2)中粒砂	赤土上部	Ⅲ	
6014	S8	B14b	—	—	14	4割	靴型	褐色(10YR4/4)中粒砂 V層付砂	無し	Ⅲ	
6015	S0	B14b	180	54	12	ほぼ直線	直型	に赤い黄褐色(10YR4/3)中粒砂	無し	不明	
6016	S0	B13b	38	35	16	円形	靴型	褐色(10YR4/4)中粒砂 V層付砂	無し	不明	
6017	S0	B13b	43	43	9	円形	靴型	褐色(10YR4/4)中粒砂	無し	不明	
6018	S0	B13b	48	42	32	円形	U字型	褐色(10YR4/6)中粒砂	無し	不明	
6019	S0	B13b	50	32	12	楕円形	直型	褐色(7.5YR4/3)中粒砂	無し	不明	
6020	S0	B13b	34	33	17	円形	靴型	褐色(7.5YR4/3)中粒砂	無し	不明	
6021	S0	B13b	65	37	16	楕円形	靴型	褐色(10YR4/4)中粒砂	無し	不明	
6022	S0	B14b	46	43	35	円形	U字型	褐色(10YR4/4)中粒砂	無し	不明	
6023	S0	B14b	42	(28)	26	円形	靴型	に赤い黄褐色(10YR4/3)中粒砂	赤土上部	Ⅲ	
6024	S0	B14b	64	61	30	円形	靴型	に赤い黄褐色(10YR4/3)中粒砂	無し	不明	
6025	S0	B13b	40	34	19	円形	靴型	に赤い黄褐色(10YR4/3)中粒砂	無し	不明	
6026	S8	B12c	69	40	38	楕円形	靴型	に赤い黄褐色(10YR4/3)中粒砂	無し	不明	

平成28年度(2016年)畑間遺跡7地点(HM16-7)遺構一覧表

番号	記号	グリッド	種類	面積	深さ	平面形状	断面形状	遺土	出土遺物	時期	備考
7001	SX	8019b	溝	340 (275)	35 (104)	楕円形	靴型	第400号層 灰青褐色(10YR4/2) 粘粒砂 明黄褐色(10YR6/3)土 片状石	山笠織 漆器筒 土師器 須恵器ほか	VI	
7002	SX	8012c	溝	(275)	42 (108)	不明	靴型	灰青褐色(10YR4/2) 粘粒砂 明黄褐色(10YR6/3)土 片状石	山笠織 漆器筒 土師器 須恵器ほか	VI	
7003	SX	8020c	溝	(381)	(108)	不明	靴型	暗褐色(10YR2/3) 粘粒砂	土師器 漆器筒 山笠織 灰背陶器ほか	VI	
7004	SX	8019c	溝	(205)	(150)	不明	靴型	灰青褐色(10YR4/2) 粘粒砂	土師器 漆器筒 山笠織 灰背陶器ほか	VI	
7005	SX	8019c	溝	189	(67)	不明	靴型	暗褐色(10YR2/3) 粘粒砂	土師器 漆器筒 山笠織 灰背陶器ほか	VI	
7006	SX	8019c	溝	(218)	(100)	不明	靴型	灰褐色(2.5Y4/1) 粘粒砂	土師器 山笠織ほか	VI	
7007	SX	8019b	溝	(101)	(57)	不明	靴型	褐色(10YR4/4) 粘粒砂	不明	不明	
7008	SX	8019a	溝	(63)	(40)	不明	靴型	褐色(10YR4/4) 粘粒砂 V層含む	山笠織ほか	VI	
7009	SX	8019b	溝	105	47	不明	靴型	赤い?層含む(2.5Y4/3) 中粒砂	山笠織	VI	
7010	SD	8019a	溝	(245)	86	31	直線	第400号層	漆器筒 山笠織 土師器ほか	V	
7011	SD	8019a	溝	(160)	62	38	弧状	第400号層	土師器 漆器筒 灰背陶器	V	
7012	SX	8019a	溝	(216)	(182)	49	不明	第400号層	土師器	V	
7013	SP	8019b	溝	31	26	27	円形	須恵器(7.5YR3/1) 粘粒砂	土師器	不明	
7014	SP	8019a	溝	59	29	13	楕円形	須恵器(2.5Y3/2) 中粒砂 V層含む	無し	不明	
7015	SD	8019a	溝	(254)	43	25	小溝形	第400号層	土師器 漆器筒 山笠織	V	
7016	SD	8019a	溝	(105)	34	23	直線	第400号層	土師器	V	
7017	SP	8018a	溝	32	31	25	円形	須恵器(2.5Y3/2) 中粒砂	無し	不明	
7018	SP	8019a	溝	42	38	25	円形	須恵器(10YR2/3) 粘粒砂 灰化物含む	無し	不明	
7019	SP	8019b	溝	42	34	18	楕円形	に赤い須恵器(10YR4/3) 粘粒砂	無し	不明	
7020	SD	8019b	溝	(43)	33	12	直線	須恵器(10YR2/3) 粘粒砂	無し	不明	
7021	SP	8019b	溝	(43)	29	16	楕円形	赤い?層含む(2.5Y4/2) 中粒砂 V層含む	無し	不明	
7022	SP	8019a	溝	62	(110)	15	不明	に赤い須恵器(10YR4/3) 粘粒砂	無し	VI	
7023	SP	8019a	溝	62	(110)	15	不明	第400号層	無し	不明	

# 遺物一覧表

## ・遺物一覧表凡例

口縁等の残存率は円形ゲージを用い計測し 12 分割で記した。

口径・底径のうち ( ) で記したものは、確度の低い数値である。

器高のうち ( ) で記したものは残存部分の数値である。

色調は全体的に主たるものを記し、一部内外面および断面を別に記した。

時期は下記の本遺跡の時期区分で記した。

時期区分表

時期	時代・土器型式
I	1 縄文時代晩期以前
	2 縄文時代晩期末～弥生時代初頭
	3 弥生時代前期 (櫻王式期～水神平式期)
II	1 弥生時代中期前半 (岩滑式期)
	2 弥生時代中期後半 (貝田町式・瓜郷式期～凹線紋系・古井式期)
III	1 弥生時代後期 (八王子古宮式期～山中式期)
	2 弥生時代終末期～古墳時代前期 (廻間式期～松河戸Ⅰ式期)
	3 古墳時代中期 (松河戸Ⅱ式期～宇田式期)
IV	1 古墳時代後期～終末期 (東山10号窯式期～東山44号窯式期)
	2 奈良時代 (東山50号窯式期～黒笹14号窯式期)
	3 平安時代前期 (黒笹90号窯式期～東山72号窯式期)
V	1 平安時代後期 (山茶碗第2～4型式期)
	2 鎌倉時代 (山茶碗第5～7型式期・常滑窯3～6a型式期)
	3 鎌倉時代末～室町時代前期 (山茶碗第8～9型式期)
	4 室町時代中期 (山茶碗第10～11型式期)
	5 室町時代後期 (瀬戸大窯式期)
VI	江戸時代



番号	標種	樹形	調査区	遺構・部位	積存率	口径 cm	高さ cm	底径 cm	瓦葺等の特徴	胎土	色澤	時期	その他・備考
001	弥生上層	深鉢	4	II・遺跡	口：1/12	-	(3.7)	-	内面-指子ナ、指子ナ 外面-条痕	砂粒・礫を含む	2.537/4肌灰色	1-3	
002	弥生上層	深鉢	1	1005D	口：1/12	-	(6.3)	-	内面-輪縁部、押付文、押付文不明 外面-1筋帯不明	砂粒・礫を含む	107X8/4肌黄褐色	1-3	
003	弥生上層	厚口径	4	4012K	口：1/12	-	(2.2)	-	内面-輪縁部、ヨコナテ、条痕文 外面-ヨコナテ	砂粒・礫を含む	2.537/3肌灰色	0-1	
004	弥生上層	厚口径	2	2126SD	口：1/12	(12.1)	(2.4)	-	内面-輪縁部、ヨコナテ 外面-ヨコナテ	砂粒・礫を含む	107X7/3に引、黄褐色	0-1	
005	弥生上層	厚口径	4	4028K	口：1/12	(16.3)	(1.6)	-	内面-ヨコナテ、条痕文、ナテ 外面-ヨコナテ	砂粒・礫を含む	107X7/4に引、黄褐色	0-1	
006	弥生上層	甗	2	2154SD	口：2/12	(17.2)	(2.6)	-	内面-肩長のため調査不明 外面-条痕文、指付突、キケテ、ナテ 指部正文	砂粒・礫を含む	107X6/4に引、黄褐色	1-3	
007	弥生上層	甗	4	4015D	-	-	(4.5)	-	内面-ミガテ 外面-条痕文、指付突、キケテ、ナテ	砂粒・礫を含む	107X7/4に引、黄褐色	1-3	
008	弥生上層	甗	4	4016KX	-	-	(4.5)	-	内面-ミガテ 外面-ミガテ	砂粒・礫を含む	2.537/4肌灰色	1-3	瀬賀川系土層
009	弥生上層	深鉢	4	4012K	口：1/12	(24.0)	(0.8)	-	内面-ヨコナテ 外面-条痕、口縁部条痕2条	砂粒・礫を含む	107X7/4に引、黄褐色	1-3-0-1	
010	弥生上層	深鉢	4	4036K	口：1/12	(24.0)	(5.3)	-	内面-ヨコナテ 外面-条痕、口縁部条痕2条	砂粒・礫を含む	107X5/2肌黄褐色	1-3-0-1	
011	弥生上層	深鉢	4	4012K	口：1/12	(40.0)	(5.4)	-	内面-ヨコナテ 外面-条痕、口縁部条痕2条、押し文	砂粒・礫を含む	2.534/1肌灰色	1-3-0-1	
012	弥生上層	深鉢	4	4066K	口：1/12	-	(2.7)	-	内面-ヨコナテ 外面-条痕、口縁部条痕2条	砂粒・礫を含む	2.537/2肌灰色	1-3-0-1	
013	弥生上層	深鉢	4	4066K	口：1/12	-	(3.3)	-	内面-ヨコナテ 外面-条痕、口縁部条痕2条	砂粒・礫を含む	2.534/1肌灰色	1-3-0-1	
014	弥生上層	深鉢	4	4012K	口：1/12	-	(4.0)	-	内面-ヨコナテ 外面-条痕、口縁部条痕2条	砂粒・礫を含む	2.537/2肌灰色	1-3-0-1	
015	弥生上層	深鉢	4	4012K	底：2/12	-	(3.8)	(6.6)	内面-肩長のため調査不明 外面-条痕文、ナテ	砂粒・礫を含む	2.537/2肌灰色	1-3-0-1	
016	弥生上層	深鉢	4	II・遺跡	底：2/12	-	(4.2)	(7.0)	内面-ナテ 外面-ナテ	砂粒・礫を含む	2.534/1肌灰色	1-3-0-1	
017	弥生上層	深鉢	4	II・遺跡	底：1/12	-	(3.1)	(7.0)	内面-底ナテ 外面-条痕、ミガテ	砂粒・礫を含む	2.535/1肌灰色	1-3-0-1	
018	弥生上層	深鉢	4	4016KX	底：3/12	-	(2.6)	(6.4)	内面-底ナテ 外面-条痕文、ナテ	砂粒・礫を含む	107X7/3に引、黄褐色	1-3-0-1	
019	弥生上層	甗	4	4015D	口：6/12	(15.4)	(11.0)	-	内面-指子ナ、ヨコナテ、一部肩長のため調査不明 外面-1筋帯文、軸子文、注脚、説文、口縁部条痕	砂粒・礫を含む 断面：2.537/2肌灰色 断面：2.537/6/4に引、黄褐色	2.537/2肌灰色	0-2	
020	弥生上層	甗	4	4015D	-	-	(6.0)	-	内面-ハテ、説文 外面-ハテ	砂粒・礫を含む	2.537/4肌灰色	0-2	
021	弥生上層	甗	4	4015D	-	-	(5.4)	-	内面-輪縁部、指子ナ 外面-ナテ、筋帯文、説文	砂粒・礫を含む	2.537/6/4に引、黄褐色	0-2	
022	弥生上層	甗	2	2126SD	-	-	(5.0)	-	内面-指子ナ 外面-筋帯文	砂粒・礫を含む	107X8/2肌白色 断面：2.537/1肌色	0-2	
023	弥生上層	甗	2	2065KX	口：6/12	11.1	(20.5)	-	内面-指子ナ、ハテ、押し文、筋帯文 外面-ハテ、ナテ、押し文、筋帯文	砂粒・礫を含む	107X8/3肌黄褐色 断面：107X5/1肌灰色	0-2	

番号	器種	形状	調査区	遺構・位置	残存率	口徑 cm	高さ cm	底径 cm	出土等の特徴	胎土	色澤	時期	その他・備考
024	弥生土器 甕	2	2180SD	—	(5.5)	—	—	—	内面—指すエ、指すエ、ヨコナデ 外面—ハタ、直線文	砂粒、礫を含む	2.5Y7/3灰黄色 断面：2.5Y7/1黄灰色	Ⅱ-2	—
025	弥生土器 甕	1	1186SK	口：2/12 底：3/12	(11.6)	27.7	(6.9)	—	内面—取すエ、指すエ、ヨコナデ 外面—ハタ、指すエ、ナデ、ヨコナデ	砂粒、礫を含む	10YR7/4C.5灰褐色 断面：10YR7/1黄灰色	Ⅲ-1	—
026	弥生土器 甕	2	Ⅱ・直刷	口：1/12	(9.4)	(6.5)	—	—	内面—指すエ、ナデ 外面—磨料のため磨面不明	砂粒、礫を含む	10YR7/4C.5灰褐色	Ⅱ～Ⅲ	—
027	弥生土器 甕	4	Ⅱ・直刷	口：1/12	—	(3.8)	—	—	内面—取すエ 外面—ナデ	砂粒、礫を含む	2.5Y7/3灰黄色	Ⅱ～Ⅲ	—
028	弥生土器 甕	2	Ⅱ・直刷	—	(2.8)	—	—	—	内面—ナデ、指すエ 外面—取すエ、直線文、竹管状刺状文	砂粒、礫を含む	10YR7/4C.5灰褐色	Ⅲ	—
029	弥生土器 甕	2	Ⅱ・直刷	—	(3.6)	—	—	—	内面—輪刷痕、指すエ 外面—ヨコナデ、直線文、竹管状刺状文、直線文	砂粒、礫を含む	2.5Y8/3灰黄色	Ⅱ-2	—
030	弥生土器 甕	2	2180SD	口：1/12	(17.8)	—	—	—	内面—ハタ、指すエ 外面—刺状文、直線文上に刺状文、直線文	砂粒を含む	10YR6/4黄褐色	Ⅱ-2	—
031	弥生土器 甕	2	2180SD	口：1/12	(19.5)	(4.8)	—	—	内面—直状文、口縁部細点ナデ 外面—ナデ	砂粒、礫を含む	10YR7/3C.5黄褐色	Ⅲ-1	—
032	弥生土器 甕	2	2206SK	口：3/12	(4.8)	—	—	—	内面—輪刷痕、ナデ、直線文 外面—ハタ、ナデ、口縁部細点ナデ	砂粒、礫を含む	10YR7/4C.5灰褐色	Ⅲ-1	—
033	土師器 台付甕	4	4065SD	—	(3.6)	—	—	—	内面—取すエ 外面—ナデ	砂粒、礫を含む	10YR7/4C.5灰褐色	Ⅲ-2	—
034	土師器 高杯	2	2120SD	—	(8.0)	—	—	—	内面—輪刷痕、取すエ 外面—磨料のため磨面不明	砂粒、礫を含む	10YR7/3C.5黄褐色	Ⅲ-3	—
035	弥生土器 甕	2	2225SK	口：2/12 底：4/12	(13.6)	17.3	4.3	—	内面—取すエ、指すエ、ミガキ 外面—ハタ、直線文、指すエ、ミガキ	砂粒、礫を含む	7.5YR7/6褐色	Ⅲ-2	—
036	弥生土器 甕	2	2221SK	底：1/12	(11.7)	5.8	—	—	内面—ナデ、ハタ 外面—ハタ、直線文、指すエ、ミガキ	砂粒、礫を含む	2.5Y8/2灰白色	Ⅲ-2	—
037	土師器 甕	6	6016SD	口：10/12 底：12/12	10.3	16.2	5.2	—	内面—輪刷痕、ハタ、ナデ、取すエ、指すエ、直線文 外面—直線文、ミガキ	砂粒、礫を含む	10YR7/4C.5灰褐色	Ⅲ-2～3	—
038	土師器 小甕鉢	6	6016SD	口：7/12 底：12/12	12.4	7.6	3.6	—	内面—輪刷痕、取すエ、ハタ 外面—ヨコナデ、ミガキ、取すエ	砂粒、礫を含む	10YR7/4C.5灰褐色	Ⅲ-2～3	—
039	土師器 甕瓿上蓋	2	2096SD	残存部位：脚上蓋	(6.2)	—	—	—	外面—指すエ、指すエ	砂粒、礫を含む	10YR6/6黄褐色	Ⅱ-2	付け組履：2.3cm
040	土師器 甕瓿上蓋	1	目跡	残存部位：脚上蓋	(3.6)	—	—	—	内面—ナデ 外面—指すエ、指すエ	砂粒を含む	7.5YR6/4黄褐色	Ⅱ-2	付け組履：2.1cm
041	土師器 甕瓿上蓋	7	目跡	残存部位：脚上蓋	(5.0)	—	—	—	外面—指すエ、指すエ	砂粒を含む	10YR7/4C.5灰褐色	Ⅱ-2	付け組履：2.1cm
042	土師器 甕瓿上蓋	1	Ⅱ・直刷	残存部位：脚上蓋	(4.7)	—	—	—	内面—ナデ 外面—指すエ、指すエ	砂粒を含む	7.5YR6/6褐色	Ⅱ-2	付け組履：2.1cm
043	土師器 甕瓿上蓋	7	目跡	残存部位：脚上蓋	(6.8)	—	—	—	外面—指すエ、指すエ	砂粒を含む	7.5YR6/6褐色	Ⅱ-2	付け組履：2.1cm
044	土師器 甕瓿上蓋	6	Ⅱ・直刷	残存部位：脚上蓋	(5.9)	—	—	—	外面—指すエ、指すエ	砂粒を含む	7.5YR6/4黄褐色	Ⅱ-2	付け組履：1.8cm
045	土師器 甕瓿上蓋	1	目跡	残存部位：脚上蓋	(4.5)	—	—	—	外面—指すエ、指すエ	砂粒、礫を含む	7.5YR6/4黄褐色	Ⅱ-2	付け組履：1.6cm
046	土師器 甕瓿上蓋	7	7001SK	残存部位：脚上蓋	(5.4)	—	—	—	外面—指すエ、指すエ	砂粒、礫を含む	7.5YR7/4C.5灰褐色	Ⅱ-2	付け組履：1.7cm

調査区

第 24 回



番号	路線	線形	調査区	道幅・単位	既存率	口徑 cm	標高 cm	経度 cm	位置等の特徴	掘土	色調	時期	その他・備考
25 047	上線路	敷道上路	Ⅱ・Ⅲ層	既存率 既存部位：脚上層 (5.3)	長 (5.3)	-	-	-	外側一帯オサエ、指ナ	08粉を含む	5YR7/6褐色	N-2	付け廻り：1.6cm
048	上線路	敷道上路	106SSP	口：1/10	(10.0)	(2.9)	-	-	内外一帯オサエ、指ナ	08粉を含む	10YR6.5/3淡黄褐色	N-2	
049	上線路	溝	1186SX	口：1/12	(13.1)	(13.1)	-	-	内側一帯積層、指ナオサエ、ハク、ヨコナナ 外側一帯ヨコナナ、ハク	08粉を含む	10YR7/4にぶ、黄褐色	N-2	
050	上線路	溝	1186SX	口：12/12	(12.4)	(12.1)	-	-	内側一帯積層、ハク、ヨコナナ、縦ナナ、指ナオサエ 外側一帯ヨコナナ、縦ナナオサエ、オサエ	08粉を含む	10YR6.0/3にぶ、黄褐色	N-2	
051	上線路	溝	2153SX	口：1/12	(24.0)	(2.8)	-	-	内外一帯一ヨコナナ	08粉を含む	7.5YR7/4にぶ、褐色	N-2	
052	上線路	溝	Ⅷ段	底：7/12	-	(5.6)	(6.0)	-	内側一帯積層、指ナオサエ、指ナ 外側一帯ハク、縦ナナ	08粉、礫を含む	10YR6.0/3淡黄褐色	N-2	
053	遊歩路	坪身	Ⅷ段	口：5/12	(9.0)	(3.3)	-	-	内側一帯ヨコナナ 外側一帯ヨコナナ、脚上層、脚上層オサエ	08粉を含む	N6.0A褐色	N-2	
054	遊歩路	無付坪	2126SD	底：12/12	-	(2.6)	(7.5)	-	内側一帯ヨコナナ、脚上層、脚上層オサエ 外側一帯ヨコナナ、脚上層、脚上層オサエ	08粉、礫を含む	2.5Y7/1灰白色	N-2	
055	遊歩路	無付坪	2048SX	口：4/12	(11.0)	(4.2)	(7.2)	-	内側一帯ヨコナナ、脚上層、脚上層オサエ 外側一帯ヨコナナ、脚上層、脚上層オサエ	礫を含む	5YR6/2にぶ、褐色	N-2	
056	遊歩路	坪身	2071SP	口：2/12 底：2/12	(12.1)	(3.6)	(3.0)	-	内側一帯ヨコナナ、脚上層、脚上層オサエ 外側一帯ヨコナナ、脚上層、脚上層オサエ	08粉を含む	10YR6.0/3にぶ、黄褐色 脚上：2.5Y7/1灰白色	N-2	
057	遊歩路	溝	Ⅷ段	口：1/12	(13.0)	(4.6)	-	-	内側一帯ヨコナナ、脚上層、脚上層オサエ 外側一帯ヨコナナ、脚上層、脚上層オサエ	08粉を含む	7.5YR6/4にぶ、褐色	N-2	
058	遊歩路	溝	Ⅱ層	底：2/12	-	(2.9)	(7.4)	-	内側一帯ヨコナナ、脚上層、脚上層オサエ 外側一帯ヨコナナ、脚上層、脚上層オサエ	08粉を含む	10YR6.0/3にぶ、黄褐色	N-2	
059	遊歩路	溝	1041SK	底：4/12	-	(2.1)	(8.0)	-	内側一帯ヨコナナ、脚上層、脚上層オサエ 外側一帯ヨコナナ、脚上層、脚上層オサエ	08粉を含む	2.5Y7/1灰白色 脚上：7.5YR6/2淡褐色	N-2	
060	遊歩路	有付坪	Ⅱ層	底：1/12	-	(1.7)	(11.0)	-	外側一帯ヨコナナ、脚上層、脚上層オサエ	08粉、礫を含む	10YR6.0/3にぶ、黄褐色	N-2	
061	遊歩路	有付坪	Ⅱ・Ⅲ層	-	-	(1.2)	-	-	外側一帯ヨコナナ、脚上層、脚上層オサエ	08粉を含む	5Y6/1灰白色	N-2	
062	遊歩路	溝	132/F1	幅：8/12	-	(1.8)	-	-	外側一帯ヨコナナ、脚上層、脚上層オサエ 外側一帯ヨコナナ、脚上層、脚上層オサエ	08粉、礫を含む	5YR5/2灰褐色	N-2	幅内注：(3.4) cm
063	遊歩路	溝	7 7003SX	口：1/12	(18.1)	(2.1)	-	-	外側一帯ヨコナナ、脚上層、脚上層オサエ 外側一帯ヨコナナ、脚上層、脚上層オサエ	08粉、礫を含む	5Y6/1灰白色	N-2	
064	遊歩路	溝	Ⅱ・Ⅲ層	口：1/12	(17.0)	(2.9)	-	-	外側一帯ヨコナナ、脚上層、脚上層オサエ 外側一帯ヨコナナ、脚上層、脚上層オサエ	08粉を含む	5YR5/1灰白色	N-2	
065	遊歩路	溝	1066SP	口：1/12	(15.0)	(2.1)	-	-	内外一帯ヨコナナ	08粉を含む	10YR6.0/3淡黄褐色	N-2	
066	遊歩路	遊積	1061SD	底：2/12	-	(3.3)	(6.9)	-	外側一帯ヨコナナ、脚上層、脚上層オサエ 外側一帯ヨコナナ、脚上層、脚上層オサエ	08粉を含む	5Y5/1灰白色	N-2	
067	遊歩路	遊積	Ⅱ層	底：1/12	-	(3.3)	(6.8)	-	外側一帯ヨコナナ、脚上層、脚上層オサエ 外側一帯ヨコナナ、脚上層、脚上層オサエ	08粉、礫を含む	N6.0A褐色	N-2	
068	遊歩路	遊積	2 2163SK	底：2/12	-	(2.9)	(11.8)	-	外側一帯ヨコナナ、脚上層、脚上層オサエ 外側一帯ヨコナナ、脚上層、脚上層オサエ	08粉を含む	5Y6/1灰白色	N-2	脚上のため調査不可
069	遊歩路	有付坪	Ⅱ層	底：1/12	-	(3.9)	(14.0)	-	内外一帯ヨコナナ	08粉、礫を含む	2.5Y7/2灰白色	N-2	

調査区

番号	器種	形状	調査区	遺構・位置	発見率	口径 cm	高さ cm	底径 cm	注目する特徴	土質	色調	時期	その他・備考
070	須恵器 甕	7	7001SX	口：2/12	(18.0)	(4.9)	内面二口方十字 外面二口方十字			砂鉄・礫を含む	2.5Y5/1灰白色	N-2	
071	須恵器 短頸甕	1	1156SX	口：1/12	(19.0)	(5.8)	内面二口方十字			砂鉄・礫を含む	2.5Y6/1灰白色	N-2	
072	須恵器 短頸甕	1	甲層	口：2/12	(13.0)	(13.6)	内外面一口方十字		内外面一口方十字、口蓋部ヨコナシ	砂鉄・礫を含む	2.5Y8/1灰白色	N-2	
073	須恵器 甕	2	2126SD	底：2/12	(15.4)	(4.8)	内面二口方十字、強い十字 外面二口方十字、弱十字、底面押痕のたこ跡部不明			砂鉄・礫を含む	5YR4/1弱灰色 断面：2.5Y7/1灰白色	N-2	
074	須恵器 甕	7	7001SX	口：1/12	(10.0)	(4.4)	内面二口方十字、多分、土質			砂鉄・礫を含む	2.5Y7/1灰白色	N-2	
075	須恵器 把手	2	2038SK	-	(4.4)	(4.4)	内面二口方十字		内面二口方十字、胎ナシ	砂鉄・礫を含む	2.5Y8/3灰白色	N-2	
076	須恵器 把手	2	1層	-	(6.4)	(6.4)	内面二口方十字		内面二口方十字、胎ナシ	砂鉄・礫を含む	2.5Y8/2灰白色	N-2	
077	灰釉陶器 甕	2	2126SD	口：1/12 底：12/12	14.3	2.7	6.6	内面二口方十字 外面二口方十字	内面二口方十字、胎ナシ、胎ナシケケズリ、胎付蓋付	砂鉄・礫を含む	2.5Y7/2灰白色	N-2	
078	灰釉陶器 甕	2	II・I層	底：1/12	(2.0)	(8.0)	(8.0)	内面二口方十字 外面二口方十字	内面二口方十字、胎ナシケケケズリ、胎付蓋付	砂鉄・礫を含む	2.5Y7/2灰白色	N-2	
079	灰釉陶器 甕	2	2126SD	底：2/12	(1.8)	(8.8)	(8.8)	内面二口方十字 外面二口方十字	内面二口方十字、胎ナシケケケズリ、胎付蓋付	砂鉄・礫を含む	2.5Y8/1灰白色	N-2	
080	灰釉陶器 甕	1	甲層	底：9/12	(2.8)	(6.0)	(6.0)	内面二口方十字 外面二口方十字	内面二口方十字、胎付蓋付	砂鉄を含む	2.5Y7/1灰白色	N-3	
081	灰釉陶器 甕	1	II・I層	底：2/12	(1.5)	(7.0)	(7.0)	内面二口方十字 外面二口方十字	内面二口方十字、胎付蓋付	砂鉄を含む	2.5Y7/1灰白色	N-3	
082	緑釉灰地 甕	1	1021SK	底：2/12	(2.1)	(7.0)	(7.0)	内面二口方十字 外面二口方十字	内面二口方十字、胎付蓋付	砂鉄を含む	2.5Y7/2灰白色	N-3	甕の目録付
083	山笠陶 小皿	1	1066SK	口：4/12 底：6/12	(7.6)	2.5	(4.0)	内面二口方十字	内面二口方十字、胎付蓋付	砂鉄・礫を含む	5Y8/1灰白色	V-2	
084	山笠陶 小皿	1	1066SK	口：3/12 底：12/12	7.6	1.8	4.1	内面二口方十字	内面二口方十字、胎付蓋付、胎付蓋付り風	砂鉄・礫を含む	2.5Y7/3灰白色	V-2	
085	山笠陶 小皿	1	1066SK	口：1/12 底：12/12	7.2	1.9	4.5	内面二口方十字	内面二口方十字、胎付蓋付、胎付蓋付り風	砂鉄・礫を含む	2.5Y7/1灰白色	V-2	
086	山笠陶 小皿	1	1066SK	口：3/12 底：12/12	7.6	2.0	4.2	内面二口方十字	内面二口方十字、胎付蓋付、胎付蓋付り風	砂鉄・礫を含む	2.5Y7/1灰白色	V-2	
087	山笠陶 小皿	1	1066SK	口：3/12 底：12/12	8.0	2.0	4.6	内面二口方十字	内面二口方十字、胎付蓋付、胎付蓋付り風	砂鉄・礫を含む	2.5Y6/2灰白色	V-2	
088	山笠陶 小皿	1	1066SK	口：1/12 底：7/12	(8.8)	2.0	(5.0)	内面二口方十字	内面二口方十字、胎付蓋付、胎付蓋付り風	砂鉄・礫を含む	2.5Y6/2灰白色	V-2	
089	山笠陶 甕	1	1066SK	口：5/12 底：3/12	(13.5)	4.7	(7.2)	内面二口方十字	内面二口方十字、胎付蓋付、胎付蓋付り風	砂鉄・礫を含む	2.5Y7/1灰白色	V-2	
090	山笠陶 甕	1	1066SK	口：1/12 底：2/12	(13.8)	4.6	(6.8)	内面二口方十字	内面二口方十字、胎付蓋付、胎付蓋付り風	砂鉄・礫を含む	2.5Y7/1灰白色	V-2	
091	山笠陶 甕	1	1066SK	底：3/12	(3.6)	(6.3)	(6.3)	内面二口方十字	内面二口方十字、胎付蓋付、胎付蓋付り風	砂鉄・礫を含む	2.5Y8/1灰白色	V-2	
092	山笠陶 甕	1	1066SK	底：3/12	(3.7)	(8.2)	(8.2)	内面二口方十字	内面二口方十字、胎付蓋付、胎付蓋付り風	砂鉄を含む	2.5Y7/3灰白色	V-2	
093	山笠陶 甕	1	1066SK	口：10/12 底：6/12	15.4	5.4	(7.4)	内面二口方十字	内面二口方十字、胎付蓋付、胎付蓋付り風	砂鉄・礫を含む	2.5Y7/2灰白色	V-2	

調査区

調査区

調査区

番号	器種	制形	調音区	遺構・単位	残存率	口径 cm	器高 cm	底径 cm	注目等の特徴	胎土	色調	時期	その他・備考
094	山笠窯	碗	1	1005K	口：8/12 底：7/12	—	(2.6)	(5.7)	内外面一口方ロケ子、胎付蓋行	砂鉄・磁土を含む	2.5/7/1K白色	V-2	軽装版
095	山笠窯	碗	1	1005K	口：9/12 底：12/12	16.0	4.7	7.7	内外面一口方ロケ子、胎付蓋行	砂鉄・磁土を含む	10/187/4にぶ、黄褐色	V-2	軽装版
096	山笠窯	碗	1	1005K	—	—	(2.3)	(7.0)	内外面一口方ロケ子、胎付蓋行	砂鉄・磁土を含む	2.5/7/2K灰色	V-2	軽装版
097	原形埴	片1鉢	1	1005K	口：2/12 底：2/12	(2.5)	(6.2)	—	内外面一口方ロケ子	砂鉄・磁土を含む	10/185/1K灰色	V-2	軽装版
098	原形埴	皿	1	1005K	底：1/12	—	(5.0)	—	内外面一口方ロケ子	砂鉄・磁土を含む	10/185/1K灰色	V-2	軽装版
099	山笠窯	碗	2	2126SD	口：5/12 底：12/12	16.0	5.0	8.0	内外面一口方ロケ子、胎付蓋行、胎付正蓋、胎付切取版、胎付蓋行	砂鉄・磁土を含む	2.5/18/1K白色	V-2	軽装版
100	山笠窯	碗	2	2126SD	口：5/12 底：6/12	(15.6)	4.4	8.0	内外面一口方ロケ子、胎付蓋行	砂鉄・磁土を含む	10/186/2浅黄褐色	V-2	軽装版
101	山笠窯	碗	2	2126SD	口：2/12 底：12/12	15.9	4.8	7.2	内外面一口方ロケ子、胎付蓋行	砂鉄・磁土を含む	10/187/3にぶ、黄褐色	V-2	軽装版、砂鉄版
102	山笠窯	碗	2	2126SD	口：1/12 底：10/12	(17.0)	5.1	(7.6)	内外面一口方ロケ子、胎付蓋行	砂鉄・磁土を含む	2.5/18/1K白色	V-2	軽装版
103	山笠窯	碗	2	2126SD	口：5/12 底：5/12	(16.2)	4.8	(6.7)	内外面一口方ロケ子、胎付蓋行	砂鉄・磁土を含む	2.5/17/2K灰色	V-2	軽装版
104	山笠窯	碗	2	2126SD	口：2/12 底：12/12	(15.6)	4.8	(7.8)	内外面一口方ロケ子、胎付蓋行、ナデ	砂鉄・磁土を含む	10/186/1K白色	V-2	軽装版
105	山笠窯	碗	2	2126SD	口：1/12 底：4/12	(16.0)	4.8	7.0	内外面一口方ロケ子、胎付蓋行、ナデ	砂鉄・磁土を含む	2.5/18/1K白色	V-2	軽装版
106	山笠窯	碗	2	2126SD	口：5/12 底：12/12	(16.2)	5.1	(7.7)	内外面一口方ロケ子、胎付蓋行	砂鉄・磁土を含む	10/187/3にぶ、黄褐色	V-2	軽装版
107	山笠窯	碗	2	2126SD	口：5/12 底：12/12	15.6	4.8	7.1	内外面一口方ロケ子、胎付蓋行	砂鉄・磁土を含む	2.5/17/1K白色	V-2	軽装版
108	山笠窯	碗	2	2126SD	口：3/12 底：12/12	(15.6)	5.1	(7.6)	内外面一口方ロケ子、胎付蓋行	砂鉄・磁土を含む	2.5/18/1K白色	V-2	軽装版
109	山笠窯	碗	2	2126SD	底：12/12	—	(3.3)	8.1	内外面一口方ロケ子、胎付蓋行、ナデ	砂鉄・磁土を含む	2.5/18/1K白色	V-2	軽装版
110	山笠窯	碗	2	2126SD	底：8/12	—	(3.2)	7.2	内外面一口方ロケ子、胎付蓋行	砂鉄・磁土を含む	2.5/17/1K白色	V-2	軽装版
111	山笠窯	碗	2	2126SD	口：5/12 底：12/12	14.9	5.3	7.0	内外面一口方ロケ子、胎付蓋行、ナデ	砂鉄・磁土を含む	5/7/1K白色	V-2	軽装版
112	山笠窯	碗	2	2126SD	口：7/12 底：5/12	14.4	5.0	7.0	内外面一口方ロケ子、胎付蓋行	砂鉄・磁土を含む	外蓋：2.5/17/2K灰色 内蓋：2.5/17/1K白色	V-2	軽装版
113	山笠窯	碗	2	2126SD	口：7/12 底：1/12	(15.6)	5.3	(7.1)	内外面一口方ロケ子、胎付蓋行	砂鉄・磁土を含む	7.5/16/2Kオリーブ色	V-2	軽装版
114	山笠窯	碗	2	2126SD	口：5/12 底：12/12	(14.5)	5.0	(7.3)	内外面一口方ロケ子、胎付蓋行	砂鉄・磁土を含む	5/7/1K白色	V-2	軽装版
115	山笠窯	碗	2	2126SD	口：10/12 底：12/12	13.9	5.1	6.2	内外面一口方ロケ子、胎付蓋行、胎付正蓋	砂鉄・磁土を含む	5/7/1K白色	V-2	軽装版
116	山笠窯	碗	2	2126SD	口：8/12 底：2/12	13.5	5.6	(6.4)	内外面一口方ロケ子、胎付蓋行	砂鉄・磁土を含む	2.5/17/1K白色	V-2	軽装版
117	山笠窯	碗	2	2126SD	口：5/12 底：5/12	(13.6)	4.8	(5.8)	内外面一口方ロケ子、胎付蓋行、胎付正蓋	砂鉄・磁土を含む	7.5/16/1薄灰色	V-2	軽装版

資料

資料

番号	器種	形状	調音区	演奏・搬送	残存率	口径 cm	総高 cm	底径 cm	演奏の特徴	胎土	色澤	時期	その他・備考
118	山笠焼	碗	2	21265D	口：4/12 底：3/12	(14.4)	(5.4)	(6.0)	内面-ロクろナ子、割正型 外面-ロクろナ子、同底切柄、彫付縁付	砂粒・濃を含む	2.5Y7/2K黄褐色	V-2	
119	山笠焼	碗	2	21265D	口：11/12 底：12/12	13.6	4.8	5.8	内面-ロクろナ子、割正型 外面-ロクろナ子、同底切柄、彫付縁付	砂粒・濃を含む	2.5Y8/1K白色	V-2	彫込碗
120	山笠焼	碗	2	21265D	口：12/12 底：12/12	13.5	4.8	6.3	内面-ロクろナ子、割正型 外面-ロクろナ子、同底切柄、彫付縁付	砂粒・濃を含む	2.5Y7/1K白色	V-2	彫込碗
121	山笠焼	碗	2	21265D	口：4/12 底：10/12	(14.2)	4.7	6.1	内面-ロクろナ子、割正型 外面-ロクろナ子、ナデ、彫付縁付	濃を含む	5Y7/1K白色	V-2	彫込碗
122	山笠焼	碗	2	21265D	口：5/12 底：6/12	(12.5)	5.0	(6.3)	内面-ロクろナ子、彫付縁付	砂粒・濃を含む	5Y7/1K白色	V-2	彫込碗
123	山笠焼	碗	2	21265D	口：11/12 底：12/12	14.3	5.3	6.3	内面-ロクろナ子、割正型 外面-ロクろナ子、彫付縁付	砂粒・濃を含む	5Y7/1K白色	V-2	彫込碗、片口彫込
124	山笠焼	碗	2	21265D	口：5/12 底：5/12	(13.5)	5.2	(5.2)	内面-ロクろナ子、割正型 外面-ロクろナ子、同底切柄	砂粒・濃を含む	2.5Y7/1K白色	V-2	彫込碗
125	山笠焼	碗	2	21265D	口：6/12 底：12/12	13.1	5.8	4.6	内面-ロクろナ子、割正型 外面-ロクろナ子、同底切柄	砂粒・濃を含む	10Y88/2K白色	V-2	彫込碗
126	山笠焼	碗	2	21265D	口：6/12 底：5/12	(13.6)	5.9	6.8	内面-ロクろナ子、割正型 外面-ロクろナ子、彫付縁付	砂粒・濃を含む	2.5Y7/1K白色	V-2	彫込碗
127	山笠焼	碗	2	21265D	口：2/12	(13.0)	(4.3)	-	内外面-ロクろナ子	砂粒・濃を含む	2.5Y7/1K白色	V-2	瀬戸産
128	山笠焼	碗	2	21265D	口：3/12	(13.2)	(4.0)	-	内外面-ロクろナ子	濃を含む	5Y8/1K白色	V-2	瀬戸産
129	山笠焼	碗	2	21265D	口：3/12	(12.6)	(5.3)	-	内面-ロクろナ子、割正型 外面-ロクろナ子、同底切柄、板状切柄、彫付縁付	砂粒・濃を含む	2.5Y8/2K白色	V-2	瀬戸産
130	山笠焼	碗	2	21265D	口：5/12 底：5/12	(12.0)	6.3	(4.2)	内面-ロクろナ子、割正型 外面-ロクろナ子、同底切柄、板状切柄、彫付縁付	砂粒・濃を含む	2.5Y7/1K白色	V-2	彫込碗、瀬戸産
131	山笠焼	碗	2	21265D	底：8/12	-	(2.0)	(5.0)	内面-ロクろナ子、割正型 外面-ロクろナ子、同底切柄、彫付縁付、ナデ	濃を含む	5Y8/1K白色	V-2	彫込碗、瀬戸産
132	山笠焼	碗	2	21265D	底：1/12	-	(2.7)	(5.0)	内面-ロクろナ子、割正型 外面-ロクろナ子、同底切柄、板状切柄、彫付縁付	濃を含む	7.5Y88/1K白色	V-2	彫込碗、瀬戸産
133	山笠焼	小皿	2	21265D	口：1/12 底：12/12	(8.8)	2.5	4.3	内面-ロクろナ子、割正型 外面-ロクろナ子、同底切柄、板状切柄	砂粒・濃を含む	10Y87/2比、黄褐色	V-2	彫込碗
134	山笠焼	小皿	2	21265D	口：5/12 底：12/12	9.2	2.2	4.2	内面-ロクろナ子、割正型 外面-ロクろナ子、へら切	砂粒・濃を含む	2.5Y8/1K白色	V-2	彫込碗
135	山笠焼	小皿	2	21265D	口：12/12 底：12/12	8.2	2.3	4.3	内面-ロクろナ子、割正型 外面-ロクろナ子、同底切柄	砂粒・濃を含む	5Y7/1K白色	V-2	彫込碗
136	山笠焼	小皿	2	21265D	口：8/12 底：12/12	(9.1)	(2.2)	5.1	内面-ロクろナ子、割正型 外面-ロクろナ子、同底切柄	砂粒・濃を含む	2.5Y7/1K白色	V-2	彫込碗
137	山笠焼	小皿	2	21265D	口：10/12 底：12/12	8.5	2.0	5.3	内面-ロクろナ子、割正型 外面-ロクろナ子、同底切柄、へらナデ	砂粒・濃を含む	2.5Y7/1K白色	V-2	彫込碗
138	山笠焼	小皿	2	21265D	口：11/12 底：12/12	7.8	2.0	4.5	内面-ロクろナ子、割正型 外面-ロクろナ子、ナデ	濃を含む	2.5Y7/1K白色	V-2	彫込碗
139	山笠焼	小皿	2	21265D	口：10/12 底：12/12	8.3	2.1	4.6	内面-ロクろナ子、割正型 外面-ロクろナ子、同底切柄	砂粒・濃を含む	2.5Y7/1K白色	V-2	彫込碗
140	山笠焼	小皿	2	21265D	口：3/12 底：5/12	(7.6)	2.0	(4.4)	内面-ロクろナ子、割正型 外面-ロクろナ子、同底切柄、板状切柄	砂粒を含む	2.5Y7/2K黄褐色	V-2	彫込碗
141	山笠焼	小皿	2	21265D	口：7/12 底：12/12	7.6	2.2	3.0	内面-ロクろナ子、割正型 外面-ロクろナ子、同底切柄	砂粒・濃を含む	2.5Y8/1K白色	V-2	彫込碗

裏面表

番号	器種	形状	調音区	通積・単位	残存率	口径 cm	器高 cm	口径 cm	器高 cm	技法等の特徴	出土	色調	時期	その他・備考
142	山笠篋	小皿	2	21265D	口：12/12 底：12/12	8.8	2.0	5.7	5.7	内面一口クワナナ、筒形正直 外面一口クワナナ、筒形正直	砂鉄・漆を含む	5Y8/1R6白色	V-2	
143	山笠篋	小皿	2	21265D	口：8/12 底：10/12	7.5	1.8	5.0	5.0	内面一口クワナナ、筒形正直 外面一口クワナナ、筒形正直	砂鉄・漆を含む	5Y7/1R6白色	V-2	
144	山笠篋	小皿	2	21265D	口：12/12 底：12/12	8.0	1.7	5.6	5.6	内面一口クワナナ、筒形正直 外面一口クワナナ、筒形正直	砂鉄・漆を含む	2.5Y7/1R6白色	V-2	
145	山笠篋	小皿	2	21265D	口：8/12 底：12/12	8.6	1.7	5.5	5.5	内面一口クワナナ、筒形正直 外面一口クワナナ、筒形正直	漆を含む	2.5Y8/1R6白色	V-2	瀬戸産
146	山笠篋	小皿	2	21265D	口：3/12 底：3/12	(8.4)	(1.3)	(6.4)	(6.4)	内面一口クワナナ、筒形正直 外面一口クワナナ、筒形正直	砂鉄・漆を含む	2.5Y7/1R6白色	V-2	程度、見込みに行き物 あり
147	山笠篋	小皿	2	21265D	口：17/12 底：12/12	7.9	1.8	4.8	4.8	内面一口クワナナ、筒形正直 外面一口クワナナ、筒形正直	漆を含む	5Y8/1R6白色	V-2	
148	山笠篋	小皿	2	21265D	口：17/12 底：12/12	(8.0)	1.6	4.4	4.4	内面一口クワナナ、筒形正直 外面一口クワナナ、筒形正直	漆を含む	5Y7/1R6白色	V-2	
149	山笠篋	小皿	2	21265D	口：12/12 底：12/12	7.3	1.4	4.4	4.4	内面一口クワナナ、筒形正直 外面一口クワナナ、筒形正直	砂鉄・漆を含む	7.5Y8/2R6.2緑色	V-2	
150	山笠篋	小皿	2	21265D	口：17/12 底：5/12	—	(6.6)	6.1	6.1	内面一口クワナナ、筒形正直 外面一口クワナナ、筒形正直	砂鉄を含む	5Y8/1R6白色	V-2	4層以上の重なる漆層あり 底は口から5cm計
151	山笠篋	小皿	2	21265D	口：17/12 底：2/12	(8.0)	0.8	(6.3)	(6.3)	内面一口クワナナ、筒形正直 外面一口クワナナ、筒形正直	砂鉄・漆を含む	2.5Y7/1R6白色	V-3-4	
152	山笠篋	小皿	2	21265D	口：5/12 底：5/12	(8.0)	1.0	5.5	5.5	内面一口クワナナ、筒形正直 外面一口クワナナ、筒形正直	砂鉄を含む	5Y7/1R6白色	V-3-4	
153	山笠篋	小皿	2	21265D	口：5/12 底：5/12	(7.6)	1.1	(5.0)	(5.0)	内面一口クワナナ、筒形正直 外面一口クワナナ、筒形正直	砂鉄を含む	2.5Y7/1R6白色	V-3-4	
154	山笠篋	小皿	2	21265D	口：11/12 底：5/12	(7.8)	1.2	(5.3)	(5.3)	内面一口クワナナ、筒形正直 外面一口クワナナ、筒形正直	砂鉄を含む	5Y8/1R6白色	V-3-4	
155	山笠篋	皿	2	21265D	口：1/12 底：7/12	(12.8)	(3.0)	—	—	内外一口クワナナ 外面一口クワナナ、筒形正直、駝付部分	砂鉄・漆を含む	2.5Y8/2R6白色	V-3	上層漆層の可成りあり
156	山笠篋	皿	2	21265D	口：4/12 底：5/12	(12.6)	4.6	(2.2)	(3.0)	内外一口クワナナ 外面一口クワナナ、筒形正直、駝付部分	砂鉄を含む	2.5Y8/1R6白色	V-3	
157	山笠篋	皿	2	21265D	口：1/12 底：5/12	(13.8)	3.0	(5.6)	(5.6)	内外一口クワナナ 外面一口クワナナ、筒形正直、駝付部分	漆を含む	5Y8/2R6白色	V-3	見込み及び行に程度あり
158	山笠篋	皿	2	21265D	口：1/12 底：6/12	(11.8)	4.5	(3.8)	(3.8)	内外一口クワナナ 外面一口クワナナ、筒形正直、駝付部分	漆を含む	5Y8/1R6白色	V-4	程度
159	山笠篋	皿	2	21265D	口：2/12 底：2/12	(11.2)	(2.8)	—	—	内外一口クワナナ	漆を含む	10Y8/2R6白色	V-4	
161	山笠篋	片口鉢	2	21265D	口：1/12 底：1/12	(23.7)	(3.8)	—	—	内外一口クワナナ	砂鉄・漆を含む	2.5Y7/1R6白色	V-1	
162	山笠篋	片口鉢	2	21265D	口：1/12 底：1/12	(21.4)	(7.5)	—	—	内外一口クワナナ、筒形正直 外面一口クワナナ、筒形正直	砂鉄・漆を含む	2.5Y6/1R6灰色	V-2	
163	山笠篋	片口鉢	2	21265D	口：1/12 底：1/12	(28.2)	(8.3)	—	—	内外一口クワナナ	砂鉄・漆を含む	7.5Y7/1R6白色	V-2	
164	山笠篋	片口鉢	2	21265D	口：1/12 底：1/12	(26.2)	(4.4)	—	—	内外一口クワナナ	砂鉄・漆を含む	5Y7/1R6白色	V-2	

器高

器高

番号	器種	形状	調査区	遺構・層位	採年表	口径 cm	器高 cm	底径 cm	技法等の特徴	胎土	色澤	時期	その他・備考
165	山形陶	片口鉢	2	21265D	底：5/12	—	(7.8)	(13.4)	内面—ロウロウ子、重口縁部、 外面—ロウロウ子、凹縁部、 底：5/12、胎土不明	砂粒・磁を含む	2.3Y7/1灰白色	V-2	
166	山形陶	片口鉢	2	21265D	底：3/12	—	(5.4)	(14.4)	内面—ロウロウ子 外面—ロウロウ子、系切縁、 胎土不明	磁を含む	2.3Y7/1灰白色	V-2	程度粗
167	山形陶	片口鉢	2	21265D	底：4/12	—	(6.0)	(12.0)	内面—ロウロウ子、凹縁部、 外面—ロウロウ子、胎土不明	磁を含む	2.3Y7/1灰白色	V-2	
168	山形陶	片口鉢	2	21265D	底：2/12	—	(9.5)	(12.0)	内面—ロウロウ子、胎土不明	砂粒・磁を含む	2.3Y6/1灰白色	V-2	
169	山形陶	片口鉢	2	21265D	底：5/12	—	(7.6)	(13.0)	内面—ロウロウ子、胎土不明	砂粒・磁を含む	2.3Y6/2灰白色	V-2	程度粗
170	山形陶	片口鉢	2	21265D	底：7/12	—	(3.8)	(9.6)	内面—ロウロウ子、胎土不明	磁を含む	5Y8/1灰白色	V-2	
171	滑石焼	甕	2	21265D	口：1/12	(5.48)	(15.0)	—	内面—輪縁部、指ササエ、 外面—ヨコナ子、胎土不明	砂粒・磁を含む	5Y8/4に赤い赤褐色 断面：7.5Y6/1灰白色	V-1	
172	滑石焼	甕	2	21265D	口：1/12	(26.0)	(8.5)	—	内面—輪縁部、指ササエ、 外面—ヨコナ子、胎土不明	砂粒・磁を含む	5Y8/4に赤い赤褐色 断面：5Y8/1灰白色	V-2	
173	滑石焼	甕	2	21265D	口：1/12	(30.0)	(8.0)	—	内面—輪縁部、指ササエ、 外面—ヨコナ子、胎土不明	砂粒・磁を含む	5Y8/4に赤い赤褐色 断面：2.3Y7/1灰白色	V-2	
174	滑石焼	甕	2	21265D	口：1/12	(35.8)	(9.6)	—	内面—輪縁部、指ササエ、 外面—ヨコナ子、胎土不明	砂粒・磁を含む	7.5Y8/3に赤い赤褐色 断面：2.3Y6/2灰白色	V-2	
175	滑石焼	甕	2	21265D	口：1/12	—	(6.2)	—	内面—輪縁部、指ササエ、 外面—ヨコナ子、胎土不明	砂粒・磁を含む	2.3Y6/2滑石焼色 断面：5Y8/2灰白色	V-2	
176	滑石焼	甕	2	21265D	口：1/12	(44.2)	(4.4)	—	内面—ヨコナ子、胎土不明	砂粒・磁を含む	10Y8/7Zに赤い赤褐色 断面：5Y6/1灰白色	V-2	
177	滑石焼	甕	2	21265D	口：1/12	—	(7.4)	—	内面—ヨコナ子、胎土不明	砂粒・磁を含む	5Y8/4に赤い赤褐色 断面：5Y6/1灰白色	V-2	
178	滑石焼	甕	2	21265D	口：1/12	(44.6)	(5.3)	—	内面—ヨコナ子、胎土不明	砂粒・磁を含む	5Y8/4に赤い赤褐色 断面：5Y6/1灰白色	V-2	
179	滑石焼	甕	2	21265D	口：1/12	(39.2)	(8.1)	—	内面—ヨコナ子、胎土不明	砂粒・磁を含む	5Y8/4に赤い赤褐色 断面：10Y8/6/1灰白色	V-2	
180	滑石焼	甕	2	21265D	口：1/12	—	(9.1)	—	内面—ヨコナ子、胎土不明	砂粒・磁を含む	7.5Y8/4に赤い赤褐色 断面：5Y7/1灰白色	V-2	
181	滑石焼	甕	2	21265D	口：1/12	(40.8)	(10.5)	—	内面—ヨコナ子、胎土不明	砂粒・磁を含む	2.3Y6/5磁褐色	V-2	
182	滑石焼	口口鉢	2	21265D	口：2/12	(28.9)	(11.7)	—	内面—ヨコナ子、胎土不明	砂粒・磁を含む	内面：5Y8/4に赤い赤褐色 断面：NS06M白色	V-2	
183	滑石焼	甕	2	21265D	口：1/12	(47.4)	(9.0)	—	内面—ヨコナ子、胎土不明	砂粒・磁を含む	2.3Y6/5磁褐色 断面：NS06M白色	V-2	
184	滑石焼	甕	2	21265D	口：1/12	(52.0)	(11.9)	—	内面—ヨコナ子、胎土不明	砂粒・磁を含む	5Y8/5磁赤褐色 断面：NS06M白色	V-2	
185	滑石焼	甕	2	21265D	口：2/12	(37.6)	(18.6)	—	内面—指ササエ、胎土不明	砂粒・磁を含む	5Y8/5磁赤褐色 断面：2.3Y7/1灰白色	V-2	
186	滑石焼	甕	2	21265D	口：1/12	—	(6.1)	—	内面—ヨコナ子、胎土不明	砂粒・磁を含む	2.3Y8/4磁赤褐色 断面：NS06M白色	V-2	

番号	機種	顔形	調音区	音階・単位	残存率	口径 cm	筒高 cm	総長 cm	振込等の特徴	胎土	色調	時期	その他・備考
187	原形機	横	2	212650	口：1/12 底：1/12	(47.6)	(7.4)	—	内面—ヨコナナ子 外面—ヨコナナ子、ナナ子	0枚、鏝を含む	7.5YR5/3にふい、黄褐色 断面：2.5Y6/1R灰色	V-2	
188	原形機	横	2	212650	口：1/12	—	(5.8)	—	内外面—ヨコナナ子	0枚、鏝を含む	7.5YR5/3にふい、黄褐色 断面：2.5Y6/1R灰色	V-2	
189	原形機	横	2	212650	口：1/12	(35.0)	(9.1)	—	内面—輪縁部、ヨコナナ子 外面—ヨコナナ子	0枚、鏝を含む	7.5YR5/3にふい、黄褐色 断面：2.5Y6/1R灰色	V-2	
190	原形機	横	2	212650	口：1/12	—	(10.5)	—	内面—ヨコナナ子、指ナサエ 外面—ヨコナナ子	0枚、鏝を含む	7.5YR5/3にふい、黄褐色 断面：2.5Y6/1R灰色	V-2	
191	原形機	横	2	212650	口：1/12	(24.0)	(7.5)	—	内面—ヨコナナ子、指ナサエ 外面—ヨコナナ子	0枚、鏝を含む	7.5YR5/3にふい、黄褐色 断面：2.5Y6/1R灰色	V-2	
192	原形機	丸面調	2	212650	口：1/12	(22.5)	(6.0)	—	内面—ヨコナナ子、指ナサエ 外面—ヨコナナ子	0枚、鏝を含む	7.5YR5/3にふい、黄褐色 断面：2.5Y6/1R灰色	V-2	
193	原形機	面	2	212650	口：5/12	(15.7)	(17.5)	—	内面—輪縁部、ヨコナナ子、指ナサエ 外面—ヨコナナ子、ナナ子、底部の杖痕	0枚、鏝を含む	10Y4/1R灰色 0.5YR4/2R紫色 断面：2.5Y7/6R灰色	V-1	外面に#のような顔筋跡あり
194	原形機	面	2	212650	底：1/12	—	(6.2)	(12.0)	内面—指ナサエ、指ナサエ 外面—ヨコナナ子、指ナサエ	0枚、鏝を含む	7.5YR5/3にふい、黄褐色 断面：2.5Y6/1R灰色	V-2	
195	原形機	面	2	212650	口：1/12	(18.0)	(6.4)	—	内面—輪縁部、ヨコナナ子、指ナサエ 外面—ヨコナナ子	0枚、鏝を含む	7.5YR5/3にふい、黄褐色 断面：2.5Y6/1R灰色	V-2	
196	原形機	立口調	2	212650	口：2/12	(12.0)	(4.4)	—	内外面—ヨコナナ子	0枚、鏝を含む	2.5Y6/1R灰色	V-2	
197	原形機	玉縁調	2	212650	口：1/12	(10.2)	(5.2)	—	内面—ヨコナナ子 外面—ヨコナナ子	0枚、鏝を含む	5YR5/2にふい、黄褐色 断面：2.5Y7/2R灰色	V-2	
198	原形機	小鉢	2	212650	口：4/12 底：4/12	(15.3)	5.8	(13.0)	内面—ヨコナナ子、指ナサエ 外面—ヨコナナ子、ナナ子、底部の杖痕	0枚、鏝を含む	5YR6/4にふい、黄褐色 断面：2.5Y7/1R灰色	V-2	
199	原形機	小鉢	2	212650	口：1/12 底：1/12	(15.0)	4.7	(13.2)	内面—指ナサエ、ナナ子 外面—指ナサエ、ナナ子	鏝を含む	5YR5/2にふい、黄褐色 断面：2.5Y7/1R灰色	V-2	
200	原形機	羽釜	2	212650	口：1/12	(21.9)	(6.6)	—	内外面—ヨコナナ子	0枚、鏝を含む	10YR6/3成黄褐色	V-2	上面貫孔成
201	原形機	羽釜	2	212650	—	—	(4.9)	—	内面—ヨコナナ子 外面—ヨコナナ子	0枚、鏝を含む	5YR7/6褐色	V-2	上面貫孔成
202	原形機	片口鉢	2	212650	口：1/12	(22.0)	(5.6)	—	内面—輪縁部、ヨコナナ子、指ナサエ 外面—ヨコナナ子、指ナサエ	0枚、鏝を含む	5YR5/4にふい、黄褐色 断面：2.5Y6/1R灰色	V-2	
203	原形機	片口鉢	2	212650	口：1/12 底：3/12	(34.0)	12.6	(17.0)	内面—ヨコナナ子、指ナサエ 外面—ヨコナナ子、指ナサエ、底部の杖痕	0枚、鏝を含む	2.5YR4/2R紫色 断面：2.5Y6/1R灰色	V-2	
204	原形機	片口鉢	2	212650	口：1/12	(29.0)	(6.1)	—	内外面—ヨコナナ子	0枚、鏝を含む	5YR5/3にふい、黄褐色	V-2	
205	原形機	片口鉢	2	212650	口：1/12	—	(5.3)	—	内面—輪縁部、ヨコナナ子 外面—ナナ子、ヨコナナ子	0枚、鏝を含む	5YR5/2R褐色	V-2	
206	原形機	片口鉢	2	212650	口：1/12	—	(4.3)	—	内面—ヨコナナ子 外面—ヨコナナ子	0枚、鏝を含む	7.5YR5/2R褐色	V-2	
207	原形機	片口鉢	2	212650	口：1/12	(35.8)	(6.2)	—	内面—ヨコナナ子 外面—ヨコナナ子、指ナサエ	0枚、鏝を含む	5YR6/6褐色	V-3	
208	原形機	片口鉢	2	212650	口：1/12	—	(7.2)	—	内面—ヨコナナ子、指ナサエ 外面—ヨコナナ子、指ナサエ、底部の杖痕	0枚、鏝を含む	2.5YR5/2にふい、黄褐色 断面：2.5Y6/1R灰色	V-3	
209	原形機	片口鉢	2	212650	口：1/12	—	(7.1)	—	内面—ヨコナナ子、指ナサエ 外面—ヨコナナ子、指ナサエ	0枚、鏝を含む	5YR4/1R灰色 断面：5YR6/6褐色	V-4	
210	原形機	片口鉢	2	212650	口：1/12	(32.8)	(9.7)	—	内面—ヨコナナ子 外面—ヨコナナ子、指ナサエ	0枚、鏝を含む	5YR6/3にふい、黄褐色 断面：2.5Y6/1R灰色	V-4	

原形機

原形機

番号	機種	形状	設置区	運賃・乗立	稼働率	口径 cm	幅高 cm	底径 cm	投玉等の特徴	遊士	色調	時期	その他・備考
211	落球機	片口鉢	2	21050	口：1/12	—	(70)	—	内外面—ロケロケ子	0枚、遊を含む	5Y85/4にぶい、赤褐色 新調：5Y6/1K白色	V-4	
212	落球機	片口鉢	2	21050	口：1/12 底：1/12	(348)	129	(140)	内面—ロケロケ子、ヨコナ子 外面—ロケロケ子、ヨコナ子、遊ちかえ、靴ナ子	0枚、遊を含む	5Y5/4K白色	V-4	
213	落球機	片口鉢	2	21050	口：3/12	(294)	98	—	内面—輪転機、ロケロケ子 外面—ロケロケ子、靴ナ子	0枚、遊を含む	5Y85/3にぶい、赤褐色 新調：5Y5/4K白色	V-4	
214	落球機	片口鉢	2	21050	底：2/12	—	(68)	(130)	内面—輪転機、靴ナ子、ヨコナ子 外面—ハタ、ヨコナ子	0枚、遊を含む	7.5Y85/3にぶい、褐色	V-3-4	
215	落球機	片口鉢	2	21050	底：2/12	—	(64)	(130)	内面—ロケロケ子、靴ナ子、遊 外面—ロケロケ子、靴ナ子、遊	0枚、遊を含む	2.5Y85/6褐色	V-3-4	
216	落球機	片口鉢	2	21050	底：1/12	—	(68)	(160)	内面—輪転機、ナ子、指ナ子、靴ナ子 外面—ナ子、指ナ子、遊、遊部付靴	0枚、遊を含む	2.5Y85/3にぶい、赤褐色	V-3-4	
217	落球機	片口鉢	2	21050	口：1/12	(284)	(74)	—	内面—指ナ子、ナ子、ヘラケケ子 外面—指ナ子、ナ子、ヘラケケ子	0枚、遊を含む	5Y85/6褐色	V-5	
218	占測戸	折鉢小皿	2	21050	口：3/12 底：4/12	(90)	22	(52)	内面—ロケロケ子、遊 外面—ロケロケ子、回転切頭、遊	0枚、遊を含む	N7 0K白色	V-4	
219	占測戸	指反方面	2	21050	口：1/12 底：3/12	(113)	22	(60)	内面—ロケロケ子、遊 外面—ロケロケ子、回転切頭、遊	0枚、遊を含む	10Y87/3にぶい、青褐色	V-4	
220	占測戸	小皿	2	21050	底：11/12	—	(14)	(48)	内面—ロケロケ子、指反面、遊 外面—ロケロケ子、回転切頭	0枚、遊を含む	2.5Y77/2K褐色	V-4	
221	占測戸	小皿	2	21050	口：1/12 底：2/12	(107)	22	(34)	内外面—ロケロケ子、遊	0枚、遊を含む	5Y8/4K白色	V-5	
222	占測戸	人目監視	2	21050	口：3/12	(120)	(50)	—	内面—ロケロケ子、遊 外面—ロケロケ子、遊、回転ヘラケケ子、遊	0枚、遊を含む	5Y8/4K白色	V-4	
223	占測戸	人目監視	2	21050	底：9/12	—	(25)	(40)	内面—回転ヘラケケ子、遊部付台 外面—回転ヘラケケ子、遊部付台	0枚、遊を含む	5Y77/4K白色	V-4	
224	占測戸	皿	2	21050	口：1/12	—	(31)	—	内面—ロケロケ子、遊 外面—ロケロケ子、遊	0枚、遊を含む	2.5Y77/1K白色	V-4	
225	占測戸	皿	2	21050	口：1/12	—	(44)	—	内外面—ロケロケ子、遊	0枚、遊を含む	2.5Y8/28K白色	V-4	
226	占測戸	鉢	2	21050	底：3/12	—	(17)	(100)	内面—ロケロケ子、遊 外面—ロケロケ子、回転切頭、板柱付遊	0枚、遊を含む	2.5Y77/28K褐色	V-4	
227	占測戸	鉢	2	21050	底：3/12	—	(17)	(93)	内面—ロケロケ子、遊、遊 外面—ロケロケ子、回転切頭、遊	0枚、遊を含む	2.5Y77/28K褐色	V-4	
228	占測戸	皿	2	21050	底：3/12	—	(18)	(106)	内面—ロケロケ子、遊 外面—回転ヘラケケ子、遊、回転ヘラケケ子	0枚、遊を含む	5Y6/4K白色	V-4	
229	占測戸	型	2	21050	底：2/12	—	(28)	(130)	内面—ロケロケ子、遊 外面—回転ヘラケケ子、遊	0枚、遊を含む	2.5Y8/28K白色	V-4	
230	占測戸	折鉢深皿	2	21050	底：3/12	—	(44)	(122)	内面—ロケロケ子、遊 外面—回転ヘラケケ子、遊	0枚、遊を含む	2.5Y87/6にぶい、褐色 新調：10Y88/4K青褐色	V-4	
231	占測戸	花籃	2	21050	底：2/12	—	(50)	(52)	内面—ロケロケ子、靴ナ子、遊 外面—ロケロケ子、靴ナ子、遊	0枚、遊を含む	10Y87/3にぶい、青褐色	V-3	
232	占測戸	轉付小口	2	21050	—	—	(68)	—	内面—ロケロケ子、ヘラケケ子、遊 外面—回転ヘラケケ子、遊	0枚、遊を含む	2.5Y8/4K白色	V-3	
233	占測戸	散飯	2	21050	—	—	(94)	—	内面—回転ヘラケケ子、遊 外面—回転ヘラケケ子、遊	0枚、遊を含む	2.5Y77/3K褐色	V-3	

遊園地

遊園地



番号	機種	顔形	調音区	演奏・単位	演奏率	口徑 cm	筒高 cm	総長 cm	振込等の特徴	撥土	色調	時期	その他・備考
234	占部戸	角子	2	212650	底：12/12	—	6.9	8.8	内面—輪縁取、口ワロナ子、指ササエ、 外面—口ワロナ子、口ワ	08粒を含む	2.5Y7/18K白色	V-3	
235	上線部	伊勢型調	2	212650	口：1/12	(20.0)	(3.8)	—	内面—ヨコナ子、ハツ 外面—ヨコナ子、指ササエ	08粒・撥を含む	2.5Y8/18K白色 新調：10Y6/18K色	V-2	
236	上線部	伊勢型調	2	212650	口：2/12	(24.6)	(5.3)	—	内面—ヨコナ子、角ナ子 外面—ヨコナ子、指ササエ	撥を含む	7.5Y67/4C赤・褐色 新調：2.5Y4/18K色	V-2	
237	上線部	伊勢型調	2	212650	口：2/12	(25.8)	(13.6)	—	内面—ヨコナ子、角ナ子、ハツナズリ 外面—ヨコナ子、ハツ、指ササエ、ハツナズリ	08粒・撥を含む	7.5Y67/4C赤・褐色 新調：2.5Y7/26K褐色	V-2	
238	上線部	伊勢型調	2	212650	口：2/12	(23.4)	(5.1)	—	内面—ヨコナ子、角ナ子、指ササエ 外面—ヨコナ子、ハツ、指ササエ	08粒・撥を含む	10Y98/26K白色 新調：2.5Y5/18K色	V-2	
239	上線部	伊勢型調	2	212650	口：1/12	(26.0)	(3.3)	—	内面—ヨコナ子	08粒・撥を含む	2.5Y7/18K白色 新調：10Y31/4Cグリーンブ褐色	V-2	
240	上線部	伊勢型調	2	212650	口：1/12	(23.7)	(2.8)	—	内外面—ヨコナ子	08粒・撥を含む	2.5Y7/26K褐色	V-3	
241	上線部	伊勢型調	2	212650	口：1/12	(24.6)	(5.6)	—	内面—指ササエ、ヨコナ子、ナ子 外面—ヨコナ子、ハツ	08粒・撥を含む	7.5Y67/4C赤・褐色 新調：3.5Y8/18K色	V-3	
242	上線部	羽渡	2	212650	—	—	(3.1)	—	外面—ヨコナ子、ヨコナ子 外面—ヨコナ子、ナ子	撥を含む	7.5Y98/4度鉄褐色	V-4	
243	上線部	羽渡	2	212650	口：1/12	(23.6)	(1.8)	—	外面—ヨコナ子 外面—ヨコナ子、ナ子	08粒・撥を含む	2.5Y8/26K白色	V-4	
244	上線部	内仕調	2	212650	口：1/12	(24.0)	(5.5)	—	外面—ヨコナ子、指ササエ、仕調	08粒・撥を含む	2.5Y8/26K白色	V-4	
245	上線部	内仕調	2	212650	口：1/12	—	(4.2)	—	外面—ヨコナ子、ナ子	08粒・撥を含む	2.5Y8/26K白色	V-4	
246	上線部	小車	2	212650	口：5/12 底：11/12	(7.3)	1.6	(5.1)	外面—口ワロナ子、指ササエ 外面—口ワロナ子、指ササエ、撥、仕調	08粒・撥を含む	7.5Y7/26K褐色	V-2-4	
247	上線部	小車	2	212650	口：1/12	(7.2)	1.6	(4.6)	外面—口ワロナ子、指ササエ、撥 外面—口ワロナ子、指ササエ、撥	08粒・撥を含む	5Y96/6褐色	V-2-4	
248	上線部	小車	2	212650	口：4/12 底：4/12	(8.2)	1.3	(5.6)	外面—口ワロナ子、指ササエ、撥 外面—口ワロナ子、指ササエ、撥	08粒・撥を含む	10Y98/26K白色	V-2-4	
249	上線部	小車	2	212650	口：2/12 底：2/12	(8.0)	1.5	—	外面—ヨコナ子、指ササエ、ナ子 外面—ナ子、指ササエ	08粒を含む	2.5Y8/26K白色	V-2-4	
250	上線部	小車	2	212650	口：2/12	(9.1)	1.4	(3.7)	外面—ナ子、指ササエ 外面—口ワロナ子、撥	08粒を含む	7.5Y67/4C赤・褐色	V-2-4	
251	首座	腕	2	212650	口：1/12	—	(3.7)	—	外面—口ワロナ子、撥 外面—口ワロナ子、運打文、撥	08粒を含む N9.0NK白色	—	V-2-3	
252	首座	腕	2	212650	口：1/12	—	(2.6)	—	外面—口ワロナ子、撥 外面—口ワロナ子、運打文、撥	08粒を含む N9.0NK白色	—	V-2-3	
253	首座	腕	2	212650	底：2/12	—	(1.9)	(4.7)	外面—口ワロナ子、運打文、撥 外面—口ワロナ子、ハツナズリ、指ササエ、撥	08粒を含む N9.0NK白色	—	V-2-3	
254	首座	腕	2	212650	口：1/12	—	(1.7)	—	内外面—口ワロナ子、撥	08粒を含む N9.0NK白色	—	V-3-4	
255	首白座	合子	2	212650	口：4/12	(4.2)	(1.6)	—	外面—口ワロナ子、撥 外面—口ワロナ子、運打文、撥	08粒を含む N9.0NK白色	—	V-2-3	
256	白座	腕	2	212650	底：2/12	—	(2.5)	(7.0)	外面—輪縁取、口ワロナ子、撥 外面—輪縁取、口ワロナ子、運打文、撥	08粒を含む N9.0NK白色	—	V-2-3	
257	山笠調	小車	2	218650	口：6/12 底：8/12	(8.2)	2.0	(5.6)	外面—口ワロナ子、指ササエ、 外面—口ワロナ子、ハツナズリ、指ササエ	撥を含む	2.5Y6/18K褐色	V-2	程度損

真高30

番号	器種	形状	調弦区	遺構・部位	残存率	口径 cm	器高 cm	技法等の特徴	胎土	色澤	時期	その他・備考
258	山笠碗	小皿	2	2180SD	口：5/12 底：7/12	(7.6)	1.6	内面→ロウカクナ子、割正 外面→ロウカクナ子、割正	襷を含む	5YR7/1灰白色	V-2	瀬戸産 内田降灰多
259	山笠碗	小皿	2	2180SD	口：5/12 底：8/12	(7.7)	1.8	内面→ロウカクナ子、割正 外面→ロウカクナ子、割正	襷を含む	2.5YR7/1灰白色	V-2	内田降灰多
260	山笠碗	碗	2	2180SD	口：1/12 底：10/12	(14.6)	5.1	内面→ロウカクナ子、割正 外面→ロウカクナ子、割正	柄杓、襷を含む	2.5YR7/1灰白色	V-2	軽辺碗
261	山笠碗	碗	2	2180SD	口：1/12 底：10/12	(14.4)	4.7	内面→ロウカクナ子、割正 外面→ロウカクナ子、割正	柄杓、襷を含む	2.5Y7/2灰白色	V-2	
262	山笠碗	碗	2	2180SD	口：1/12 底：10/12	(13.6)	5.9	内面→ロウカクナ子、割正 外面→ロウカクナ子、割正	柄杓、襷を含む	5Y7/1灰白色	V-2	軽辺碗
263	山笠碗	碗	2	2180SD	口：10/12 底：12/12	12.9	4.8	内面→ロウカクナ子、割正 外面→ロウカクナ子、割正	柄杓、襷を含む	2.5YR7/1灰白色	V-3	
264	山笠碗	碗	2	2180SD	口：3/12 底：5/12	(13.2)	4.3	内面→ロウカクナ子、割正 外面→ロウカクナ子、割正	柄杓、襷を含む	2.5Y7/1灰白色	V-3	瀬戸産
265	山笠碗	碗	2	2180SD	口：5/12 底：12/12	(13.0)	4.4	内面→ロウカクナ子、割正 外面→ロウカクナ子、割正	柄杓、襷を含む	2.5Y7/1灰白色	V-3	瀬戸産
266	滑澤碗	片口鉢	2	2180SD	口：1/12 底：28/9	(8.4)	-	内面→ロウカクナ子、割正 外面→ロウカクナ子、割正	柄杓、襷を含む	5YR7/6褐色	V-4	
267	滑澤碗	片口鉢	2	2180SD	口：1/12 底：30/0	(7.8)	-	内面→ロウカクナ子、割正 外面→ロウカクナ子、割正	柄杓、襷を含む	10YR6/2灰黄褐色	V-4	
268	滑澤碗	片口鉢	2	2180SD	口：1/12 底：24/0	(5.8)	-	内面→ロウカクナ子、割正 外面→ロウカクナ子、割正	柄杓、襷を含む	2.5YR6/4c. 赤、褐色	V-4	
269	滑澤碗	片口鉢	2	2180SD	口：1/12 底：28/0	(7.4)	-	内面→ロウカクナ子、割正 外面→ロウカクナ子、割正	柄杓、襷を含む	5YR6/2c. 赤、褐色	V-4	
270	滑澤碗	甕	2	2180SD	口：1/12 底：39/0	(6.4)	-	内面→ロウカクナ子、割正 外面→ロウカクナ子、割正	柄杓、襷を含む	5YR7/1弱黄褐色	V-4	
271	滑澤碗	広口罐	2	2180SD	口：1/12 底：15/2	(8.4)	-	内面→ロウカクナ子、割正 外面→ロウカクナ子、割正	柄杓、襷を含む	5YR7/1弱黄褐色	V-4	
272	滑澤碗	小鉢	2	2180SD	口：5/12 底：1/12	(17.4)	7.0	内面→ロウカクナ子、割正 外面→ロウカクナ子、割正	柄杓、襷を含む	7.5YR2/6暗褐色	V-2	
273	古瀬戸	折縁深皿	2	2180SD	口：1/12 底：5/12	-	(3.5)	内面→ロウカクナ子、割正 外面→ロウカクナ子、割正	柄杓を含む	5YR7/2弱黄褐色 断面：10YR6/1弱灰白色	V-4	
274	古瀬戸	大日笠碗	2	2180SD	口：1/12 底：5/12	(11.6)	7.2	内面→ロウカクナ子、割正 外面→ロウカクナ子、割正	柄杓を含む	2.5Y7/3灰白色	V-4	
275	古瀬戸	甕	2	2180SD	口：3/12 底：1/12	(11.0)	(6.8)	内面→ロウカクナ子、割正 外面→ロウカクナ子、割正	柄杓を含む	2.5Y7/1灰白色	V-4	
276	古瀬戸	甕	2	2180SD	口：1/12 底：1/12	-	(17.4)	内面→ロウカクナ子、割正 外面→ロウカクナ子、割正	柄杓を含む	2.5Y7/3灰白色	V-4	
277	上滑澤	伊勢形鍋	2	2180SD	口：2/12 底：1/12	(21.3)	(4.4)	内面→輪縁飯、ヨコナ子 外面→ヨコナ子、割正	柄杓を含む	2.5Y7/3灰白色	V-2	
278	上滑澤	滑澤	2	2180SD	口：1/12 底：1/12	(21.5)	(4.1)	内面→ロウカクナ子、割正 外面→ロウカクナ子、割正	柄杓を含む	10YR6/4暗黄褐色 断面：2.5YR5/1弱灰白色	V-3	
279	上滑澤	滑澤	2	2180SD	口：1/12 底：1/12	-	(4.8)	内面→輪縁飯、ヨコナ子 外面→ヨコナ子、割正	柄杓を含む	7.5YR5/1弱灰白色	V-3	
280	上滑澤	滑澤	2	2180SD	口：3/12 底：22/5	(22.5)	-	内面→輪縁飯、ヨコナ子、割正 外面→ロウカクナ子、割正	柄杓を含む	10YR7/4c. 赤、黄褐色	V-4	

編纂者

番号	機種	外形	調音区	音程・単位	発音率	口径 cm	筒高 cm	総長 cm	構造等の特徴	搬土	色調	時期	その他・備考
281	上線部	羽達	2	2185D	口：2/12 底：5/12	(18.0)	(3.7)	—	内外部一箱オオヤ、オオヤ 外部一ハヤ、ヨコヤ	砂鉄を含む	100R7/3におよぶ濃褐色	V-4	
282	上線部	羽達	2	2185D	口：1/12 底：5/12	(20.8)	(3.7)	—	内外部一箱オオヤ、オオヤ 外部一ハヤ、ヨコヤ	砂鉄、鏽を含む	100R4/1弱灰色 断面：2.5Y7/3弱灰色	V-4	
283	山笠部	小組	2	2195SK	口：1/12 底：5/12	(8.7)	1.2	(6.5)	内外部一ロウロコヤ、同底切り風	砂鉄、鏽を含む	2.5Y7/3弱灰色	V-3	
284	山笠部	組	2	2195SK	口：1/12 底：12/12	12.7	3.6	5.1	内外部一ロウロコヤ、同底切り風、表段反風	砂鉄、鏽を含む	2.5Y7/2弱灰色	V-4	
285	山笠部	組	2	2195SK	口：2/12 底：4/12	(12.7)	3.1	(4.4)	内外部一ロウロコヤ、同底切り風	砂鉄を含む	2.5Y7/1弱灰色	V-4	
286	山笠部	組	2	2155SX	口：1/12 底：3/12	(14.5)	(3.5)	—	内外部一ロウロコヤ	砂鉄を含む	100R8/3弱黄褐色	V-3	
287	山笠部	組	2	2195SK	口：3/12 底：12/12	(12.0)	3.9	5.1	内外部一ロウロコヤ、同底切り風、表段反風	砂鉄、鏽を含む	2.5Y7/2弱灰色	V-4	
288	山笠部	組	2	2205SK	口：1/12 底：8/12	(13.2)	4.2	5.6	内外部一ロウロコヤ、同底切り風、表段反風、駒付部分	砂鉄、鏽を含む	2.5Y7/1弱灰色	V-3	
289	山笠部	組	2	2195SK	口：1/12 底：1/12	(14.1)	5.4	(6.2)	内外部一ロウロコヤ、駒付部分	砂鉄、鏽を含む	5Y7/1弱白色	V-3	
290	原田地	置	2	2155SX	口：1/12	(36.2)	(6.3)	—	内外部一ヨコヤ	砂鉄、鏽を含む	100R4/2弱黄褐色 断面：5Y8/3弱灰色	V-4	
291	原田地	置	2	2155SX	口：1/12	—	(5.0)	—	内外部一ヨコヤ	砂鉄、鏽を含む	5Y8/3弱灰色	V-4	
292	原田地	大置	2	2195SK	口：1/12	(45.3)	(8.5)	—	内外部一箱オオヤ、オオヤ、 外部一ヨコヤ	砂鉄、鏽を含む	5Y8/3弱灰色	V-4	
293	原田地	片口鉢	2	2195SK	口：1/12	(30.8)	(8.2)	—	内外部一ロウロコヤ	砂鉄、鏽を含む	断面：5Y8/3弱灰色	V-4	
294	古瀬戸	小鉢	2	2155SX	口：7/12 底：12/12	8.7	3.5	4.6	内外部一ロウロコヤ、駒オオヤ	砂鉄、鏽を含む	2.5Y8/6弱褐色	V-4	
295	古瀬戸	大日笠部	2	2155SX	口：6/12	(12.0)	(5.7)	—	内外部一ロウロコヤ、同底へウケズリ、駒付部分、鏽	砂鉄、鏽を含む	2.5Y7/2弱灰色	V-4	
296	古瀬戸	平鉢	2	2205SK	口：1/12	(16.8)	(5.7)	—	内外部一ロウロコヤ、同底へウケズリ、駒付部分、鏽	砂鉄を含む	2.5Y8/2弱灰色	V-4	
297	古瀬戸	折縁深皿	2	2155SX	口：1/12	(29.0)	(8.2)	—	内外部一ロウロコヤ、同底へウケズリ、駒付部分、鏽	砂鉄を含む	2.5Y8/2弱灰色	V-4	
298	古瀬戸	折縁深皿	2	2195SK	底：3/12	—	(8.9)	(11.6)	内外部一ロウロコヤ、同底へウケズリ、駒付部分、鏽	砂鉄、鏽を含む	2.5Y8/3弱灰色	V-4	
299	古瀬戸	折縁深皿	2	2155SX	底：2/12	—	(3.3)	(13.5)	内外部一ロウロコヤ、同底へウケズリ	砂鉄、鏽を含む	2.5Y8/2弱白色	V-4	
300	古瀬戸	片口鉢	2	21745P	口：2/12	(18.8)	(3.2)	—	内外部一ロウロコヤ、鏽	砂鉄を含む	2.5Y7/2弱灰色	V-2-3	
301	上線部	組	2	2205SD	口：1/12 底：2/12	(11.0)	1.6	(8.4)	内外部一箱オオヤ	砂鉄を含む	100R7/2におよぶ濃褐色 断面：7.5Y7/1灰色	V-4	
302	上線部	組	2	2195SK	口：1/12 底：8/12	(12.2)	1.9	7.2	内外部一ヨコヤ、駒オオヤ 外部一ヨコヤ、オウケズリ	砂鉄を含む	外周：100R6/2弱黄褐色 断面：5Y7/1弱白色	V-4	
303	上線部	羽達	2	2195SK	口：12/12	20.5	(10.4)	—	内外部一ハヤ、ヨコヤ、オウケズリ	砂鉄を含む	100R7/2におよぶ濃褐色	V-4	

番号	路線	駅名	調査区	道幅・高さ	積存率	口径 cm	高さ cm	長さ cm	採取等の特徴	土質	色調	時期	その他・備考
調査区	304	上野原	平差	2	2195SX	口：2/12 底：3/12	(17.6)	(13.1)	内面→ロウケズリ、散り子、指平土、ヨコナナ 外面→ロウケズリ、ハナ、指平土、ヨコナナ	砂粒を含まない	100R7/4におよぶ淡青色	V-4	
	305	上野原	平差	2	2158SX	口：1/12 底：1/12	(5.3)	-	内面→散り子、散り子、ヨコナナ 外面→ハナ、指平土、ヨコナナ	砂粒を含まない	100R7/3におよぶ淡青色	V-4	
	306	上野原	伊勢型調	2	2158SX	口：1/12 底：2/12	(26.0)	(1.7)	内面→輪切盛、ヨコナナ 外面→ヨコナナ	砂粒を含まない	7.5YR6/3におよぶ褐色	V-2-3	
	307	山笠岡	小皿	2	2116SD	口：2/12 底：3/12	(7.0)	(3.9)	内面→ロウケズリ、散り子、指平土、ヨコナナ 外面→ロウケズリ、散り子、指平土、ヨコナナ	砂粒を含まない	5Y7/1灰白色	V-4	
	308	山笠岡	俣	2	2116SD	口：2/12 底：1/12	(11.8)	(4.4)	内面→ロウケズリ、散り子、指平土、ヨコナナ 外面→ロウケズリ、散り子、指平土、ヨコナナ	砂粒を含まない	2.5YR3/2灰黄色	V-4	
	309	山笠岡	俣	2	2156SX	口：1/12 底：1/12	(2.8)	-	内面→ロウケズリ、散り子、指平土、ヨコナナ 外面→ロウケズリ、散り子、指平土、ヨコナナ	砂粒を含まない	2.5YR2/6灰白色	V-4	
調査区	310	古瀬戸	舞鶴小皿	2	2156SX	口：1/12 底：1/12	(11.6)	(1.9)	内面→ロウケズリ、散り子、指平土、ヨコナナ 外面→ロウケズリ、散り子、指平土、ヨコナナ	砂粒を含まない	2.5Y7/2灰黄色	V-4	
	311	古瀬戸	折縁深皿	2	2115SD	口：1/12 底：2/12	-	(4.2)	内面→ロウケズリ、散り子、指平土、ヨコナナ 外面→ロウケズリ、散り子、指平土、ヨコナナ	砂粒を含まない	2.5Y7/2灰黄色	V-4	
	312	古瀬戸	折縁深皿	2	2116SD	口：1/12 底：3/12	-	(4.3)	内面→ロウケズリ、散り子、指平土、ヨコナナ 外面→ロウケズリ、散り子、指平土、ヨコナナ	砂粒を含まない	2.5YR2/6灰黄色 断面：2.5Y7/2灰黄色	V-4	
	313	青塚	赤戸	2	2205SD	口：1/12 底：1/12	(12.3)	(2.8)	内外面→ロウケズリ、散り子、指平土、ヨコナナ	砂粒を含まない	5Y8/1灰白色	V-4	
	314	青塚	赤戸	2	2205SD	口：1/12 底：1/12	(12.3)	(2.5)	内外面→ロウケズリ、散り子、指平土、ヨコナナ	砂粒を含まない	5Y8/1灰白色	V-4	
	315	白塚	俣	2	2116SD	口：1/12 底：2/12	-	(3.1)	内面→ロウケズリ、散り子、指平土、ヨコナナ 外面→ロウケズリ、散り子、指平土、ヨコナナ	砂粒を含まない	5Y7/1灰白色	V-4	
	316	上野原	小皿	2	2116SD	口：2/12 底：3/12	(6.8)	(4.4)	内面→ロウケズリ、散り子、指平土、ヨコナナ 外面→ロウケズリ、散り子、指平土、ヨコナナ	砂粒を含まない	2.5YR2/6灰白色	V-4	
	317	上野原	平差	2	2148SD	口：1/12 底：1/12	(23.2)	(2.3)	内外面→ヨコナナ	砂粒を含まない	10YR8/3淡黄褐色 断面：2.5YR5/2灰黄色 断面：5Y5/1灰白色	V-3	
	318	上野原	平差	2	2148SD	口：1/12 底：1/12	(22.0)	(4.2)	内面→ロウケズリ、散り子、指平土、ヨコナナ 外面→ハナ、ヨコナナ	砂粒を含まない	2.5YR2/6灰白色	V-3	
	319	古瀬戸	三好	2	2149SX	底：12/12	-	(26.2)	内面→ロウケズリ、散り子、指平土、ヨコナナ 外面→ヨコナナ	砂粒を含まない	5Y6/1灰白色	V-2	大瀬山上真A
	320	原田池	田	2	2190SX	底：12/12	-	(24.3)	内面→ヨコナナ、散り子、指平土、ヨコナナ 外面→ヨコナナ、散り子、指平土、ヨコナナ	砂粒を含まない	2.5YR2/6灰黄色 断面：2.5YR5/2灰黄色 断面：2.5YR5/1灰黄色	V-4	大瀬山上真B
	調査区	321	山笠岡	小皿	2	2066SX	口：12/12 底：12/12	8.1	5.3	内面→ロウケズリ、散り子、指平土、ヨコナナ 外面→ロウケズリ、散り子、指平土、ヨコナナ	砂粒を含まない	2.5Y7/1灰白色	V-2
322		山笠岡	俣	1	II・田圃	口：4/12 底：12/12	(13.2)	5.7	内面→ロウケズリ、散り子、指平土、ヨコナナ 外面→ロウケズリ、散り子、指平土、ヨコナナ	砂粒を含まない	2.5YR1/灰白色	V-2	野段堀
323		山笠岡	俣	1	1046SD	底：4/12	-	(3.7)	内面→ロウケズリ、散り子、指平土、ヨコナナ 外面→ロウケズリ、散り子、指平土、ヨコナナ	砂粒を含まない	2.5YR1/灰白色	V-2	野段堀
324		山笠岡	俣	2	II・田圃	口：6/12 底：12/12	12.1	4.1	内面→ロウケズリ、散り子、指平土、ヨコナナ 外面→ロウケズリ、散り子、指平土、ヨコナナ	砂粒を含まない	2.5Y7/1灰白色	V-2	野段堀
325		山笠岡	俣	2	II・田圃	口：6/12 底：11/12	12.1	4.1	内面→ロウケズリ、散り子、指平土、ヨコナナ 外面→ロウケズリ、散り子、指平土、ヨコナナ	砂粒を含まない	2.5YR1/灰白色	V-3	野段堀
326		山笠岡	俣	7	7005SX	口：1/12 底：1/12	(11.2)	3.4	内面→ロウケズリ、散り子、指平土、ヨコナナ 外面→ロウケズリ、散り子、指平土、ヨコナナ	砂粒を含まない	5Y8/1灰白色	V-3	野段堀

番号	機種	劇形	演義区	遺構・部位	残存率	口徑 cm	體高 cm	底徑 cm	注目等の特徴	胎土	色澤	時期	その他・備考
327	山笠窯	碗	1	1130SX	口: 5/12 底: 5/12	(11.0)	3.6	(3.0)	内面一口方ロコナ字、 外面一口方ロコナ字、 凹彫糸切り風、 彫付高行	砂胎を含む	2.9Y8/1R6白色	V-4	緑砂胎
328	山笠窯	碗	2	2165SX	口: 1/12 底: 1/12	(10.7)	2.5	(4.0)	内面一口方ロコナ字、 外面一口方ロコナ字、 凹彫糸切り風	砂胎、襷を含む	2.9Y7/1R6白色	V-4	
329	山笠窯	片口鉢	2	II・皿厨	口: 1/12	(32.0)	(8.6)	—	内外面一口方ロコナ字	砂胎、襷を含む	7.5Y8/2R6褐色	V-2	
330	山笠窯	片口鉢	7	II厨	底: 1/12	—	(3.9)	(8.0)	内面一口方ロコナ字、 外面一口方ロコナ字、 彫付高行	襷を含む	2.9Y7/2R6褐色	V-2	
331	山笠窯	片口鉢	2	II・皿厨	底: 5/12	—	(2.0)	(5.3)	内面一口方ロコナ字、 外面一口方ロコナ字、 彫付高行	砂胎、襷を含む	5Y8/1R6白色	V-2	同上層表付行者、4枚以上 緑砂胎、底付は基上段
332	常陸焼	片口鉢	1	II・皿厨	口: 1/12 底: 2/12	(31.8)	13.6	(16.0)	内外面一口方ロコナ字、 指才字	砂胎、襷を含む	7.5Y8/2R6褐色	V-2	
333	山笠窯	鉢	7	7005SX	口: 1/12 底: 1/12	(15.5)	6.3	(10.6)	内面一口方ロコナ字、 外面一口方ロコナ字、 底彫糸切り風	砂胎、襷を含む	10Y8/7Rに赤い、青褐色	V-2	
334	常陸焼	比羅皿	2	2066SX	—	(15.2)	—	—	内外面一輪筋、 指才字、 ココナ字、 外面一口方ロコナ字	砂胎、襷を含む	5Y8/2R6に赤い、赤褐色	V-2	
335	上野窯	豆皿	7	I厨	口: 12/12 底: 12/12	3.1	1.3	—	内面一口方字 外面一口方字	砂胎を含む	5Y8/2R6赤褐色	V-5-M	
336	上野窯	小皿	7	7001SX	口: 12/12 底: 12/12	6.5	1.7	2.1	内面一口字 外面一口字、 指才字	砂胎を含む	10Y8/6Rに赤い、青褐色	V-5-M	
337	上野窯	小皿	7	7001SX	口: 6/12 底: 12/12	6.0	1.3	—	内面一口字 外面一口字、 指才字	砂胎を含む	7.5Y8/7Rに赤い、褐色	V-5-M	
338	上野窯	小皿	7	7001SX	口: 1/12	(8.8)	(1.8)	—	内面一口字 外面一口字、 指才字	砂胎、襷を含む	7.5Y8/7Rに赤い、褐色	V-5-M	
339	上野窯	小皿	7	7001SX	口: 2/12	(8.4)	(1.5)	—	内外面一指才字	砂胎を含む	10Y8/7Rに赤い、青褐色	V-5-M	口縁部彫付首
340	上野窯	小皿	7	7001SX	口: 1/12	(9.0)	(1.9)	—	内面一口字 外面一指才字	砂胎、襷を含む	10Y8/7Rに赤い、青褐色	V-4-5	
341	上野窯	小皿	2	2218P	口: 1/12 底: 8/12	(7.7)	1.4	(4.1)	内面一口方ロコナ字 外面一口方ロコナ字、 凹彫糸切り風	砂胎を含む	7.5Y8/6Rに赤い、褐色	V-4-5	
342	上野窯	小皿	7	7001SX	底: 8/12	(8.5)	1.7	5.0	内面一口方ロコナ字 外面一口方ロコナ字、 凹彫糸切り風	砂胎、襷を含む	5Y8/6R褐色	V-4-5	口縁部彫付首
343	上野窯	小皿	7	7005SX	口: 2/12 底: 7/12	(7.5)	1.5	(4.2)	内面一口方ロコナ字 外面一口方ロコナ字、 凹彫糸切り風	砂胎、襷を含む	10Y8/7Rに赤い、青褐色	V-4-5	
344	山笠窯	小皿	2	2066SX	口: 4/12 底: 2/12	(8.6)	1.7	(4.0)	内面一口方ロコナ字 外面一口方ロコナ字、 凹彫糸切り風	砂胎を含む	7.5Y8/7R褐色	V-4-5	
345	上野窯	皿	4	II・皿厨	口: 1/12 底: 2/12	(11.7)	2.1	(7.8)	内面一口方ロコナ字 外面一口方ロコナ字、 凹彫糸切り風	砂胎を含む	10Y8/7Rに赤い、青褐色	V-4-5	
346	上野窯	皿	4	II・皿厨	口: 1/12 底: 3/12	(11.4)	2.7	(6.0)	内面一口方ロコナ字 外面一口方ロコナ字、 凹彫糸切り風	砂胎、襷を含む	10Y8/7Rに赤い、青褐色	V-4-5	
347	上野窯	碗	7	7005SX	口: 1/12	(13.0)	(2.5)	—	内外面一口方ロコナ字	砂胎、襷を含む	10Y8/7Rに赤い、青褐色	V-4-5	
348	上野窯	皿	7	7001SX	口: 1/12	(12.4)	(1.9)	—	内外面一口方ロコナ字	砂胎、襷を含む	10Y8/7Rに赤い、青褐色	V-4-5	
349	上野窯	皿	7	7001SX	口: 1/12	(13.0)	(1.8)	—	内外面一口方ロコナ字	砂胎、襷を含む	2.9Y7/3R6褐色	V-4-5	

番号	器種	形状	調幅区	通幅・高さ	材質	口径 cm	器高 cm	技法等の特徴	胎土	色調	時期	その他・備考
350	上段器	皿	7	II 層	口：2/12 底：5/12	1.8 (6.6)	内面—ロウナナ子、同底周切り風 外面—ロウナナ子、同底周切り風	08粉を含む	10X87/4にぶ、黄褐色	V-4~5		
351	上段器	皿	7	7001SX	口：1/12 底：8/12	2.2 (7.4)	内面—ロウナナ子、同底周切り風 外面—ロウナナ子、同底周切り風	08粉を含む	10X87/4にぶ、黄褐色	V-4~5		
352	上段器	伊勢型調	2	2165SK	口：1/12 底：—	(4.0)	内面—ヨコナナ子、ナナ子、横オウエ 外面—ハナ、ヨコナナ子	08粉・横を含む	2.5Y8/26灰白色	V-2~3		
353	上段器	羽釜	4	I 層	口：1/12 底：—	(5.4)	内外面—ロウナナ子	08粉・横を含む	10X88/3成黄褐色	V-3~4		
354	上段器	内皿調	7	7001SX	口：7/12 底：—	(11.1)	内面—ナナ子 外面—横オウエ、ナナ子、ヨコナナ子	08粉・横を含む	10X87/4にぶ、黄褐色	V-4		
355	上段器	内皿調	7	7001SX	口：7/12 底：—	(12.7)	内面—横オウエ、ナナ子、ヨコナナ子、ナナ子 外面—ヨコナナ子、ナナ子、横オウエ	08粉・横を含む	10X87/3にぶ、黄褐色	V-4~5		
356	上段器	羽釜	7	7001SX	—	(9.9)	内面—ロウナナ子、横 外面—ロウナナ子、同底周切り風、横	08粉・横を含む	10X87/4にぶ、黄褐色	V-4~5		
357	占瀬戸	折縁小皿	2	II・III層	口：2/12 底：4/12	2.3 (5.6)	内面—ロウナナ子、横 外面—ロウナナ子、同底周切り風、横	08粉を含む	2.5Y8/26灰白色	V-4		
358	占瀬戸	小皿	2	2157SK	口：3/12 底：12/12	2.3 4.5	内面—ロウナナ子、横 外面—ロウナナ子、同底周切り風、横	08粉・横を含む	2.5Y7/26灰白色	V-4		
359	占瀬戸	小皿	2	II・III層	口：2/12 底：4/12	2.7 (6.0)	内面—ロウナナ子、横 外面—ロウナナ子、同底周切り風、横	08粉を含む	2.5Y8/16灰白色	V-4		
360	占瀬戸	碗	2	2165SK	底：7/12 底：—	(2.5)	内面—ヨコナナ子、横 外面—ヨコナナ子、同底周切り風、横	08粉・横を含む	2.5Y7/26灰白色	V-4		内面トナシ風
361	占瀬戸	碗	2	II・III層	底：7/12 底：—	(2.4)	内面—ヨコナナ子、横 外面—ヨコナナ子、同底周切り風、横	08粉を含む	2.5Y8/16灰白色	V-4		
362	占瀬戸	仏瓶	2	II・III層	底：8/12 底：—	(2.7)	内面—ロウナナ子、同底周切り風 外面—ロウナナ子、同底周切り風、横	08粉・横を含む	2.5Y8/16灰白色	V-3		
363	占瀬戸	把子付鍋	1	I 層	口：1/12 底：—	(6.5)	内面—ロウナナ子、横 外面—ロウナナ子、同底周切り風、横	08粉を含む	10X87/2にぶ、黄褐色	V-2		
364	占瀬戸	取付皿	2	II・III層	底：5/12 底：—	(2.7)	内面—ロウナナ子、横 外面—ロウナナ子、同底周切り風、横	08粉を含む	10X87/2にぶ、黄褐色	V-2		
365	占瀬戸	御目付大 皿	2	II・III層	—	(3.6)	内面—同底周切り風 外面—同底周切り風、横	08粉を含む	5Y8/16灰白色	V-4		
366	瀬戸瓦調	鉢	1	1305SX	口：1/12 底：5/12	10.9 (10.1)	内面—ロウナナ子、横 外面—ロウナナ子、同底周切り風、横	08粉を含む	5Y8/16灰白色	V-5~VI		
367	占瀬戸	皿	2	II・III層	底：7/12 底：—	(6.4)	内面—ロウナナ子、横 外面—ロウナナ子、同底周切り風、横	08粉を含む	2.5Y7/16灰白色	V-4		
368	占瀬戸	碗	1	II・III層	口：1/12 底：—	(2.6)	内面—ロウナナ子、横 外面—ロウナナ子、同底周切り風、横	08粉を含む	5Y8/16灰白色	V-2~3		
369	瓦	軒丸瓦	2	2126SD	—	幅：(15.2) 高：(4.4)	瓦当面—ナナ子、横オウエ	08粉・横を含む	2.5Y8/26灰白色	V-1~2		瓦当径：15.0cm 芯文
370	瓦	軒丸瓦	2	2126SD	—	幅：(5.4) 高：(4.1)	瓦当面—ナナ子、横オウエ	08粉を含む	2.5Y7/26灰白色	V-1~2		瓦当径：(14.8) cm 芯文
371	瓦	軒丸瓦	2	2126SD	—	幅：(4.0) 高：(7.1)	瓦当面—ナナ子	08粉を含む	Ng-06灰白色	V-1~2		芯文
372	瓦	軒丸瓦	2	2126SD	—	幅：(5.0) 高：(7.1)	瓦当面—ヨコナナ子、ハナナ子	08粉を含む	Ng-06灰白色	V-1~2		瓦当径：(14.0) cm 芯文

図353

図354



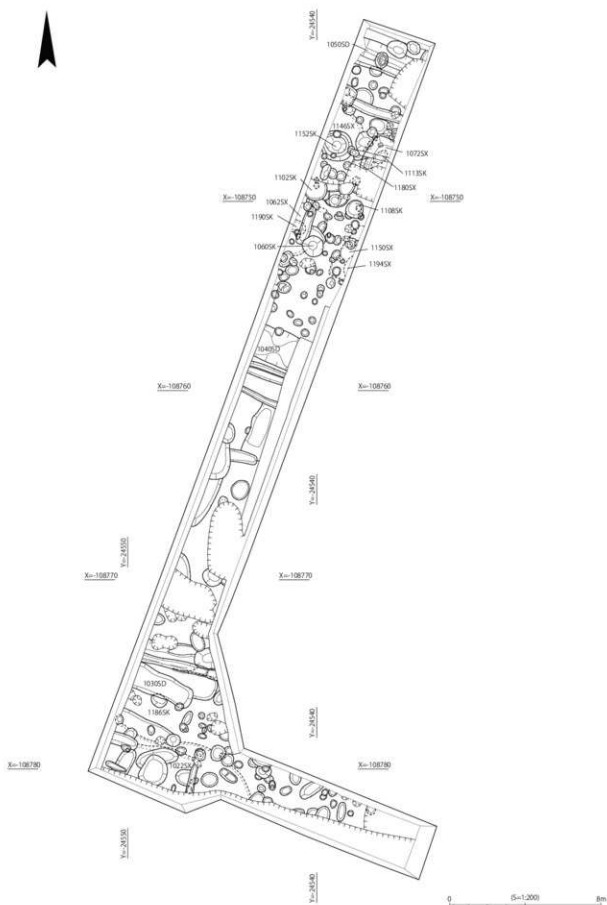




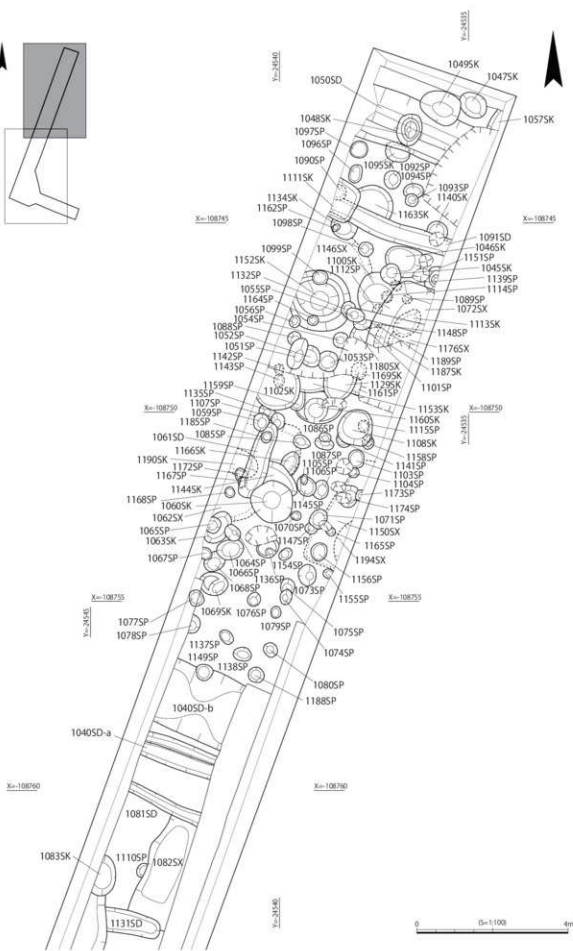
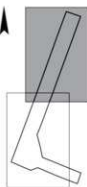
## 图版



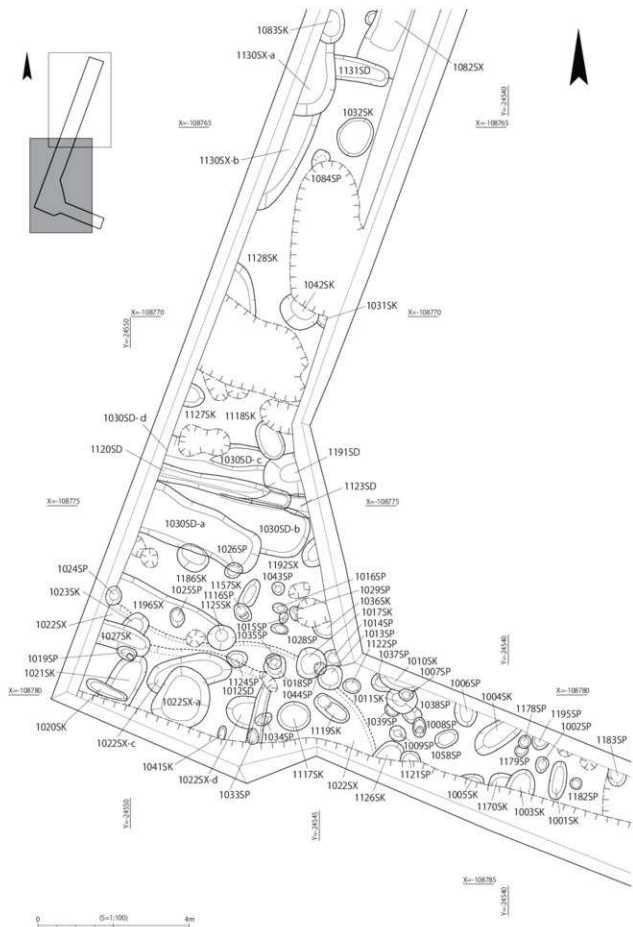
図版1 遺構 1 地点 調査区平面図（全体）



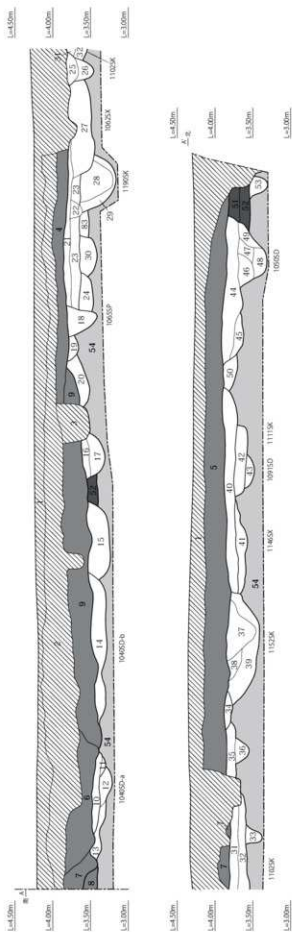
図版2 遺構 1地点 調査区平面図(北部)



図版 3 遺構 1 地点 調査区平面図 (南部)

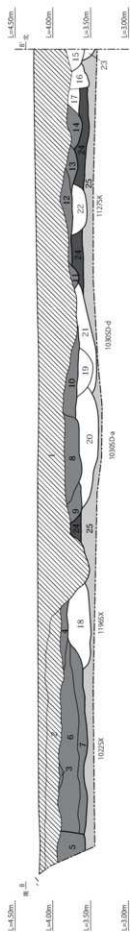


図版 4 遺構 1 地点 土層断面図 1 (西壁)

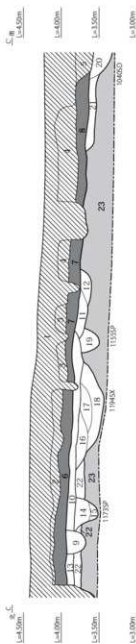


1. 表土層(表層)
2. 赤土・黄褐色(10YR5/4)細粒砂
3. 暗褐色(10YR3/4)粗粒砂
4. 暗褐色(10YR3/4)粗粒砂
5. 黄褐色(10YR3/2)粗粒砂
6. 黄褐色(10YR3/2)粗粒砂
7. 暗灰褐色(2.5Y4/2)中粒砂
8. 赤土・黄褐色(10YR3/2)中粒砂
9. 赤土・黄褐色(10YR3/2)中粒砂
10. 赤土・黄褐色(10YR3/2)中粒砂
11. 赤土・黄褐色(2.5Y3/2)中粒砂
12. 暗褐色(2.5Y5/2)中粒砂
13. 赤土・黄褐色(10YR3/2)中粒砂
14. 赤土・黄褐色(2.5Y4/2)中粒砂
15. 赤土・黄褐色(2.5Y4/2)中粒砂
16. 赤土・黄褐色(2.5Y4/2)中粒砂
17. 暗褐色(10YR3/2)中粒砂
18. 暗褐色(2.5Y3/2)中粒砂
19. 暗褐色(2.5Y3/2)中粒砂
20. 赤土・黄褐色(10YR4/3)中粒砂
21. 暗褐色(10YR3/2)粗粒砂
22. 暗褐色(10YR3/2)粗粒砂
23. 赤土・黄褐色(10YR4/3)粗粒砂
24. 赤土・黄褐色(10YR4/3)粗粒砂
25. 暗灰褐色(2.5Y4/2)中粒砂
26. 暗灰褐色(2.5Y4/2)中粒砂
27. 暗褐色(10YR3/2)中粒砂
28. 暗褐色(2.5Y4/2)中粒砂
29. 暗灰褐色(2.5Y4/2)中粒砂
30. 赤土・黄褐色(10YR4/3)中粒砂
31. 暗褐色(10YR3/2)粗粒砂
32. 暗褐色(10YR3/2)粗粒砂
33. 暗灰褐色(2.5Y4/2)中粒砂
34. 暗褐色(2.5Y3/2)中粒砂
35. 赤土・黄褐色(10YR4/3)中粒砂
36. 赤土・黄褐色(10YR4/3)中粒砂
37. 暗褐色(10YR2/2)中粒砂
38. 暗褐色(2.5Y2/2)中粒砂
39. 赤土・黄褐色(10YR4/3)中粒砂
40. 暗褐色(10YR2/2)中粒砂
41. 暗褐色(10YR3/2)中粒砂
42. 暗褐色(10YR3/2)中粒砂
43. 暗褐色(10YR3/2)中粒砂
44. 暗褐色(10YR3/2)中粒砂
45. 暗褐色(10YR3/2)中粒砂
46. 暗褐色(10YR3/2)中粒砂
47. 暗褐色(10YR3/2)中粒砂
48. 暗褐色(10YR3/2)中粒砂
49. 暗褐色(2.5Y2/2)中粒砂
50. 暗褐色(10YR3/2)中粒砂
51. 暗褐色(10YR3/2)中粒砂
52. 暗褐色(10YR4/4)中粒砂
53. 赤土・黄褐色(10YR5/4)中粒砂
54. 暗褐色(10YR3/2)中粒砂

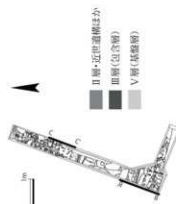
■ 土層・近世遺構仕分  
 ■ 土層(包含層)  
 ■ V層(基盤層)



1. 表土(現代堆土)
2. オリブ灰褐色(SY4)300粒砂 2~5mm程度の小礫含む
3. 暗褐色(SY3C)400粒砂 しまつ強い
4. 灰色(SY3A)400粒砂 しまつ強い
5. 灰色(SY3A)400粒砂 しまつ強い
6. 暗褐色(SY3C)400粒砂 目道付大礫を含む
7. 暗褐色(SY3C)400粒砂 V層・目道付含む
8. 暗赤褐色(SY4)200粒砂
9. 暗褐色(SY3C)200粒砂
10. 灰褐色(SY3A)200粒砂
11. 暗褐色(SY3C)400粒砂
12. 灰褐色(SY3A)200粒砂
13. 灰色(SY3A)400粒砂 2~5mm程度の小礫含む
14. 灰色(SY3A)400粒砂 2~5mm程度の小礫含む
15. 灰色(SY3A)400粒砂 V層・目道付含む
16. 灰褐色(SY3A)200粒砂
17. 暗褐色(SY3C)200粒砂 V層・目道付含む
18. 暗褐色(SY3C)200粒砂 V層
19. 暗褐色(SY3C)100粒砂
20. 灰色(SY3A)400粒砂
21. 暗褐色(SY3C)400粒砂 V層
22. 10350-d
23. 10350-d

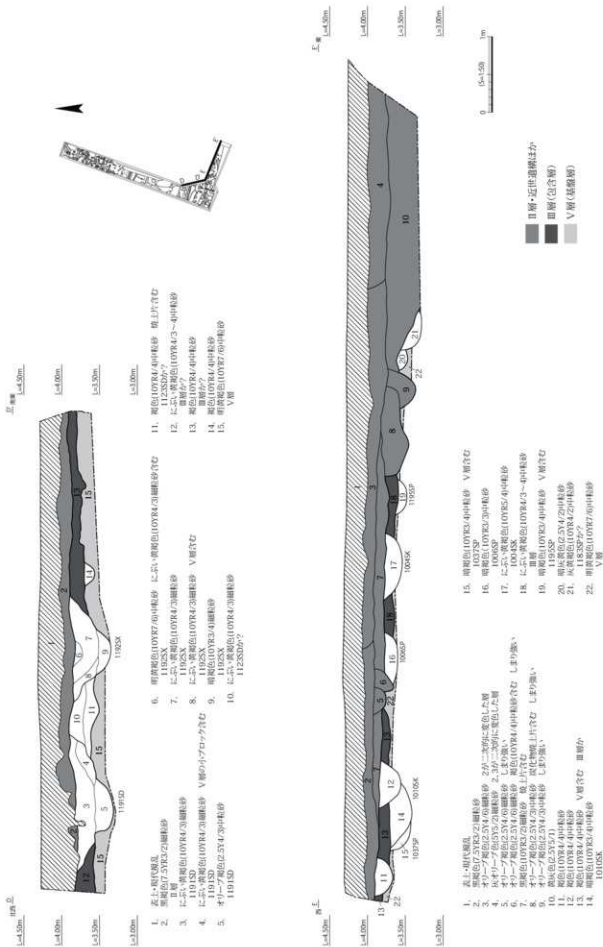


1. 表土(現代堆土)
2. 灰色(SY3A)400粒砂
3. 暗褐色(SY3C)400粒砂 目道付・目道付多含む
4. 暗褐色(SY3C)400粒砂 目道付・目道付多含む
5. オリブ灰褐色(SY4)400粒砂
6. 暗褐色(SY3A)400粒砂
7. 暗褐色(SY3C)400粒砂
8. 灰色(SY3A)400粒砂
9. 暗褐色(SY3C)400粒砂 V層
10. 暗褐色(SY3C)400粒砂
11. 暗褐色(SY3C)400粒砂 V層
12. 暗褐色(SY3C)400粒砂 V層
13. 暗褐色(SY3C)400粒砂 V層
14. 暗褐色(SY3C)400粒砂 V層
15. 暗褐色(SY3C)400粒砂
16. 暗褐色(SY3C)400粒砂
17. 暗褐色(SY3C)400粒砂 V層
18. 暗褐色(SY3C)400粒砂 V層
19. 暗褐色(SY3C)400粒砂 V層
20. 暗褐色(SY3C)400粒砂
21. オリブ灰褐色(SY4)400粒砂 V層
22. 暗褐色(SY3C)400粒砂
23. 暗褐色(SY3C)400粒砂 V層



- 目道付・目道付多含む
- 目層(包含層)
- V層(包含層)

図版 6 遺構 1 地点 十層断面図 3 (南東部北壁・南部東壁)



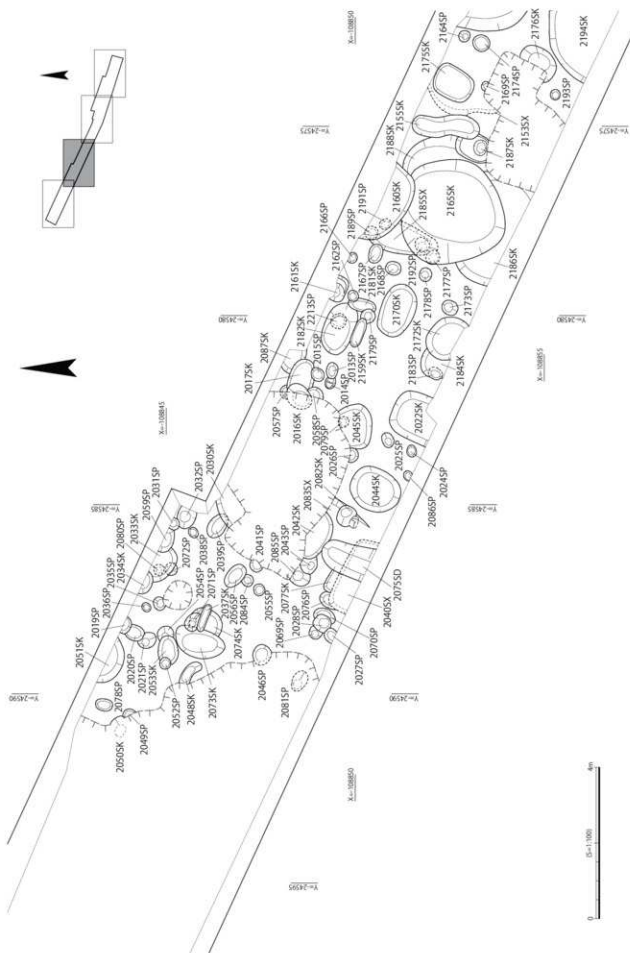
図版 6 遺構 1 地点 十層断面図 3 (南東部北壁・南部東壁)





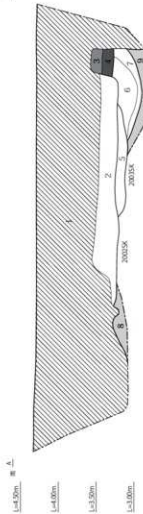


図版9 遺構 2地点 調査区平面図(西2)



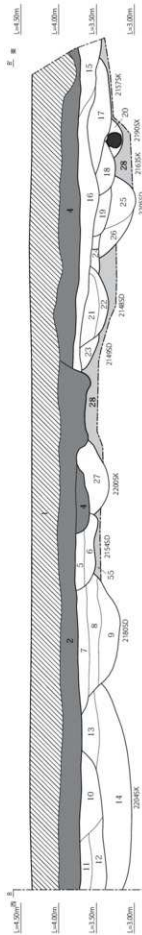




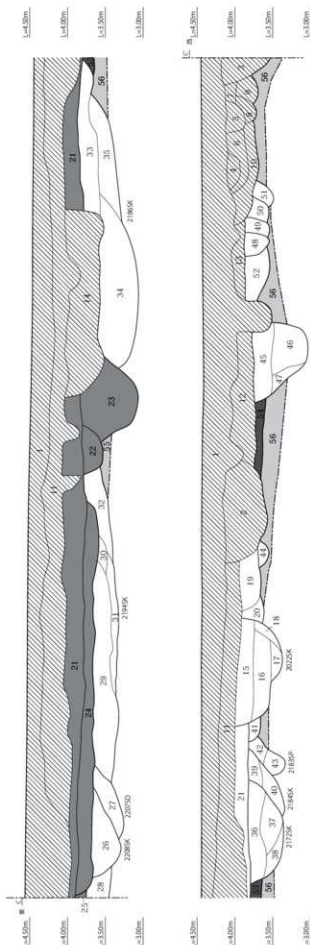


■ 目録+近世遺構ほか  
 ■ 田層(包含層)  
 ■ V層(基盤層)

1. 表土・腐植
2. 黒色(10YR4/0)細砂 目録多量に含む
3. 黒色(10YR4/0)細砂
4. 黒色(10YR4/0)細砂
5. 黒色(10YR2/2)細砂
6. 黒色(10YR2/1)中粗砂
7. オリーブ黄褐色(5Y4/2)中粗砂
8. 黒色(10YR4/0)細砂
9. 黒色(10YR2/2)中粗砂
10. 黒色(10YR2/1)中粗砂



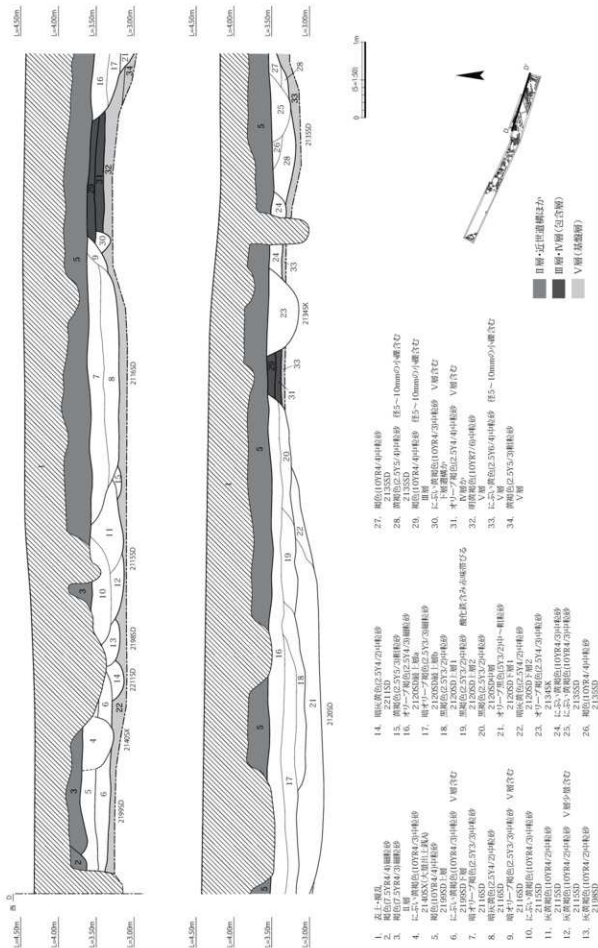
1. 表土・腐植
2. 黒色(10YR4/0)細砂
3. 黒色(10YR4/0)細砂
4. 黒色(10YR4/0)細砂
5. 黒色(10YR4/0)細砂
6. 黒色(10YR4/0)細砂
7. 黒色(10YR4/0)細砂
8. 黒色(10YR4/0)細砂
9. 黒色(10YR4/0)細砂
10. 黒色(10YR2/2)細砂
11. 黒色(10YR2/2)細砂
12. 黒色(10YR2/2)細砂
13. 黒色(10YR2/2)細砂
14. 黒色(10YR2/2)細砂
15. 黒色(10YR2/2)細砂
16. 黒色(10YR2/2)細砂
17. 黒色(10YR2/2)細砂
18. 黒色(10YR2/2)細砂
19. 黒色(10YR2/2)細砂
20. 黒色(10YR2/2)細砂
21. 黒色(10YR2/2)細砂
22. 黒色(10YR2/2)細砂
23. 黒色(10YR2/2)細砂
24. 黒色(10YR2/2)細砂
25. 黒色(10YR2/2)細砂
26. 黒色(10YR2/2)細砂
27. 黒色(10YR2/2)細砂
28. 黒色(10YR2/2)細砂
29. 黒色(10YR2/2)細砂
30. 黒色(10YR2/2)細砂
31. 黒色(10YR2/2)細砂
32. 黒色(10YR2/2)細砂
33. 黒色(10YR2/2)細砂
34. 黒色(10YR2/2)細砂
35. 黒色(10YR2/2)細砂



1. 表土+埋没
2. ボーラー層色(SY4)3中粗砂
3. ボーラー層色(SY4)3中粗砂
4. ボーラー層色(SY4)3中粗砂
5. 黒褐色(SY3)2中粗砂
6. 黒褐色(SY3)2中粗砂
7. 黒褐色(SY3)2中粗砂
8. 黒褐色(SY3)2中粗砂
9. 上土+埋没
10. 上土+埋没
11. 黒褐色(SY3)2中粗砂
12. 黒褐色(SY3)2中粗砂
13. 黒褐色(SY3)2中粗砂
14. 埋没
15. 埋没
16. 埋没
17. 埋没
18. 埋没
19. 埋没
20. 埋没
21. 黒褐色(SY3)2中粗砂
22. 埋没
23. 埋没
24. 埋没
25. 埋没
26. 埋没
27. 埋没
28. 埋没
29. 埋没
30. ボーラー層色(SY4)4中粗砂
31. ボーラー層色(SY4)4中粗砂
32. ボーラー層色(SY4)4中粗砂
33. 埋没
34. ボーラー層色(SY4)4中粗砂
35. ボーラー層色(SY4)4中粗砂
36. 埋没
37. 上土+埋没
38. 上土+埋没
39. 上土+埋没
40. 埋没
41. 埋没
42. ボーラー層色(SY4)4中粗砂
43. ボーラー層色(SY4)4中粗砂
44. 埋没
45. 埋没
46. ボーラー層色(SY4)4中粗砂
47. ボーラー層色(SY4)4中粗砂
48. 埋没
49. 埋没
50. 埋没
51. 埋没
52. 埋没
53. 埋没
54. 埋没
55. 埋没
56. 埋没



■ 目層+近世遺構ほか  
 ■ 目層(包含層)  
 ■ 目層(包含層)





図版 15 遺構 2 地点 土層断面図 4 (東部北壁・東壁)

L=4.00m

L=4.00m

L=3.50m

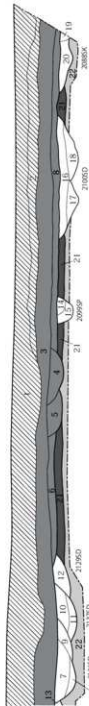
L=3.00m

L=4.00m

L=4.00m

L=3.50m

L=3.00m



1. 灰土・埋瓦
2. 褐色(10YR4/4)中粒砂
3. 褐色(10YR4/4)中粒砂
4. 褐色(10YR4/4)中粒砂
5. 褐色(10YR4/4)中粒砂
6. 褐色(10YR4/4)中粒砂
7. 褐色(10YR4/4)中粒砂
8. 褐色(10YR4/4)中粒砂
9. 褐色(10YR4/4)中粒砂
10. 褐色(10YR4/4)中粒砂
11. 黄褐色(2.5Y/6)中粒砂 径5~10mmの小礫を含む
12. 灰土・埋瓦
13. 褐色(10YR5/4)中粒砂
14. 褐色(10YR4/4)中粒砂
15. 褐色(10YR4/4)中粒砂
16. 灰土・埋瓦
17. 黄褐色(2.5Y/6)中粒砂
18. 灰土・埋瓦
19. 褐色(10YR4/4)中粒砂
20. 褐色(10YR4/4)中粒砂
21. 褐色(10YR4/4)中粒砂
22. 灰土・埋瓦

L=4.50m

L=4.00m

L=3.50m

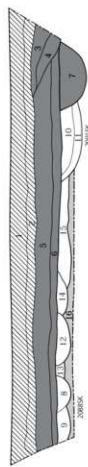
L=3.00m

L=4.50m

L=4.00m

L=3.50m

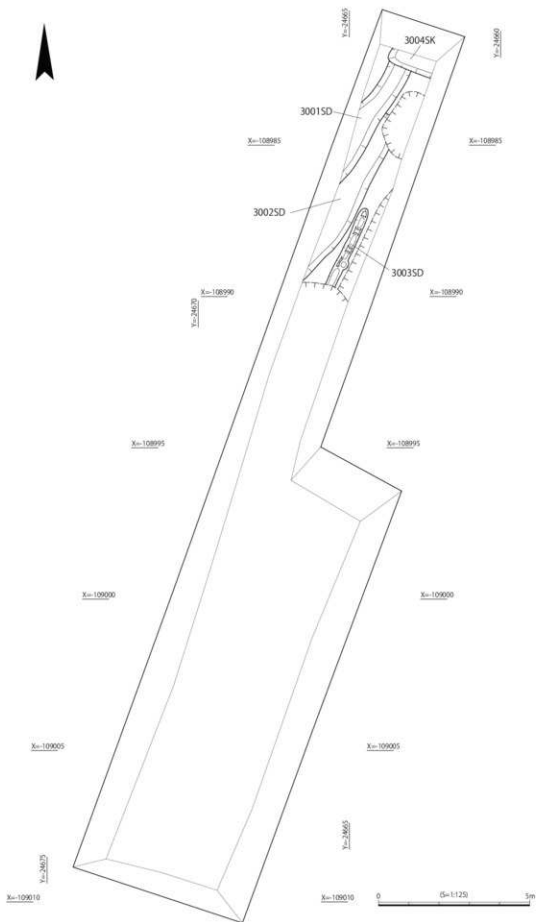
L=3.00m



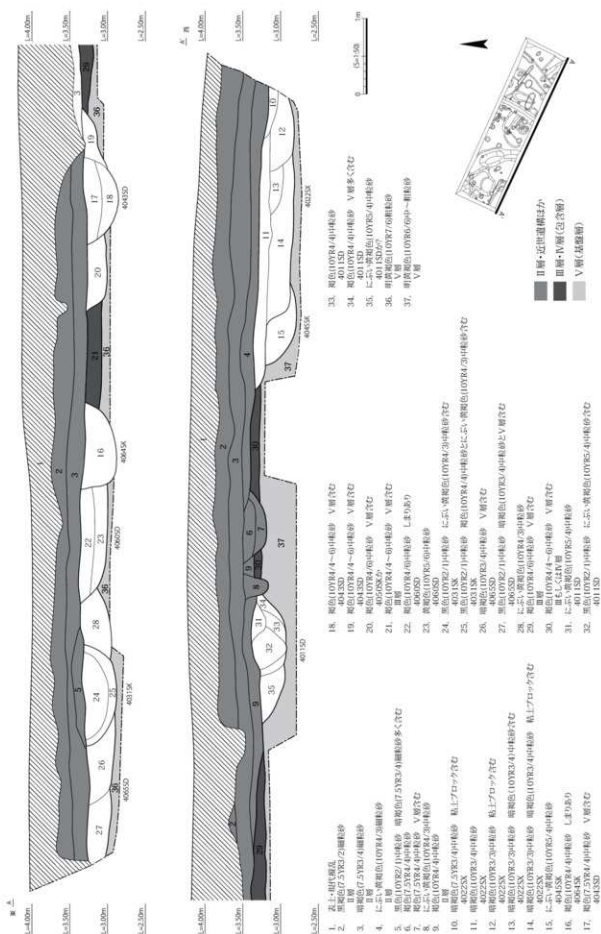
1. 灰土・埋瓦
2. 褐色(10YR4/4)中粒砂
3. 灰褐色(5YR4/2)中粒砂
4. 褐色(10YR4/4)中粒砂
5. 褐色(10YR4/4)中粒砂
6. 褐色(10YR4/4)中粒砂
7. 褐色(10YR4/4)中粒砂
8. 灰土・埋瓦
9. 褐色(10YR4/4)中粒砂
10. 暗赤(7.5Y/6)中粒砂 径3~5mmの小礫を含む
11. 黄褐色(2.5Y/6)中粒砂
12. 暗赤(7.5Y/6)中粒砂
13. 暗赤(7.5Y/6)中粒砂
14. 暗赤(7.5Y/6)中粒砂
15. 暗赤(7.5Y/6)中粒砂
16. 暗赤(7.5Y/6)中粒砂
17. 暗赤(7.5Y/6)中粒砂
18. 暗赤(7.5Y/6)中粒砂
19. 暗赤(7.5Y/6)中粒砂
20. 暗赤(7.5Y/6)中粒砂
21. 暗赤(7.5Y/6)中粒砂
22. 暗赤(7.5Y/6)中粒砂

0 0-150 1m

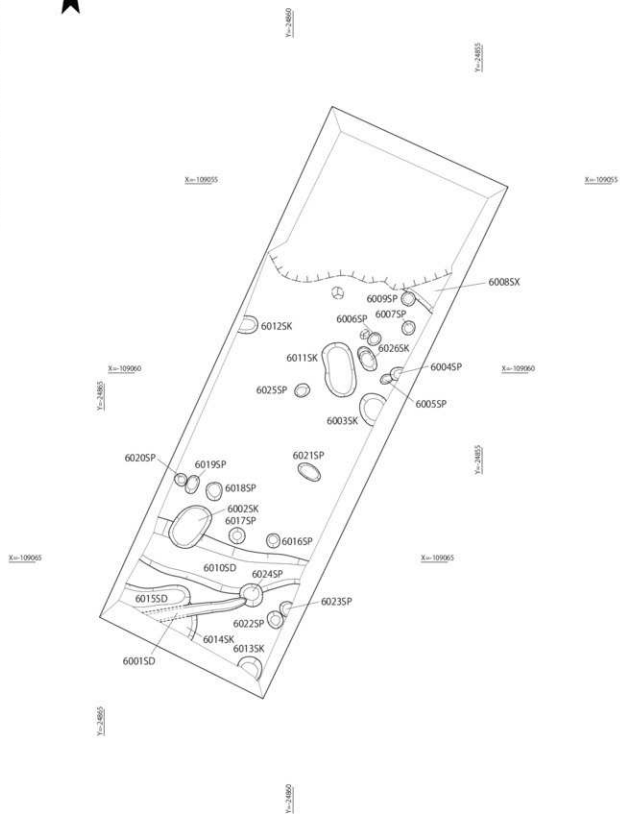
■ 目附一定仕通溝ほか  
■ 埋瓦(包含層)  
■ V層(基盤層)



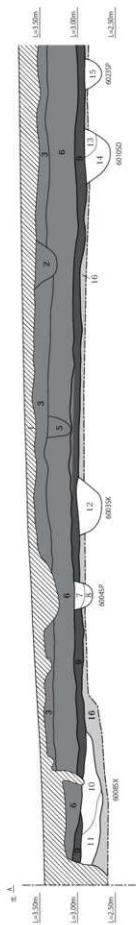




図版 19  
遺構 6 地点 調査区平面図

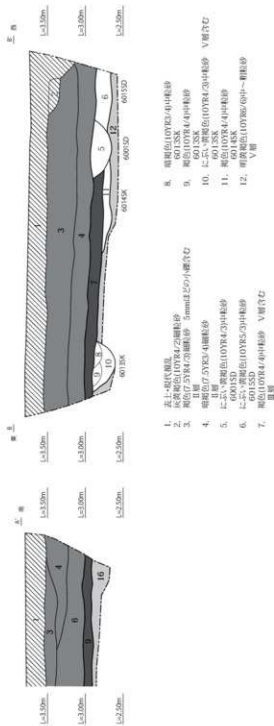


0 (S=1:100) 4m



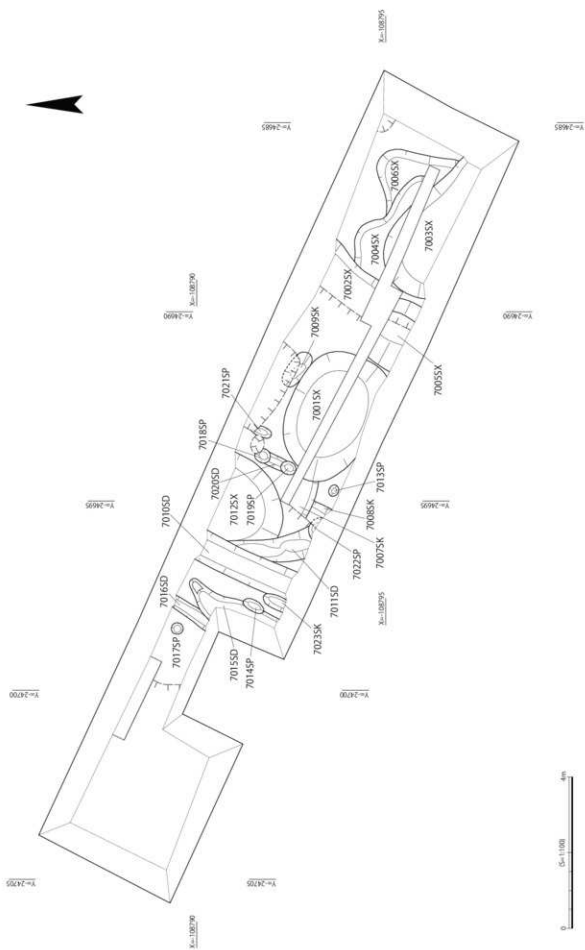
1. 表土・現代遺瓦  
 2. 赤褐色土(10YR4/2)細粒砂  
 3. 赤色(7.5YR4/2)細粒砂  
 4. 褐色(7.5YR4/2)細粒砂 5mmほどの小礫含む  
 5. 赤褐色土(10YR4/2)細粒砂  
 6. 赤褐色(7.5YR4/2)細粒砂  
 7. 赤(10YR4/4)中粒砂  
 8. 赤褐色(10YR5/6)中粒砂  
 9. 赤(10YR4/4)中粒砂 V層含む  
 10. 赤褐色土(10YR5/4)細粒砂  
 11. 赤(10YR4/4)中粒砂  
 12. 赤褐色土(10YR5/4)細粒砂  
 13. 赤褐色土(10YR5/4)細粒砂 V層含む  
 14. 赤褐色土(10YR5/4)細粒砂  
 15. 赤(10YR4/4)中粒砂  
 16. 赤褐色土(10YR5/6)中・粗粒砂

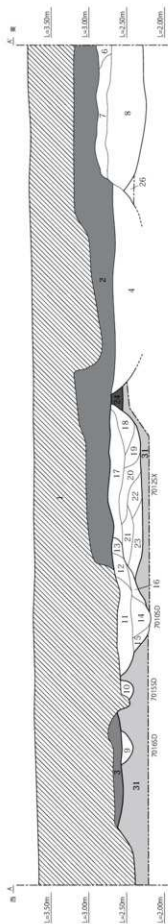
■ 日層・近世遺構ほか  
 ■ 日層(包含層)  
 ■ V層(基礎層)



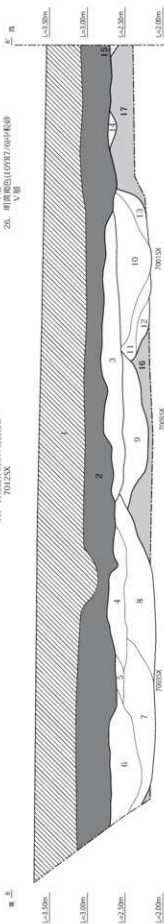
1. 表土・現代遺瓦  
 2. 赤褐色土(10YR4/2)細粒砂  
 3. 褐色(7.5YR4/2)細粒砂 5mmほどの小礫含む  
 4. 褐色(7.5YR4/2)細粒砂  
 5. 赤褐色土(10YR4/2)中粒砂  
 6. 赤褐色土(10YR5/2)中粒砂  
 7. 赤(10YR4/4)中粒砂 V層含む  
 8. 赤褐色土(10YR5/4)中粒砂  
 9. 赤(10YR4/4)中粒砂  
 10. 赤褐色土(10YR4/2)中粒砂 V層含む  
 11. 赤(10YR4/4)中粒砂  
 12. 赤褐色土(10YR5/6)中・粗粒砂 V層

図版21 遺構 7地点 調査区平面図





1. 表土(現代堆積)
2. 灰黄色10YR8/4の粗粒砂
3. 灰黄色10YR8/4の粗粒砂
4. 灰黄色10YR8/4の粗粒砂
5. 灰黄色10YR8/4の粗粒砂
6. 灰黄色10YR8/4の粗粒砂
7. 灰黄色10YR8/4の粗粒砂
8. 灰黄色10YR8/4の粗粒砂
9. 灰黄色10YR8/4の粗粒砂
10. 灰黄色10YR8/4の粗粒砂
11. 灰黄色10YR8/4の粗粒砂
12. 灰黄色10YR8/4の粗粒砂
13. 灰黄色10YR8/4の粗粒砂
14. 暗灰黄色2.5Y4/2の中粒砂
15. 赤褐色2.5Y4/2の中粒砂
16. 赤褐色2.5Y4/2の中粒砂
17. 赤褐色2.5Y4/2の中粒砂
18. 赤褐色2.5Y4/2の中粒砂
19. 赤褐色2.5Y4/2の中粒砂
20. 赤褐色2.5Y4/2の中粒砂
21. 赤褐色2.5Y4/2の中粒砂
22. 赤褐色2.5Y4/2の中粒砂
23. 赤褐色2.5Y4/2の中粒砂
24. 赤褐色2.5Y4/2の中粒砂
25. 赤褐色2.5Y4/2の中粒砂
26. 暗灰黄色10YR8/7の中粒砂



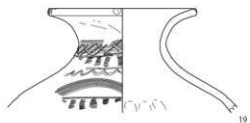
1. 表土(現代堆積)
2. 灰黄色10YR8/4の粗粒砂
3. 暗灰色10YR3/2の粗粒砂
4. 暗灰色10YR3/2の粗粒砂
5. 暗灰色10YR3/2の粗粒砂
6. 暗灰色10YR3/2の粗粒砂
7. 暗灰色10YR3/2の粗粒砂
8. 暗灰色10YR3/2の粗粒砂
9. 暗灰色10YR3/2の粗粒砂
10. 暗灰色10YR3/2の粗粒砂
11. 暗灰色10YR3/2の粗粒砂
12. 暗灰色10YR3/2の粗粒砂
13. 暗灰色10YR3/2の粗粒砂
14. 暗灰色10YR3/2の粗粒砂
15. 暗灰色10YR3/2の粗粒砂
16. 暗灰色10YR3/2の粗粒砂
17. 暗灰色10YR3/2の粗粒砂
18. 暗灰色10YR3/2の粗粒砂
19. 暗灰色10YR3/2の粗粒砂
20. 暗灰色10YR3/2の粗粒砂
21. 暗灰色10YR3/2の粗粒砂
22. 暗灰色10YR3/2の粗粒砂
23. 暗灰色10YR3/2の粗粒砂
24. 暗灰色10YR3/2の粗粒砂
25. 暗灰色10YR3/2の粗粒砂
26. 暗灰色10YR3/2の粗粒砂



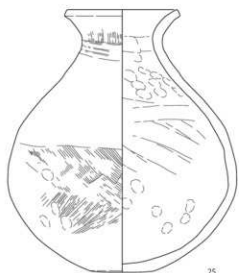
■ 土層・近世遺構土か  
 ■ 土層(包含層)  
 ■ V層(基盤層)

10. 黒褐色10YR3/2の粗粒砂 明露部10YR6/8の土層多量に含む
11. 灰黄色10YR8/4の粗粒砂 7001SX
12. 灰黄色10YR8/4の粗粒砂 明露部10YR6/8の土層に含む
13. 灰黄色10YR8/4の粗粒砂 V層を含む
14. 暗灰色10YR3/2の粗粒砂 V層を含む
15. 暗灰色10YR3/2の粗粒砂 7006SX
16. 赤褐色2.5Y4/2の中粒砂 V層
17. 暗灰色10YR3/2の粗粒砂 V層
18. 暗灰色10YR3/2の粗粒砂
19. 暗灰色10YR3/2の粗粒砂
20. 暗灰色10YR3/2の粗粒砂
21. 暗灰色10YR3/2の粗粒砂
22. 暗灰色10YR3/2の粗粒砂
23. 暗灰色10YR3/2の粗粒砂
24. 暗灰色10YR3/2の粗粒砂
25. 暗灰色10YR3/2の粗粒砂
26. 暗灰色10YR3/2の粗粒砂

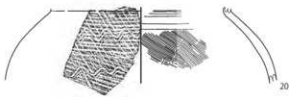




19



25



20



21



26

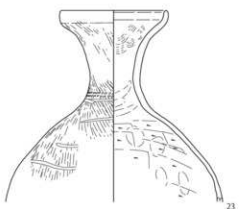
27



22



28



23



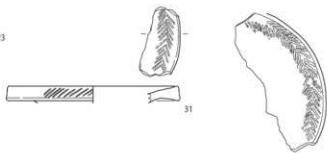
29



30



24



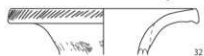
31



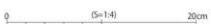
33

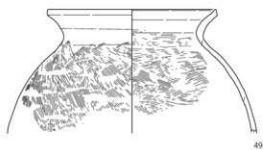


34



32





49



50



51



52



53



54



55



56



57



58



59



60



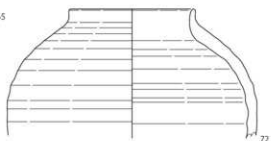
61



62



63



64



65



66



67



68



69



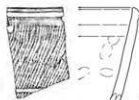
70



71



72



73



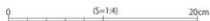
74

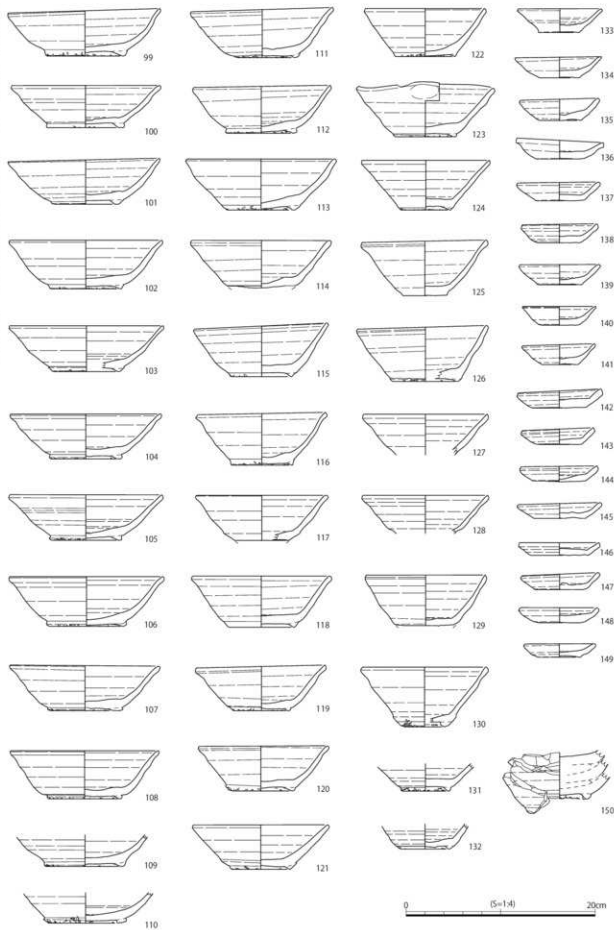


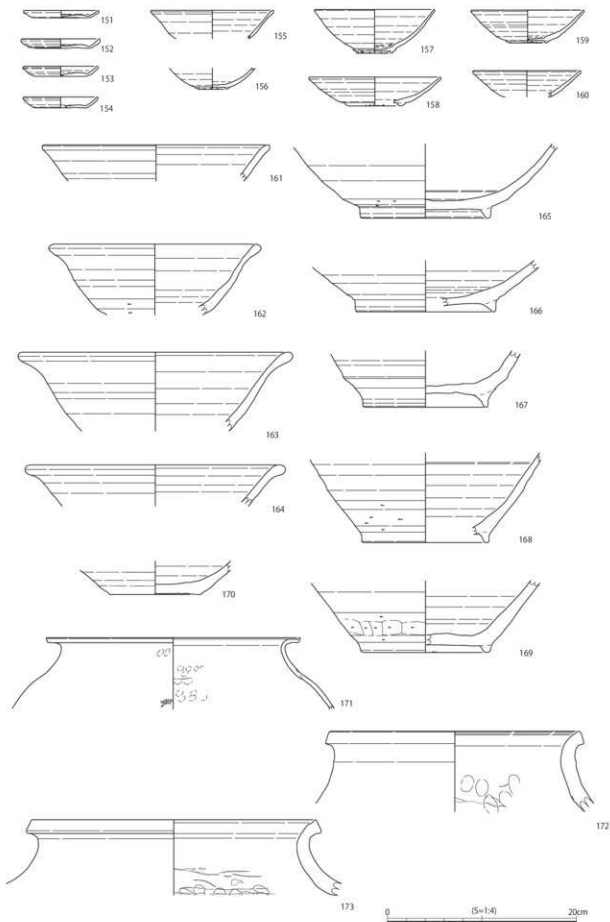
75

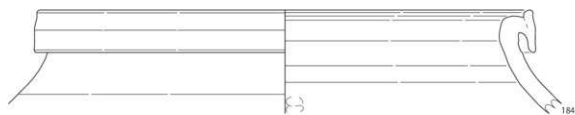
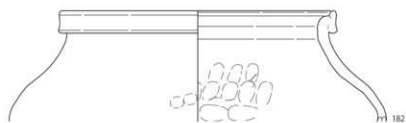
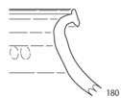
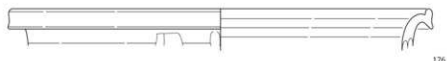


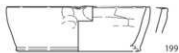
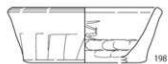
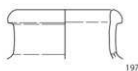
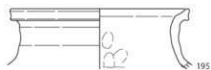
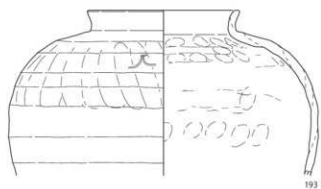
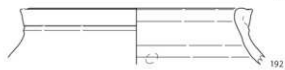
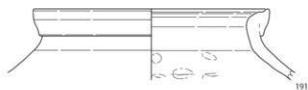
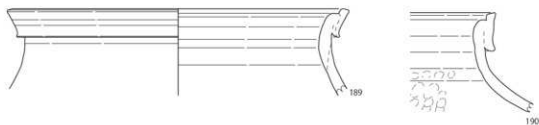
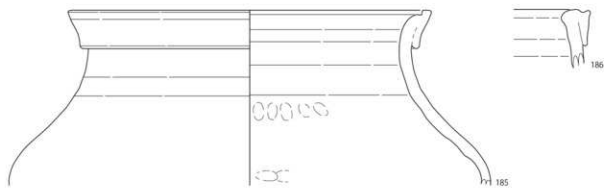
76



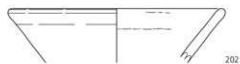




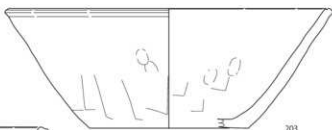




0 5cm 10cm 20cm



202



203

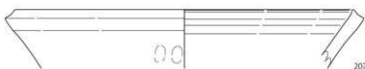


204

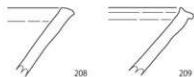


205

206



207

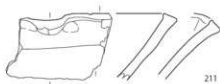


208

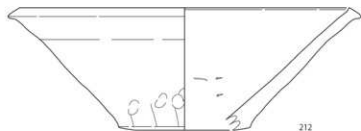
209



210



211



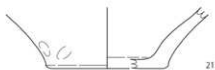
212



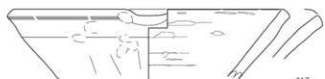
214



213



215

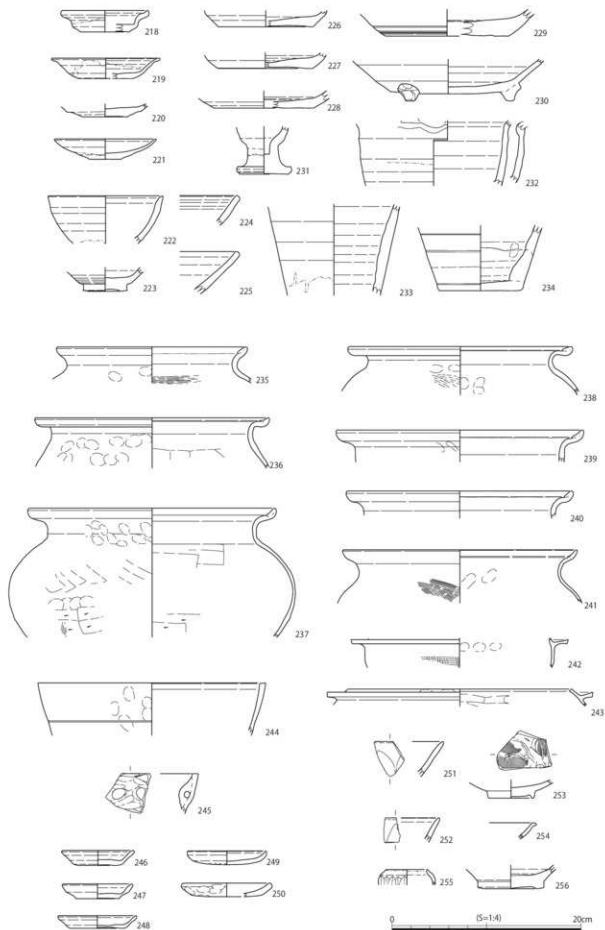


217

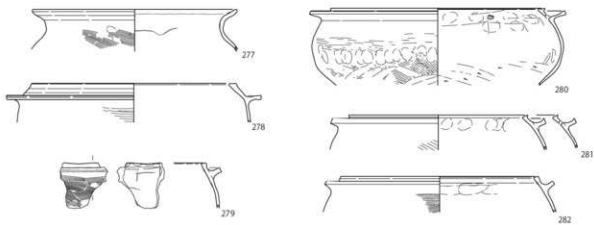
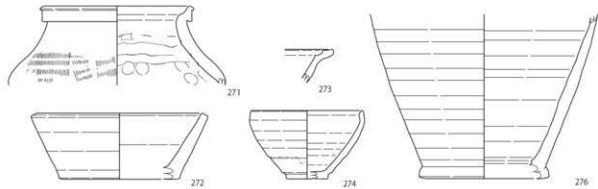
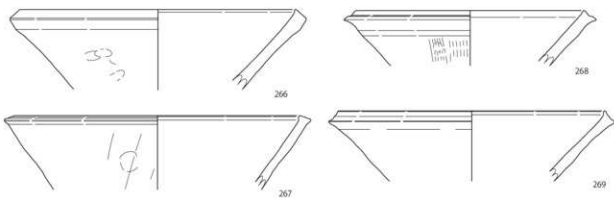
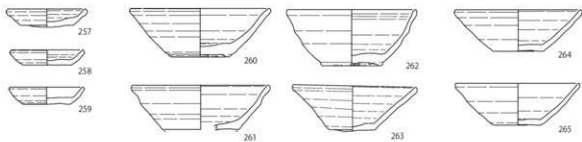


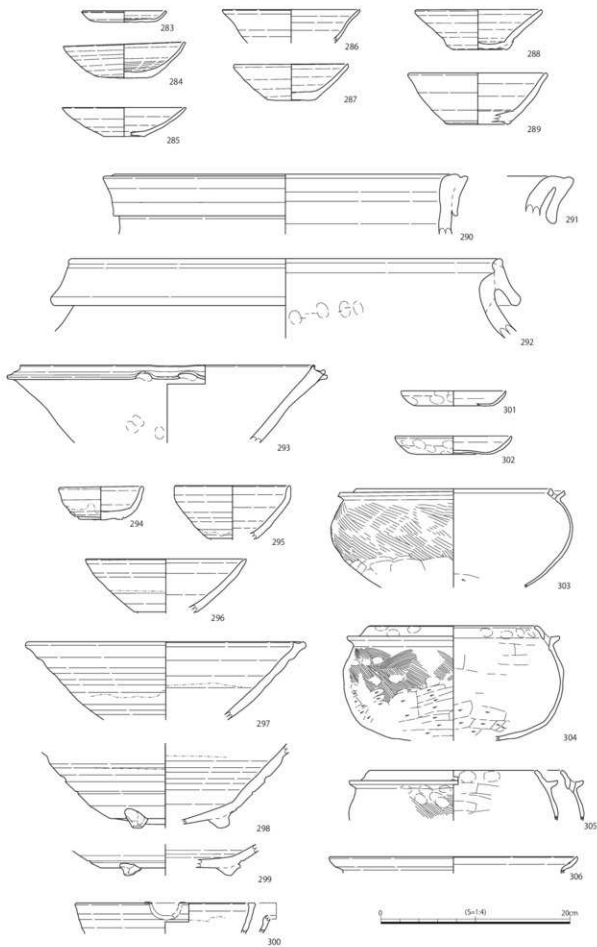
216

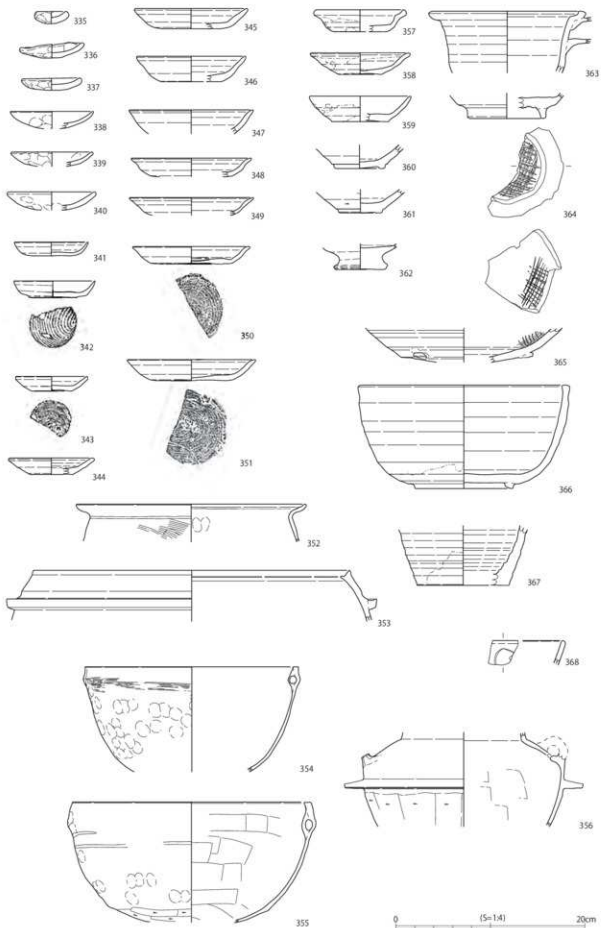
0 (5=1:4) 20cm



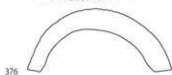
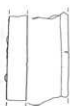
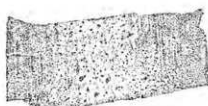
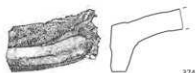
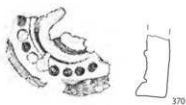
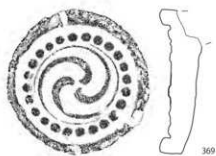




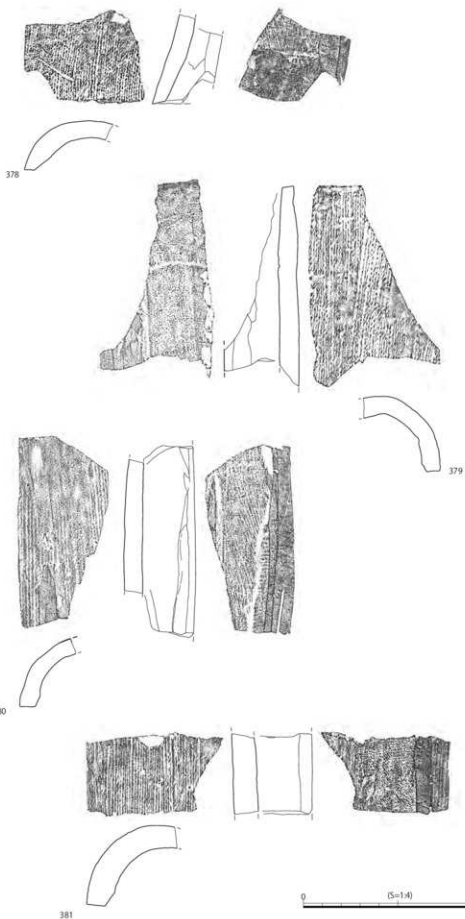


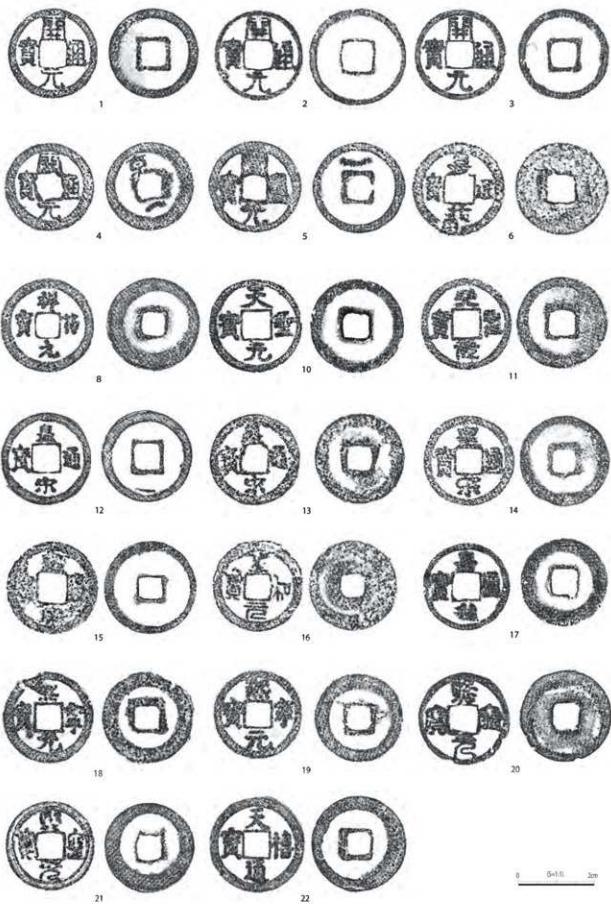


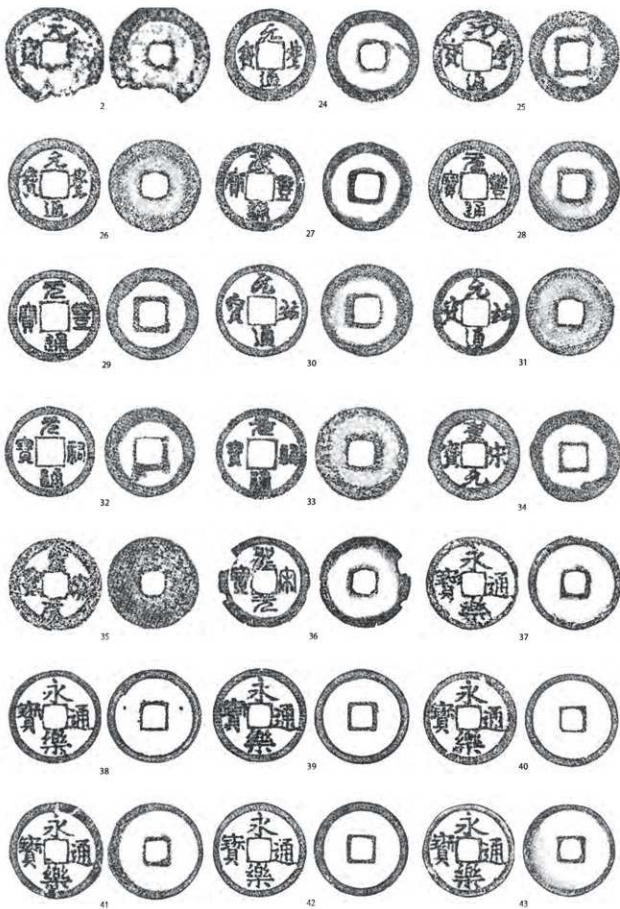
0 (5=1:4) 20cm

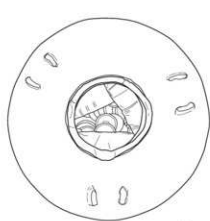
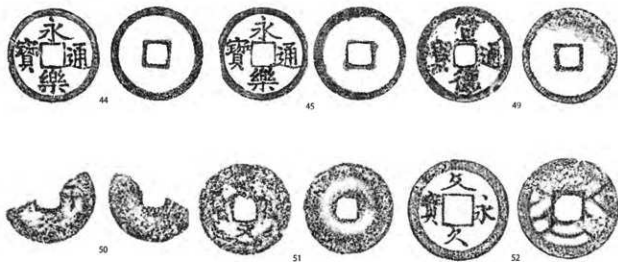


0 (5=1:4) 20cm

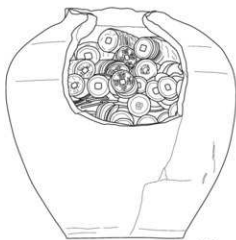








319



320

大量出土錢 A・B 壺内錢貨



# 写真図版





1 1地点全景（南から）



2 1地点全景（北部）（北東から）



1 1地点西壁(北端)



2 1地点西壁(北部)



3 1地点東壁(北部)



1 1地点西壁(南部)



2 1地点東壁(南部)



3 1地点南東部北壁



1 1030SD (北西から)



2 1030SD 検出 (北西から)



1 1040SD（北西から）



2 1050SD（東から）



1 1060SK (西から)



2 1060SK 遺物出土状況 (西から)





1 1152SK (南から)



2 1160SK (東から)



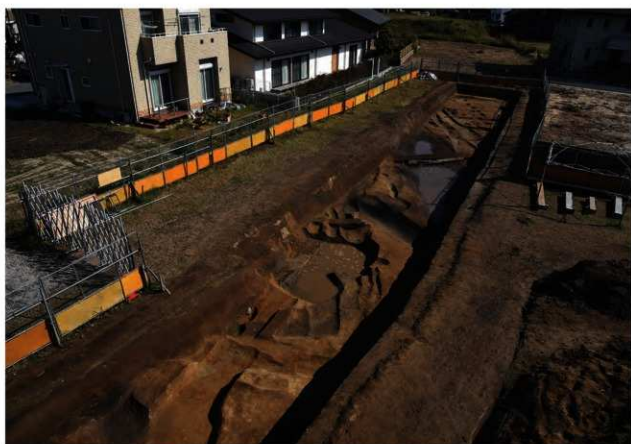
1 1180SX (東から)



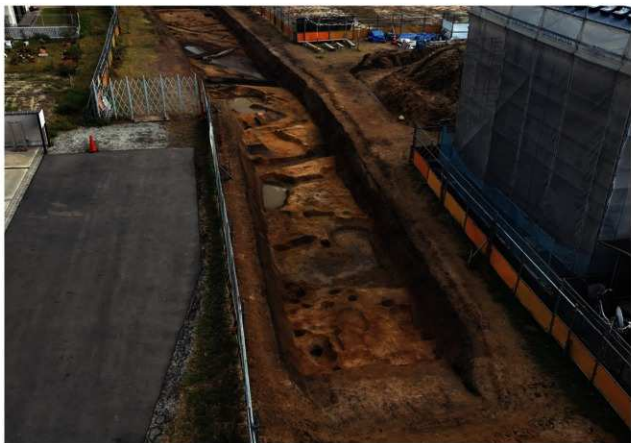
2 1186SK (北西から)



1 2地点東区全景(西から)



2 2地点東区全景(東部)(西から)



1 2地点東区全景(西部)(西から)



2 2地点西区全景



1 2地点西区西壁



2 2地点西区北壁



3 2地点西区南壁



1 2地点東区東壁



2 2地点東区北壁(東部)



3 2地点東区北壁(中央部)



1 2地点東区北壁(西部)



2 2地点東区南壁(西部)



3 2地点東区南壁(西部)



1 2090SD・2100SD・東部柱穴列検出(西から)



2 2100SD(南西から)





1 2120SD 検出(北東から)



2 2120SD 遺物出土状況(南西から)



1 2120SD 遺物出土状況 (南西側) (北東から)



2 2120SD 遺物出土状況 (北東側) (南西から)



1 2120SD 遺物出土状況(北東側)(東から)



2 2120SD 遺物出土状況(杏葉唐草文軒平瓦)(東から)



1 2120SD 断面 (南西から)



2 2120SD 断面 (北西から)



1 2135・2144SD ほか検出 (北東から)



2 2135・2144SD ほか (南西から)



1 方形区画溝群と大量出土銭B(西から)



2 方形区画溝群南西部検出(2115SD・2156SK・2196SDほか)(南から)



1 2148SD (南から)



2 2115SD (東から)



3 方形区画溝群と大量出土銭B (南西から)



1 2115・2199SD ほか断面 (南西から)



2 2205SD 断面 (南から)



3 2205SD 遺物出土状況 (南東から)



4 2205SD 遺物出土状況 (南東から)





1 2180SD (南東から)



2 大量出土銭Aと方形区画溝群検出(西から)



1 大量出土銭 A (2140SX) (南から)



2 大量出土銭 A (2140SX) (南から)



1 大量出土銭B (2190SX) (南から)



2 大量出土銭B (2190SX) (南から)



1 大量出土銭 B (2190SX) (南東から)



2 大量出土銭 B (2190SX) (南東から)



1 2156SK 独針杵出土状況(北から)



2 2156SK 独針杵出土状況(東から)



1 2153SX 遺構群検出 (南から)



2 2153SX 遺構群断面 (南東から)



1 2010・2065SK (東から)



2 2200SK (南から)



1 3地点北部全景(南西から)



2 3地点北部検出(南東から)





1 4地点全景（南西から）



2 4地点全景（中央部）（南から）



1 4地点西壁



2 4地点南壁(西部)



3 4地点南壁(東部)



1 4011SD 検出（南東から）



2 4011SD（南東から）



1 4011SD 断面 (南から)



2 4030・4052SK (北東から)



1 6地点全景（北から）



2 6地点検出（北西から）



1 6地点南壁



2 6地点東壁



3 6地点東壁(北部)



1 6010SD（北西から）



2 6010SD 遺物出土状況（西から）



1 7地点全景(東から)



2 7010・7011SD・7012SX ほか(北西から)





1 7地点北壁



2 7地点南壁



1 7地点検出（中央部）（北東から）



2 7001SX（北から）











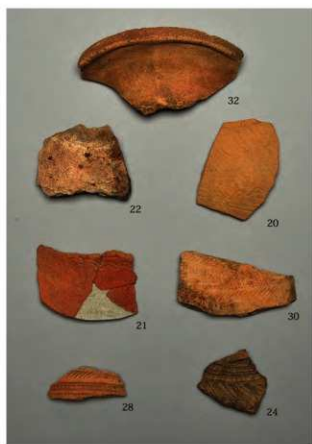








1 弥生土器



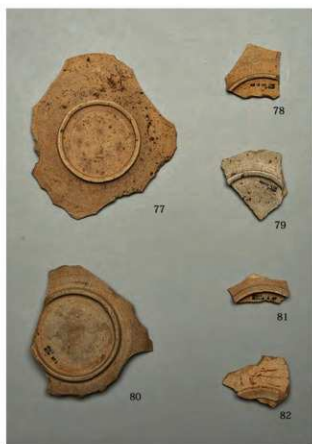
2 弥生土器



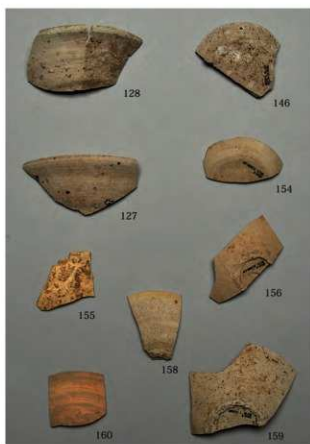
3 製塩土器



1 古代の須恵器



2 灰釉陶器



3 山茶碗(瀬戸産・東濃型)



1 2120SD 出土遺物（常滑焼）



2 2120SD 出土遺物（鉢類）



1 2120SD出土遺物（古瀬戸・土師器ほか）



2 方形区画溝群出土遺物



1 2180SD 出土遺物



2 2153SX ほか出土遺物



1 土師器皿



2 古瀬戸



3 土製品 (加工円盤ほか)



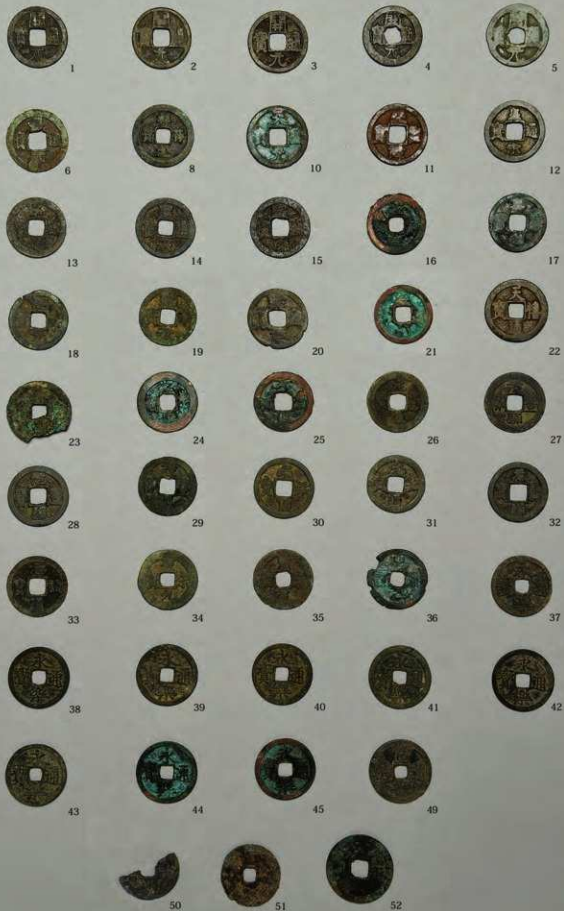






出土銭Bの蓋（鉢の破片）







1 和鏡



2 独鈷杵

## 報告書抄録

ふりがな	へいせい28ねんど はたまいせきはっくつちょうさほうこく						
書名	平成28年度 畑間遺跡発掘調査報告						
副書名							
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	中村毅(編) 安津由香里 小林克也 竹原弘展 藤根久						
編集機関	株式会社アコード 名古屋営業所						
所在地	〒498-0021 愛知県弥富市平島町大脇12-3-202 Ⅱ. 0567-65-6082						
発行機関	愛知県東海市教育委員会						
所在地	〒476-8601 愛知県東海市中央町1丁目1番地 Ⅱ. 052-603-2211						
発行年月日	2018年(平成30年)3月30日						
所収遺跡名	所在地	市町村 コード 遺跡	北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
畑間遺跡	愛知県 東海市 大田町	23222 43050	35 01 11	136 53 42	20160608 ～ 20170123	1239.4	土地区画 整理事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
畑間遺跡	集落	弥生時代	土坑・溝	弥生土器・須恵器 中世陶磁器 金属製品(銭貨ほか) 自然遺物(貝・骨)		2基の中世大量出土銭 独結片・和鏡片出土	
		古代	柱穴・土坑				
		中世	柱穴・土坑 ・溝				
要約	<p>畑間遺跡は、愛知県東海市に位置する縄文時代晩期から近世に至る集落遺跡である。平成28年度の調査では、主に弥生時代、古代、中世の遺構・遺物を検出した。弥生時代と古代の遺構・遺物は少ないが、方形周溝墓の可能性のある溝を検出した。報告の大部分は中世の遺構・遺物である。</p> <p>中世の遺構としては、集落を横断する大溝や方形区画を形成する溝群などを検出した。中世段階の本遺跡の集落構成を復元する上で重要な成果である。また、2基の大量出土銭が見つかったことは特筆に値する。古瀬戸三耳壺と常滑焼壺の内部に大量銭が納められていた。これらは、上述の方形区画を形成する溝の埋没後に埋められており、近接する土坑からは密教法具の独結片も出土した。大量出土銭が発掘調査において出土したのは調査時点で愛知県下初であり、遺構との検討も可能な貴重な事例である。</p>						

---

愛知県東海市

平成 28 年度

畑間遺跡発掘調査報告

平成 30 年 3 月 10 日印刷

平成 30 年 3 月 30 日発行

- 編集 株式会社アコード名古屋営業所  
〒498-0021 愛知県弥富市平島町大脇 12-3-202  
TEL0567-65-6082
- 発行 愛知県東海市教育委員会  
〒476-8601 愛知県東海市中央町 1 丁目 1 番地  
TEL052-603-2211
- 印刷・製本 株式会社明新社  
〒630-8141 奈良県奈良市南京終町 3 丁目 464 番地  
TEL0742-63-0661
-